やまざと

会報１３号（２０００夏号）

行事お知らせ

✳花・星・人in南竜　８月５日（土）６日（日）白山南竜ケビン

✳秋の山小屋酒場　９月下旬

事務局へお問い合わせ、またはワンゲルＨＰをご覧下さい。

金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会

目　　次

＊表紙 …… 21期　竹中　敏
＊会報「やまざと」によせて …… 会長15期　奥名　正啓　1

海外特集
＊海外トレッキングの魅力について－超・私的放浪記 …… 29期　深井　嘉浩　2
＊カラコルムの旅より …… 11期　長岡　正利　9
＊熱い大地の想い出話ＰａｒｔⅡ …… 33期　佐藤かおり　16
＊シェルパのふるさとを訪ねて …… 15期　舟田　節子　24

ミレニアム行事報告
＊Ｍ１　ＯＢスキー合宿ｉｎ野沢 …… メールから　44
＊Ｍ２　お花見コンパ顛末の記 …… 15期byせっちゃん　56
ｎＭ３　山小屋酒場
高三郎と犀川ダム …… 18期　椿川　利弘　58
現役バイト一言 …… 59
春の山小屋酒場 …… 15期　舟田　節子　60
2000年春山小屋酒場 …… 13期　辰野　隆義　64
山小屋酒場沿革史 …… 67
＊野猿天国複数に分裂？（新聞記事より） …… 68
＊ちょっと久しぶりの白山 …… 20期　深田　進　69
＊山便り（僧ケ岳） …… 10期　木津　治男　73
＊山便り（尾瀬） …… 11期　青柳　健二　74
＊山便り（猿山） …… 15期　奥名　正啓　76
＊ＯＢ一言通信 …… 77
＊メール通信 …… 79
＊鈍行列車で思ったこと　他３編 …… ０期　田村　昭夫　86
＊石川県のキノコ－自然環境とキノコ相－（転載） …… 19期　栂　典雅　89
＊古九谷のこころを今に（北国新聞「舞台」から） …… 20期　中村　元風　93
＊現役情報 …… 前田顧問　現役　94
＊新聞切り抜き情報 …… 97
＊ＯＢ名簿について　住所録記載変更者 …… 103
＊会計報告 …… 106

ブナの林の中でのんびりとコーヒーを飲んでいたら、むこうで、変なにおいの正体を確かめようと、テンが立ち上がってあたりをうかがっていました。

コーヒーを飲んでいた人はあまりに気持ちがよく、ぼおっとしていたので、テンに気付きませんでした。

でも、見た人はいなかったので、ほんとうにテンがいたかどうかはだれも知りませんでした。

21期　竹中　敏

会報「やまざと」によせて

ＯＢ会会長　15期　奥名　正啓

ＯＢの皆様いかがお過ごしでしょうか。

最後の未知の分野、ヒトの遺伝子の解明が進み、もうじきその全容が明らかになると言われています。これまで不治の病とされてきた難病が克服できたり、将来かかりそうな可能性の大きい病気なども予見できる。そうなると、自分は４０才を過ぎると体質がこんな風に変わって、こんな病気になりやすいといったことが分かってくる。喜ばしいことかどうか甚だ疑問である。ある男が結婚しようとしている女性の家を訪ねたところ、その母親がそっくりの顔立ちをしていたので将来の彼女を見てしまったようで、少なからず落胆してしまった。先が見えるのは決していいことばかりではない。「知りすぎたのね」とはならない方が人生はおもしろい。恐竜がその図体の大きさ故に滅びたように、人類もその頭脳の発達故に滅びかねない。地球が誕生して５０億年、生命が誕生して４５億年、誕生した生命は５０億種類、現存する生物は５００万種類、実に９９．９％は絶滅してしまった。その一つにヒトが入っても決して不思議ではないが、我々の英知を結集し節度を持って臨めば免れることができるに違いない。同じように我らが山小屋ベルクハイムも、現役の諸君と我々ＯＢの力でいつまでも残しておこうではありませんか。

北海道の有珠山がまたもや噴火活動を活発化させ、付近の住民を不安に陥れ被害も甚大のようです。本当に気の毒なことだ思いながらも、新しく山ができるその活力、躍動感には目を見張るものがあり、一種の生命の誕生のような感動すら覚える。白山は水に削られ、砂防工事もむなしく莫大な土砂を流し続けて壊れていく一方である。片方で山が生まれ、一方で山がなくなっていくのは自然なことであって、ヒトが望むように残すのはむしろ不自然と言うべきかもしれない。

さて、今年は西暦２０００年を記念して（そんな義理はないのだが・・）野沢でのスキー合宿も例年になく参加者が多く、出来事もいろいろありました。沈床園でのお花見コンパは、桜の開花がいつもより１週間ほどおくれてちょうど満開の日にあたりました。物事はすべてがうまくいくはずもなく、昼前まではなんとか曇り空が雨をささえていましたが、いよいよという時になって支えきれず、本格的な雨となってしまいました。そんな中で２組の宴会が春雨に煙り、白い光のライトアップを受けた石川門とサクラを眺めつつほろ酔い加減で、遙か昔ワンゲルにはいった頃を思い浮かべていました。
ベルクハイムは床の傷みが激しく、全面張り替えることにしました。舟と現役を利用して資材や工具など運搬し修復作業を始めました。春は山菜取りの人が多くそして釣りに入ってくる人も多くちょっとした賑やかさを感じます。秋には継続作業だけでなく、囲炉裏を復活させようかとたくらんでおりますので、皆様のご協力をお願いします。秋は、ゆっくりとした時の流れを感じさせて、すてきな安らぎという報酬も与えてくれます。

８月には白山南竜への集中を計画しています。日頃の生活習慣からはなかなか抜け出せるものではありません。しかしながら、普段の通勤の帰り道を少し変えただけで別の世界へ迷い込んだような新鮮さを感じることもあります。そんな気持ちでふと白山にでも出かけてみませんか。南竜で忘れかけていたあの人に会えるかもしれません。

海外トレッキングの魅力について
―超・私的放浪記―

29期：深井 嘉浩

以前、『やまざと』誌上で“アジア放浪・帰国報告”をさせていただきましたが、今回はＯＢ会舟田様より“海外トレッキング”に関する執筆の機会を頂きましたので、僭越ながら駄文にまとめてみました。ご興味のある方は是非ご一読下さい。

●1984/04～1989/03：金沢大学ワンダーフォーゲル部在籍

在学中の記憶は、何故か「ワンゲル活動とバイトと酒宴」のみ。おかげで当時ワンゲルの主流であった「留年（ためどし）会」の一員となり、その後の人生の歯車が狂い始める。

●1988/03～1988/06：ユーラシア放浪ＰＡＲＴⅠ

大学５年を迎える春、エベレストを見たくてチベットを目指す。バイト代（総額２０万円）を手に、神戸より「鑑真号」片道切符（当時２万円）で上海に上陸。生まれて初めての海外に戸惑いながらも、今にして思えば結構ディープな辺境地（雲南・四川省の山岳地帯）を寄り道。日本を出て３ヶ月後、ようやくチベット高原・定日（ティンリ）で、地平線の彼方の“チョモランマ”に対面（あの時の感激は今思い出しても胸が熱くなります）。その後、バスとヒッチ･ハイクでヒマラヤを越え、あこがれの都カトマンズへ。

しかし、ネパール側は既にモンスーン（雨季）を迎えており、また資金も底を尽きたため、ヒマラヤ・トレッキングに未練を残しながらも、カトマンズよりバンコク経由で帰国。金沢で“赤痢（の疑い）騒動”を起こし、当時の現役部員の皆さんには大変ご迷惑をお掛けいたしました。

●1989/04～1996/05：ＪＴＢ日本交通公社勤務

団体旅行営業のため、担当ツアーは主に“温泉宴会旅行”が中心であったが、時にはアメリカ・ヨーロッパなど“おしゃれな海外”へのグループ･ツアーも手掛け、世界各地で貴重な経験を得る。７年後退社。転職して、しばらく“２度目の放浪”に向けての資金稼ぎに精を出す。

●1996/12～1997/07：ユーラシア放浪ＰＡＲＴⅡ

「タイ航空」片道切符で、懐かしのバンコク・カオサンロードへ。今回の放浪もルート・帰国日は未定。当初は『深夜特急』（あるいは“猿岩石”）みたいに、ユーラシアを横断してヨーロッパを目指すつもりで出発する。まずは、タイ南部の“楽園”ピピ島（今は『ビーチ』撮影で有名になってしまったが）で、サラリーマン・モードからバックパッカー・モードに頭を切り替えた後、念願の“ヒマラヤ・トレッキング”実現のため、カトマンズへ渡る。

数日間の準備の後、現地ガイド一名と共にルクラへ飛び、「どうせ行くならエベレスト直下まで」と欲を出し“カラパタール”へと歩き出す。周囲をタムセルク、アマダブラムといったヒマラヤの巨峰群に圧倒されるエベレスト街道を、ナムチェ、タンボチェと進む。途中高山病で「頭が爆発しそうな痛み」にのた打ち回ったりしながらも、９日目にカラパタール(5545m)へ到達。宇宙みたいな濃紺の空の下、目の前に聳える世界最高峰と対峙した時、「あぁ、生きてて良かった、会社辞めて旅に出て良かった（帰国後、結構後悔することになるのだが…）」と、溢れる涙を止めることのできない感動を体験してしまう。

これがきっかけで“ヒマラヤ”にはまり、１５日間のトレッキングを終えてカトマンズへ戻ると間もなくポカラへ移動。“アンナプルナ内院＆ジョムソン街道”を、聖地ムクチナートまで２１日間ぶっ通しで歩き続ける。内院（アンナプルナＢＣ.4000m）では周囲を取りまくヒマラヤ核心部のパノラマ、アンナプルナ山群南麓では聖峰マチャプチャレからダウラギリへと連なる山岳展望、そして北麓ではチベット的な荒涼とした世界。日々様変わりしていく風景と、そこに生きるヒマラ

ヤの民の日常が非常に印象的な旅であった。

その後、３ヶ月かけてインドを放浪。途中パキスタン国境に近いラジャスタン地方・ジャイサルメールの砂漠では、ラクダを借りて２泊３日の“キャメル・サファリ”も体験。後半はガンジス河を遡り、インド・ガルワール・ヒマラヤ最高峰“ナンダデビィ”山域へも足を延ばす。４月はまだ残雪も多く最源流まで到達できなかったものの、このエリアはヒンドゥー教最高の聖地のため“サドゥー（修行聖者）”との出会いなど、なかなか怪しい体験もあり、この頃には「自分が日本人である」という自覚がすっかり希薄になっていた。

ニューデリーの大使館でパキスタンとイランのビザを取得（トルコから西はビザ不要）。「Go Go West！ にんにきにきにき…（『西遊記』のテーマ知ってますか？）」と、気合を入れてヨーロッパへ向けて西進を再開するが、軽い気持ちで立ち寄った北パキスタンで、再び足は止まってしまう。

せっかく来たからにはと、山岳ガイドと交渉し、“ナンガパルバット”南面ベースキャンプまで行ったのだが、ＢＣから見上げる落差 5000m（！）の南壁と、横たわるルパル氷河の迫力にまたもや魅了される。更に、フンザからパスーにかけてのカラコルム・ハイウェイ周辺では、ラカポシ、ディラン、シスパーレを筆頭とする 7000m級の峰々が、ネパール・ヒマラヤをも凌駕する荒削りな山岳風景を展開させていたのである。

「こうなったらカラコルムの核心部・Ｋ２まで踏み込まねば後悔する」と、インドの古本屋で入手していた英文ガイドブックでコース研究の上、山岳ガイドに相談する。しかし“Ｋ２”は、総延長 50Km のバルトロ氷河の最奥“コンコルディア(4600m)”まで行かねば、その姿を見ることができず、往復に１５日を要する。しかも村々の点在するネパール・トレックとは異なり、全くの無人地帯を歩くため、全ての食料・燃料・テント等を、遠征さながらのキャラバン隊で運ばなければならないと言う。従って自分の乏しい資金では無理だと判り、後ろ髪引かれる思いで断念。気持ちを切り替えて次の国イランへ進むことに決めた。。

ところが、スカルドの安宿で同宿したドイツ＆オーストリアの女性二人組み（しかも若い！）にこの話をすると、彼女達もＫ２へ行ってみたいと意気投合。更にこの夜、イギリス人のパーティーが正にＫ２・トレックを終えて我々の宿に戻って来た。しかもバルトロからゴンドコロ・パス(5600m)を越え、フーシェ谷を回って下山したらしい。興奮してガイドのＭｒ.バシールに相談を持ち掛けると、「５人以上集まれば、君達の予算でもう一度行ってもいい」と言う。話は盛り上がり、この日から“同志集め”に奔走、スカルドの各安宿に「英文＆日本語の募集ポスター」を貼り、また街で見かけたバック・パッカーには片っ端から声を掛けて回った。数日のうちにドイツ人青年一名とオランダ人カップル一組が加わり、まるで“ブレーメンの音楽隊”みたいに６名の国際パーティーが結成された。パーミッション（入山許可証）の取得や、バザールでの食料・装備調達などで、計２週間近くの日数を費やした後、遂に出発の日を迎える。

ガイド以下、ポーター、コックそして我々６名を含め、総勢３０名の大キャラバンは、“即席パーティー”のため、当初は揉め事の連続であった。ガイドＶＳポーター、そしてメンバーＶＳメンバー（ヨーロッパ人は本当に自己主張が強い）。わずか数日にして既に分裂の危機を迎えていたが、その度に仲裁に回る。自分も相当に我の強い方であるが、それでも彼らよりははるかに「和と協調性（日本人の美徳か？）」を持ち合わせていたようで、いつしか「添乗員」になってしまう。

さてコースの方は、氷河歩きとは言っても堆積した岩石に覆われているため、ピッケル・アイゼンは不要である。（今回は復路ゴンドコロ・パスという一般的でないルートをとるため、峠越え用に中古のピッケルを現地で入手したが。）しかし、クレバスが多く、時には０℃の水流を渡渉した

りと、ガイドが居なければルート・ファインディングは困難である。また、バルトロ両岸に次々と現れるパイユ、トランゴ・タワー、ムスターグ・タワーといった岩峰群は、どれも“怪峰”と呼ぶにふさわしい迫力で、地球創世期の風景（見たことないけど）に居るような感覚である。

出発８日目、コンコルディアに到着。バルトロ氷河はここで、正面に立ちはだかるガッシャブルムⅣにより左右に二分される。北側“ゴッドウィンオースティン氷河”の奥にブロード・ピークと、巨大なピラミッド・Ｋ２を臨む。神秘性と威厳を兼ね備えたその存在感に、強い衝撃を受ける。

翌日、Ｋ２のＢＣまで往復、日本隊・スペイン隊のベースでお茶などをご馳走になる。（この一ヶ月後、日本隊はＫ２西壁ルートの初登頂に成功。）その後、我々は進路を南に取り“ビグネ氷河”を遡って行く。いよいよ最難関“ゴンドコロ・パス”へ向けて。

午前２時起床、満点の星空のもと、氷河の最源頭を詰める。徐々に傾斜が増し、クラストした雪面をピッケルでカッティングしながら登る。斜面の途中で「超人ラインホルト・メスナー」に遭遇。感激の余り、鼻水垂らしながら抱きつくと、とっても迷惑そうであったが。やがて高度は5,000mを越え、足取りは重い。しかし、既に“カラパタール”を経験していたためか、高山病の兆候は無い。夜が明ける頃、突然前方の視界が開ける。“ゴンドコロ・パス”だ！ 振り返ると、朝日を浴びて真紅に染まったＫ２、ブロード・ピーク、ガッシャブルムⅣ・Ⅲ・Ⅱ・Ⅰが、視界へ飛び込んできた(なんと、8,000m峰４座が一挙に！)。第三の極地・カラコルムの全貌――想像を絶する光景である。かつて、立花隆の『宇宙からの帰還』で読んだ「宇宙空間から地球を眺めた時の飛行士の感覚」が、なんだか身近に感じられ、ナチュラル・トリップへと導かれて行く…。やがて、メンバー、ポーターの全員が無事に到着。数日前までのぎくしゃくした人間関係はもはや過去のものとなり、一人一人と固く抱き合ってお互いの“偉業”を祝福しあう。言葉なんて要らない。極限の地での達成感が、我々を一つに結び付けていた。

しばし“至福の時”を満喫した後、フーシェ側ゴンドコロ氷河への下降を開始する。峠から覗きこむと、高度差1,000m近くも垂直に切れ落ちた雪壁だ。たった一本のザイルを何度もフィックスしながら、慎重に下る。幸いにも快晴のコンディションで雪が適度に緩み、ステップは確実であったが、条件次第ではアイゼンのみならず、各種登攀具が必携のルートであろう。数時間の緊張の後、雪と氷の世界から解放される。我々を待ち受けてくれた６月下旬のフーシェ谷は、色とりどりの高山植物が咲く“シャングリラ＝桃源郷”の世界であった。

１５日間のトレックを終え、久しぶりにスカルドへ帰り着くと、我々“Ｋ２・ゴンドコロ国際パーティー１９９７（自称）”は解散した。各々が西へ東へ、再び“バック・パッカー”に戻るために。翌朝、宿を出る時ガイドとメンバーの皆が見送ってくれた。“SEE YOU AGAIN！いつか、またどこかで”。この長い旅の途中で、いくつもの“出会い”と“別れ”を経験してきたが、こんなにもつらい瞬間はなかった。乾いたスカルドの街が涙で霞んで見えなくなっても、バスの窓からずっとずっと手を振り続けた…。

さて、イスラマバードへ戻った時点で、残金は $500 を切っていた。もう旅は続けられない。旅の潮時を既に迎えていた。「日本へ帰ろう。」街の旅行エージェントを回ると、日本までの航空券はどんなに安くても $700 はすると言う。大ピンチ！ しかし名案が浮かぶ。「まだ、陸路がある！」

中国ビザを速攻で取得すると、再びバスでカラコルム・ハイウェイの北上を開始。ギルギット、フンザと連日バスを乗り継ぎ、やがてフンジェラブ峠を越え中国側のパミール高原へ。途中カラクリ湖では、あまりの美しさに思わずバスを乗り捨てる。コングール、ムスターグ・アタ両峰に囲まれた草原地帯は、カザフ族の遊牧民が羊を追う季節を迎えており、夢の中に居るような光景であっ

た。翌日、通過しようとするバスを必死に追って捕まえ、カシュガルへ。バザールに集う“青い目のエキゾチックな美女達”に心を奪われつつも、数日後ホータンへ移動。ここから、タクラマカン砂漠の中央を南北に縦断する新ルートを、２泊３日のバスの旅。座席の代わりに狭い２段ベッドが何台も並ぶ妙なバスで、ずっと横になってなければならない。食事とトイレ休憩（と言ってもトイレなどないが、）以外は、とにかく４０時間余りひた走り、ときおり顔を上げて車窓を眺めるのだが、見えるのは一面の砂漠のみであった。シルクロード最大の街ウルムチに着くと、今度は列車の切符を手配。学生時代の「地獄の硬座（２等座席）上海～昆明４日間」の忌まわしい想い出が、ふと頭をよぎり、なけなしの金で「硬臥（２等寝台）」チケットを奮発する。車中では、またもや中国人民の筆談攻めに遭いながらも、酒や弁当まで恵んでくれる“国際友好的好意”に甘えつつ快適な４日間を過ごし、一気に上海へ到着。

９年前、生まれて初めての海外で、最初に泊まった安宿「浦江飯店」へ再び転がり込む。長旅の疲れで放心状態のまま、宿の前を流れる黄浦江をぼんやり見つめていると、９年前の旅から、日本でのサラリーマン生活、そして今回の放浪へと、全てがここで一筆書きで繋がっているような、そんな気妙な感覚を味わう。

遂に資金は底をつきていたが、なんとか“裏技？”で「鑑真号」に乗船。桟橋から出港する瞬間、８ヶ月に及ぶ“ユーラシア大陸”への別れを実感し、感傷的になる。３日後神戸に接岸。久し振りの日本に戸惑いながら、考えたことは「明日から何して生きて行こう？」であった。

●1997/08～1998/03：社会復帰への道

すっかりネジの抜けてしまった状態で、帰国直後の会話はやたら“宇宙”とか“輪廻転生”などの単語が多く、「インド帰り＝やばい人」の図式にみごとにはまり、回りの友人は思いっきり引いてしまう。約１ヶ月程の“リハビリ期間”を要した後、日本社会への復帰活動を開始。“縁”とは誠にありがたいもので、名古屋市内の旅行代理店を紹介されて半年間お世話になる。また、この間の“飛び込み就職活動”で、春からアルパインツアー東京本社への再就職も決まった。

●1998/04～今のところ：アルパインツアーサービス勤務

「業界経験＋ヒマラヤ放浪＝アルパイン」という極めて安直な発想で入社。３２歳を迎えての転職、初めての東京生活、そして“くせもの”揃いの職場（社風はモロ体育会系山岳部！）。様々なストレスを感じながらも、波瀾に富んだ展開を「人生、旅の連続」と開き直ることに決め込む。

さて仕事の内容であるが、“世界の山旅・辺境の旅”をテーマとする旅行会社なだけに、営業の傍ら、世界各地の山岳地帯へ“ツアー・リーダー”（ここでは決して“添乗員”とは呼ばない）として赴いている。この２年間で、得意のネパール・ヒマラヤを皮切りに、ヨーロッパ･アルプス、カナディアン・ロッキー、ニュージーランドなどへの“トレッキング・ツアー”及び、アフリカ最高峰キリマンジャロ、ボルネオ島キナバル山、台湾玉山・雪山などの“登頂トレッキング”へ同行した。この年末に、念願の地元・名古屋営業所へ転勤。今夏は、南米・アンデスなどでツアー・リーダーを務める予定である。

こうやってコースを羅列すると、なんだかすごい登山技術を必要とするように思われるかもしれない。確かに“登頂ツアー”の一部（モンブランなど）で、ピッケル･アイゼン技術、及び現地ガイドとのアンザイレン登行を必要とするものもあるが、ほとんどは“ワンゲル出身者”であれば体験できるコースである。優れた登攀技術を要求される“エキスペディション（遠征登山）”とは異なり、“トレッキング”において必要とされるのは「体力」の他は、次の２点であろう。

まず第一点は、「辺境地への適応力」だが、これはワンゲル出身者には全く問題無いでしょう（笑）。

そして第二は、キリマンジャロやヒマラヤ高所（特に4,000m以上）での「高所順応力」である。しかし「高所順応力」は経験と体質・体調に負うところが大きく、また日常トレーニングが可能なものでもない（日本では富士登山くらいか）。必要なことは、とにかくゆっくり歩く、水分を多く取る、一日の登行高度を抑えるといった、基本的な「高山病の予防知識」の修得と厳守です。高山病は非常に危険な問題であり、実際に自分も取り返しのつかない事故に遭遇してますので、特に初めて高所に赴く場合は、肝に銘じておいて下さい。

以上、極めて個人的な経験をもとに「海外トレッキング」について書いてきましたが、興味をお持ち頂き「昔取った杵柄」を奮い起こすきっかけとなれば幸いです。私の場合は「会社辞めて放浪」と言う特殊なケースですが、今は「休暇でヒマラヤ・トレッキング」も充分可能な時代です。先日は、３３歳の現役銀行員（熱田 渉氏）が「世界７大陸最高峰登頂」なんて言う衝撃的なニュースまで耳にしています。もちろん、それぞれ職場の事情など、取り巻く環境は千差万別でしょうが、是非とも世界の高峰と対峙して「人生観に影響する程のインパクト」を体験してみて下さい。

最後に【ＣＭ】となりますが、私が勤務しております「アルパインツアーサービス㈱」の業務を紹介させていただきます。ＯＢ、現役の皆さんに、情報提供などお役に立てることがあればご協力させて頂きますので、宜しくお願いいたします。

【ツアー内容】海外・国内トレッキングのパッケージツアー（カタログに掲載）
海外トレッキングの個人手配・グループツアー手配
ヤマケイ登山教室など「山と渓谷社」タイアップ・ツアー

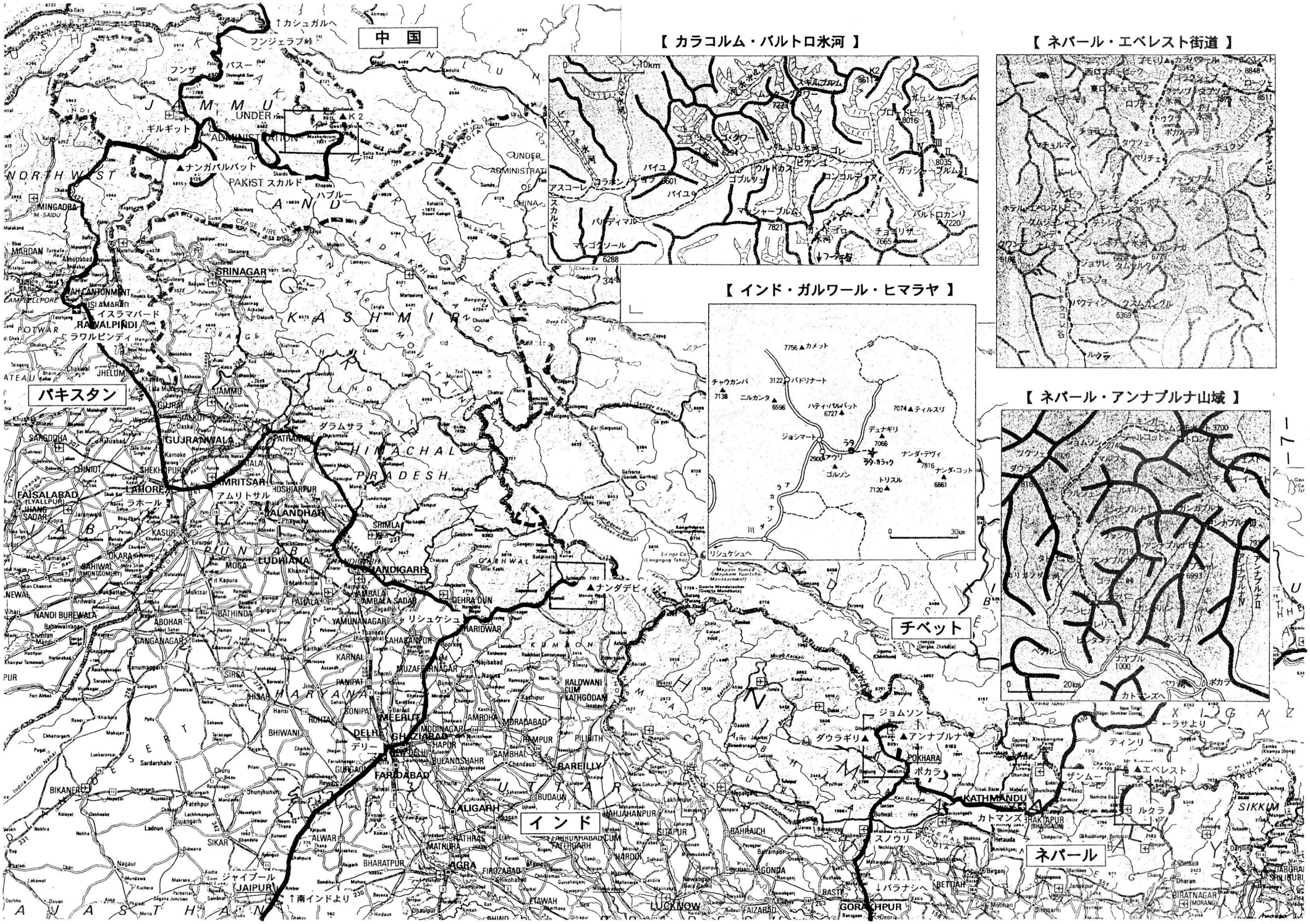
【 カタログ 】『世界の山旅・辺境の旅』＝夏版（３月発行）・冬版（９月発行）の２分冊。
ヨーロッパ･アルプス、カナディアン･ロッキー、カラコルム、アンデス　→夏版
ネパール･ヒマラヤ、インド･ヒマラヤ、ニュージーランド、パタゴニア　→冬版
キリマンジャロ、ボルネオ、台湾、中国・チベット、日本の山旅 etc.　→通年

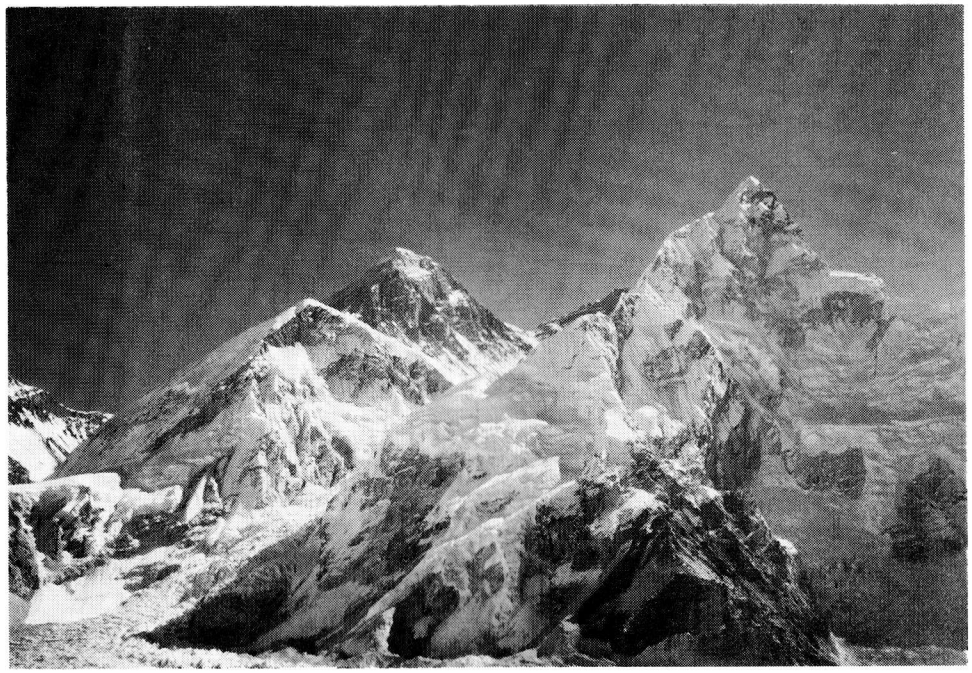
【 説 明 会 】現地で撮影したスライドやビデオを上映、トレッキングコース＆ノウハウを解説。
特にカタログ発行時（３月・９月）は、全国各地で「地方説明会」も開催。
私も中部地区(東海・北陸)を担当しますので、ご興味のある方是非お越し下さい。

【 問合せ／資料・カタログ請求 】
アルパインツアーサービス株式会社 名古屋営業所　　深井 嘉浩〔ＫＵＷＶ２９期〕
住所：〒450-0002 名古屋市中村区名駅 3-23-6 第２千福ビル８階
TEL：０５２－５８１－３２１１　FAX：０５２－５６１－８３３８

追伸：東京勤務の折に、１１期・長岡さん、１５期・南保さんにお会いする機会がありました。これも「やまざと」掲載がご縁と、この場を借りてお礼申し上げます。

また、放浪帰国後は一文無しで、しばらく山にも行けない状況でしたが、最近は２７期・竹内さん（福井山岳会所属。３３期・西村さんも同会員）とロッククライミング〔北岳バットレスⅣ尾根〕や山スキー〔白馬蓮華、取立山〕に同行させて頂いたり、３０期・大村君（何故か今も近所）とは北八ヶ岳宴会山行＆クロカン･スキー（初体験）に行って参りました。山から遠ざかってる皆さんも、たまには仕事忘れて遊びませんか？

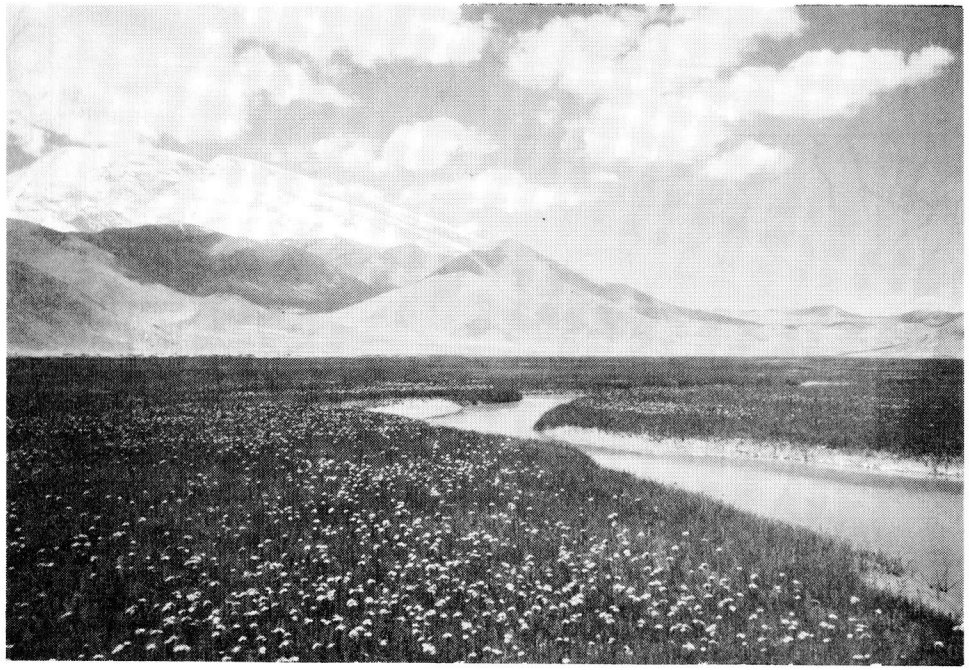

中国
パキスタン
インド
ネパール
チベット
【 カラコルム・バルトロ氷河 】
【 ネパール・エベレスト街道 】
【 インド・ガルワール・ヒマラヤ 】
【 ネパール・アンナプルナ山域 】
↑カシュガルへ
フンジェラブ峠
フンザ
ギルギット
ナンガパルバット
PAKIST スカルド
ハプルー
UNDER ADMINISTRATION
UNDER ADMINISTRATION OF CHINA
K2
MINGADRA
MARDAN
SRINAGAR
RAWALPINDI
イスラマバード
ラワルピンディ
JHELUM
JAMMU
GUJRANWALA
SIALKOT
ダラムサラ
PATHANKOT
AMRITSAR
アムリトサル
LAHORE
ラホール
FAISALABAD
JALANDHAR
SRINAGAR
SIMLA
CHANDIGARH
DEHRA DUN
ナンダデビ
リシュケシュ
HARIDWAR
YAMUNANAGAR
SAHARANPUR
KARNAL
PANIPAT
MUZAFFARNAGAR
SONIPAT
MEERUT
DELHI
デリー
GHAZIABAD
ALIGARH
AGRA
MATHURA
ALWAR
JAIPUR
ジャイプール
↑南インドより
BIKANER
BHIWANI
HISAR
SIRSA
BAREILLY
MORADABAD
RAMPUR
LUCKNOW
FAIZABAD
GONDA
BAHRAICH
GORAKHPUR
BETTIAH
BIRATNAGAR
SIKKIM
KATHMANDU
カトマンズ
POKHARA
ポカラ
ジョムソン
ダウラギリ
アンナプルナ
エベレスト
ルクラ
ティンリ
ラサより
スノウリ
↓バラナシへ
ジョシマート
ラタ
ラタ・カラック
ナンダ・デヴィ
ナンダ・コット
トリスル
ゴルソン
ニルカンタ
バドリナート
カメット
チャウカンバ
リシュケシュへ
ベシサハル
カトマンズへ
ポカラ
ベシサハル
ナガルコット
ナガルコット
ナガルコット



【 カラパタール(5545m)より エベレスト(中)とヌプツェ(右) 】

【 アンナプルナ内院・ＢＣ付近(4000m)は 周囲全てが「ヒマラヤ」】

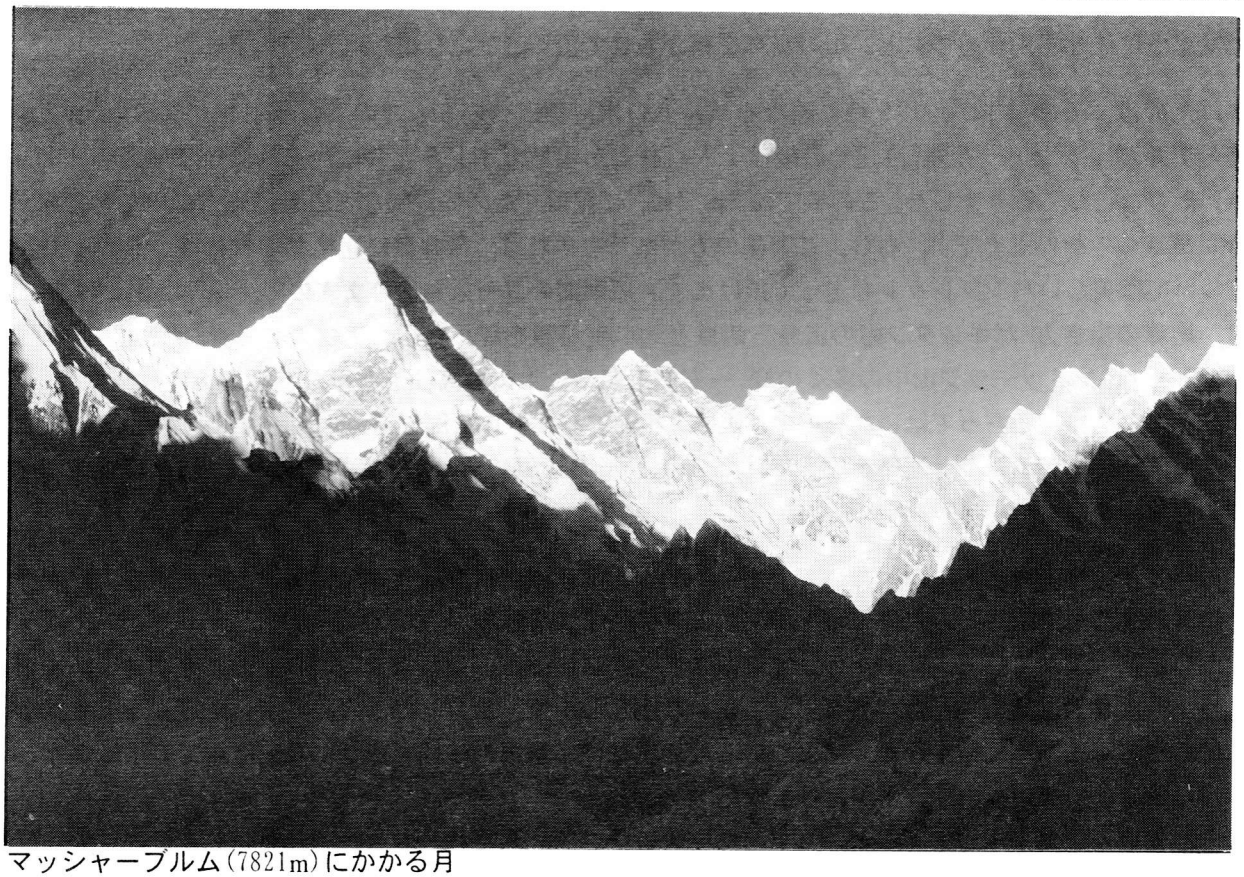
【 ゴンドコロ･パス(5600m)より Ｋ２(中)とブロード･ピーク(右) 】



【 ７月のパミール高原ムスターグ･アタ山麓は一面の花、夢の世界 】

カラコルムへの旅より ―― 次ページ記述の山歩きにつき，写真で紹介させて頂きます。

11期OB 長岡正利



マッシャーブルム(7821m)にかかる月
日が差し始めるまでは氷点下の世界。バルトロ氷河コンコルディア(標高4650m)より望見。

雲湧きはじめたマッシャーブルム　上写真の右方の谷間から見上げたもの。この辺りでの，谷との比高は約3000mだが，地形の規模が大きいために，覆いかぶさるように聳える山々もさほどには見えません。

この原稿をまとめつつ，ふと気がつけばカラコルムに出発したのがちょうど１年前のことでした。職を辞して後，１ヶ月間余をかけて，長年の憧れであったパキスタン北部を歩いて参りました。

今回，「やまざと」誌の海外特集とのことで，一時はなにがしかの紀行的文をとは思ったものの，慌ただしい中では思うに任せず，せめてもと，山の写真を紹介させて頂くことにしました。

出かけたのは，その前半が，Ｋ２峰に連なるバルトロ氷河源頭への５人でのトレッキング（29期OB深井様ご勤務のアルパインツアー社催行），その後は１人（むろん現地ガイドらと共に）で，フンザ地区の5000mの山を歩いたりなどして参りました。この稿では，本当は，ご覧頂くために地図などもとは思っていたのですが，つい時間が無くてそのままです。もし，ご興味の方がありますれば，深井様に連絡なされれば，トレッキング部分については美しいパンフレットを送って頂けます。短期間のコースもありますので，是非お出かけを。

実は，地球の歩き方･パキスタン編の広島三朗様と，小生が職を辞めたら，アフガニスタン国境に近いヒンドゥークシュ･ヒンドゥーラジ山中の多くの峠 ―玄奘三蔵や，大唐の高仙芝将軍など歴史上の故実の地― を結ぶ山歩きにご一緒にと言ってはいたものの，氏は２年前にバルトロ上部で遭難･ご逝去。しからば単独でと，現地の登山関係エージェントと連絡を取って見たものの，６月ではいくつかの峠は雪で越えられないとの由で，上述のような山歩きとなりました。

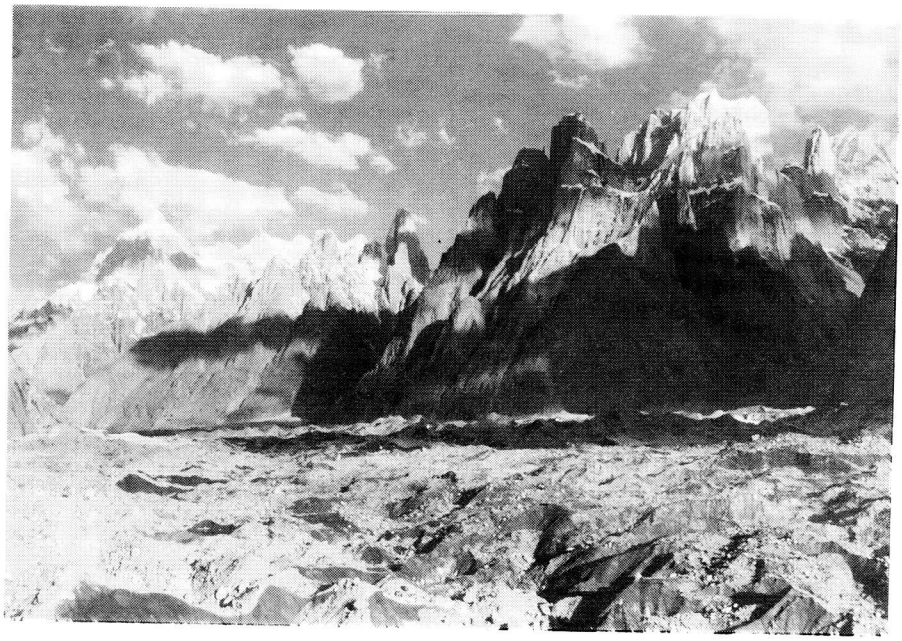
ここに紹介する写真は氷河の山々だけですが，夏のこと故，山中には様々の植物も。一方，山麓での人々の生活と山々の眺めも素晴らしいものでしたが，ここでは割愛しました。

バルトロ氷河の懐深くにて，8000mの山々に囲まれた中にいると，これまでの山の記憶も総てどこかに消えてしまうような壮大な眺めでした。静寂につつまれた眠りの中で，テントの下の凍りついた岩片を載せた氷の底から伝わってくる氷河の微かな震えに気づいて起き出せば，氷雪の稜線を背景に満天に総ての星は煌々と輝き，本当に物音一つない夜の静けさがありました。

人家のある辺りまで下山してくると，さすがに気候はなごみ，夕暮れともなれば巨樹のもとに佇んで，暮れなずむ氷河の山々が夕焼けに染まるさまなどの，涼しい風の気配。もう，酷寒と低酸素に悩まされることもない，満ち足りた眠りの安らかさのことなどが想い浮かびます。山麓でも，空が澄んでいると，夜ごとの人工衛星の光輝や流れ星の数々など，それが当たり前のことのように思えてきました。

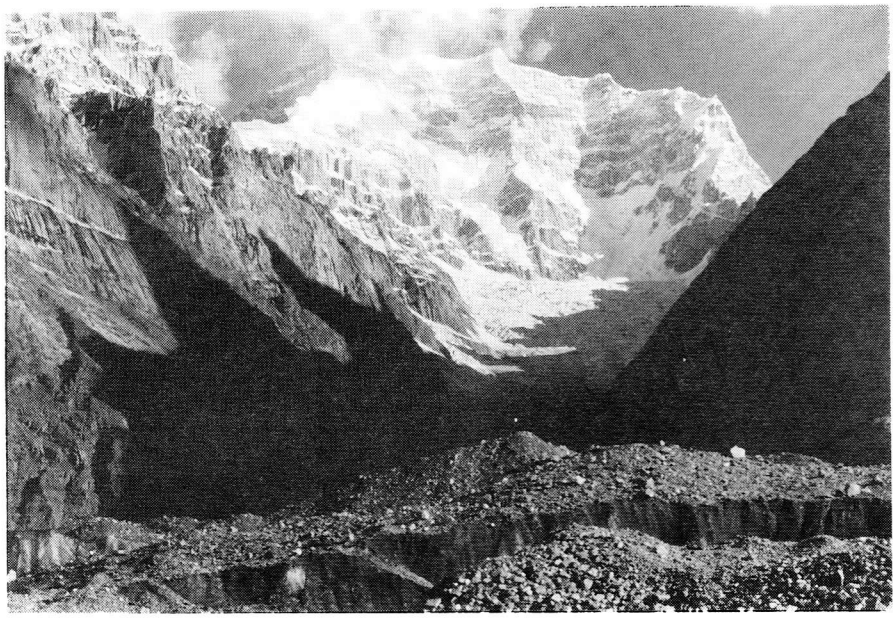
早いもので，それからもう１年。退職直後には，これでようやくに心のゆとりを得ることが出来ると浮き立つ心持ちで，今後は古今の書に親しみ，和洋の音楽を愉しみ，西域関係の探検史を学び，などと思ったのもつかの間。再就職して以来は毎朝６時20分出発の慌ただしい生活にて，列車中での読書時間だけは確実に増えたものの，この山歩きのアルバム整理も未だままならぬ状況です。

いつの日にか再びと思えど，今や，カラコルム山中での日々は夢まぼろしのようです。

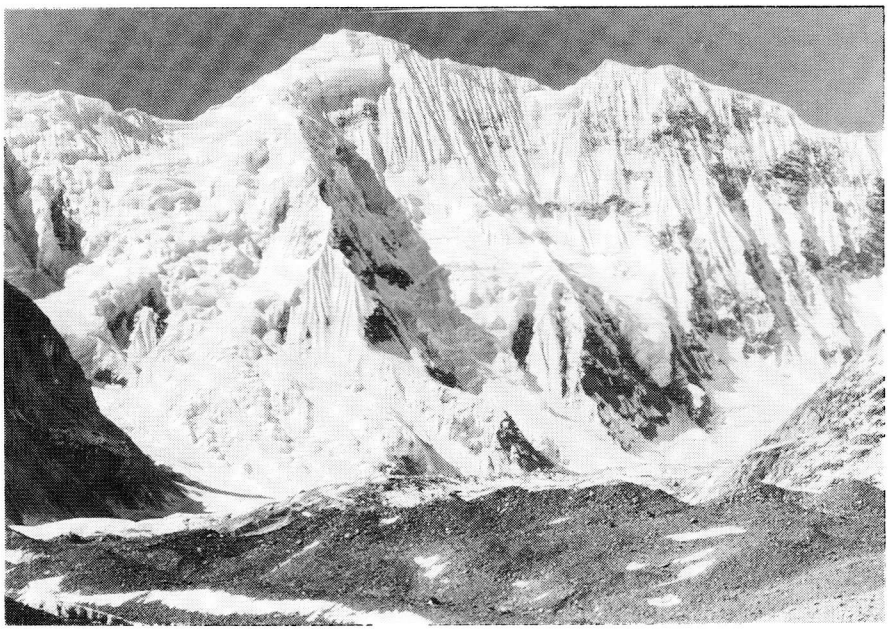


バルトロ氷河側壁に連なる山々

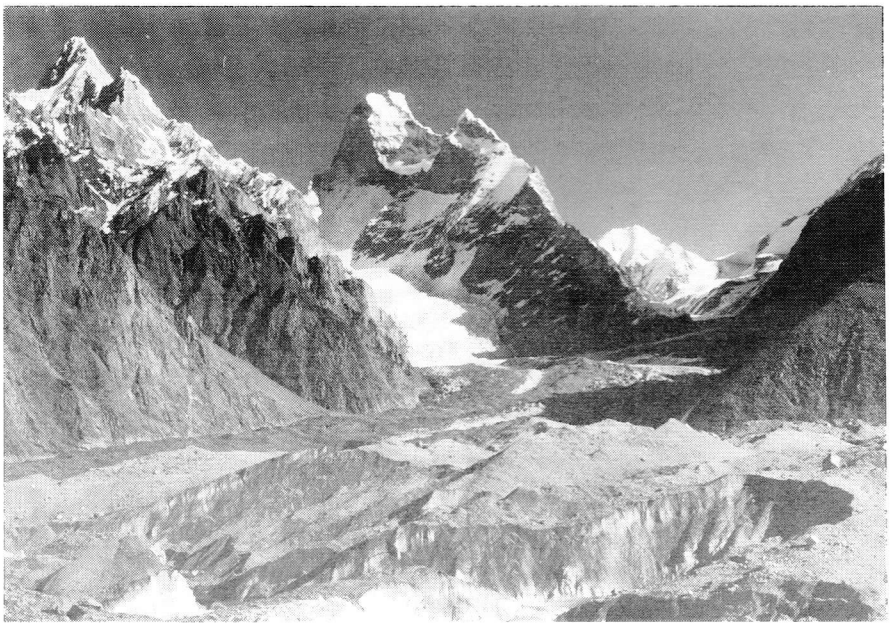
歩き始めて，ここまでで５日目。氷河はまだ序の口。氷河に磨かれた怪奇な岩峰が延々と続く。氷河の上はご覧のような岩屑の堆積で，起伏に富んだ広大な砂利山状。近くの岩峰までの比高は，2000～3000m。 山は，左より，パイユピーク(6610m)，トランゴタワー(6763m)など。



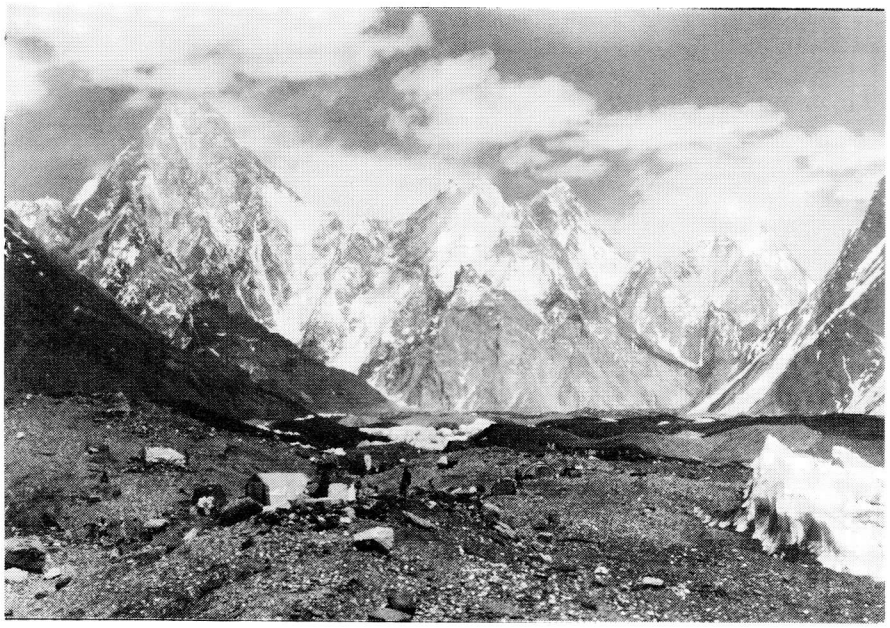
クルクスム（6600m）
巨大なバルトロ氷河本流には，左右から多くの支流氷河が合流している。その何れにも，源頭には美しい山々が覗いているが，7000～8000m級の山々が多い中では，あまり登山の対象とはならないようで，ほぼ無名。左もその１つ。



ビアルチェディ氷河源頭のピーク（6810m）
これも，上記同様のピークの１つ。懸垂氷河と氷河の雪襞が見事。



ムスターグタワー（7284m）
同じく，脇から合流する氷河の奥のピーク。

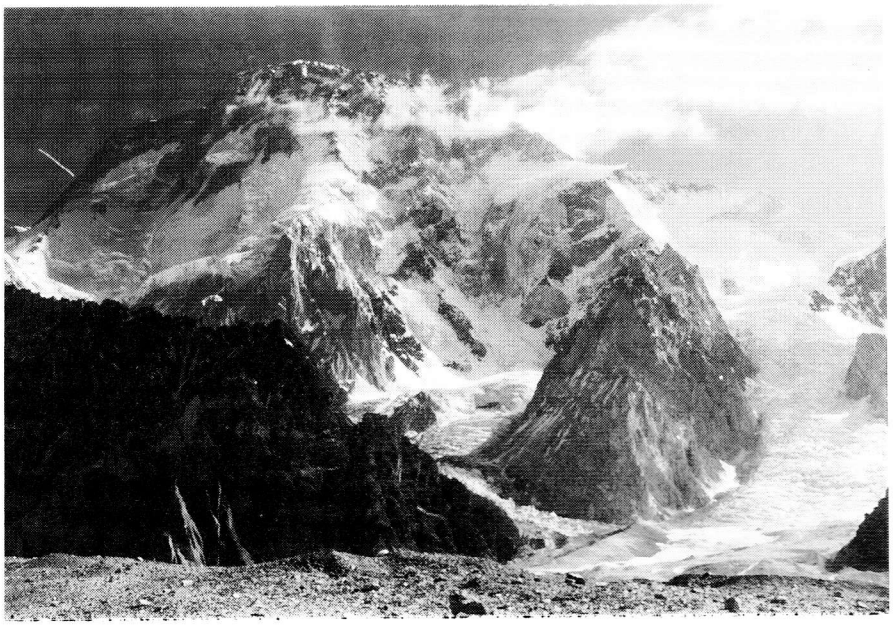


ガッシャーブルムⅣ峰（7980m）

山名は，現地バルティ語で「美しい山」の意との由。

トレッキングの半ばからずっと正面に見え続け，早朝の曙光から夕暮れの闇に沈むまで，終日の美しい眺め。

手前は，パキスタン陸軍の連絡キャンプ。トレッキングの間も，このピーク右奥のシアチェン氷河域では，インド軍との間での砲撃戦が続いていた。

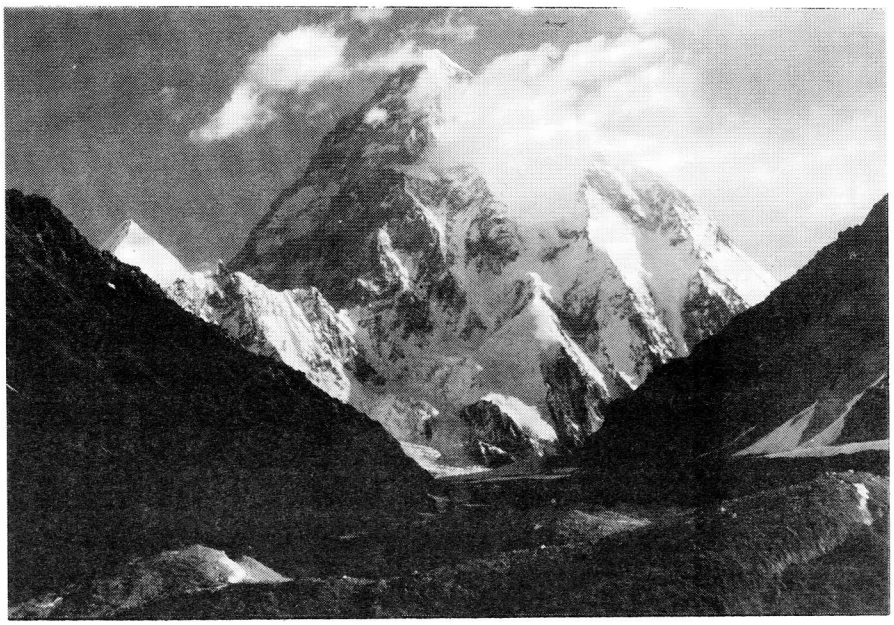


中央写真：**ブロードピーク**（8051m）

上の写真でのガッシャーブルム山脚がコンコルディア。その地に近づくとともに，このどっしりとした山が左方に見え始める。

下の写真：Ｋ２（8611m）

バルトロ氷河は，上部のコンコルディアで南北に分岐する。ここからしばらく進むと，ようやくにＫ２の全景が見え始める。左に小さく覗く純白の峰は，エンジェルピーク。



先に述べた広島様の永眠の地は，この左奥の氷河の中。最後の会話は，カザフのアルマトィ市からの電話にて，国境地域一帯のソ連邦製10万分１図等が入手可能なので先生の分もご一緒に･･･と。後日，その地図に対して，初めて詳しい地形が判ったのでいよいよこれからとのお礼が届いたのが最後となってしまいました。その地図も，きっと共に氷河の中に。

ここでは，山を中心に紹介させて頂きました。しかし，カラコルムの本当の美しさは，氷河の山々を背とした山懐の村での風光や村々を結ぶ峠に―パミールを想わせる草原の峠から，夏も氷雪の中の嶮しい峠まで。

広島様も登頂したＫ２を眺めつつ，氏とのそんな峠歩きの夢も，もう永遠に叶わぬ夢となってしまったな･･と，ぼんやりと考えていました。

かなり以前に書いたものですが，今も心に残る地の故に，ここで紹介させて頂きました。

（日本地図センター刊『地図ニュース』No. 218より）11期OB 長岡正利

図-1　ラダック周辺の衛星画像図、上部がインダス河、その右がレー、左はラダックへの最後の峠フォツ・ラ。中央はザンスカール川（Olizane、1：350,000　Ladakh Zanskar、約10分の6に縮小）

ラダックとザンスカールは、インド亜大陸北方のヒマラヤとカラコルム山脈の間の河源近くのインダス河流域にあり、その主邑はそれぞれレーとパダムである。

ラダックとは、チベット語で言う「峰（関嶺）の彼方」の地である。

その語のとおり、周辺のいずれから見ても3000～6000mの関嶺の彼方の、幾つもの峠の向うに弧立した地である。標高は低いところで3500m、気温の年較差50℃・日較差20℃以上、年雨量100㎜以下の荒寥・静寂の地であり、遠く氷河の山々を望む。その気候と高度のゆえに、気味の悪いくらいに澄んだ蒼空と強烈な日差しのもとで、僅かばかりの耕地と小さな集落には釣合わないようなチベット仏教（ラマ教）僧院（ゴンパ）が岩山の麓や頂に古城のようなたたずまいを見せている。

これらの地への起点、インド北部のシュリーナガル（本誌8月号で紹介；本稿はその続きです）からラダックへ至るには、4000m前後の3つの峠を越える2日行程を要する。道は、最初の険しい峠、ゾジ・ラをすぎる頃から風景が一変し、次第に沙漠の様相を見せる。中間地カルギルを過ぎれば、谷間で僅かな水を利用できる土地のほか、山々と大地はことごとく不毛。ヒマラヤ造山運動で隆起・褶曲した地層の異様な色彩を見るのみとなる。また、これ以奥では人々の容貌はモンゴル系となって各所に白亜の仏塔やゴンパが点在するなど、それまでのイスラム文化圏からチベット仏教圏に入る。なお、ザンスカールへは、途中のカルギルより南へ、ジープでさらに2日を要する。

このように、この地は、地理・文化的にはチベット圏にある。かつてはチベットの一王国であったが、近世以降はインドの一部として長くチベット世界とは分離されてきた。しかし、今日でもなお小チベットと呼ばれているように、かつての文化を保ち続けている。これは、天然の要害と苛酷な自然に守られて、外国の支配が強いものとはなり得なかったためにほかならない。

ラダックとザンスカールでは、1947年のインド・パキスタン独立直後からのカシュミールの帰属をめぐる3回の戦争、東部のアクサイ・チンの領有をめぐる中印紛争等の政治的理由から、紛争地域として長く外界との接触を絶たれてきたため、古くから人々の生活の中に生き続けていた仏教とその美術―かの地の人々にとっては信仰の対象そのもの―が1974年の入域解禁によって突然に現代に甦り、伝承されてきた民俗・文化とともに密教系仏教美術研究の面で世界の注目を浴びた。

この付近の地図

インド亜大陸全域の地図の利用については、本誌8月号「スリナガル」の稿で紹介したとおり、米国AMSがかつて作成した25万分1図シリーズ等が利用できる。ほかに、この地方については1987年に作成された衛星画像地図（図-1）があり、等高線はないものの、道路や集落については唯一正確な最新情報として重宝である。

東西交流史の中で

この地は、今でこそ、中印・中パの両国境紛争

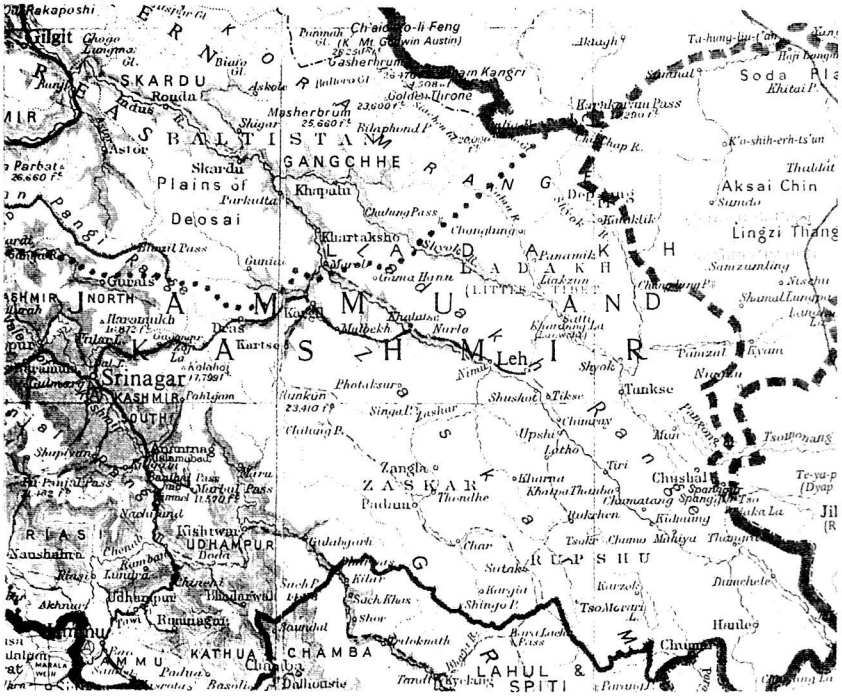


図-2　ラダックの中心地レー（図の右）と、その起点シュリーナガル
図中紫色の点線は印パ停戦ライン、破線は中印係争国境（Bartholomew、1：4,000,000 Indian Subcontinent、10分の9に縮小）

によって三方の国境を閉ざしたままとなっているが、近世には、ヘディン、スタインらの東トルキスタンへの地理的探検隊も通過し、さらに奥地へと峠を越えていった交易上要衝の地であり、かつてはチベットや新疆へ開かれた国際都市であった。

さかのぼれば、インドに生まれ、早くから中国、日本へと伝わっていた仏教は、チベットには7世紀に中国とネパールから伝えられたが、さらに8世紀には当時インドで全盛であった密教がカシュミールとこの地を経てチベットに伝えられ、隆盛を見た。その後、中国、インドと相次いで仏教およびその文化が消滅する中で、奇跡的にこの地に遺った曼荼羅等の図像（写真⑦）はかつてインドにおいて全盛であった大乗仏教の流れを正統的に伝えているものといわれている。

なお、日本とこの地域との歴史的な繋がり・交流は、仏教伝来に関するものを除けば何もない。最近の調査・登山隊を除いて、この地への日本人入域者で知られているのは、明治末期から昭和初期まで中央アジアに広く足跡を残した大谷光瑞の探検隊の一部と明治末の日野陸軍少佐の踏査行位のものである。

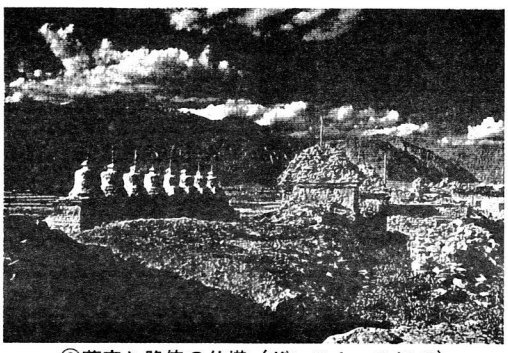
王朝の興亡と現在

ラダックが吐蕃（チベット）の史書に登場するのは、10世紀末である。もとより、人口希薄の地のゆえに、周辺への大きな勢力は及ぼし得なかったが、15世紀にはナムギャル王のもとで、レーを中心に今に残る多くの寺院が建設されるなどの繁栄を見た。その後、中央アジアからのトルコ系民族の侵入、次いで西のバルチスタンの軍勢の侵寇を受け、王国は崩壊の危機に立たされるものの、16・17世紀には再び全盛をむかえ、ナムギャル王朝は仏教の興隆に努めてチベットとの交易も盛んに行われた。しかし17世紀には、チベット・蒙古、カシュミールの軍勢に蚕蝕され、衰退の道を歩むこととなり、19世紀以降は英国統治下のカシュミール藩王国に併合されて現在に至っている。

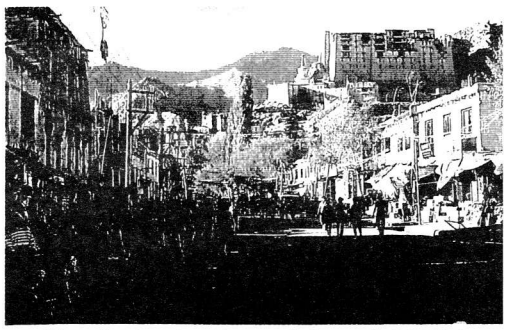
このような歴史を経て、ラダックの中心地レーには、市街のどこからも見え、丘の上から町を睥睨するような9層の王宮の廃虚（写真④）が今に残っている。しかし、僻遠の地ザンスカールでは、かつての王国の都邑とは名ばかりに過疎化が進んで、今では日干しレンガの家が数十軒のみとなったパダム（写真⑤）とさらに奥の寒村ザンラにそれぞれナムギャル王家の末裔が住み、今も村人から「王」として遇されている。

ラダックを世に知らしめ、今も唯一ともいえる観光資源となっているのは、既に述べたとおり、密教系美術の数々が残る僧院（図-1中に点在する＊）であるが、その代表は、ラダックで現存最古のアルチ・ゴンパ（11世紀）であり、整然と描かれた精緻な曼荼羅その他の壁画は壮観を極める。ほかに、陸路ラダックに入る際に岩石砂漠のよう

①不毛の大地を縫うラダックへの道

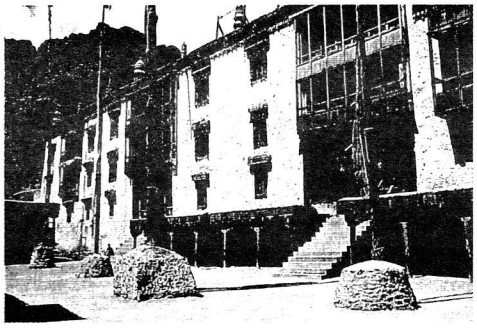

②蒼空と路傍の仏塔（ザンスカールにて）

③たくましく生きる人々（同、路上の行商）



④ラダックの中心地レー、背後の山上は旧王宮

⑤今では見るかげもないザンスカールの中心地パダム、仏塔が点在する土色の街



⑥ラダックで最大のヘミスゴンパ内庭

な山中に見えてくるラマユル・ゴンパレーを過ぎて周辺の無数の仏塔とともに風景との美しい調和を見せるティクセ・ゴンパ、最奥にあって仮面舞踏を伴う初春の大祭が有名な最大規模のヘミス・ゴンパ（写真⑥）等々。ザンスカールではカルシャその他の僧院がある。

谷間に点在する僧院の壁面には、数多くの曼荼羅を始めとして、朱、青、黄白に彩られた守護尊、護法尊の多くが忿怒の異相をなし、時に明妃を抱く。見るものを呪縛するような画像の数々である。苛酷な自然と風土に生きてきたチベットの人々の内に秘めたる鋭い情緒感による凄ましい限りの創造物であろう。

しかし、村々には、仏の加護と来世を信ずるように穏やかな表情でマニ車（廻す毎に、納めた経文を唱えたことになるという）を手にして真言を唱え続ける老人はいても、修行が続けられている筈の僧院には、ほとんど堂守のような、宗教的気迫・緊張感を感じさせ得ないような僧以外には見あたらず（高僧は主都デリー等に滞在の由）、堂内には異彩異形の諸尊と曼荼羅が、周囲を飾る千仏とともに退色し損傷しながらも、不思議に色鮮やかに、冷えびえとした空間をなしているのみである。

この地では、夏も終わりに近い頃から風が吹き始め、微細な土沙を巻き上げて視界を閉ざす日が多くなる。やがて、秋ともなると日々に気温は低下して空は澄み渡り、天地に満つる月の光の白い輝きが地上の霜に見まごうような酷寒の夜が訪れる。

峠は雪に閉ざされ、外界から訪れる人も絶える。ほとんど人々に顧みられなくなった僧院の閉ざされた内陣の闇の中では、幾多の仏の、人々の心を見据えるような眼が永遠の命を長らえているのではないかと——。

（国土地理院）

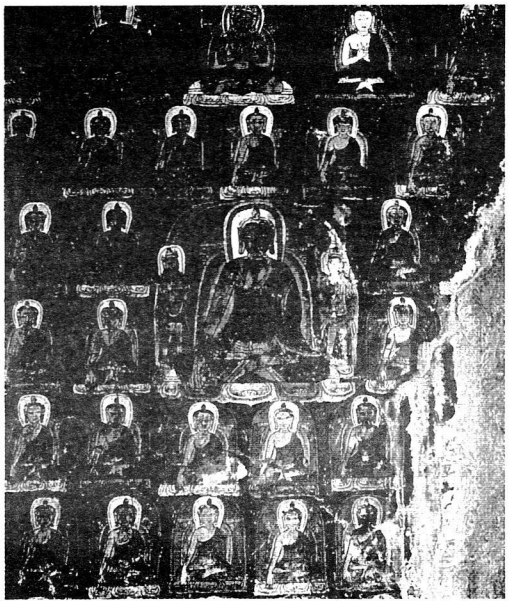
【文献】

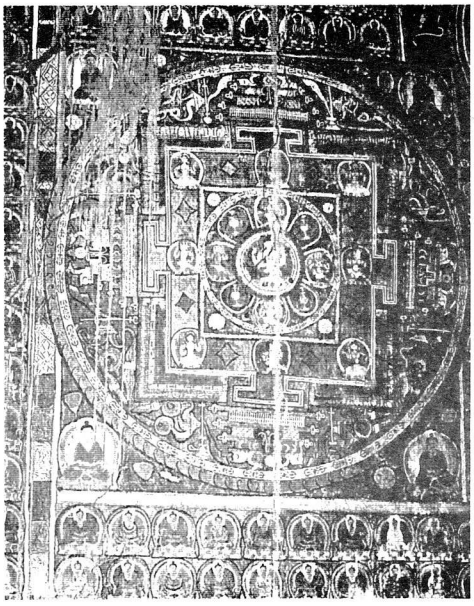
F. de Filippi："Himalaya, Karakoram and Eastern Turkestern", E. Arnold, 1932.

HAAJ：「チベット・ラダック研究」、1973.

岩村武二：「ラダック曼荼羅」、岩波書店、1987.

O. Follmi："Zanskar—A Himalayan Kingdom", Thames & Hudson, 1988.





⑦僧院の壁画の教かず、左：護法尊マハカーラ（日本に渡って大黒さま）、中：千体仏の一部、右：別尊曼荼羅

熱い大地の想い出話
Ｐａｒｔ Ⅱ

33期　佐藤　かおり

もう何号も前に（編者注　会報６号）、熱い大地の想い出話（パラグアイの話）を書かせてもらいました。また今回も、熱い大地（南米大陸）の話を書かせてもらいます。

あ、そうそう、申し遅れましたが、私、結婚しました！（編者注　旧姓西村かおりさん）その甘～い？新婚旅行の話です。私を知ってる方は、私がずーと自由な独身生活を楽しむだろうと思っていたでしょうが、ふとしたタイミングでこうなり、新婚旅行で、南米大陸最高峰゛アコンカグア゛へ登ってきたのであります。今回、その日程、費用などまとめて何かの参考になれば、そして、是非行ってみてもらいたいと思っております。

アコンカグアというと、ヒマラヤ以外では一番高い山、標高6959m、もしくは6962mということで、高所登山になります。皆、高山病の不安から「行けない！」と敬遠してませんか？あせって登れば高山病も出るでしょうが、マイペースでゆっくりと、余裕をもって高度順応すれば、必ずこのくらいの標高なら登れると思います。しかし、休みがとれない！これが一番の問題でしょう。だって、アルゼンチンのメンドーサ（登山基地）まで３日はかかります。もちろん直行便はありません。私達は、サンチアゴ（チリ）経由で国境を夜行バスで越えました。（37曲がりの急カーブ立山なんて目じゃない！）

舟田さんに「キーッ！私も行きたい！と思えるような原稿を」と頼まれたのですが、登山自体はそんなに楽ではなかったので、キーッ！という感じはしないと思います。

キリマンジャロの時は小屋泊りで、ガイド、ポーター付き、食事もいっぱいおいしいものを作ってくれたので、個装だけ持ってぶらぶらゆっくり行けばよかったし、ジャングルから草原までのいろいろな美しい植物も見れました。ヒマラヤトレッキングの時も、ポーター、コックとの大名行列で、至れり尽くせりの待遇で快適でした。途中の村や寺や人々、シャクナゲや風景も美しく、興味深かった。アコンカグアは、そんな風に行けるところではないということをお断りしておきます。お金を出せば大名行列も出来るかもしれませんが、ピークアタックとなると、そう甘くはありません。B.C.が4000m以上だし、6000m以上での歩行は１歩がつらくて５歩ずつ歩くのが精一杯でした。やはり一般人が全て行けるわけではないので、ガイド登山は南壁トレッキング（4000m付近）が多いようです。

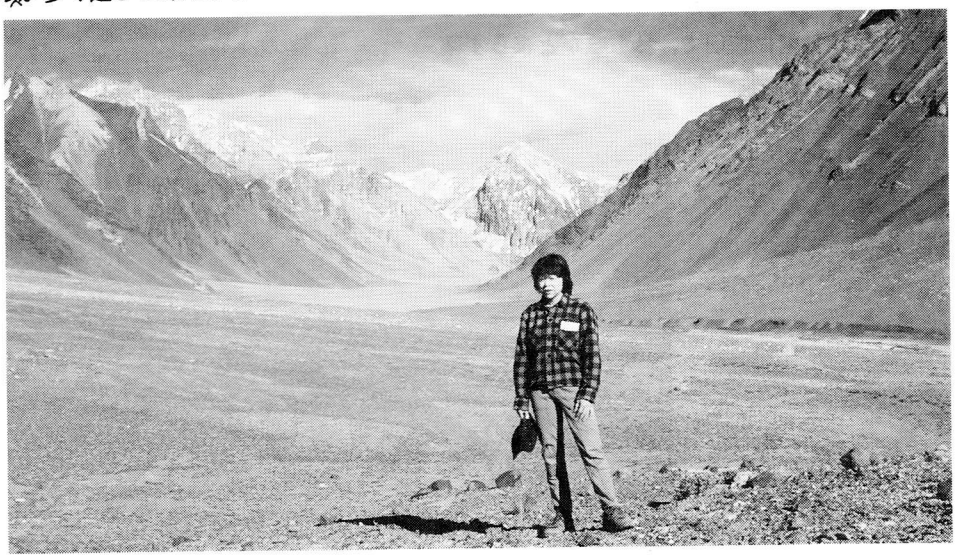
ちなみに、今年は2000年をまたぐ登山ということで、人が多く入っていて、3000人くらいがシーズン中アタックに入るだろうとのことでした。私達は、 237、 238番目でした。

私達は全て二人でやったので、食事は全て自分達で準備（買い出しから、パッキング、調理まで）し、生活用品もほとんど持って行きました。（テント、コンロ、シュラフなど。レンタルもあるが、それほどいいものはない。）

B.C.までは、゛ムーラ゛（馬みたいなの！？）が食料を運んでくれたけれど、高度順応の為、私達は、B.C.まで行くのも荷を13kg程ずつ担いでトレッキングです。B.C.からＣ（キャンプ）を一つずつ上げる荷揚げも、全て自分達でやりました。そしてつまらないことに植生が乏し

【チリ、アルゼンチン国境】

【登山申請後のトレッキング道。正面奥がアコンカグア。ここら辺は、ハイカー、トレッキングの人が多く遊びに来る。】



【コンフルエンシアへの道。オルコネス谷がずっと続く】

いのです。景色は、B.C.までででも、オルコネス谷の河原の乾燥強風地帯で、砂・石だらけ。B.C.から上もザレザレでつまらない。初めだけ（コンフルエンシアまで）少し緑があって鳥が飛んでいたなあくらいで、あとは無機質な世界でした。こんなこと書くと行きたくないと思うでしょうか？厳しーい、淋しい世界です。

登山の内容については、食料、装備表、行動表、日程表などを見て下さい。ここでは登山基地メンドーサ、B.C.の様子を書いてみます。

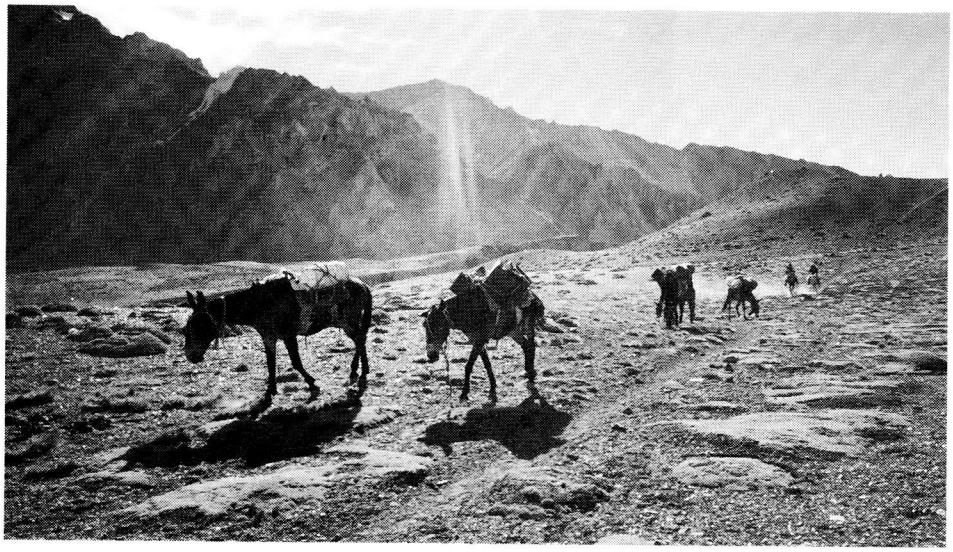
登山基地〝メンドーサ〟、聞き覚えないですか？ワインの産地です。日本に入っているアルゼンチンワインを見て下さい。きっとメンドーサの名前を見つけるでしょう。私達はボデガー（ワイン倉庫）見学と試飲をし、ワインも何本か担いで帰ってきました。

メンドーサは各国のトレッカー達がうろうろしていて、登山用品店、レンタル店、ムーラの手配、レンジャー小屋（入山届をチェックするところ）までの交通機関の手配などをするエージェントが多くあり、登山許可証をもらうところもこの街にあります。交渉は英語かスペイン語です。ちなみに一般の人々は英語も分かりません。

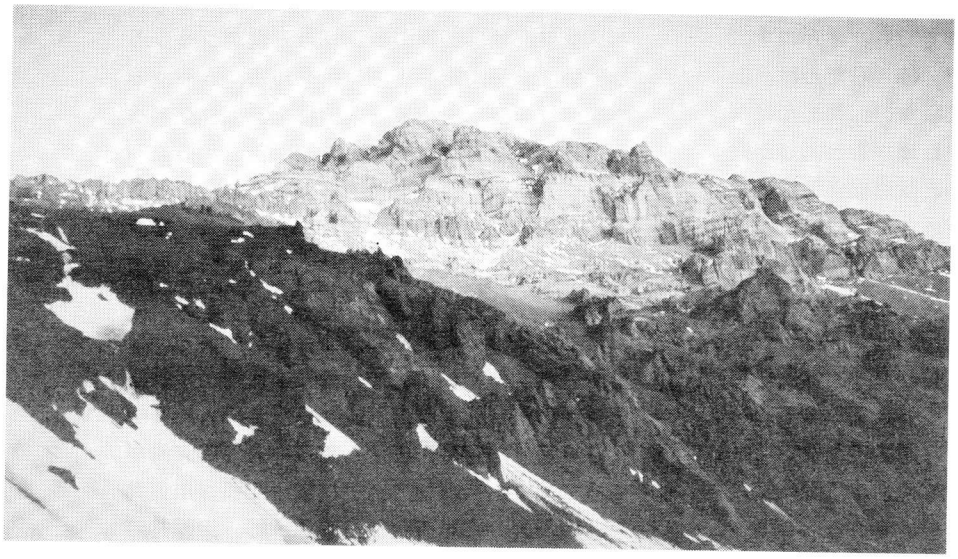
宿泊施設は街の中心に、安いのから高いのまでありますが、日本人にお薦めするのが「民宿アコンカグア」です。（街から空港の方へ８㎞くらい行った郊外）移住した日本人増田夫婦がやっててて、アコンカグアに登った長谷川恒男や、山田昇、植村直己、三浦雄一郎、田部井淳子なども来ていて、写真やサインがあります。そして、ノート（記録帳）や資料も揃っていて参考になるし、日本語の文庫本などもあります

。自炊なので好きなものが食べれるし、安全です。（南米の安ホテルなどでは、まれに荷物がなくなることがある）お風呂もあるので旅の疲れもとれるし、郊外なので静かに寝れます。のんびりするにはもってこいです。）そして、頼めばいろいろな手配もやってくれます。語学に自信のない人、日程に余裕がない人にはお薦めです！ちなみに、好意でシーズン中のみやってるだけなので、予約が必要です。

次にB.C.の様子ですが、テント村ができています。それぞれ個人用のテントも多くありますが、様々なトレッキング会社の大テントが多くあって、下山の荷を運ぶムーラの手配、下山後の交通機関の手配などをしてくれるし、レストラン、バーもあります。パソコンや携帯電話を使って下界と連絡してくれるので、安心です。医療テントも大きいのが二つあります。医療は常駐です。非常に親切で、私も咳がとまらず薬をもらいました。（日本語は通じません）B.C.には共同トイレ（汚い！）が掘ってあります。お金を出せば綺麗なトイレの鍵を借りられます。（20$）。B.C.にはシャワーもあります。（ソーラーシステム。10$／回）温かいかは不明です。B.C.近く（15分くらい離れた所）にはホテルがあって、泊まれるし、おいしい食事もあります。C２への荷揚げ後、ここで休養し、力を蓄えて、ピークアタックという人もいます。B.C.では氷河の融けた流れている水を使います。朝はまだきれいそうだけど、昼からは茶色く汚そう！欧米人は浄化するポンプを持って来ていました。私達は布フィルターだけでした。そして、B.C.では日本人にも会えます。（単独で来ている人が多い）私達は10人くらいと話をし、情報交換をしました。日本食を分けてもらったり、下山時にいらない物をあげてきました。



【ムーラが荷を運ぶ。（B.C.まで）】



【B.C.からアコンカグア頂上を見る（夕焼け）】

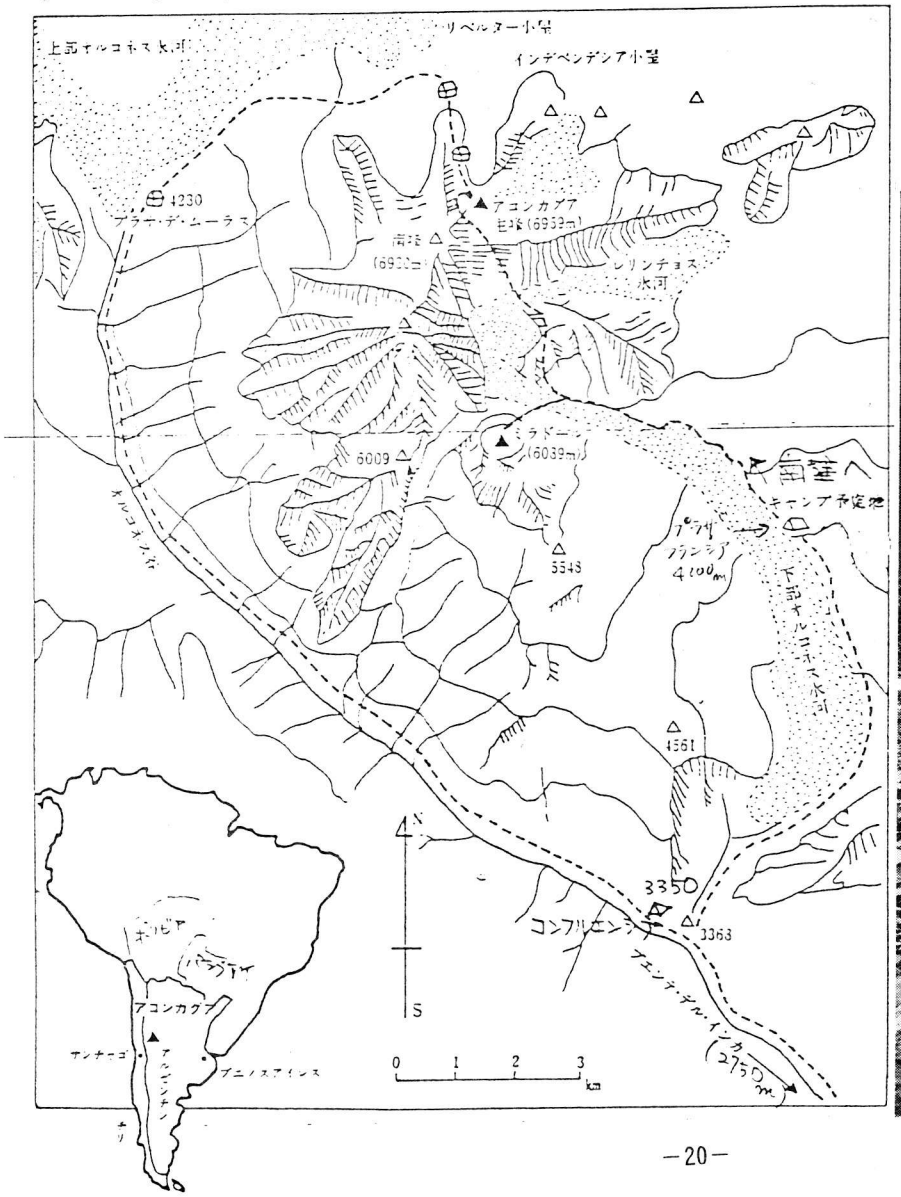
きよし＆かおりのアコンカグア登山

12/13(月)	12:30	イースターアイランド発(LA834)
	19:15	サンチアゴ着(サンチアゴ泊)
	22:00	バスでアルゼンチンのメンドーサへ
12/14(火)	4:00	メンドーサ着　泊:民宿アコンカグア
	午後	登山準備(登山申請, 装備レンタル)
12/15(水)	午前	登山準備(買出し)
	午後	パッキング
12/16(木)	5:00	バスでプエンテ・デル・インカへ
	9:50	ムーラで運ぶ荷を預け, ワゴンでレンジャーテントへ 登山申請書提出
	1120	キャラバン開始(2900m)
	17:30	コンフルエンシア着(3300m)・泊
12/17(金)	9:11	高所順応のため, 南壁方面へ散歩
	15:45	南壁ベースキャンプ(プラザ・フランシア:4100m)着
	18:39	コンフルエンシア着(3300m)・泊
12/18(土)	7:52	B. C. (プラサ・デ・ムーラス)へ移動
	17:35	B. C. (4200m)着・泊
12/19(日)	11:06	高所順応(空身)
	15:22	4945m着(キャンプ・カナダを過ぎたところ)
	17:30	B. C. 着・泊
12/20(月)	9:05	高所順応(C1往復)とC1への荷上げ
	14:53	C1(カンビオ・デ・ペンディエンテ:5100m)着
	17:28	B. C. 着・泊
12/21(火)	10:43	高所順応(C1へ移動)
	15:50	C1着
		C1'(ニド・デ・コンドレス:5300m)往復(登り1時間, 下り20分)
	17:40	C1着・泊
12/22(水)	11:04	高所順応(C2:ベルリンキャンプ:5620m往復)とC2への荷上げ
	15:55	C2着
	17:32	C1着・C1撤収
	18:57	B. C. 着・泊
12/23(木)		B. C. で休養
12/24(金)		B. C. で休養
12/25(土)	11:45	C1へ移動
	19:15	C1着・泊
12/26(日)	10:02	C2へ移動
	15:40	C2着・泊(高所順応のため, 5800m付近まで登る)
12/27(月)	5:28	アコンカグアピークアタック
	16:23	**アコンカグア北峰(6962m)到着**
	20:30	C2着・泊
12/28(火)	11:03	下山
	12:16	C1着・デポの荷を回収
	15:17	B. C. 着・泊
12/29(水)	9:03	下山
	17:30	レンジャーテント着・登山終了(ごみを提出)
		タクシーでメンドーサへ戻る(23:00着)

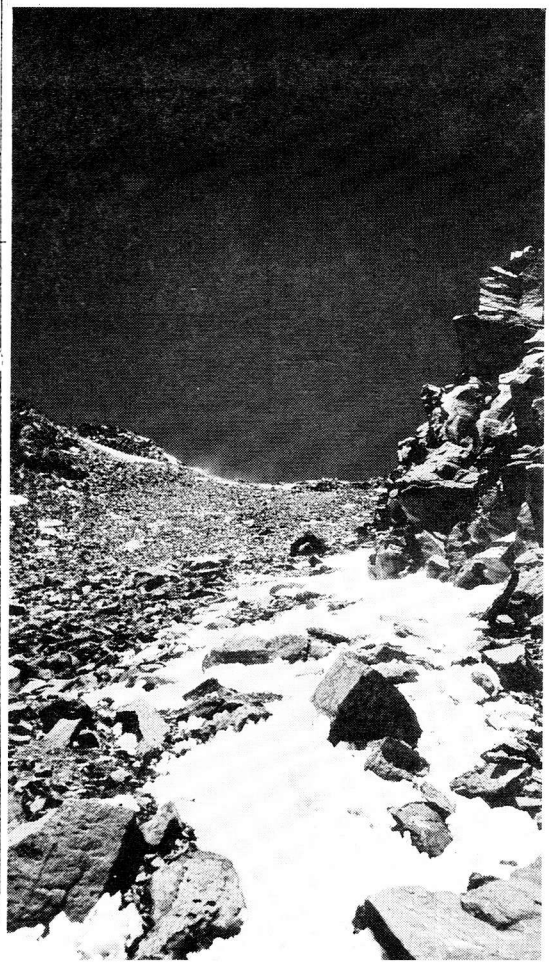
【B.C.からC１へのザレ、ジグの道。登り切った所がC１】

【Ｃ１からアコンカグアを見る（中央奥にピークへのトラバース道が見える）】

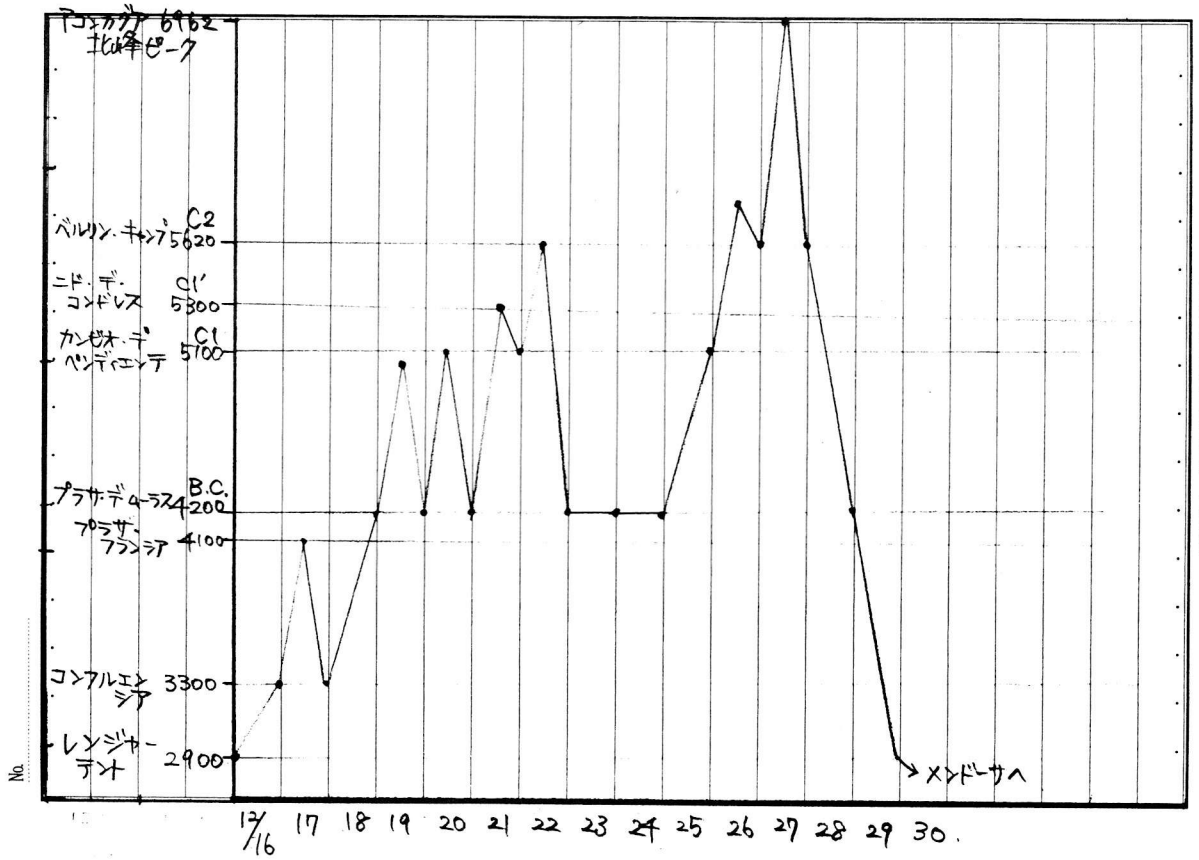
アコンカグア峰・周辺図



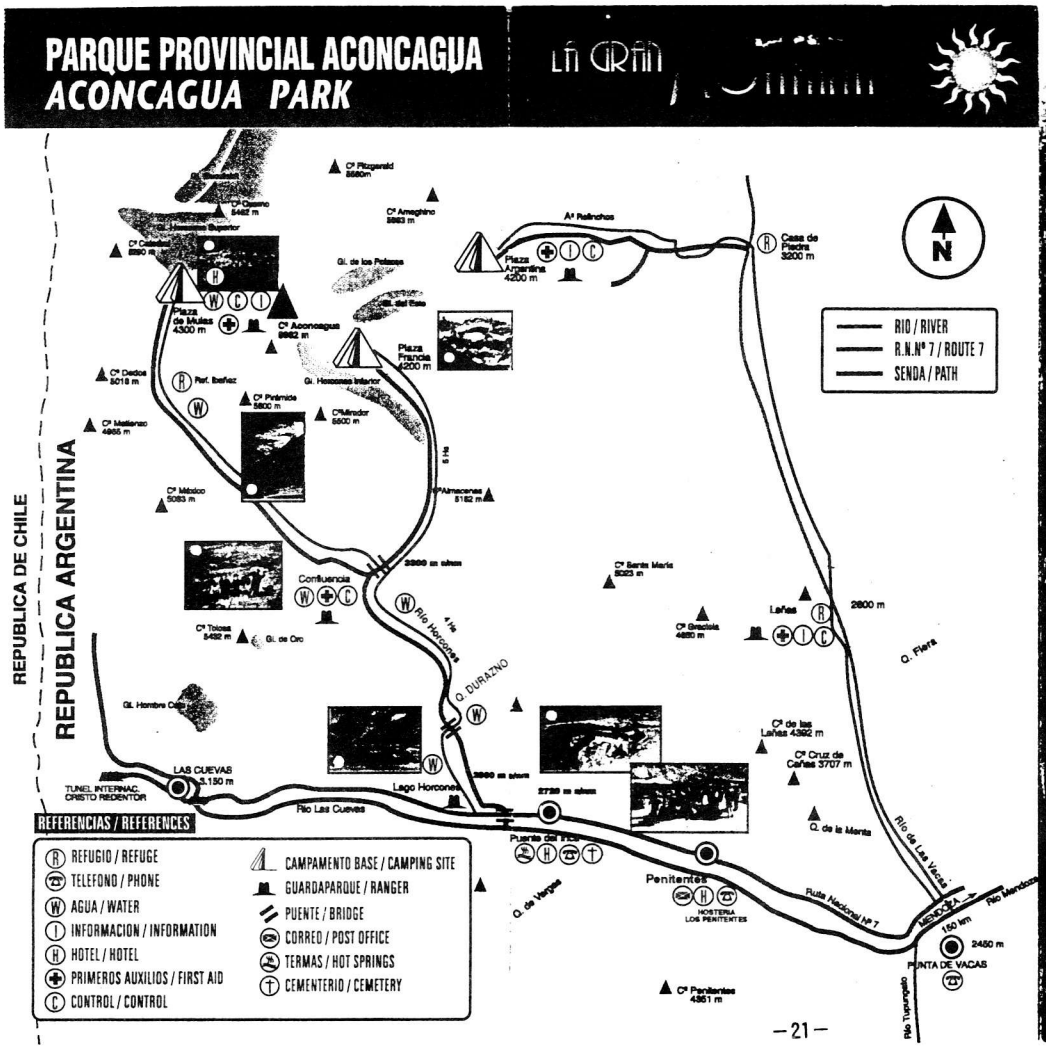
【カナレータ（ピークへの道。結構急で、6000m以上で、一歩一歩がつらかった。登り切って左奥がピーク。】

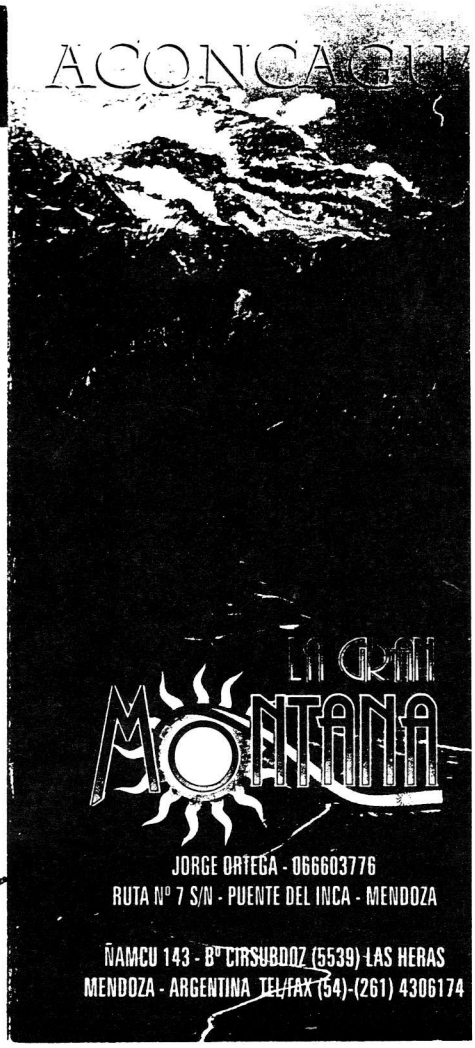


② 行動表



社団法人 福井市自家用自動車協会





【アコンカグア頂上。苦闘の末、16時23分やっと到着。疲れ切った。）】

装備リスト

＜日本から持っていった物＞

・テント（エクスペディション用）１張　（上部キャンプは強風です。B.C.用にもう一つあると便利。私達は持って上がったり下りたりで大変でした。）

・ピークワン（白ガソリンコンロ　白ガスは現地購入　ＥＰＩ、プリムスガスは売ってない。しかしキャンピングガスはある）

・プラ靴　・オーバーウェア上下　・鍋セット、まな板、ナイフ　・アイゼン（ピッケルは持っていかなかった。雪はあるが特に必要性は感じない。ストック…三浦雄一郎隊の隊がおいていったものをレンタルした）

・スパッツ、靴下　・毛手、オーバーミトン

・目出帽、帽子、サングラス　・テルモス

・ろうそく、ライター、固形メタ　・懐電

・コンパス（使わなかった）・シュラフ（厳冬期用）、シュラフカバー、エアマット

・地図（日本でアトラストレックの簡単な地図コース概略をもらいに行く。詳細な地図はない。道に迷うことはない）　・修理具

・じょうご　・布フィルター（B.C.近くの氷河の水は汚く、必要！浄化ポンプを使っている人も多い）　・医薬品（頭痛薬、胃腸薬、抗生物質、日焼け止めクリーム、カットバン、テーピング）

＜現地レンタル品＞

・ストック　・水ポリ　・ガスポリ

・ダウンジャケット

食料について

B.C.までのトレッキング中、B.C.での食料は現地調達した。

人参、玉ネギ、ジャガイモ、キャベツ、ニンニク、ソーセージ、チーズ、スープ、魚・貝の缶詰、シーチキン、オレンジ、米、パン、スパゲティ、クッキー、チョコ、ナッツ、ドライフルーツ、あめ、カステラ、ジャム、マヨネーズ、コーヒー、ココア、ジュースの素紅茶、砂糖、ビール、ワイン、ウィスキー

B.C.までは荷をムーラが運んでくれる（１頭60kgまでOK 120$）ので多く買いすぎた。余った物は日本人にあげてきた（困ったかもしれない！）

Ｃ１、Ｃ２での食事は全て日本食で持参した。これは泣けてくるくらいおいしくて**絶対に**必要やった（余裕があればもっと多くほしかった）

ジフィーズ、α米、ラーメン、みそ汁、お茶漬、ふりかけ、梅干し、緑茶、キャラメル、日本のあめ

費用について

・航空チケット（周遊）サンチアゴ⇌成田　209000

・国内移動、空港税etc.　45000

・サンチアゴ⇌メンドーサ（バス）20$×2

・登山許可証（20日間　Expedition）　120$
（High Season　12／15～？）
（Low Season　は80$　）

・ムーラ１頭（60kgまで）　120$

・メンドーサ～レンジャーテント　23$
（タクシー８$～バス10$～車５$）

・レンジャーテント～メンドーサ　100$
（タクシー１台をチャーター）

・メンドーサでの移動費　10$
（タクシー、バス）

・民宿アコンカグア宿泊費25$×４泊　100$
（少し高い！）

・手数料（日本への通信費、ムーラ。タクシーの手配など）　100$

・食料　100$

・ホワイトガソリン　9$

・装備レンタル（ダウンジャケット、　70$
　ガス入れ、水ポリ、ストック）

おまけ

アコンンカグア登山に17日間もかかっているし、南米は遠いし、新婚旅行がこれだけ？

心配しないで下さい。行く前にハワイで挙式をして、ワイキキビーチでリゾートもしたし、イースター島へモアイ像を見に行ったし、マイアミでイルカのフリッパーも見たし、アコンカグア疲れも、チリのリゾート地ビーニャ・デル・マルでのんびりし、甘～い新婚旅行を楽しんで帰ってきました。

何か、旅行から帰ってきて、新居への引っ越し、新生活、そして仕事を始めた私は、普通のおばさんになってしまって、アコンカグアへ登頂してきたということは、もうすご～く昔の、夢のような出来事のようです。

でも、私の体にしみついている゛ラテン゛の感覚が再び呼び掛けるのです。あ～～行きたい南米大陸！！絶対行くぞ！

次回も報告しますのでお楽しみに。そして、キリマンジャロ、アコンカグアときて、次は、マッキンリーを目指す予定です！？（もちろんマイパートナーと一緒です）

【おまけ　私のパートナー‘きよし’と。
1999.12.5ハワイにて】

p.s.　G.W.は“白山～ベルクハイム”と張り切って準備していたのですが、前日になって、“妊娠”が発覚し、日帰り登山、山菜採りに変更になりました。
いつか挑戦する予定です。
最近、週末は山にも行かず、マラソンもできず、家事と家の片付けに追われています。

シェルパのふるさとを訪ねて

15期　舟田　節子

この旅行記は、ワンゲルのＯＢ会報用に手がけましたものの、あまりに長くなりすぎました。そこで「限定版」として20部をカラーコピー付きで制作。気にかけていただきました方々に、先に帰国報告で送らせていただきました。

それが「少なからぬ」反響を頂き、また私自身、ガイド本には書いてない事をお伝えしたい願望も根強くありました。そのうえに、この頃は老人力も強まりまして、「ガマン、ヒカエメ」を美徳と思わず、「ワガママ」こそやっておくべきの信条に至っております。（「昔からワガママ」の声も・・・。こうやって、老人は頑迷になる・・・）

よって全編大公開。編集長の独断と偏見を究める事にしました。「限定版」に胸キュンをされた方・・オンナゴコロとはその程度のものです。

＜はじめに＞

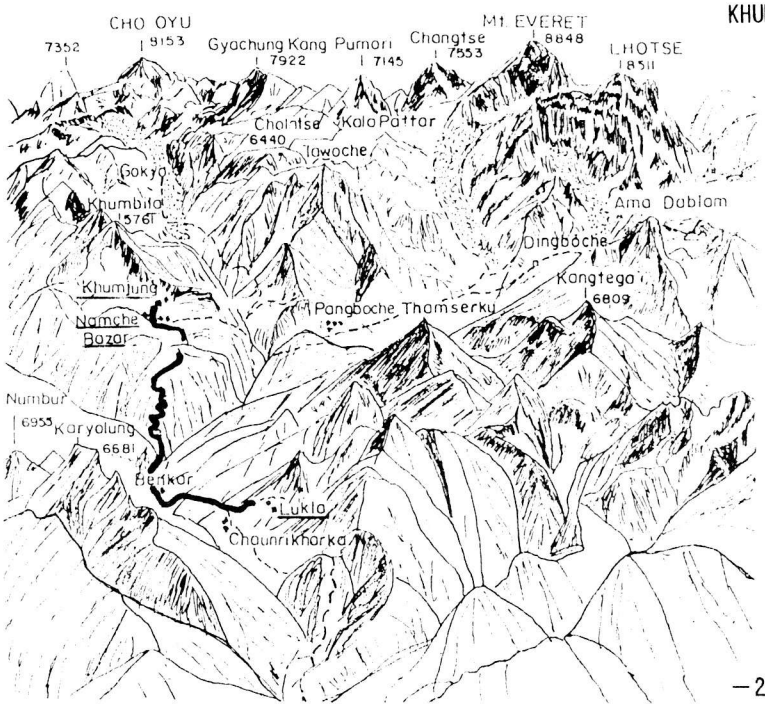
ネパールはインドの北、緯度では奄美大島と同じくらい。北海道の２倍の面積をもつ国です。エヴェレスト登山で知られる国ですが、入山隊数は制限されており、今は、トレッキングが目的の外国人旅行者が急増しています。「厳冬期ヒマラヤ！」と吃驚されましたが、10月から３月が乾期でトレッキングシーズン。また、高山病さえ克服できれば、5545ｍのカラパタールもトレッキングの延長のままに踏む事ができます。

今回の私の旅をＫＵＷＶ・ＯＢの皆様に分かりやすく例えれば、芝原から、中河内、下小屋を経て、赤摩木古・大門へ・・・が似たイメージになります。それらを2000ｍ程高くし、まわりに6000ｍ級の山を配置すれば、あたらずといえども遠からず。高山病の予防上「ゆっくり」の人の方が賢いとされ、それもＯＢにはお薦めです。

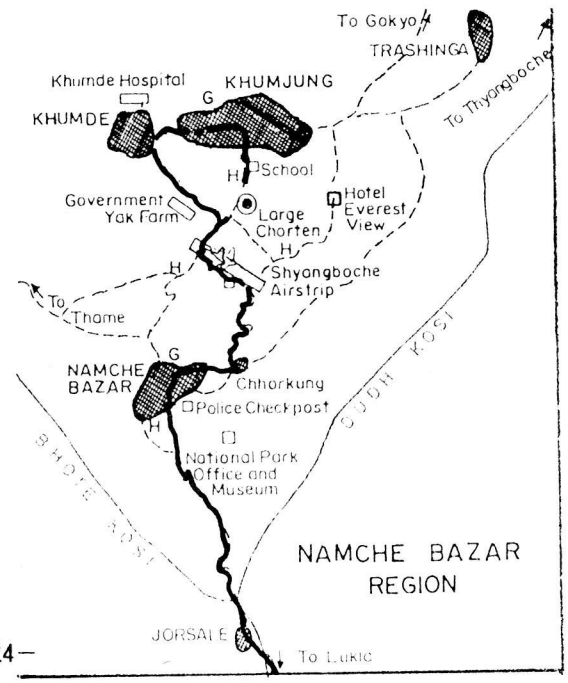
まず深井君から、カタログを取り寄せて下さい。すると、チャンスはなぜか転がってくるものです。「Ｉ　ｗｉｓｈ」が全ての夢の始まりです。

1949 ネパール開国
1951 クンブに最初の登山隊入域
1953 チョモランマ（エヴェレスト）初登頂
　　エドモンド・ヒラリー、テンジン・ノルゲイ初登頂者となる
1964 ルクラに滑走路完成
1975 サガルマータ（エヴェレストのネパール名）国立公園設立

	外国人入国数	登山・トレッキング 目的旅行者数	登山隊数	登山隊 隊員数	クンブへの入域者数
1962	6、179				
1975	92、400	12、587			4、254
1985	180、989	28、707	91	824	6、906
1990	254、885	39、999			8、290
1995	363、395	84、524	91	624	



KHUMBU Mount Everest Trekking Mapより



長いのが苦手な人用にｓｕｍｍａｒｙをつけておきます。

北國新聞 平成12年（2000年）3月28日（火曜日）

舞台

シェルパのふるさと

「ナマステ」と声を掛けると、日本人と目ざとく識別した子供たちからは、「こんにちは」のあいさつが返ってくる。ここはネパール、クンブ地方のクンデ・クムジュン村。

標高三八〇〇㍍に建つ学校は平屋の石造りである。暖房はなく、黒板と長椅子だけの空間へ、家での昼食を終えた子供たちが戻ってくる。

シェルパ語に文字はない。子供たちは学校で、ネパール語の読み書きを習い、算数、歴史、英語へと領域を広げていく。

女は家、ロッジ、ジャガイモ畑を守り、男は出稼ぎとガイド・ポーターで現金収入を得る。そんな暮らしに見合った実学を学ぶ。

舟田節子（金大ワンゲルOB会事務局長）

ちなみに私たちの青年ガイドの三人は日本語もペラペラである。聞けば、富山県の芦峅寺の建設会社と技術交流の枠があり、七年前から毎年八人が一年間の研修に来ているという。そんな語学力、気配り、ロッジの厨房での料理の腕、買い物での商品知識など、彼らは第一級の「生きる力」の持ち主である。

にもかかわらず、七割が失業し、カーストの残る国では、ガイド・ポーターの口を待っているしかない。故郷の村には、祭の当番、三度の結婚セレモニーなど、貯えを放出させる因習がある。

一方、国は自国民の出国や外貨持ち込みに厳しい制限を設けている。日本での思い出に彼らの目が輝く時、私たちの胸は限りなく痛んだ。彼らの事情を変える力はない。

しかし日本の子供たちには、今の日本に生きる幸せと、生き方をじっくり考えてほしい。（金沢市）

＊ヒマラヤ！

Ｙ２Ｋがさらに騒がしくなってきた頃、丁度西暦2000年は銀婚式の年にもあたる事を私はこじつけだしていた。いかにフランチャイズの自営塾とはいえ、「休まない」は信用の第一歩。この１８年、振替日なしの休室は、三男坊の出産の一日のみだ。

その信条が大揺れしたのが昨年。実家の兄嫁が２年３ケ月の闘病の末、50才で亡くなった。悠悠自適のはずだった実家の母が、闘病中から主婦に返り咲く事になった。

これまでも、私は少なからぬ悲報に接し涙してきたが、やはりそれは葬儀のその場や、思い出す時だけの悲嘆だった。周囲の日常の歯車がどう狂うものなのかは、初めての身につまされる直視といえた。

「必要な人」に戻った母はそれなりに生き甲斐を得てもいるようだ。が、その娘は、わが子を育てあげて責任を果たした後に、必ずしも思いのままになる第二の人生が待っている訳ではない事を思い知った。「親の責任」・・・リストラの時代に、それだけはと耐えている人は多かろう。それを果たせなかった兄嫁は無念だったろうし、それを分かち合う伴侶を失った兄も哀れだ。

ところが、そんな身近な悲劇が、心して「親の責任」を全うしなければ、「より無難に、より手堅く」の教訓へと私の場合は結びつかなかった。いつどんなご縁で歯車が狂うかしれない。「周りの状況が全て整ってから」まで、待ってはいられないし、そもそもそんな事などありえないのだ。チャンスは自分が作らなければ、とびつかなければ・・・。

そんなあたりが、「生き方」の別れ目になっていくのだろう。山渓の海外ツアーのページに目のとまる自分がいた。2000年だもの、銀婚式だもの・・「親の責任」「仕事の責任」を、そうこじつけて外そうとしている自分がいた。29期深井君からのツァーカタログも、ようやく本気で目を通してみた。値段、日数、いつ頃？その頃にはヒマラヤに傾きつつあった。思い切ってなら、不便そうな所が先だ。へえ、秋がベストなんだ。そういえば上馬夫妻も秋だった。

そんな「夢」に色をつけだしていた頃に、思いがけず、高校同窓のＭ氏（北大山スキー部ＯＢ・設計士）から、クンブ協会の公開セミナーへのお誘いが来た。一度も同級になったことのない彼とは、同窓会で顔を合わせるようになってから同じ系統のサークルであった事がわかり、近年情報交換を始めている。「ヒマラヤの人

・自然・文化」のテーマが個人的にもタイムリーで、三男坊も連れて参加する事にした。

10月23日、国際交流センター。「カンチェンジュンガ縦走」の記録映画に続き、「ヒマラヤの民・シェルパ族」の講師は、当時（1984）の登山隊隊長・鹿野勝彦氏。金大文学部文化人類学教授で、たった二人が部員の山岳部の顧問でもある。金沢の山岳界はもったいない事をしているが、私も、その日まで、ああ例の田村さんと親交のあった、環境問題に首つっこんでいるあの鹿野さんの旦那さん・・とまでしか知らなかった。

意外な経歴にびっくりの講演の後、「シェルパのふるさとに博物館を建てよう」が趣旨のクンブ協会の説明があり、春には、現地紹介を意図した交流ツアーを出すという。

エーッ！色をつけても、「まあ夢だよね」の筈だった。その夢がコロンと前に転がり出てきたのだ。しかも「博物館を建てよう」や「シェルパとの交流」なら、生徒や親への「言い訳」もできるではないか！そうだよ、これがチャンスってやつさ！

日も決まっていないのに「行く！」と即答した。「決断が速い」と、M氏に感心された。というか、呆れられたが・・こうして、ヒマラヤへの旅が実現する事になったのだ。

＊２月23日（水）

ロイヤルネパールは陸路を飛ぶ。上海の水郷地帯を抜けてからは、鰯の背を並べたような雲がひたすら続く。その上にいるのが今も夢みたいだ。

「ヒマラヤを見てこようよ」旦那の方は「そんな不潔な所！」と、案の定のパスとなる。最後まで「親の責任」がひっかかった私には、願ってもない展開になった。「銀婚式」の言い訳なんかは、とっくにふっとんでいる。言い訳なんかどうでもいいのだ。この際、「ワガママ」に撤しよう。

「行く準備」より「留守にする準備」に追われた４ケ月。広げたてては途方に暮れた48年分の身辺整理は、財務・税務以外は、こだわりの次元の事と、吹っ切れてからはかどるようになる。妻・母・嫁・塾長・地域住人・ＯＢ会事務局長他の役割の手配にもへとへとになる。が、この煩わしさこそが48年生きてきた証でもあった。手配の一段落がついた時には、それらが待っていてくれるのは有り難い事と思えるようになった。ただ、ごまかしのきく妻・母他に比べ、競争のただ中の塾業の方は、やはりきついものがあった。それは改めて「なぜ働くのか」の問いと答えも与えた。「行く！」と決めただけで生じてくる諸々、発想の転換が、新鮮でもあった。

おたおた忙しがっているうちに、ミレニアムの年を迎えた。年度末も重なり、束の退会届を手にしながらも、私は「自分の為だけに時間を使う贅沢さ」に酔った。そして、とうとう機上の人になったのだ。

「あれがエヴェレストですよ」

前席のＮＧＯのおじさんが教えてくれる。名残の夕映えに浮かぶ紺色の三角形。見たよー！もっと近くで見るんだよ！高度が下がる。まばらに電灯のともる街が流れていく。

カトマンズに降り立つ。薄暗い空港だ。荷物に飛び付いてくる子供達。迎えのエージェントの実子かと思ったら、赤の他人で、お金をせびられたのには参った。歓迎のカタ（シルクの薄布）をかけてもらう。子供達は車の窓まで開けて「ヒャクエン、ヒャクエン」と手を伸ばす。25年前の新婚旅行でのバンコックの子供達を思い出す。子供相手の仕事をしていながら、こんな子達がいる事をすっかり忘れていた。

諦めた子供達が他の車に群がっていく。エヴェレスト！の興奮がドーンと落ちた。さっきまで感じていた幸せな贅沢にも、ピリピリとひびが入った。

市街と思えぬくらい車は揺れて、ホテルに到着。郵便事情がとにかく悪いと聞いていたので、行きもしないうちから、少しでも早く確実に着くようにとポストカードをしたためる。ともかく教室の子供達へのサービスに送らなければ・・。何の事はない、ネパールの初夜も、学研漬けで暮れた。

ここで、今回のメンバーを紹介しよう。金沢勢が６名。東京から１名。合流のＨ君はＧ氏の甥で、卒業旅行。６名の方は、クンブ協会代表のＧ氏、市役所を退職して数年のＫ氏、学研仲間のＹさん、Ｕさん、Ｙさんの友人のＯさん、私の、男２、女４。女同志は山仲間でもある。

Ｙさんはツアーの話がもちあがった３ケ月前に、Ｕさんはそのさらに１年前に検査入院からの急死でご主人を亡くしていた。仕事をやってきた強み、成人した子供達の存在で、共に立ち直りは早かったが、立ち直れない部分も当然あった。

「別の道を行けば、別の風が吹いているし、別の花も咲いているよ。行ってみよう。」いろんな人種が、宗教が、共存して穏やかに暮している国。神々の山の麓で、貧しくても感謝のう

【ナムチェ東の展望台にて　中央左奥にのぞくエヴェレストと前衛の峰々
左よりTAWECHE・6501 EVEREST・8848 NUPTSE・7855(背後にLHOTSE・8516) AMA DABLAM・6812
タウツェ　ヌプツェ　ローツェ　アマ・ダブラム
アンヌル　Yさん　筆者　Oさん　ハクパ　K氏　Uさん　アンツェリン】

ちに暮らしている人達。癒しがあるような気がした。

まず、説明会に誘った。彼女達の方が海外旅行体験は豊富だが、この異色の旅には心惹かれたようだ。冬が乾期でトレッキングシーズンになる事や、ポーターが荷を運んでくれる事がわかると、これまた「行く！」の即決。またも、M氏を感心させる事になった。彼女達も、身辺整理に、トレーニングにと励んだ。

そしてG氏。彼については、トレッキングを通じてようやくあれこれがわかった。そもそも海を越えて博物館を建てようなんて、話が壮大すぎて、自分の常識中に収まらない。M氏への信用だけで「行く！」と返事をしたものの、その後は彼に、「もしかして宗教団体か？」や「政治的裏があるのか？」や「どこまでマジな話なの？」と問い合わせるはめになった。そして顎髭のG氏が私と同年で、会も同人誌のレベルの規模とつながりである事。ネパールの国であれば、そんな規模の団体であっても、経済格差で建物が建ち、そんなペースでしか進行していかない事もわかってきた。

彼は早大卒後、各国へ放浪の旅をしたらしいが、シェルパのふるさとが一番彼のフィーリングに合い、しかも次々と人脈もつながりだしていったらしい。そして競馬新聞の編集という仕事は、丁度シーズンオフがヒマラヤの乾期にあたり、クンブへの、定期・長期訪問が可能である。それらから、彼はクンブとの懸け橋を、宿命のごとく受けとめているらしい。「クンブ協会」は、彼の「ピュアな心から生まれた夢」のようだった。「あれだワ、・・・、あれだワ」の口癖が気にならなくなった頃には、「何が出来るかわからないけれど、応援してあげようよ」になったから、やはり彼には、教祖の素質があるようだ。

そんな彼を「かわり者のおじさん」と笑っているH君だって、卒業旅行先に、欧米ではなくヒマラヤを選んだ。「結婚しない変な兄弟ばっかり」と嘆く、母親方の親戚の方が彼には性に合うそうだ。能登中島は長じた今も、一人でも訪れる心和む場所だという。

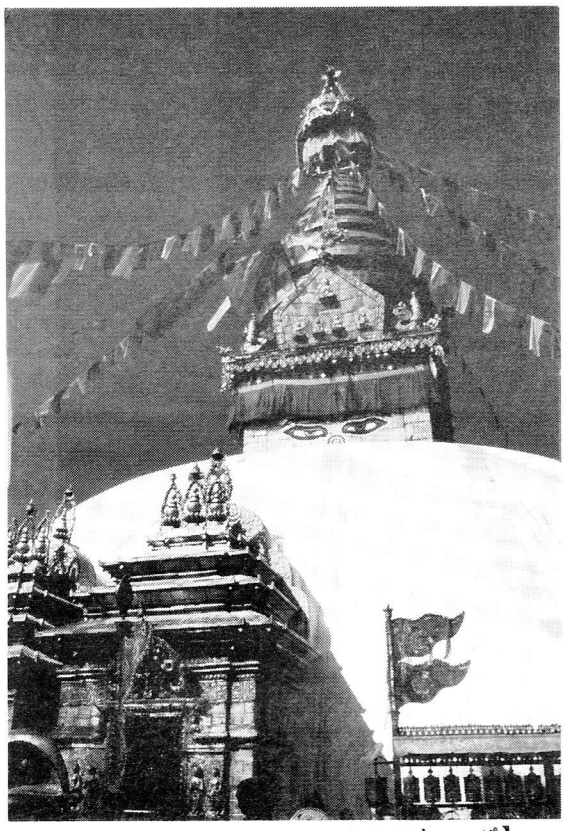
そして、奥さんに「ヤマンバを襲っても、襲われるな」と意味深に諭されてきたというK氏は（ヤマンバって私達のこと？）、駒草会所属で、お洒落なこだわりのある紳士だった。駒草会とは、金沢でまともに文献を調べての山をやってる人ならわかる、老舗の山の会だ。今では偶数月の飲み会のみが活動とのこと。

ツアー説明の時には多数が来ていたが、結局１２日の休みをとれたのは上記のメンバーだった。

＊２月24日（木）

今回、協会はクンデ村にメイルを設置してくる事を目的としていた。よってG氏がプロバイダとの契約他諸々の手続きをカトマンズで行う今日が、私達の市内観光日となる。

カトマンズ盆地のしっとりした朝。向かいの屋上で、朝日に祈る少年の姿が印象的だ。玄関ではキャリアウーマンらしきインド系美人を捕まえ早速記念写真。そしてワゴンに乗り込む。



【スワヤンブナートのストゥーパ】

「わー、牛！」「うわー朝市だよ！」という間もなく、朝の喧騒に巻き込まれる。信号がないどころか、車など意に介さず、往来する人々。「きゃー、どいて」と、思わず足を踏んばっていた面々も、無駄な抵抗を止めてしまう。小型三輪が、満パイの人を乗せ、カラフルなサリー姿が両側を行き交う。果物、生肉、衣類・・狭い店先に、わずかでも売り物があれば並べてある感じ。貧しく、それでいて不思議なエネルギーが溢れている。

その日は、スワヤンブナート（ラマ教寺院）、国立博物館、ダルバール・スクエア（旧王宮）、ボウダナート（ラマ教寺院）、パシュパティナート（ヒンズー教寺院）を回る。

気後れしてつい財布を開けてしまった物売りを、どうにか振りきれるようになり、かえって掛け合いを楽しめるようになった頃には、旅の楽しさが戻ってきた。最初にどっと来た違和感から、少しずつ同じ人間の共通項が見つかりだす。それは「見たい」「知りたい」の貪欲さも、困惑の中から蘇らせた。

何より、日本の添乗員みたいな横柄なのにゾロゾロくっつかされて型にはまった見物をするのではなく、好きな所で止まり、言いたい事を言い、触りたい物に触る事ができた。それは、青年ガイド達が、着かず離れずで見守っていてくれたお蔭だ。彼らは日本語が「通じる」のレベルどころか、ペラペラだった。物売りには閉口したものの、このカトマンズには不思議な大らかさがあって、迷子や財布の管理以上の緊張を与えなかった。

汗ばむ陽気の向こうにも、はためくタルタアのかなたにも、白銀の峰々が輝いていた。

＊２月25日（金）

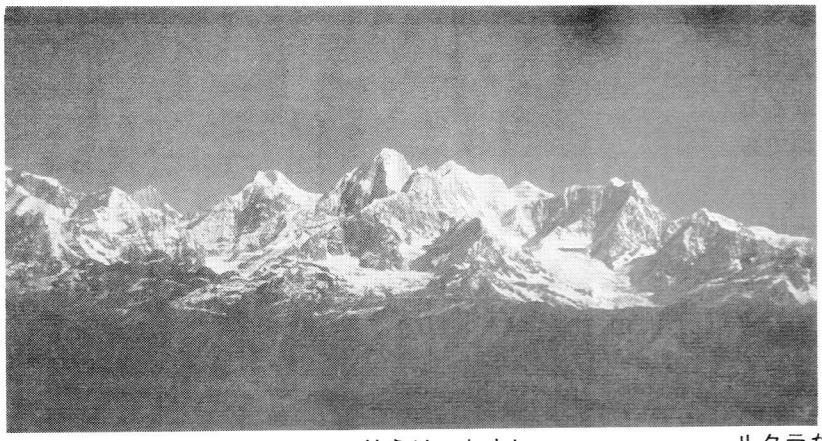
荷物は、ホテルに預けていく分と、ポーターに預ける分と、自前用に分ける。このポーターに担いでもらえるというのが魅力的で、ちらと日本で登れなくなっても、こっちへ来れば可能かも・・・なんて思ったりした。が、そう甘い訳でなく、高度障害が出るので、ポーターに担いでもらえるから、私達でも行けるという事である。

カトマンズの国内便は、さらに貧弱な施設から出る。ここで同行者が増える。きびきび指示を与えているのは、今回のトレッキング会社のアンテンバ社長だが、その父と、彼の義弟にあたるアンヌル（私達のガイド28才）の３才になる息子カーディン君。老齢の父はカトマンズへ避寒に来ており、カーディンは脚気の治療に滞在していて、同行してクンデ村へ帰るのだ。奥地のクンブと都会のカトマンズはそんな住み分けもされている。

ちなみに社長は、元教師から建設会社をおこし、トレッキング会社も兼業の、クンデ村の成功者である。その建設会社は、富山県芦峅寺の丸新志鷹の支店であり、彼は技術協力の枠をもらって７年前から、クンブの若者達８名を毎年１年間の研修に送り出している。１年間の間に彼らは、ひらがな、カタカナの読み書きまでできるようになるという。私達の青年ガイドのアンヌル、アンツェリンが日本語ペラペラなのはそんなつながりからだった。

お隣富山のあの立山の麓！おばさん達はすっかり嬉しくなり、「どこ行った？」「何がおいしかった？」「いじ悪されたことなかった？」と、たちまち質問責めにする。彼らも打ち解けた顔になって、楽しかった日本での思い出をあれこれと語った。

彼らが手にする研修手当は月に５万円。年に60万円のその額で、帰国すれば家が建つそうだ。だから社長の所へは推薦されたくての「ビール」が絶えないらしい。もちろん彼は国の代表として厳重な人選を行なっている。「クンブのエリート」ともいえる彼らが、どれだけ優秀な人材であるかは、12日間の同行で私達にはよくわかった。にもかかわらず、７割が失業、カー



【カトマンズ空港を飛び立つとまず眼に入るのがランタン・ジュガール山群。左奥がシシャパンマ（8013）中央がドルジェ・ラクパ（6966）右へレンポ・ガン（6979）ブルビ・チャチュ（6722）　無名峰も多い。】

ストの残る国では、シェルパの彼らは、たまにのガイド役を待つか、出稼ぎかの生き方しかできないのだった。異国の旅人の感傷ぐらいではどうにもならない。

そこらの事情のよくよく分かっているＧ氏は言った。「こんなふうにトレッキングに出掛けて来る事。これが結局の所、一番彼らを援助する事になるんですよ」

ともあれ、17人乗りのグルカエアラインは、人機一体の迫力で青空へ浮上した。盆地を抜けると、「耕して天に至る」どおりの段々畑。菜の花も茶畑も・・・。そして絶句するのみの白銀の峰々。写るものやら分かりもしないシャッターを切る。

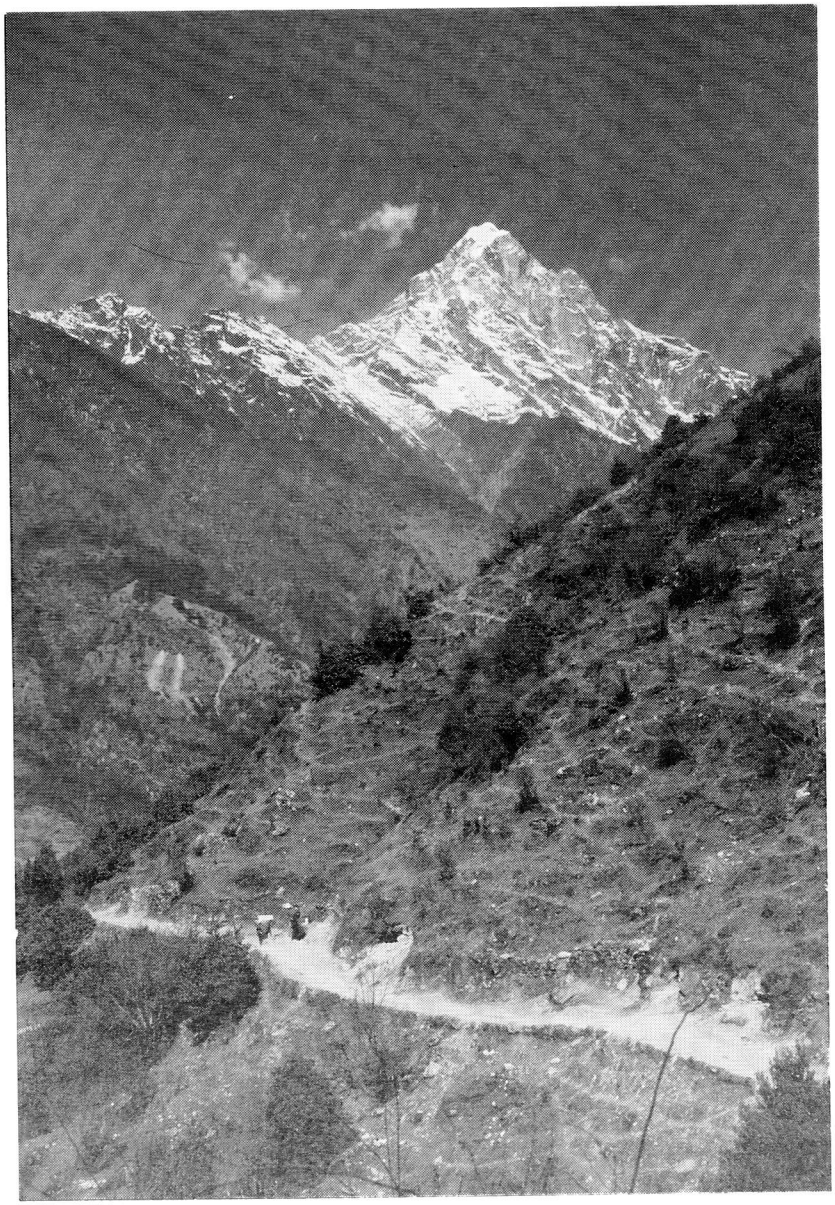
惚れ惚れのうちに、ガガガ・・と未舗装の滑走路を、登るようにしてルクラへ降り立つ。ガイド本どおりに機体の上にはクワンデ（6187m）が聳える。慌ただしい積み替えの後、今度は駈け下りるが如き助走でグルカは飛び立っていった。それは突然、昔スタンツで見た風呂敷スーパーマンを思い出させた。あの頃から30年。ここにいるのが信じられない。クラッとする程の幸せ・・・。

ポーターへの荷分けの間、初めてのミルクティーを飲む。早くもワッペン買いを始めるＹさを笑いながら、石畳の道、悠然の鶏、額に荷担ぎ紐のポーターも、全てが珍しい。街並を抜けると、チョルテンがあった。再びここへ戻る日まで・・・「オムマニペメフム」と唱えてマニ車を回す。

最初の１ピッチ分もフィルムがもたなかった。道行くゾッキョ（牛）、はためくタルタア、マニ石、メンダン（マニ石の行列）・・・珍しいやら嬉しいやら。

最初は下って行くから、クワンデはますます高く前方に聳える。ナムチェは、あの山を右に回り込んだ所。そこからクワンデは台形に見え、今見える三角は、その台形の左端にあたるのだと教わる。

ルクラから高校生のガイド、ハクパ君が増えた。彼もこの１月に日本から帰ってきたばかりで、嬉しそうに日本語を使っている。替りばんこで負われているカーディン君もようやく私達に慣れて笑顔を見せるようになった。Ｙさんは



【クワンデを見ながら、山腹を下り、川沿いの旧道に合流する。牛馬も通る幅広の小径】

同じ３才の孫がいるので、彼にかかりを言いっぱなしだ。カーディンの母親は２週間前、先にクンデの隣村クムジュンに帰ったとの事だ。３月に三番目の結婚セレモニーを行い、それでようやくアンヌル一家は一緒に暮らす事になるのだという。つまりシェルパは足入れ婚なのである。

エヴェレスト街道沿いの点在する集落には、すべてロッジがあり、また、バッティという茶店も並んでいる。そこの石垣は背中の荷を預けられる高さの段になっており、トイレも完備だ。「トイレが近いんだけど」のUさんも一安心。ただし、板に穴があいただけの代物で、これが二つあいている物は「連れション」が風習なのかとちょっと悩む。ともあれ済ませたら、傍らの枯れ松葉をかぶせてくるのがエチケットで、この簡単なトイレを移動しては、畠に有機物を梳き込むのが、クンブ流農法のようだった。

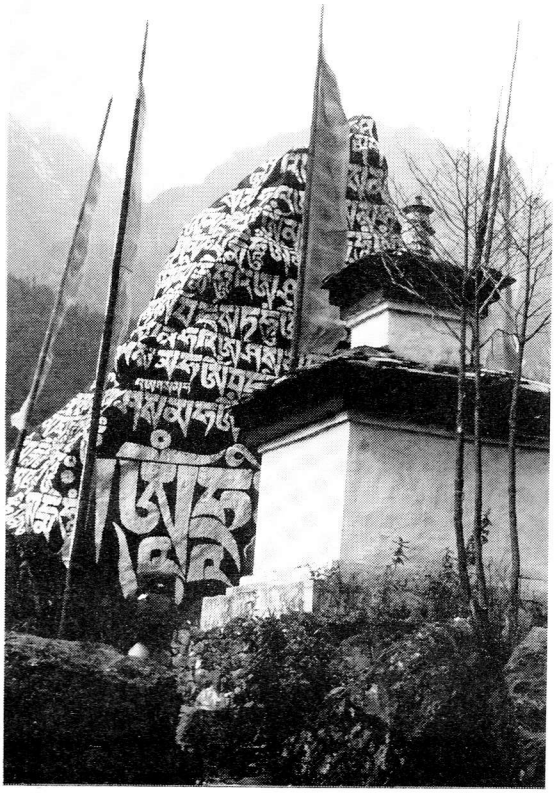
薪の煙の匂いといい、それは幼い頃の日本の風景だった。哀れでもなんでもない。つい40年前までは、こんな風景が、こんな時間が、日本にも流れていた。

ただし、この感傷を交えた懐かしさは、心に余裕のある間だけで、実は不快・不満は鬱積していったのだった。高山病の予防の為にと、湯茶をせっせと飲む。必然「夜中に懐電を手に外へ出て、離れた木戸をギーコと開けて」は、寝る前からため息の出る「お仕事」だった。

「早くできるから」でラーメン（ララ）が昼食になった。即席ラーメンに人参、青菜入り。それに、スプーン、フォークが添えられている。この昼食地点ガットからは谷上にクスムカングール（6369m）の雪峰が拝める。カメラならずとも焦点の合わない気がする仰角だ。アンヌルがフーフー冷ましてやりながら、息子にララを食べさせている。お客の前だからという事でなく、穏やかな愛情を注いでいる若い父親。おばさん達が「シェルパの夫、いや婿さんもいいなあ」と、ほほえましく眺めていると、カーディン君も満足一杯の笑みを返した。

クスムカンはすぐ雲に隠れた。乾期のヒマラヤだって、午後は曇るものなのだ。谷間はわけても陰気になる。表象物にもいちいち感激しなくなる。そんなふうに、路傍の巨石を埋め尽くす経文の浮き彫りにも、葬式仏教程度の信仰の私達には、珍しいの次には「飽きる」がきてしまう。ちなみに、同行の老人は、数珠を片手に「オムマニ・・・」「オムマニ・・」をずっと唱えっぱなしだ。うーん、真似できない。

先頭のアンツェリンは、さすがにお経ではなく、お気に入りのインドポピュラーの口笛だ。休憩中には、ポータブルデッキのイヤホンを耳



【経文の彫られたマニ石、チョルテン（仏塔）と、ラマ教の表象物が並ぶ道】

にしている姿もあった。表象物の左を通るというルールを、厳守していた訳でもない。シェルパも「今の若いモンは・・・」というのだろうか。じいちゃんは、私達がミルクティーを飲む時には薄いどぶろくを口にしていた。彼が、ずっと昔に亡くなった田舎の伯父さんによく似ていたので、わからないと思いつつもにこにこと声をかけてみた。当然わからない早口が返ってきた。そんな老人達と、英語も日本語もあやつれる若者達・・どんなギャップが出てくるのだろう。

出国前に多忙だったG氏と、避寒中に足がなまったという老人が遅れ気味で、予定より手前のチュモアが宿となる。腰掛けのベンチにはチベット絨毯。壁には、ダライ・ラマの写真と、タンカ（曼陀羅）の写しというのが、この手のロッジの一般的ダイニングルームのスタイルだ。ナムチェには、西のターメからの水力発電の電気が来ているが、間のとり残された寒村は、ランプのままで客を待っている。

お楽しみのメニューはとなると、人力や牛で運んでこれて貯蔵のきく物、米・粉・野牛の肉・卵、わずかの現地調達の野菜からのバリエーションとなる。本日は野菜チャーハンと、発音すると鄙猥語になる為モモというらしい餃子を注文。カマド一つでとなると、できるまでも長期戦だ。ガイド達もキッチンでおしゃべりをしながら、料理を手伝っている。

９才という男の子が畠から取ってきた青菜をそろえていた。ちなみにここらの石垣は境界というより、畠を牛から守る為のものだ。そこへやおら牛が帰って来る。日中は出掛けてそこらの草を食み、夕刻にはちゃんと我が宿へ戻ってきて「モー」（帰ったよ！）をやる。そういえば、私達は、シェルパ語も日本語も英語もあやつるアンヌル達にも感心したが、烏がカーと鳴くのにも感心したのだ。「猫がやっぱりニャーだった」といちいち感心しているおばさんなんて・・・。でもそんな些細な事が異国の旅の醍醐味でもある。

Ｇ氏はこの宿の隣の子に毎年通う度、奨学金を渡しているとの事だ。本人が優秀なだけでなく、母親がとても律儀な人なのだそうだ。ある時、是非にと請われて心ばかりの夕食を御馳走になったが、ヌードルも、薪も隣から借りているのを見てしまい、それからは通過がてらに手渡すに撤しているという。この美談に「うちの子も」が出てくるのは当然の事で、「年一万円なら」と身を乗り出した私達も、周辺の小波を思って心ひるんだ。貧しい国への半端な善意は、より多くの人に不満と失意を与えるであろう。旅人は旅人に徹する・・・それが分相応のマナーである。

夜中、アーアの「お仕事」に起きた。真っ暗というのに人や牛の気配。あすのナムチェのバザールをめざす人達が、こんな時間にも歩いているのだった。

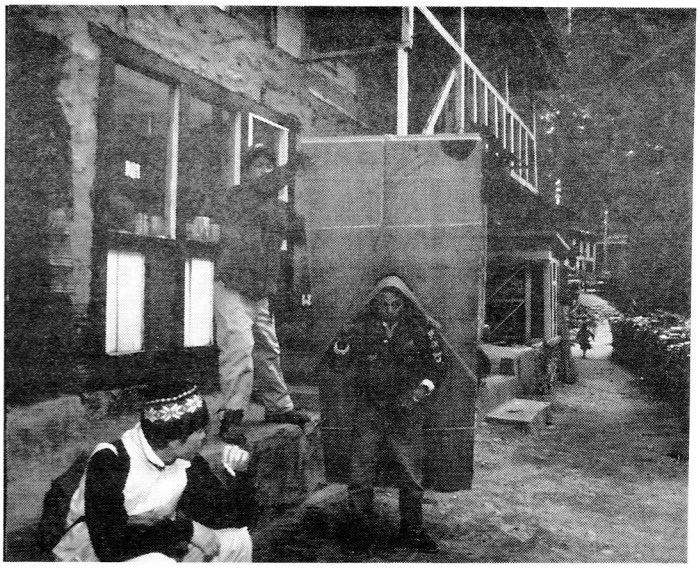
＊２月26日（土）

寒いと思えば雪が舞っている。向かいの小屋横に出ていた水が出ていない。お湯をもらって洗顔。薪も水も貴重品だが、だからといって、どこまで遠慮して、どこまで要求すべきものか、よくわからない。これからまだ奥地へ行くんだから、「もらえるうちはもらっておこうよ」で、身仕度を整える。

すぐに、宿泊予定地だったモンジョを通る。大きな集落だけあって、もの綺麗なロッジも多い。集落の外れにはサガルマータ国立公園の出先事務所があり、ここで入園料 650ルピーを払う。柵にはクンデホスピタルの「高山病を禦ぐ為にゆっくり行きましょう」の注意書きが掲げられている。

谷間の視界は限られる上に、空は灰色の雲。アップダウンを繰り返し、忍忍のうちに河原を歩くようになる。ようやくナムチェへの長い吊橋が見えて来た。

バザール帰りなのだろう、カウベルを鳴らしながらの一隊が下りて来る。ジャガイモ袋は重そうだ。牛は「厭」とは言わないのかなあ、こんな段差のある道でも後ろ脚を見なくて大丈夫



【貴重品の板もこのように運ぶ。左下がＨ君】

なのかな。柵の中や、檻の中ではなく、大型の生きものが共存しているのがちょっとしたカルチャーショックだ。それだけでも、「人間だけが生きもの」という傲慢さや、「死にたくない」の悪あがきが薄れるような気がする。

賑やかに子供達も下りて来た。ナイキやアディダスマークの衣類にびっくり　したが、チベットから、この手の偽ブランド衣類が入り込んでくるらしい。「ナマステ！」に「こんにちは！」で返してくる子供達。うぬ、見抜かれたか。世界中のトレッカーを見る彼らの方が、辺境にあっても世界慣れしているのかもしれない。

高いといっても、鉄ワイヤー製なら恐い橋という訳ではない。こんな所にも糞がしてあったから、やはり牛は畜生のレベルなのだ。この橋の欄干にもタルタアがはためいている。

渡れば、いよいよ標高差 590mの急登が始まる。国内のあの山程度と想像するが、体はずんと重かった。やはり酸素が薄くなってきているのだ。北アなら2400mあたりが森林限界。樹林帯になっている為にピンとこないが、実際には3000mの標高でジグザグに高度を上げていっているのだ。

尾根に出た所はトップダラといい、バッティの跡の石垣が並んでいる。Ｋ氏ならずとも、白山の高飯場を連想させた。いろんな国の人達が休んでいる。初めての海外旅行がヒマラヤ行きとなったＯさんは、「他へ行かんでもいいくらい、世界中の人を見たわ」と喜んでいた。ニュージーランド人に「寒いですねえ」（英語で）と言ったら、「昨日までの一週間はずっと晴れてたんだよ。明日から晴れるといいねえ」と日焼け顔で微笑まれた。途中、クンデの村長さんとすれ違う。風格あるご婦人だ。男が出稼ぎをするシェルパの村では、家を守る女が役に就くらしい。顔がわかって、彼女と近況を交わすＧ氏もなかなか格好いい。

どうにか前方に、白壁の家並が見えてくる。バザールの名残を見たいと、わずかに歩みが早まる。台地では、まだ数人が品物を広げていた。奥地の山上にこれだけの家屋(100軒あまり)がひしめいているのは意外だが、ベストシーズンの11月には、これらのロッジも満杯になり、テントを張るスペースまでなくなるという。土産物店の間を抜け、お宿のロッジに入る。やっと昼食にありつく。

ここの若い主人のアンツェリンも、日本へ研修に来ていた事があり、アンヌルの親友だ。ちなみに、シェルパの名前は生まれた曜日で決まり、何人も同姓同名がいる。旅の間でさえ、私達は４人のアンツェリンに会った。「アンヌルの一番上の姉さんは・・」「二番目の姉さんの再婚相手の・・・」といった話に同姓同名がからんで来るために、情報が混乱してしまう。私達は「大学生のアンツェリン（私達のガイド）」「ロッジの・・」「エヴェレストの・・・」と識別する事にした。昼食の間に、カーディンはクムジュンからの迎えに背負われていった。

彼ら若いシェルパ達に、ノートパソコンの使用法を伝授しているＧ氏を残して、私達は買物に出掛ける。まずは、近辺では唯一のベーカリーに赴き、あれこれを注文し、食べてみる。胡桃入りや、ネパールの小粒の林檎ペースト入りがなかなかおいしい。その後はたっぷり時間をかけて値切りの暇つぶし。

その間も雪は本格化し、白に埋まり始める。わざわざ運び賃のかさんだ物を買う気のない私は、熱がこもらないから、次第に歯の根が合わなくなりだす。同じく震えているＯさんと宿に先行。雪はますます激しくなって、見下ろす屋根屋根も真っ白になってしまった。乾期じゃないのけ？！

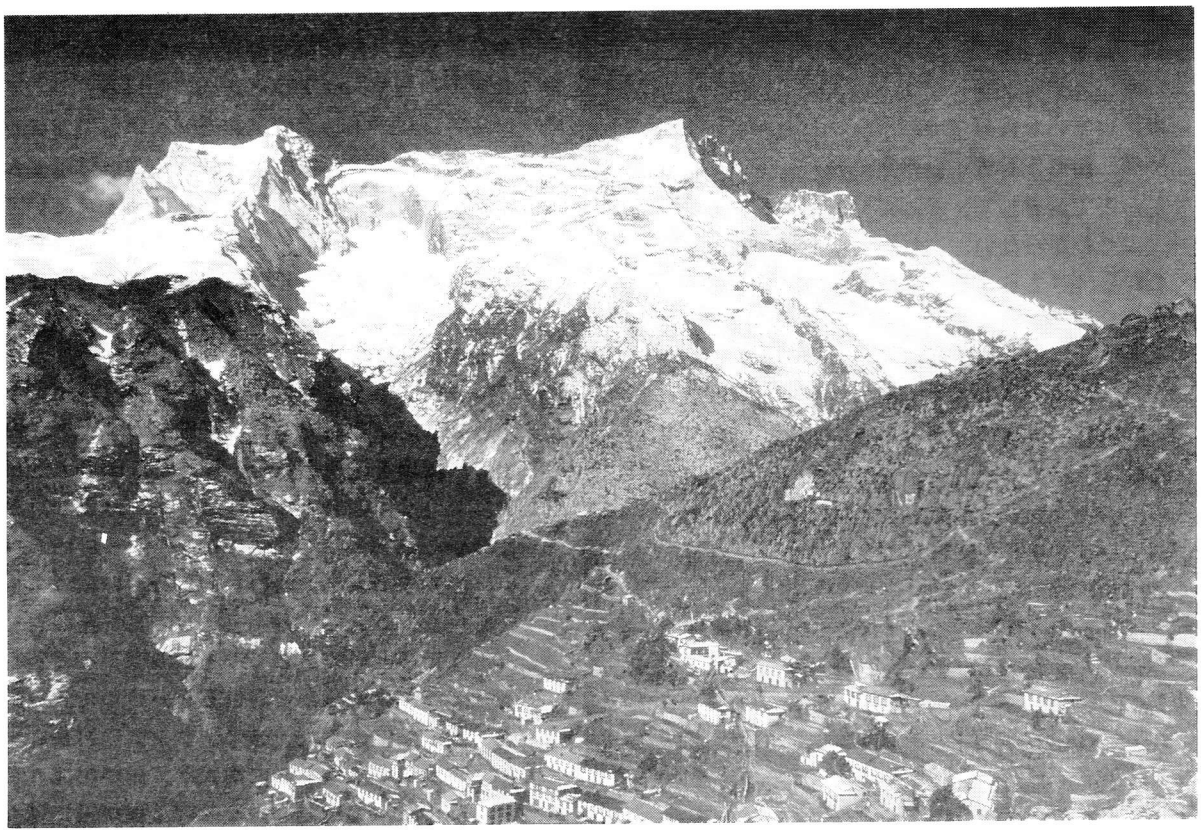
夕食はネパール定番のダルバード（豆スープ付きご飯）。食べられるうちは何か安心。皆用心して、整腸剤や何やとお腹にまつわる薬を持参してきていた。Ｋ氏に至っては、駒草会に医師もいる為、２週間前から利尿剤を飲み始めており、特別調合の散薬から、なかなかの健康キットを用意してきていた。

お腹にも、腰にもホッカイロを貼って、羽毛シュラフに潜り込む。ザックやシュラフは３人のポーターが運んでいる。シュラフはロッジに完備でよさそうに思うが、そうでないのは、ポーターの仕事確保の為なのか？

ここのトイレはキッチンのドアを開けてすぐにあった。そして「トイレにも電気がついてるよ！」だった。

＊２月27日（日）

白い屋根屋根の上にタムセルク（6623m）が聳えている。晴れている。コンタクトレンズの容器の中も凍っていた。なんか頭が痛い。高度かなあ、昨日ゾクゾクしたせいかな？Ｕさん、Ｏさんも頭痛がしたそうだが、もう朝の散歩に



【クワンデとナムチェ。絵はがき定番のアングル】

回ってきたという。立山でも苦しかった事があると心配していたUさんだが、大丈夫のようだ。昨夜はクンデの村で泊まってたアンツェリンがもう戻ってきて「40分で下りてきた」という。それなら今日は楽勝だと、晴天もあって、皆ニコニコ。

ダイニングが２階で、外は屋根雪が落ちてくるからと、これまで目立たない所で荷造りをやっていたポーター君達が、今朝は目前で仕事をしている。頬にも目付きにも幼さの残るガルツェ、ニーマ、ウメスタムの三人は、ネパール語を話せるのみで、サーダーのアンヌルからの指示を受けている。このナムチェでも荷物のの出入りがあったようで、棒秤で量り直している。復路には、食べた食料分くらいは減ったかと、やわなヒューマニストは安堵したが、彼らは、しっかりジャガイモ袋を増やしていた。往来の機会にちょっとでも多く運ぶのが、彼らポーターの効率なのだ。学力と技術があればガイド、そうでなければ体力のみを売るポーター。もしくは、少数のガイドにあぶれれば、やはりポーター。そんな口があるだけ増しといった所か。道中を往来するシェルパは、彼らの知人ばかりだ。ちょっとけたたましい発音の会話の内容は知る由もないが、いかにも「仕事があってよかったな」風の笑みであり、彼らもグッと荷担ぎ紐に力を入れていた気がする。

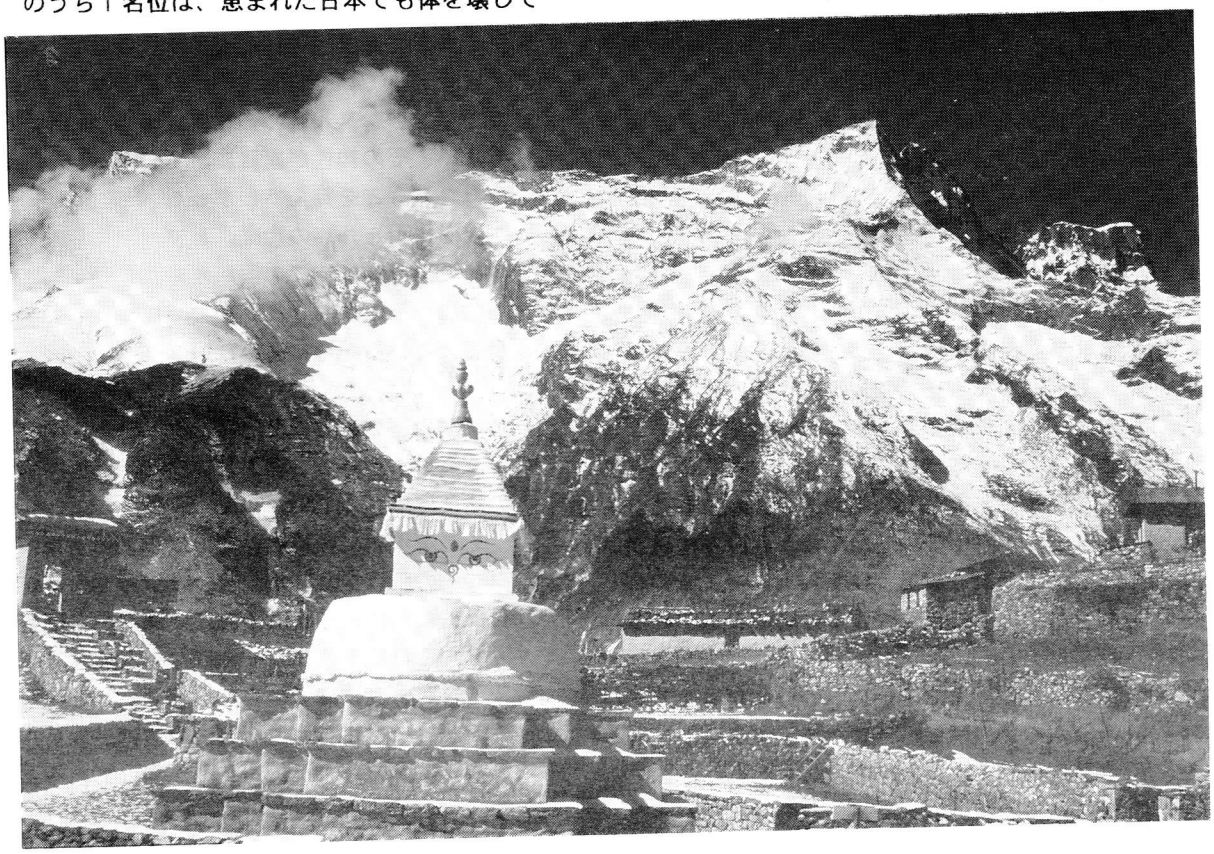
おそらく体を消耗するシェルパは短命だろう。民族的に頑丈かといえば、例のエリート８名のうち１名位は、恵まれた日本でも体を壊して途中帰国となるらしい。つまりは体力のある者が生きられ、体力がなくなれば命を閉じるのがシェルパ達だ。それが哀れな事なのかは何ともいえない。

高地山羊の如き彼らに、私達のような物見遊山が金銭以外の何を残してしまうのか・・・ヒマラヤ・シェルパ・ミュージアムは、一つの提言ではあるのだけれど。

紺碧の空に、白銀のクワンデが映える。新雪で、まばゆい白さだ。ナムチェ・ゴンバ（僧院）外壁の銅製のマニ車をカラカラ回してみる。山上にも岩から岩へロープが渡され、タルタアがはためいている。経文を版木で刷った安っぽい布だが、ヒマラヤの空に、風に、ジャストマッチだ。馬蹄形に広がるナムチェと白銀のクワンデがまさに「写真」になり、くたびれ損かと思われたカメラを駆使しまくる。おかげでえらく呼吸を乱してしまった。ナムチェが3446m。今日宿泊のクンデ村は3790m。富士山より高い。が、民家があれば、それは実感を伴う数字ではない。

集落東の丘へ向かう。たかがエヴェレスト、されどエヴェレスト。ここまで来て見れなかったではすまされない。だから、ヌプツェの肩越しにその三角形を認めた時には、おばさん達の歓喜は頂点に達した。「ウソー！、ウワー！」しかいえない貧困なボキャブラリーが悲しい。

誰が４ケ月前まで、エヴェレストを見る日が来るなんて想像していただろう。キャーキャー



【クワンデと博物館前のチョルテン。蒼と白と石組の世界】

【エヴェレスト登頂のシェルパとシェルパ二達の写真。彼らには近所のヒーロー、ヒロイン達。】

騒ぐ私達をアンヌル達が嬉しそうに見ていた。「ネパールには山しかないから」の口調が、自嘲ではなく、お国自慢の響きを持っていたのを聞きのがしてはいない。

この丘の次には、博物館を訪ねたのだが、そこには、歴代のエヴェレスト登頂シェルパの写真が飾られていた。彼らにはよく知っている近所のヒーロー、ヒロイン達だ。だから、「この人は10回も登った」ような超有名人は当然として、裏話から血縁関係から、その後の話から、面白かった。今では最高峰に登頂したぐらいでは有名にならない。無酸素は序の口、24時間でや、16時間でと宣言したり、シェルパの民族服のままで登ったり、王様の服で登ったり・・・何かとパフォーマンスがいるらしい。その右には外国人登頂者のコーナーがあり、田部井淳子、植村直巳の写真も貼られていた。

「たくさんの人登りに来てるけど、みんなシェルパのやった仕事。シェルパが道作って、ロープ張って案内する。これ、シェルパだけで登った時。シェルパはお金がない。だけど、シェルパの力報せたくて、登山隊作って登った。今度はシェルパの女の人達だけで登るよ。この写真の人達。この人が私の友達。」

日常にいくらそこに見えいても、何日ものキャンプには費用がかかる。まして働かないという贅沢も許されない。シェルパの彼らには「外国の登山隊に雇われ、あのエヴェレストに登る」・・それが最高の夢なのだ。気配りは細かいけれど、余計な事までは話さないアンヌルが、附かれたように話し続けるのを聞いてそれがわかった。

ちなみに、エヴェレストの登山料は７万ドル。税収の為の国民の把握などまず不可能であろう政府には、ダントツの歳入である。いかに辺鄙であろうと、カトマンズが都会であろうと、クンブには世界が憧れるエヴェレストや、神々の崇高な峰がある。そこへは自分達シェルパのみが案内できるのだ。ポーター達を指図し、客の体調・力量を見極め、チーム全体を采配していく。極限状態にあっても客をたて、客の夢への努力を惜しまないのがシェルパであり、それが誇りだ。ネパールヒマラヤはそんなシェルパとセットになって、歴史を作ってきたのだ。

「人集めて、ピッケルやアイゼンも皆そこへ集めて神様にお祈りする。『無事に登らせて下さい』って。それもサーダーの仕事」と語る彼は、夢あふれる青年だった。彼自身は6000m級までしか案内したことがないという。ガイドの口を待つしかない一方で、一番シェルパの血が騒ぐのもやはり「ガイド」なのだった。

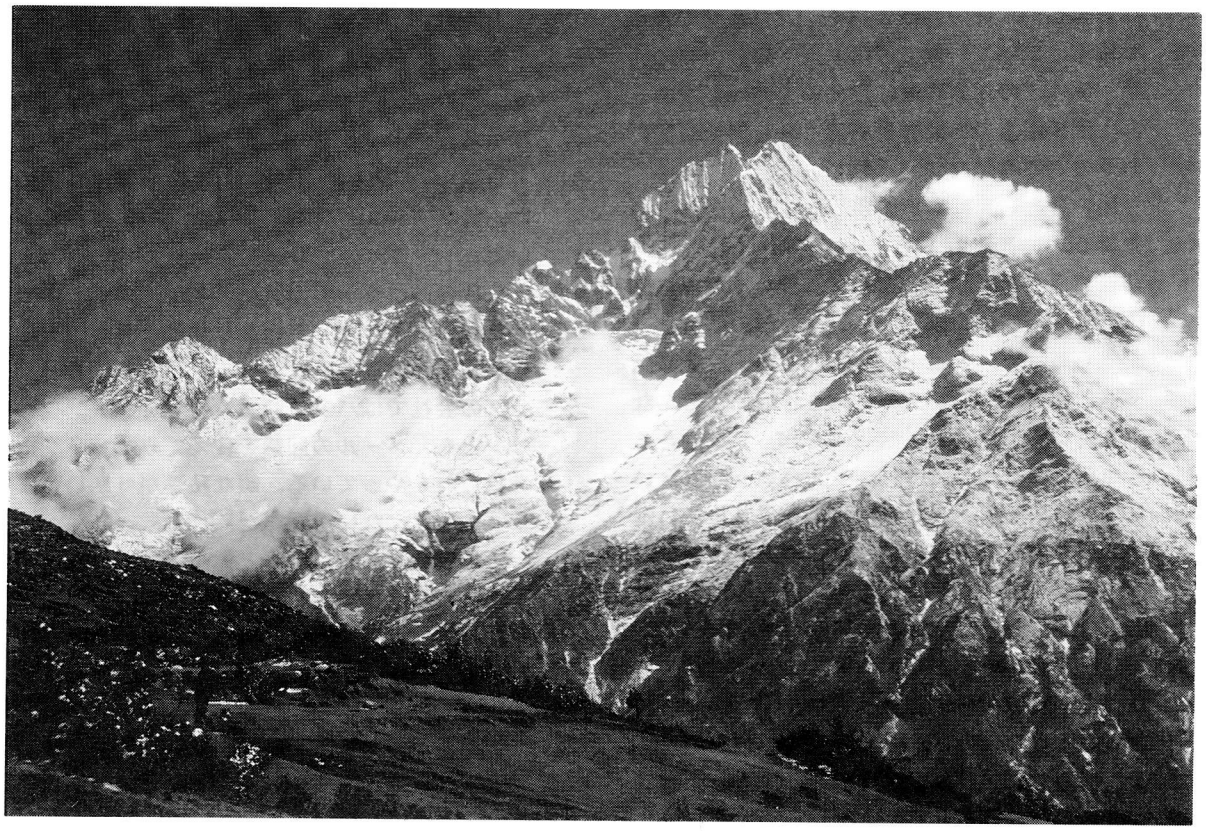
星野道夫の「アラスカ　風のような物語」には、教養をつけたばかりに、イヌイット古来の生き方もできず、さりとてアメリカ人にもなれず、自殺していく青年達の事が書かれている。だから、アンヌル達の知性と、環境がわかってきた時、その知性が裏目に出るのではないかとやりきれなさを覚えてしまった。

でも、シェルパの血は、ヒマラヤに燃えるみたいだ。そして、この国が穏やかに過ごしているのは、そんなふうに、あまりに神々しい峰々が聳えているからに違いない。

午前の逆光から抜けだしたタムセルクはヒマラヤ襞もくっきりと聳え立つ。3000m分の岩壁の高度感は「すごい」のみ。

そこを不粋に横切るのはホテルエヴェレストヴューの飛行機か？まだその手がある。しかしＧ氏によれば、一気にそれだけ高度をあげると、２、３日はフラフラで動けないから、登って馴らした方が結局体の為との事。ただ、帰路は心配がないから、単独行の時の彼は、ホテルに頼み、復路の空きがある時に、帰っているという。

キラッと目を光らせたのはＹさん。「私、ヒマラヤに惚れちゃった。今度は孫を連れてくる



【真近に嘘のように高峰が聳え立つ。タムセルク6623m。】

。私だっていつか死んじゃうんだから、『おばあちゃんと一緒にエヴェレスト見たなあ』って思い出を残しときたいの」ちょっと年上のUさんは「何言ってるの。孫は私物じゃないんだよ。何かあったらどうお詫びすんのよ」。そこへアンヌルが、不調を訴えられない幼児が、到着後死んでしまった事例を話す。微笑んでくれる自然ばかりではない。

登りつめた所がシャンボチェ飛行場。ここはホテル専用の飛行場で、上のホテルまではさらにポニーが運んでくれる。その端にあるロッジで昼食。

我孫子からだという日本人が先客でいた。3週間の休暇で、ガイドに丸々のお任せで、行ける所までの旅だという。今日は高度馴化で、ナムチェへ戻るそうだ。その彼が「おれさあ、ひどい話聞いたんだよ！」と語るには、ゴーキョへ行った日本人学生がガイドにおいてきぼりにされ、手持ちの食料もない状態で凍死寸前に通りがかりに救われたという。要するに、彼はガイドに丸々お任せだが、きちんとしたルートでまともなガイドを紹介してもらうの肝心要の所は押さえたという主張らしかった。信憑性はともかく、M氏、G氏、G氏のルートがあるツアーで来ている事が、今回の旅の楽しさになっているいるのは確かだ。

食事中に湧きに湧いてきた雲はタムセルクどころか、頭上を厚く覆い始めている。早い時間に行動すべきなのはヒマラヤも一緒だ。

その飛行場から、北西へ小高い丘を越えるとクンデ村。シェルパの聖山クーンビラの麓の平坦地に、クンデ村、クムジュン村は位置している。前者にはクンデホスピタル、後者には小学校から高校までの学校がある。共にヒラリー卿の寄付で建設された。だから、シェルパのロッジにはダライラマの次には、ヒラリー卿とテンジンの登頂写真が懸かっているのが当たり前。彼はシェルパ達の生き神様だ。そこでG氏も伝家の宝刀の如く、ヒラリー卿のサインを大事にしている。「これが目に入らぬかあ」がやれるかは、今後のお楽しみだ。

まずアンヌルの家を訪ね、休憩する。このあたりでは豪邸だ。大黒柱ともいうべき、中央の太い柱に、銀製の茶器セット。廻りの戸棚には少しずつ貯めたであろうカラフルな寝具類。職人に頼んで造るという、浮彫りのある角テーブル。

末子の男子相続のシェルパだから、上に三人の姉がいるアンヌルがここの跡取りで、3月には最後の三度目の結婚セレモニーが行なわれる。これをやらないうちは正式ではなく、やらないままのカップルもあるし、その意味では離婚は容易というか、特別視される程の事ではない。男はガイドや、出稼ぎで長期の不在だし、女は家やロッジ、ジャガイモ畠を守っているが、足入れ婚というように女は実家にいる訳だ。だから、財産の、生活の、とあわてる必要がない。正式な結婚ができるのは裕福の証でもある。

彼の場合、妻が隣村の為、さらに大がかりになるらしい。妻の親族を招く。次に自分の親族を招く。ついで、妻の村の人達、自分の村の人達、妻の上の代の親戚、自分の上の代の親戚と、１週間以上のお披露目が続くらしい。仏間にもその為の酒類が貯えられていた。

強い絆といえばいいのか、ゆすり、たかりのセレモニーといえばいいのか・・・そんな事の為にバラバラに暮らして稼ぎ、貯め、飲み食いに散財なんて虚しい。さらには、祭の当番というのもあって、それも大散財との事。Ｇ氏の話では、当番による心労死もあるらしい。こんな厳しい自然の中では「共同体を守る」が生きる知恵なのであろう。それが支え合い、助け合いならいざしらず、たかり合いにシフトしているらしきは愚かだ。彼の結婚も、村人の難癖で遅れ、二番目の娘も生まれた今、ようやく三度目のセレモニーとなったとの事だ。

シェルパの娘と日本人の結婚は、よくあるようだ。因習に縛られる事なく、富を実家にもたらしてくれる。同じ顔立ちの人種の、平和で豊かな国日本。異国へと離れる寂しさを越えて、女の成功は「日本人との結婚」であるようだ。

「成功者」と呼ばれる層ができ、建前と本音が軋み合っている。シェルパの社会はこれからガタガタと変わっていく事だろう。

私達の泊まるロッジはクンデホスピタルのまん前にあった。なにしろ標高3790m。陽が陰ってからというもの寒くておれない。

ところがロッジの女主人は、ストーブのつけ方を知らないかの如く、何もしない。多少はあたる真似とかのデモンストレーションをしてみたが、おざなりにストーブを触るだけでひっこんでしまう。おまけにトイレというのがとんでもなく遠い。一番寒い所へ来て、向こうの畠の端なんて、まさに頭痛の種・・・どころか本当に頭痛がしてきた。

これまで気配り満点だったアンヌル達も、私達が寒がっているのがわかる筈なのに動かない。ようするに彼らの村だからだ。薪や糞は貴重品。だけどタダで泊まっている訳ではない。私達もＧ氏や、アンヌル達の立場を思って（やってられないね）の目配せをしながら我慢していた。肩がすくんだままこわばってしまったくらいだ。

Ｇ氏の方はクンデの丘を越えたた途端、水を得た魚の如くいきいきとなりそれこそ暖房もない収蔵庫と、ロッジを行ったり来たり。カトマンズの会社ではパソコン番をやってるアンツェリンとも、メールの回線を変えてみたら？や、あれこれをやっている。暇な私達が「寒い」をますます言えない雰囲気だ。

「一寝入りしてくる」と休んでいたＵさんが、表情がぼやけてむくんできたみたいだ。こっちもうつむくと、動悸を打つがごときガンガンに、目の奥まで同調する。風邪か？いよいよ高山病か？

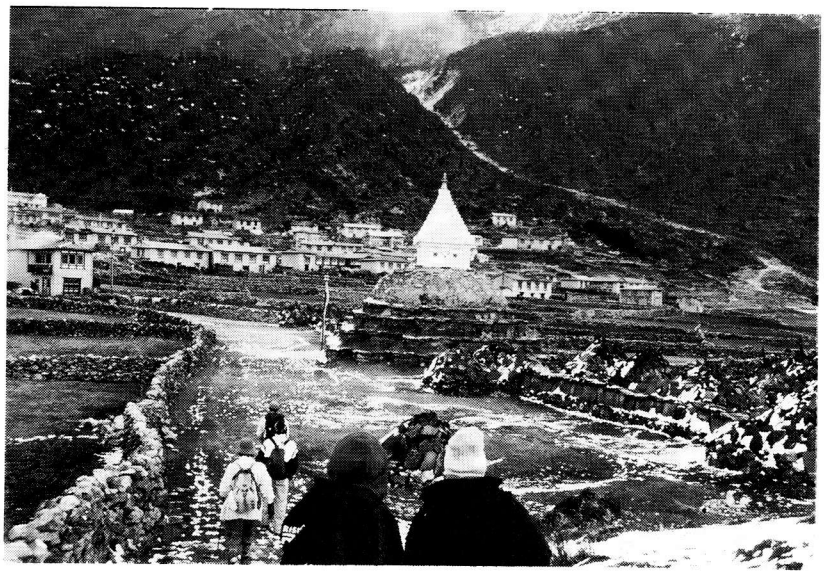
夕食時になりようやくストーブに火が入る。ジャガイモ料理が並んだが、全く手が出ない。この時食欲があったのはＧ氏とＫ氏とＹさん。あとはお湯だけを飲んでいた。外はまた雪が舞っている。

夜中、フラフラ、かつ腹も立った私達はトイレまで行かなかった。「やっちゃえ！」

＊２月28日（月）

寒さと不調で眠れなかったらしい隣から、早々に話し声が聞こえてくる。Ｕさんの顔のむくみがひどくなった。私達も腕時計がきつい、指が握れない・・とむくみが出ている。今日は周囲の散策だから、Ｕさんは出掛けないで待っているという。

すぐ後ろが病院だから、一度見てもらおうとなった。先客に怪我人がおり、呼び出してもら



【集落口にはチョルテンが立つ。石垣に囲まれているのはジャガイモ畑。聖山クーンビラの麓のため水が得られる。】

【クンデホスピタル。
石垣平屋造り。近辺
唯一の貴重な医療施設】

【右より、ナムチェで借りた
羽毛服に身を包むK氏と、
クンブ協会代表のG氏。
装備・衣類は、カトマンズ、
ルクラ、ナムチェなどで、
購入・レンタルが可能。】

っての診察をうける。結果は、指先で測る血中酸素濃度が、同行したYさんの半分。直線の上をまっすぐ歩けない状態で、即刻の下山となった。ナムチェから頭痛がしたというと、それより下まで下がれという指示だった。ボランティア経営のここは、診察は無料。薬のみ有料のシステムだ。

結局、エヴェレストヴューのポニーを回してもらい、馬方、アンツェリン、ポーターの3名がついてモンジョまで下山と決まる。ポニーがくるのも遅かったし、乗った事もないポニーで下りられるかも心配だったが、さりとて代案はない。

後で無事合流してからの話では、ナムチェを通過したあたりでグッと体は楽になり、乗馬の方もローレンローレンのメロディーがうかぶ程に快適だったという。「話の種が増えたね」と喜べてよかった。この費用は5000ルピー、1万円だった。ポニーに乗って来る手もある・・Yさんは、孫との夢をまた蒸し返しているようだった。

そうやって、Uさん達一行が石垣のかなたに消えてから、G氏はさらにメール開設に励み、私達の方は散策に出る事になる。まず、G氏と仮設事務所まで同行する。暇なロッジの1室を借りているという事になるが、その部屋に専用の電話回線が引かれ、ミュージアムの収蔵品の一部が置かれている。あとの品は持ち主の所に置いたまま、「登録」で収集しているという。1点1点にラベルが貼られ、何軒かの家を見てきた私達も、まあ生活道具の収集とはこんなものかなと思う。これらをこなしているのは小学校のパッサン先生だ。

G氏によれば、シェルパにはボランティアという概念がなく、彼は極めて珍しく、貴重な存在だという。私はむしろ、「ボランティア」の贅沢さに気付いた。まず、給料がもらえるような人でなければ、そんな時間の使い方はできないのだ。志以前に高い障壁がある。G氏の夢と、シェルパの現実と、どこまでオーバーラップできるのだろう。

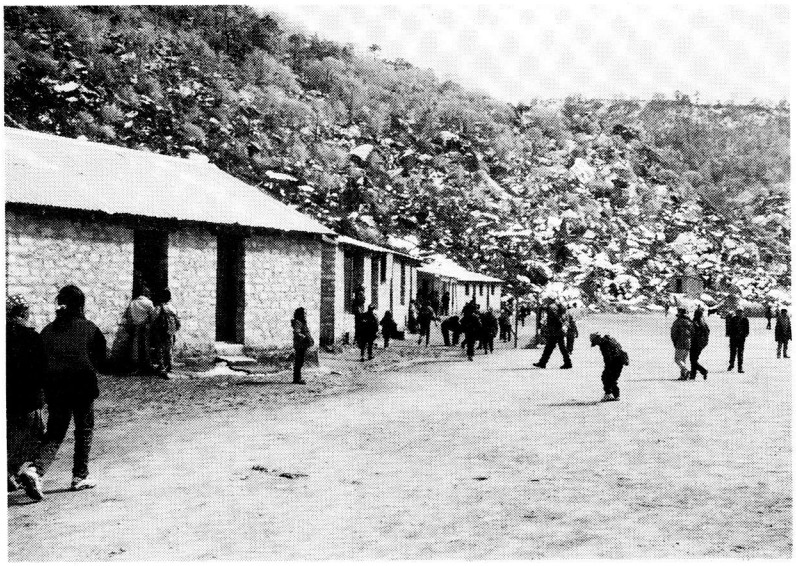
ミュージアム建設予定地は、クムジュン村からの要請で、クムジュン寄りの両村の間、つまりは、どちらからも離れた場所になった。つまりは、ポツンと離れた1軒家だ。それで常駐できるのか？電気、水道、薪のライフラインは？折り合える給与の額は？はてなマークが点滅する。

クムジュンから、三々五々子供達が帰ってくる。ここではお昼は家で食べ、また午後の授業を受けに行くのだという。となれば、ここの距離感は違うのかも？やはり多くがスポーツブランドの防寒具だ。

平屋の石垣の校舎に着く。写真で見た大型のチョルテンはここのグラウンドに建っている。校長室に招かれる。寄付のつもりはあったが、当然のように寄付台帳が最初から出てくると、ちょっとつかえるものがある。帰国して、復習にガイド本を読んでいたら、カーストの残る国では、「富める者が、貧しい者に施しを与えるのは当然」という考え方があり、乞食も堂々と物乞いをするとあった。ともあれ、台帳に記名してお金を渡したら、それでおしまいで、鳩が豆鉄砲のような顔で出てきた。

まあいいわで、教室をのぞいてみる。入り口横に黒板があり、壁沿いにグルッと長椅子が置かれているだけの空間だ。学研の先生でものをいえば、日本は飾りたてた施設を持ってはいるが、子供は不登校をするし、家の手伝いもしない。それでいて「生きる力」をスローガンにしている。環境の貧しさと教育効果は、むしろ逆相関かもしれない。

そこから、イエティの頭皮があるというゴンパへ廻る。ここも当然寄進である。ただ、私達は寄進の後、疑わしい代物を見せてもらったが、ガイドを連れていなかった白人グループは、身振りで判明した寄進だけして、そのまま帰っ



【学校も平屋造り。昼食から戻ってきた子供達が、わずかな昼休み時間を楽しむ。乾期の冬は降っても乾いた雪のため、子供達は防寒具にスニーカーのスタイル。】

てしまった。

また雪が舞いだす。服に附いたそれは見事に大型の六華だった。見惚れた後にはブルブル、ガタガタ・・・さあ帰ろう。

ロッジに日本人夫婦がいた。というより「日本語お上手ですね」といったら、「日本人です」と言われた。彼らは、夏は北アの山小屋でバイト、冬はネパールへ来て登山というライフスタイルを繰り返しているという。6000mに一座登り、二つ目の6000mの前の休養中だそうだ。「すごい」と感心したら、「シェルパがみんなやってくれるから。ロープ伝っていくだけのあんなの、登山ですかねえ」という。それでも、登山許可はシェルパともきちんと契約にしないと、おりてこないのだそうだ。

夕食は注文せず。持参したおかゆとカロリーメイトですませる。「Uさんが元気にモンジョ着」の電話が入る。よかった。

シェルパの男達がロッジに集まり始める。G氏は、交流会のつもりで声をかけたらしいが、彼らの方はミュージアムの協議のつもりで出てきたしい。そうであろう。いつ建つのか、運営資金はどうなっているのか、誰が現地責任者をやるのか？どんな準備機構をもつのか？わからない事だらけだ。

G氏の方は、建物やお金だけをぽんと出し、後は知らないというこれまでのようなやり方ではなく、現地の盛り上がりこそを待っているのだという。建物が先ではなく、盛り上がりの結果が建物である事が夢なのだ。

それは理解できる。だが彼らの側に立てば、建物が建たなければ、現実の話と受けとめられないであろう。異国の気紛れ人がいつポッと来なくなって、話が立ち消えになるか。まず、建物が建つ事が順序であろう。メールを開設しても、建築計画がぼやけたままでは、何を情報交換する事になるのか？たかがＯＢ会でも、何重もの手を打って、やっと何分の一かが実現といった所だ。盛り上がる前に醒めてしまう、うやむやになってしまう事の方が断然多い。

彼らの言葉はわからないし、交流より、協議が優先だ。先に寝る。協議の最後は酒宴になったようだ。

＊２月29日（火）

一面の雪。とうとうクンデでは山を見ずじまいだった。一昨日の景色を、もう少しアップした程度と慰められる。

帰りはハクパの家に寄る。日本へ行くと家が建つ・・のとおりに増築中だ。彼の姉は日本人と結婚して魚津にいる。その為の結婚書類はG氏が運んだのだそうだ。母親がこの完成間近の家の写真を撮って、娘の所へ送ってほしいとしきりに頼んでいる。こんなに日本とつながっているなんて知らなかった。クンブに限らず、カトマンズにも、日本語学校があり、日本と関わる事は、成功へのステップと見做されているようだ。

村を見下ろす丘に結わえられたカタの列が、バリバリに凍っている。ハクパ君の所で掛けてもらったばかりのカタを、そこへ結びつけた。また、ここへ来るよ！そう、これが最初で、きっと最後だと思った景色はいくらもある。なのに、「〇年ぶりだ」と、村を見下ろす自分が容易に想像できた。日本からネパールはあまりに遠いのに、逆のここからは裾広がりに世界につながっていそうな気がする。貧しくてもここはやはり世界の屋根だ。

ところで、高山病で登りになると遅れ気味になった私は、重いカメラザックをアンヌルに持ってもらった。空身なんて、おそらくワンゲル１年生以来の事だ。その後は、後輩の面倒をみたり、子供に気をつかったり、メンバーの体調に心砕いたり、こんなお任せなんて身分になっ

た事がない。楽だあ。こうやって少しずつお任せに戻っていくんだろうか。

景色はろくに見えない上に、寒くて寒くて、ただただ早く下りたいの一心で歩く。バザールの日でもない今日は、ナムチェの多くのロッジも閉じられたままで閑散としている。そのうちのアメリカ帰りというインテリ主人と、G氏は情報交換をしている。ここらの電話回線は、12本。すべてシャンボチェへ集めての衛星中継になり、その為か彼のメールもなかなかつながらないという事らしい。

実は、クンブからの初メールの、次の次くらいには、奥名会長へのメールを予定していた。OBスキー合宿の皆様にもそう通知してはいたが、「電話回線があれば、次はメール」の図式にはならず、空振りに終わってしまっていた。もっとも、「サムイ。アタマイタイ。トイレ、トオイ」と、碌でもないのが届いたような気もしないではない。

吊り橋まで一気に高度を下げていく。女性の方がすねているカップルもいて、やはり辛い難所だ。ヒマラヤはガイド、ポーターがセットのものと思い込んでいたが、欧米系には現地人を雇わず、長い足で颯爽と上がって行くグループも多いようだ。道は迷うはずがなく、集落が点在し、英語も通じる。Uさんの件では、やはりツテが必要とは思ったものの、「標高の高い東海道」といった解釈ができなくもない。アルプスやロッキーを眺めながら高地を歩く・・・島国日本にはないジャンルがトレッキングであって、彼らの方が場慣れしているようだ。とはいえ、あんなトイレや、油が鼻をつくようなメニューに彼らは我慢できるのだろうか。「見たい、知りたい」と「我慢」を天秤にかけたら、食べられなくなった時点で、限界だった。白とグレイの世界に同調して、全く気落ちしてしまった。

パグディンの宿で、すっきり顔のUさんに合流する。この宿はストーブが暖かく燃えている上に、2階には水洗トイレまであって感激した。それに、夕食をやっと食べたいという気になり、しかもそのラーメンをおいしいと感じた。「我慢できない」や「気落ち」がすうっと抜けて、ああ、じゃあやっぱり高山病だったんだと納得する。もっと時間をかけて馴らして行けば、ゴーキョやカラパタールも夢ではないかもしれない。

ここまで来ると、電気がついて当たり前だ。ヒマラヤに憧れていながら、ホッとしてしまう。旅は出るのが楽しい。そして、戻るのも嬉しい。

＊3月1日（水）

今日でお別れと思い、ポーター3人と写真を撮る。どこで寝たの？と聞くと下手の物置のような所を指差した。ガイドのアンヌル達は部屋で寝たり、キッチンの端で寝たりもしていたようだし、食事はキッチンで、客の分の料理を運び終わったら取っていた。ポーターの方は朝になったらどことなく現れ、昼間はいないし、宿に荷物をおいたら消えてしまう。つまり、ガイドは「人を雇う」事だが、ポーターは「荷物の移動作業のみを買う」イメージだ。

今日は登りでルクラに上がる。標高が下がった点では体は楽になったものの、蓄積疲労の方がたまってきている。歩かなきゃ帰れないんだから、歩きましょうで、ロッジを出た。

そんなのたり歩きでも、お昼になり、サンルームをもつロッジで足を止める。用心が先立っていたメニュー選びも、ここでしか食べられない物を食べておかなくては・・・になった。首を傾げてキッチンに消えたアンツェリンが「できるって」の返事。それから・・・遅いのに慣れてきた私達でも、どうかと思うほどに、出てこない。そこはキッチンを通らないとトイレに行けないから、替わりばんこの情報が入ってくる事になるが、何しろ、ロッジの主人が一人だけで、三人の私達のガイドがせっせとパイ皮作りから始めていたのだった。「できる」というのは、「用意してある」ではなく、「粉から作り始める」という意味だったのだ。今さら取り消しもできず、体が冷えに冷えるまで待った。

ようやくの焦げ目のついたアップルパイは、だから感慨物だった。「すごいね。パイだって作れるんだね」と言うと、ニコッと「カトマンズでは、何でも作るよ」の返事。彼らの方は、これからが自分達の分の食事作りだ。とても待ってはいられなくて、先に歩かせてもらった。ネパール修業が足りないと、反省した一コマだった。

そんなふうに私達の方が食欲旺盛になってきたのに反し、H君の方は食べられなくなっていた。都会っ子の彼には、連日徒歩の毎日が、初体験といった所で、若さでのカバーも限界に来ていたのだろう。

帰りはもっと暖かいだろうと話していた道が、白とグレーの世界になっている。G氏は「三月に、こんなに悪天が続くのは珍しい」と慰めのように言う。珍しい花ならともかく、こんな珍しいは願い下げだ。のどかな田園風景も、陰気な寒村にしか見えない。やはり、住むのはたいへんな事だ。

やや先行気味に歩いていたＹさんは、Ｇ氏にカマを掛け、シェルパから、嫁さんを勧められているのを聞き出していた。そうであろう。しかし、クンブに住めば、彼はシェルパにもなれず、日本人の経済的基盤も失う。では日本でとなると、農家でもない彼にはシェルパニがベストチョイスになる必要がない。

ボランティアの枠を少しでもはみ出ると、本音から、現実からが押し寄せる。知れば知る程垣根もより見えるようになる。難しいものだ。

ついにチョルテンの前に着いた。最初に物珍しく眺めた町並を、「着いた、着いた」で通るのはフィルムが軽快に巻き取られていく感じだ。そして、ついに最初にミルクティーを飲んだロッジに着く。やったー！ここが、クンブ最後の宿だ。

ポーター君達とはここでお別れだ。彼らはルクラの下の部落が家だという。私達は余ったお菓子を全部彼らに持たせた。「ありがとうね」ところが・・・ところがと言っていいのか、結局そこであと２晩滞在する羽目になった私達は、所在なげにポケットに手を突っ込み、飛行場にたむろする彼らを、ずっと見る事になる。稼ぎを手に、走って家へ帰ると思い込んだ私達が数段甘かった。私達の乗る飛行機がこなかったという事は、彼らにも客はずっとこなかった。飛行機が峠を越えた合図があってからでも間に合うであろうに、その間遊ぶでもなく、談笑するでもなく、時折石をもて遊び、いよいよ欠航と決まると消えてしまう。もっと夢を見、勝手を言ってもいい15から18才の少年達が、「ただただ待つ」の運命の中にいた。胸が痛んだ。

下山は嬉しいが、それは別れの日が迫っている事でもあった。私達は、それまで食事に同席する事のなかったアンヌル達と、豪華な晩餐を共にする事にした。ローストチキン、スプリングロール、モモ、ミックスピザ、チキンカレーを３皿ずつ取り、山分けし、解禁のビールもつぎ合った。「かんぱーい」。

儀礼ではなく、また来る事があるであろう。そうでなくてもＧ氏を通じて彼らの情報は入る。Ｙさん達ばかりではなく、私も「生きる」を考えさせられた。ミレニアムに相応しい旅だった。

＊３月２日（木）

飛行機に乗り込み、ジ・エンド・・にはならない。さらにネパールを知る後半戦が待っていたのだ。

明ければ、春霞だ。悪天にも耐性がついてしまった。予備日があるんだもの。木曜開催のルクラのバザールを楽しんでいこう。

【これは野牛の肉。貯蔵用にはチベットからの乾燥腿肉があり、壁に掛けられている。】

下の広場に人の群れ。「やってるよ！」。香辛料、豆、肉、卵、穀類、衣類、金物などが広げられ、賑やかな駆け引きが始まっている。ここはさすがに「エン」をいう者はいないが、ドル換算の為の電卓は必携である。そしていろんな民族がいるのも分かる。中でもチベット系は眼光鋭く、鼻輪などの装飾が不気味で、ちょっとおじけづく。原形をとどめているような大肉塊も圧倒的だが、「物を食って生きる」が素直に入ってくる光景でもある。Ｙさんなんかは言葉もわからないのに、「まけろ」をやってるおばさんの横にしゃがんで「まけてあげてよ」と加勢している。この場はアンツェリン達に任せるしかない。それにしても「これは高い」「絨毯はここの方がナムチェより安い」「あっちが本物」「これはすぐ破れるよ。トレッキングの間だけ使うんならいいけど」と、よく物を知っている。Ｋ氏とＯさんは「２枚で」でチベット絨毯を値切り、Ｙさん、Ｕさんは Ｔシャツを買った。駆け引きが昂じて、ロッジに戻った途端、「こんなの着たくない。誰が着てくれるかしら」になった人もいたが、黙って籠に入れるのとは違う、張りのある買物だ。

ガスはますます濃くなり、そのまま午後になってしまった。諦めて、ルクラ唯一の映画館に入る。25ルピー。ようやくカラーとわかる程度の白々画面は、インド映画のはちゃめちゃ・・例の活劇あり、唐突にヒーローヒロインを先頭の群舞ありのタイプだ。それが突然切れて、途中から映し直し。またも切れて、本日おしまいで追い出された。店をぶらぶら覗き、帰ってトランプで時間潰し。粗末な雑誌を手に取り、ネパールではどんな品物を宣伝してるのか、どんな顔がスターなのかを研究。先月のハイジャック犯人が表紙になっていた。

やっと夜になる。何度打ち上げをやってもよいではないか！ただ、G氏は「アンヌル達は向こうで食べた方が」とチラと言った。なごり惜しいUさん達は「一緒に食べよう」と言い、そうした。恐らく彼らは、客とシェルパのけじめへの周囲の目を気にしていた事だろう。好みも食べたい量も違っていたに違いない。それでも「客」を立てて、客のヒューマニズムにつきあっていた。

いろんな場面で、本当はどうしたら？があった。彼らが本来の青年らしく見える時もあれば、ある種こわばっていた時もあった。それはむしろ同族の目があった時のように思う。客、ガイドである自分達、周囲の同族の位置関係に、場面毎の気配りをしていた。そうでなければ、シェルパ社会では生きていけない。

昨日で終わりだった筈の羽毛シュラフに潜り込む。まあ、予備日だったんだから・・・。

＊３月３日（金）

窓から、対岸の峻峰が見える。いよいよクンブとお別れだ。この天気を待っていた人達が暁の散策に出ている。クワンデのモルゲンローテ。来る時より白くなっているのはあの寒さのせいだ。存分に目に焼き付けておかなくては。

アンヌルから搭乗券を受け取る。グルカのセカンドフライトだ。飛行場も人が行き交い、活気にあふれている。みなが南の空を見上げている。昨日だけでなく、その前日も飛んでいないのだ。

待望のサイレンが鳴る。ラムジュラ・ラの峠を越した機影があると、このサイレンが鳴る。それから10分たらずでかすかな爆音が聞こえ、蚊のような機影が現れるのだ。目のいいアンツェリン達は見付けるのも早ければ、会社名の判別も早い。イエティ、シャングリラ、そしてグルカ。エンジンを止めるのも惜しいように、飛び立って行く。

「俺達の飛行機は速い」。速いとは、26分で飛んでこれるという意味だ。ヒラリー隊のキッチンボーイをやっていたというロッジの主人とも、いかにもやり手そうな女主人とも、いよいよお別れだ。

いそいそと日溜まりのテラスを出立する。小さな飛行場のチェックは「ライターヲモッテイルカ」を聞かれたぐらい。搭乗便が決まっているからには悠然でもよさそうなものを、１cmでも前への心境で並ぶ。

飽きる程、南の空を眺めた。カトマンズに霧が発生しているそうだ。クワンデがまぶしい。でも、徐々に昼の雲に隠れだしている。早く来てよ！

ようやくのサイレンが鳴る。どこのだ？固唾をのんで見守る中、白にグリーンラインが掛け上がってくる。「イエティ！」歓声が上がる。

そして、飛行場は再び人声だけにもどった。管制塔からは何の情報も出てこない。アンヌルがカトマンズの社長に連絡をとる。それでカトマンズの情勢がわかる・・そんな個人ルートに各自が頼るのみだ。だから、「カトマンズ空港は閉鎖された」の情報は、ほかのガイドの報告から漏れ聞こえてきた。客達が帰り始める。まだまだ日は高い。もうやめたなんて、怠けた国だ。

すごすごロッジへ戻る。カトマンズの日本料理店へが、またクンブ食だ。明日の夜には帰国便に乗らなければならない。G氏達は最悪の事態に備えての対策を講じ始めた。

「なんて国や！」こちらもつい悪態が出る。個人が連絡をとれるくらいなら、管制塔も「何社の飛行機が出た」とか、いくらでも情報をだせるであろう。それなのに何もしないし、誰もそうすべきと言いださないのか？善処の末の欠航ではなく、この程度のいい加減さで「やあめた」をやっている気がしてならない。

客の苛立ちにアンヌル達は、カトマンズからの電話を待ちながら、黙って視線をずらしている。天候の悪い時、彼らは四日かけてジリへ下る事もあるというし、飛ばないのはそれなりの日常茶飯事なのであろう。客をなぐさめる程器用ではない彼らは、こんな時は黙っている。

なぜかサイレンが鳴った。しかし何も飛んではこなかった。

律儀に、私達を見送ろうとしていたハクパが、いよいよ出立するという。途中にも何度か「遠いんだから、もう帰って」を言ったが、「大丈夫」と、にこにこしていた。「帰ったら何をするの」と聞いたら、「学校へ行きます」の返事。そう、彼は高校生だった。

ホテルのバスで一汗流して・・・もパーになった。「ホットシャワー浴びよう！」一人 200ルピー。もう口数も少なくなってきていたH君がトップ。「いやあ、気持ちよかったスヨ」と気が晴れたという顔。次私。階段を下りれば、寒々の１坪ばかりの土間。細々水量を一旦止め、リンスをやっとこ流して出る。ぬるいか？程度ではそれ以上いられない。次のYさんは「水しかでなかった」で、次のOさんは服を脱がず足だけ洗ってきたという。根性のUさんは「ちゃんと払ったのよ！」と交渉してお湯を沸かしてもらい、それで拭いてきたという。体が温まってくると、これも笑える話ではあった。

さっきのサイレンは、業を煮やした客達のチャーター機のものだったらしい。峠までは来たがそこから引き返したそうだ。こんな場合は、まともに１フライト分を支払わねばならず、あせりが丸損の結果となるそうだ。ルクラから下りられない私達もあせっているが、カトマンズに待機する人達も、到達目標がじりじりと下がる苛立ちに　いても立ってもいられない気持ちであろう。

そうか、チャーターという手があるのか。そういえば寒風に立つ飛行場に、アメリカ人夫婦の為だけに飛んできたヘリがあった。あの時はとんでもない贅沢と思ったが、明日になったら、あえて贅沢の手も考えなければならない。

Ｇ氏から、「大本営発表」。明日のグルカはファーストフライトを押さえた。それが飛ばない場合、ヘリをチャーターする。費用は、飛行機のキャンセル料、ホテルとロッジの差額、片道も希望客を捕まえる事で、そう高くはならないという。ヘリの居場所もあたってくれているらしい。もう市内観光だってどうでもいい。帰れさえすれば。

開き直ったというか、一安心したという所かトランプで暇潰しをする。アンヌル達もホッとしたようにゲームに加わる。たかがトランプだが、彼らは頭がいい。ルールをスッと覚えるばかりか、すぐカマ掛け側に回る。日本に生まれていればさぞやの可能性を手にしたであろう。

歌ったり踊ったりの類の客相手のできない彼は、話す事がガイドの仕事になると分かったらしい。富山での思い出、シェルパの風習、自分の家族の事・・・。先の多くの情報は主にこの時聞いたものだ。立山ケーブルの除雪を日本人グループと競争してやった事、会社のトラックを無断借用してスキーに行った事、「ネパールの研修生」といえばただ乗りさせてもらえた事、大阪の女性との淡い恋・・・。羽根を伸ばした研修時代の思い出は特に笑えた。そんな自由を味わったあと、彼らはどんな想いで自国を眺めただろう。

「俺達の国は貧しいから・・・」何度もそのフレーズが出てきて、こちらもせつなかった。私達は「国」が自分を拘束するもの、生き方を決めるものと意識した事がない。それこそ、自分さえ、発想を変えればここへ来る事だってできた。「死」がちらついて「生き方」を考えさせられたものの、その「生き方」にどれほどの自由が与えられているかも、気付かずにいた。

自分がどれだけの物を手にしているか、井の中にいてはわからない。旅は贅沢。でも一度きりの人生。「見たい」「知りたい」で、果ててみたい。

ロッジには下山してきた客が増えた。大型外人のグループはガイドを筆頭に陽気なグループだ。というより、ガイドが陽気にもりたてている。ギターも歌も上手だ。ここで初めて、ネパールソングのレッサンフィリリと、チェンバ・ホを聞いた。

一緒に歌っていたら「ジャパニーズターン」と言われ、びっくり。「スキヤキ」はまあまあながら後が続かない。そうしたら彼の助け船。「ジャパニーズソングを知ってるよ」で歌いだしたのが「レット・イット・ビー」を「ナンミョウホーレンゲキョー、ナムミョウホーレンゲキョオ」で通すもの。笑い転げた。Ｙさんとオーストラリア人のペアや、Ｋ氏とロッジの女主人とのダンスやと、盛り上がる。

アンヌル達にはこんな芸はないから、生真面目な日本人向き。欧米人には、欧米人向きの陽気なガイドが斡旋されるのであろう。

さらには「私達のガイド、ハンサムだと思わない？」「そうよ。他のガイドなんて蒙古人そのものよ」という具合に、おばさん好みにまで配慮されていたものかは知らない。

味わい深い時間が流れた。でもやはり、帰りたい。帰れるのか？帰れなきゃ困るんだよ！

【女主人と踊るＫ氏達。
買物に、キッチン乱入に、
ダンスにと、異国の旅と
状況を、前向きに楽しん
でいた素敵なＫ氏だった。】

＊３月４日（土）

今朝もクワンデが朱色に染まる。だがもう、写そうという気もおこらない。ヘリが手配できるのだろうか？いっそ「１レッスン分の月謝を払い戻します」にして、開き直るか・・・。

サイレンが鳴った。待望の視線の中の１番機は、赤と紺ラインのロイヤル・ネパールだ。国営級のそこはフライト判断が最も慎重だという話だ。「あれ来たから、後はどんどん飛んで来るよ」アンツェリンがニコニコ顔でいう。皆のこわばっていた顔もホッと、ゆるむ。ついで２番機。「今度はきっと、俺達の飛行機」

来ない。どうして？昨日はこの時間に来てたでしょ。またカトマンズへ電話をいれると、グルカはまずポカラへ飛んだのだそうだ。たった１機のグルカは、それからルクラへ回るという。「速い」じゃなくて「早い」でなくちゃ困るのだ。なんで、ポカラへ先に行くのよ！なんで１機しかないところを選ぶのよ！怒りの方も八つ当り傾向になってくる。

しかし、わがグルカだけではない。あれからサイレンがウンともならないのだ。冒険パイロットが多いというイエティもこない。またカトマンズへ電話。峠の風が強く、全社がカトマンズで待機しているという。

いよいよ最悪の事態になってきた。Ｇ氏の電話のトーンも高くなる。彼が悪い訳でもないのに、私達の視線はきつくなる。どうしてくれんのよ！の行き場がないのだ。空港でずっと待機しているらしい社長との協議が終わったらしく、Ｇ氏の本日の大本営発表。「１時まで様子を見て、それからチャーターヘリの手配を・・」「こんな国、なにもあてにならない。すぐ手配して下さい」「こんな所、待ってたって無駄よ」皆、険悪。

安全第一、お天気次第なのはそれなりに分かっている。でもこの国の「待つ」とはただぼーと待っている事であって、チャンスをねらって準備万端に待機しているとは、到底考えられない。あのポーター君達だってそうだ。何も運命を変えようとしない、おかしいとも言わない、ただただじーっと待っているだけなのだ。やってられるか！

次々フライトアウトを決めていく中で、グルカは「大切なお客がいるから」と最大限の待機をしていたそうだが、やはりタイムアップになった。その間、社長さんは、ヘリを探し、ドル立てでの片道搭乗者を探したりと大変だったらしい。そしてついに、彼の義弟の友人がパイロットというツテで、５人乗りヘリが飛び立ったの報が入った。ばんざーい！やっと帰れる。と同時に、いかに自分達がパニックに陥るだけの烏合の衆であったかにも気付いた。「ごめんなさい」　Ｇ氏の方はそんな事で傷ついたというより、真にホッとした表情で座りこんでいた。一人なら、のんびりお気に入りのクンブの旅ができただろうに・・・。

彼は、まだ会いたい人や、パソコン調整の用事があり、水曜日までカトマンズに滞在するという。Ｋ氏も退職した身だから、バクタプールやパタンを回ってから帰るという。そんなふうにやれたらいいが、もう私達は宿題の丸づけの山が目に浮かぶ。

サイレンがなり、ガスにおおわれ始めた空に機影が現れる。何度かヘリを見てきたが、映画ジュラシックパークの、救出ヘリのラストシーンに重なった。やっとこの状況から脱出できる。頭の中では感動のラストミュージックが、ボリュームアップだ。

ここでもハプニングがあり、５人乗りヘリの客の分は４人分と判明した。見るも哀れにＨ君が気落ちしてしまう。男性軍はこのヘリの第２便だ。さらには一人は明日の便に回らなければならない。歓喜に水をさされた気分だが、迅速にいかねば、第２便も飛べなくなってしまう。

フワッと機上の人になる。早々にがスは切れて、例の段々畑が広がり始めた。ヘリはさすがにゆっくり広がる視界だ。尾根から尾根へは自動車道路ではない。クンブと同じ、荷担ぎ紐のネパール人と牛馬の行く小道なのだ。その背後には、午後のもやがうっすらかかってはいるが、不動の巨人達が、まぶしく光っている。その光景に、出会った人達が、重なっていく。

一路カトマンズへ・・・。

完

後日談１）三男坊は、トンデる母の留守中、近所の旦那の姉宅へ食事に行っておりました。手抜き母よりはるかに食卓事情がよかったにも関わらず、下痢に食欲不振。やつれてしまいました。最後のヤケ食いで体重回復してしまったその母は、反省しつつもちょっぴり嬉しかったものです。

後日談２）年度末の会員の個別懇談など、帰国後、多忙を極めたのは当然。そんな中でも「同じ世界遺産や」と下賀茂神社へお着物で出掛けた私。早朝予約タクシーのおじさんに「このあいだヒマラヤへ行った人じゃ？」と呆れられた。金沢は狭過ぎる！

ミレニアム行事も上半期を過ぎ、Ｍ１　スキー合宿in野沢、Ｍ２　お花見コンパ　Ｍ３　マルチトレーニングin倉谷・山小屋酒場が無事終了しています。

残るＭ４　花・星・人in南竜は号外でも再公告をいたしました。2000年に白山に登り、2000年に覚えた花、2000年に見た満天の星、2000年に歌ったワンゲルソング…と思い出作りのチャンスが目白押しです。６月24日現在の参加予定者は
０期…田村、７期…村田、11期…青柳、森川、13期…吉田、15期…上馬、宇野、奥名、鈴木、佐野、高村、舟田、松縄、松林、間所、17期…宇野、18期…大西＋家族３、椿川、23期…鳥越
８月５日（土）南竜ケビンをお訪ね下さい。

なお、Ｍ５　秋の小屋酒場もあります。こちらは９月下旬頃です。その頃にＯＢ会ＨＰをご覧になるか、事務局へお問い合わせ下さい。

ＯＢスキー合宿ｉｎ野沢　（第３回ＯＢスキー合宿）

特にどなたかに原稿を依頼したわけではありませんので、メール記録で、皆様にお伝えします。参加者に一通り登場していただけますし…。昔部誌に載っていた「落書帳抜粋」が、近い感覚でしょうか。

みんなが読めて、ワイワイがやがや。さすが時代はインターネットです。特に、スキー合宿参加者はメール持ちが多く、つい、持たない方への連絡が漏れてしまう程です。
そんなふうにメールは時代の先端を行ってはいますが、取得をしても「交信する相手がいなくて、使ってない」「入ってくることがないから、ほとんど開かない」もよく耳にします。不特定多数という使い方がある一方で、機械の以前に人間関係ありも動かぬ事実のようです。そしてまた、何らかの行事が提言されて、連絡の必要が出てこないと、これまた日常に流され、年賀状メール程度になってしまうようです。
ご紹介はスキー合宿のものですが、蒲原さんの追悼登山を中心としたメール網もあります。他の代にもメール網があることでしょう。

ＯＢ会の運営に、インターネットは不可欠。その一方でインターネットを活用しようの以前に、現役時代の人間関係ありき。ＯＢの皆様には、現役時代のサポートをはかり、かつ卒業後の親睦交流をはかるＯＢ会をこれからもご支援いただきたいと思います。
そして、いくらインターネットが便利で、人間関係があったとしても、これをきちんと交通整理してくれる人材がいなければ、運営はやっていけません。
機械の前に、人の心ありき。奥名会長に深く感謝します。

７期　mura…村田　９期　ho…保田、　ito…伊藤俊　11期　mo…森川　kato…加藤
ao…青柳　koya…小山 sib…芝田 ino…井上　taka…高田　15期　fu…舟田　ma…松林

【やまびこ駅前で】

小山　高田　上村　奥名　伊藤　村田　柴田　柴田　加藤村
森川　青柳　辰野

２０００　ＯＢスキー合宿　騒動記
その前年まで

****

10.27mo
推定　：　００年２月２６・２７日野沢温泉
予定　：　旧婚旅行から帰ったばかりの青柳さんはもう予約をいれていました。それも、２５日から・・・・・・・
結論　：　野沢温泉で１１期会をやりませんか？青柳幹事長殿お仕事ですぞ！休養？十分でしょう。

****

11.15fu
風邪はいかがですか？
昨日も晴天の日曜日でしたが、息子に車をとられ、やむなく市内のお散歩でお茶を濁しました。攻防の末にどうしても必要なら親父の車を使え、優先してやるで妥協させたので、こんな目にあうこともあります。車に乗る責任をわからせるのもたいへんです。

９期保田さんのアドレスがわからないので、転送して下さい。

保田様へ
ＯＢ会事務局の舟田です。
ワンゲルＨＰに紹介してありますが、来年もＯＢスキー合宿は野沢温泉で、２月２６、２７日で開催されます。いつもの１１期連は今回も前日から野沢入りし気炎を吐く模様です。その１１期連から、保田さんのご参加の問い合わせがきています。もし、ご参加とあれば、今から気合いをいれてトレーニングしないと間に合わないのだそうです。上手い方には上手い方の煩悩があるもののようです。

正式連絡は会報冬号紙上となり、そんな１月に入ってからでは、お好きな方はもう毎週の予定が組まれていて、今年も残念ながら・・となりかねません。また、そんなせっかくのお誘いも、誰が来るのかわからないと、自分の予定がはっきりするまでと「あとで・・」にして結局締切ごと忘れてしまうようです。こじんまりもそれなりに楽しいのですが、この際、有力な人材をメイングストに迎え、少しでも多くの方にスキー合宿を楽しんでいただきたく思います。
「保田ＯＢスキースクール」などいかがでしょう。
という訳で、いち早くご参加の確約をいただきたいのですが、いかがでしょうか。
４期の高田様にもメイングストをお願いしてみるつもりです。外湯あり、スキー博物館あり、食事よし、眺めよしで、スキーは今さらの方にも楽しめる場所であり多くの方に再会の腰をあげていただきたく思っています。
よろしくお願いします。

****

11.16ho
お誘いのメール有り難うございました。昨年は別のスキー予定が先約であり、参加出来ませんでしたが、今年度は参加予定していますのでよろしく。
また来月９期の東京地区在住の忘年会が下記の通りあるので、参加するようにＰＲします。

****

11.20kato
どこか遠いところでスキーの話がはずんでいるようですが鬼の保田さんも参加されるということですが（ちょっと懐かしく、また、反射的に恐怖を感じてしまう方である）私の予定は未定です。

今年は、学校でも比較的閑職にありつけましたので絶対参加できないというわけでもありません。　が・・・・野沢は遠いですね。明石からだと、行きで半日、あとは晩飯翌朝、朝食の後、帰りで半日というのは私のスキー技術から考えると、なかなか、さみしい（きびしい）ものがあります。あとは、いかにして、学校をサボれるかにかかっているわけですが、入試や学年末の業務とにらみあわせで考えたいと思います。国民から愛される公務員としては、業務第１と考えておりますからもう少し時間を下さい。
ところで、野沢については、昔「やましん」と

いう小さな民宿でOBスキーを２回ほどやったような記憶があります。
みなさんの覚えていますかね。

****

11.21ao
保田さん、高田さん、さらには村田お姉さんなどの先輩がたが参加されると思うとワクワクします。しごかれることになるか、更なる自信になるかは、その時の楽しみにしましょう。

しかし私は、スピードと斜面の急なるを競う気持ちはありません。優雅さと華麗さをそなえた、カービングターンの美しさで勝負しましょう。と言うとこで、今悩んでいるのが、ウエアを変えるか否かです。ウエアより、トレーニング用のローラーブレードを買うか、大幅減少した所得の配分には悩みがつきない。あのカービングスキーを買った新宿ビクトリアの店頭で考えよう。
とは言え、トレーニングは必要です。昨日の２０日には「大菩薩峠」まで、最後の紅葉狩とトレーニングを兼ねて行ってきた。先日久々にあった長岡氏を誘ったら「あまり面白くない山」と断られて、かえって行く気になったのだ。
車利用で、歩行時間３時間程度の山歩き。最高の天気に恵まれ２０００M級の尾根歩きを楽しんだ。家を出るのがチョット遅れて、尾根筋にでたのがお昼すぎになり、お目当ての富士山はかすみの中だったが、手頃なトレーニングとなって満足。山の中腹の唐松林の紅葉も最高で、紅葉リベンジも無事完了。
２月の野沢に向け、「富士の見える山旅」と和光森林公園でのジョギング（買った場合はローラーブレード）を組合せて、体調を整えて行くのが理想だ。そして当然雪が積もったら、スキーも組入れたい。１２月と１月に、各１回程度のスキー行が理想だが。　ーーー　奥様の顔色も見ながら考えよう。

節チャンへ
高田先輩の参加、強力に働きかけて下さい。当方は、しごき対象の１１期の増員に励みましょう。

森川さんへ
トレーニングは、もう始まっているのだ。甘えずガンバリたまえ。なお、高田和守取締役殿の東京での連絡方法を教えて下さい。ＫＵＷＶ会費の請求がありますので。

加藤さんへ
良き公務員であるためには、健全なる精神と肉体が必要です。あの「やましん」の楽しさを忘れていないのなら、（きびしい）とは言えないはず。優先する遊びのスケジュールを決めてから、仕事のスケジュールを作るのが現代的なんですよ。

上村さんへ
また、付合って下さい。トレーニングにも付合

柴
伊　加　青　上　柴田村　森
藤　藤　柳　村　田　田　川

ってもらえたら有り難い。また、急遽連絡するからお願いね。

保田さん・伊藤さんへ
２月の野沢楽しみです。その前に時間がとれたら、トレーニングに行きましょう。日帰りででも、富士の見えるスキー場も良いですよ。そうだ、羽鳥湖スキー場はどうですか。近くに北川氏の別荘があり、冬は使えることになったいるんです。

村田お姉さん
カービングスキーの華麗なる足わざを、野沢で披露されること楽しみにしています。

****

12.13kato
来年当初のスケジュールがわかりました。
2/２５（金）は卒業式です。だからうまくいけば25日中に野沢にいけそうです。今,さらに28日を何とか休む算段しているところです。さすれば、26（土）、27（日）と滑られます。いいね。と言うことは、スキーを買わなくちゃ。
これが面倒くさい。
なぜなら、甲高、幅広の靴を探すのに一苦労だから。
みなさんよろしくね。

****

12.16mo
森川さんです。
加藤先生の気が変わらないうちに、宿の地図を送っておきます。１２月先生も走って道具を揃えて下さい。
ふるさと；http://www.nozawa.com/furusato/

****

12.19ao
加藤先生へ
良く決心しましたね。でも教師の本分は教育にあり。卒業式までは、しっかり勤めて下さい。

で、甲高のスキー靴は手に入れましたか？そしてスキーは、当然カービングスキーでしょう！さらにウエアは、どうしたのかな？最新の流行モードで決めましょう。

森川さんへ
２台目のパソコン購入とは、景気が良いですね。さぞかし、ボーナス沢山出たのでしょう。それなら、思い切ってスキーを買い替えましょう。カービングに。舟田の節チャンも、加藤先生も、写真名人の村田お姉さんも、そして小山さんも、皆カービングスキーなんだぞー。
野沢の「やまびこゲレンデのカービングスキー教室」の仲間に入りましょう。講師は、当然すでに、２年先行しているこの私です。

奥名さんへ
そろそろ、スキーの替え時です。いや、もしかしたら、すでに買っているのかも知れない。そうでもなければ、滑走不可のスキー場に下見に行くはずないものね。野沢の教室の生徒が１人追加になったかな。

小山さんへ
どうやら、小山さんも野沢に行かなければならない雰囲気となっています。そのつもりで、スケジュールの調整をして下さい。Ｅ－メール開通により、これから１週間ごとに、催促のメールが行くことになるのでしょうから。

皆さんへ
今、野沢温泉スキー場のホームページが面白い。宿で見た、ゲレンデを写している実況ビデオの４画面が、ＨＰで見れるのだ。野沢も、今シーズンから、スノーボード解放と聞いてガッカリしていたが、われらのホームゲレンデのやまびこゲレンデはスキー専用となっているようで、一安心。カービングスキー教室も心置きなく開校できそうです。そうそう、リフト券プレゼントのアンケートもやっているから、出してみよう。当方は、リフト券プレゼントが目的。ネットサーフィンで、プレゼントのあるスキー場を調べて、片っ端に応募しよう。すでに、リストラされた身ですから、今シーズンは、スキーウエアの更新はあきらめました。リフト代は、賞品で確保して、宿賃は、スキー教室の授業料で確保する算段です。特別講師には、保田大先生が決定済です。
よろしく皆さん協力してね。

****

12.20mo
だめだよ！スキーなんか行っていては。
まず、仕事。次に、高岡の家。
そして、嫁さんのお手伝い。
準備万端にして、野沢へ。

土日は家の掃除をして、年賀状を書き終えた。
１１期のみんなには、加藤、青柳、森川参加
上村、小山参加予定としておいたので、よろしく。

【妙高山の眺めも抜群です】

今日、名古屋でも初雪がちらついた。こちらは、雪を見て喜んでいるのに。それにしても、初滑りしたなどと言う不埒ななつがいるとは？

青柳さんへ
パソコンを買ったのは娘です。
私は部品選択と工事を担当したのです。
なお、スキーは道具ではありません。
まして、技術でもありません。
要は、度胸と体力と少しの知能です。
（かの有名なＡ．Ｈ大先生が言っていなかったかな？）青柳さんに欠けているのは・・・・・・野沢で、大先生に教えてもらって下さい。

２０００年、トレーニングにお金を使用予定なので、当分木更津で購入したあの１２８，０００円のスキーを使用。なにせ、立山の御山谷を経験したスキーだから。青柳さん、まだ私の先生になるのは、〇〇〇年早い。立山、白山、涸沢、乗鞍、大雪山を滑べらなくては！

****

12.21kato
青柳氏
貴重なアドバイスありがうございます。しかし買え買えというのは、ちょっと消費文明に毒されていませんか。高価な所有物で身を飾るのは都会人の悪い癖です。景気浮揚の気持ちもわかりますが・・・・・・

そこで、私は、自分でスキーを作ろうかと思っています。思うのは自由ですから、すぐにあきらめることにします。そして、安物の代用品を探すのです。「弘法筆を選ばず」です。買いに行くのが億劫なとき、こんな事を考えます。「消費より、心が大切なんだ」と・・・・

要するに、私は、ものぐさなんでしょうね。

****

12.23fu
本日ようやく通知簿の記載が終わり、メール解

禁になりました。そうでもしないととても仕上がりません。実態をオブラートに包んでやんわりアドバイスと励ましなんてノーベル文学賞ならびに家庭平和賞ものです。仕方ないですね。どんなお仕事にもジレンマとストレスはつきものです。そんなＯＢ達のあすへの活力のために、野沢ＯＢスキー合宿はますます隆盛となるべきでありましょう。

ところが、ところで、私、不参加となってしまいました。言い訳・・・最初聞いた時は日がずれてたんですよ。それが本決まりになったら２月２２日出発となって、かねてからの浮気がばれてしまうことになりました。３月５日まで、ヒマラヤトレッキングに行ってきます。金沢クンブ協会というのがありまして、ヒマラヤ・シェルパ・ミュージアム設立の支援団体です。友人が博物館の設計を担当しています。そこが、ミュージアム建設予定地の披露と、シェルパとの交流を意図したツアーをだすことになりました。金沢発着であること、そして、かねてから関心がありながら、物見遊山のみでは家族にも生徒達にも申し開きが出来ないがブレーキになっていた私には、ふって涌いたようなチャンス。見回せば身内に病人もおらず、何をどうやりくりしても行くぞ！と決心してしまいました。そのうえに旦那が「苦節２５年」のご褒美に留守親を快諾してくれましたからもう、どう侮蔑の視線を浴びようと行ってしまいます。
スキー合宿の皆様には、陳謝につぐ陳謝です。
　１２月２３日

保田様　早々と日程を押さえこんでしまいながらの不貞をお詫び申し上げます。ご叱責は１１期のおにいさま方が、私を庇い、受けて下さることでしょう。次年度には本人が残りを受けますので、お手（足）やわらかにお願いいたします。
青柳様　スキー合宿の幹事をお譲りします。記念誌編集長のよしみでお引受下さいませ。半年毎にあのストレスを繰り返すと、ヒマラヘでもぶっとばないと発散できないのは、先輩のみご理解できますよね。

****

12.29ao
青柳です。クリスマスを、終えて。家の大掃除を終えたあとのメール。
ジャジャジャジャンー・・・１９９９年最後のビックニュース
節チャンがヒマラヤに行くんだって！この寒い時に、大丈夫？良いじゃない、ヒマラヤだもの。誰も文句を言いません。ワンダラー皆の憧れですよね。私もそのうち行きますよ。そう、２年後には、私も憧れのアルプススキー行を予定していますので、野沢はキャンセルすることになるかも知れない。でも、チョット残念。野沢やまびこカービングスキー教室は、最もしごき我意のある生徒を失うことになったのだから。まあ、その分加藤先生をしごくことにしよう。
野沢スキー合宿の幹事長は、引き受けましょう。安心して出かけて下さい。ただ、宿の予約や、メンバーの募集と確定などは、どうなっているか知りませんので、奥名殿に渉外・広報委員長をお願いいたします。ネット名人、頼りにしています。それから、森川さん、幹事長代理をよろしく。どこかの内閣みたいに、代理の方が強くなっても結構ですから、どうぞよろしく。
さあ、そうと決まったたら、１月中旬から予定していた、野沢に向けての雪上トレを正月そうそうからに変更しよう。さて、東京からの日帰りスキー場を調べなくっちゃ。と言うわけで、節チャン安心して、元気に行ってらっしゃい。張り切りすぎて、ヒマラヤで迷子になって、雪男にさらわれるようなことがないよう気を付けてね。ただ、ヒマラヤ報告を、早期に行うこと。出来たら、我が１１期が３月連休に予定している志賀高原スキー合宿に参加しなさい。新鮮な思い出話をたっぷり聞いてあげましょう。

では、とりあえず、よいお正月を。Ｙ２Ｋで、なにが起こるか期待して、２０００年を迎えましょう。

****

12.29ao
森川さんへ
もう少し素直になるべきです。すでに時代は、カービングスキーに変わってしまったのです。カービングスキーによって、新しい世界が生まれているのです。それが生み出す切れ味、スピード感、体験したことのない人には理解できないかもしれませんが、スキーに新しい喜びを与えてくれるのです。

たかが道具と言うなかれ。新しい道具が時代を切り開いていくのです。この１０００年のなかで、蒸気機関が、電灯が、自動車、飛行機が、コンピュータが、・・その道具が無かった世界と、全く違った世界を出現させたのです。新たな１０００年が始まる時、スキーの世界を変えるカービングに躊躇すべきではありません。

”時代に遅れず、時代の変化を楽しもう！！”・・・私の千年紀を迎えるにあたってのテーマです。
なお、私も白山・カラ沢・乗鞍は滑っている。蔵王・八甲田・ニセコ・阿寒湖でも滑っている。教えをうけるべきは、過去の経験の多さに対してではないのだ。時代を切り開く、新しい道具の扱い方の習得には、素直にその使い手の教えをうけるべきです。

パソコンを２台所有する先進的な森川家の家長さんですから、すでにご承知のこととは思いますが、時の流れに取り残されないようにしましょう。最後に、算数字を書く時には、０の数を間違えないよう注意しよう。

加藤さんへ（冬休み後、になっているのですか？）公務員の一員として、個人消費拡大に協力し、景気浮揚に努めましょう。スキーも、ウエアも新しい方がよろしいに決まっています。なお、今時は、バーゲンのスキーでも、カービ

ングになっていますのでご安心を。教師として、時代の流れには、遅れないようにしてください。なお、Ｅメールは、自宅で楽しむのが公務員の本分のはずです。学校のパソコンのみで、私的なメールを楽しんでいては困ります。民間企業では「コンプライアンス（法令遵守）違反」として、強く糾弾されますぞ。まあ、私は兵庫県の県民税は払っていないので、どうでも良いことですが。

****

12.31ma
あけましておめでとうございます（もっとも、まだ４時間ありますが）Ｙ２Ｋが無事クリアできるのを、会社で祈っているところです。
ところで、投書係を２カ月で首になってしまい、１月４日から、また休みのとれない職場に配属替えとなってしまいました。今度は午前２時ごろまでの勤務となります。２年ぶりにスキーを再開し、野沢の合宿へも参加するつもりでしたが、どうやら、断念せざるを得ない雰囲気です。もっとも、新職場で役に立たず、１カ月でお払い箱になる公算も大なので、望みがないわけではないのですが。いっそ、クビになったほうがいいかなと思ってしまいます。スミマセン。ことしも不義理を重ねるかもしれません。
どうぞ、お許しください

****

２０００　ＯＢスキー合宿　騒動記
その前夜まで

****

01.01mo
金沢の正月はいかがですか？
私も最近は金沢へ２～３回／年行っているのですが、津田君とは随分長い間会っていないですね。今年は雪が多いみたいですね。富山の○山さんは今シーズンもう２回もスキーに行ったとの事。うらららやましいかぎりです。

ところで、２／２６，２７野沢温泉に入りにきませんか、ついでに、スキーも。現在参加予定は、奥名会長、保田さん、青柳、加藤、森川で他に、田村さん、伊藤俊成さん、上村、小山も参加するだろう。青柳、森川は先発隊として２５日から参加予定。久しぶりに津田君の颯爽とした、スキーが見たい。
多分奥名会長は車でくるので、のせてきてもらえばいいよ。２０００年吉報を待っています。

****

01.02ao
さて、舟田事務局長より、野沢スキー合宿の幹事役をバトンタッチした時に、決心した新春初滑りを、本日実行いたしましたので報告しましょう。同期小山氏に触発され、日帰りマイカースキーに本格的にトライすることにしたのです。東京からでも、やる気と元気さえあれば、日帰りスキーもそれなりに楽しめるのです。金沢・富山人よりちょっとコストがかかるのがタマニキズですが。その分は、インターネット・

辰野　　田村
加藤　　村田

【11期の頃、ワンゲルは文化部と誤解されたとか？】

トレードで稼ぐ決心なのです。

群馬県川場スキー場。平成元年開設した、立体駐車場付のマイカー族用スキー場です。関越自動車道、沼田インターから１７。自宅から、約２時間半でスキー場です。本日、１月２日６時に自宅を出発。９時すぎから滑り出し、１４時まで、コーヒータイム１回だけで、存分に滑りました。ゲレンデは、そんなに混んでいず、空は快晴、積雪１Ｍ、コースは、１０００メートル超のリフトが５本。それなりにコブもあり、予想以上に楽しめました。高速道の渋滞が気になり、早めに切り上げ、１４時４０分には、車に乗って、帰途についたのですが、渋滞はそんなにでも無く、１８時前には、自宅に無事戻ったたのでした。

関東方面の方、川場スキー場は、お勧めです。近い、そして路面にはほとんど雪なしで、チェーンなしでも行ける。リフト最高度標高１８００Ｍを越えるので、雪質もまずまず。武尊岳の中腹、谷川連邦を前にして、眺めも最上の部類に入る。最後にリフト券。５０歳以上でシニア券。一日券１０００円引きの３５００円なり。ちょっと早いし、ややさびしい気分だが、安いことで、幸せな気分にさせられるのです。

さて、我がカービングスキーも我が足腕もまださび付いていないのを確認。今年もスキーを、存分楽しめる体力ありを確認。野沢スキー合宿の幹事役への自信も得た。今年も、人生、少しは楽しく遊べそうです。

今年の遊び計画。まず、スキーですが、１月中旬・下旬にそして２月中旬に日帰り又は一泊スキー。これは、２月下旬の野沢スキーのトレーニング。そして野沢スキー合宿。さらに、３月連休に志賀高原で、今年の仕上げ。最後、５月連休に滑れるかな？

そして、山ですが、今年から富士山にこだわって見たいと思っています。富士登頂（まだ登っていない）も含め、富士の見える山旅を、写真撮影も一緒に楽しんでみようと思う。（近くで楽しめる山として、富山・金沢人の立山・白山と同じ）ただ、ここに、白山と槍・穂高に行けるチャンスがでれば、そっちが優先されるかな。どうも欲張りすぎのようです。娘の就職活動と息子の大学受験の動向を確認しながらの行動になりますので、まあ、実現は、半分でもあれば、良しとすることになりましょうが。
でも、今日のスキー、ヤッパリ独りでは、疲れるのが早いし、もう一つ面白くない。メール仲間の皆さん、今年もどうか、お付き合い下さいますようお願いいたします。

またまた、長らくお付き合い下さいましてありがとうございました。

****

01.15mo
正月明け早々うれしいメールが届いたので、お知らせします。四国の関取が春場所中にもかかわらず、2月の野沢温泉に参加されるそうです。氏とは2年前熱海の温泉で別れて以来。また、温泉で会えるとは。
和守さんへ場所等はワンゲルＯＢ会ホームページからたどり、地図をプリントアウトして下さい。さすらいのワンダラーならできるでしょう。（分からなければ、こっそり連絡下さい。なお、今回のみ、幹事長代行を青柳さんがやっています。詳細は奥名会長まで。）

****

01.17ao
野沢スキー合宿トレーニングと称して、日帰りスキーを楽しみました。

日　時　　２００００年1月１５日（土）
　８：５５　～　１８：０６
場　所　　ガーラ湯沢スキー場
メンバー　　保田先輩、上村、青柳

状　況
新幹線の駅が、スキー場入口というシティー派感覚のスキー場。　「私をスキーに連れてって！」と１１期１年時の夏合宿「雲平ﾊﾟｰﾃｨ」リーダーかつスキー合宿リーダーの保田先輩にスキーに連れてってもらった。天気は、終日なぜか雪。久しぶりに上越特有のベタ雪で、スキーを覚えた金沢と新幹線のない時代に通った石打での感触を懐かしく味わいながらのスキーとなった。やや距離が短いのが難だが、９時４５分から１６時４５分まで、２回のビールタイムをはさんで、トレーニングという名にふさわしく、筋肉が悲鳴を上げるまで存分にスキーを楽しんだのだった。上村は、可愛いボーダーちゃんにぶつけられて嬉しい悲鳴をあげ、保田先輩は、リフト下の新雪入ってリフト放送で注意され、私は、ゲレンデに座り込むボーダーを回転ポールに見立てて、華麗なるカービングターンを描いたのだった。
しかし、保田先輩のスキーは華麗で速い。野沢スキー合宿のランクアップ間違いなし。１９５ｃｍのスキーを自在に操り、斜面が急になるほど、ほとんど直滑降で降りてしまうのだから参っちゃう。野沢では、じっくり御教授して下さい。まずは、野沢トレーニング第１段は大成功。できたら野沢までに、あと２回のトレーニングを実施し、ＶＴＲのイメージトレーニングと合わせて絶好調で野沢に乗り込む予定なり。

森川さん
幹事長代理として、貴君の野沢スキー合宿メンバー増強への努力を大いに評価します。ただし、実戦へのトレーニングを怠らないこと。温泉だけの森川さんになったら、さびしいもんね。
加藤さん
国際感覚を磨くのは、大いに結構。オーストラリア人の可愛い彼女を、日本文化の神髄である古式豊かな野沢共同温泉に招待しましょう。そして、おじさんたちとの楽しいスキーも、日本の現代の一面を知る良い勉強になるでしょう。ワインシュタイン博士も大歓迎だと思いますよ。そうそう、ＡＯＬでオートラリアとのメールができるようにしてやってね。

井上　史三さん
森川幹事長の進言を受け入れ、加藤さんちの彼女のためにも、優秀な英語教師とすてきな国際派女性の野沢参加を認めてあげて下さい。なお、仕事が忙しいのは分かりますが、あまり無理をしないように気を付けてね。たまには、気晴らしにスキーにも行く余裕も大切です。

小山さん
カービングスキーに乗っていますか？　あのなんとも言えないカービング感覚を味わってしまうと、もう毎週日帰りスキーに行きたくなっちゃうのじゃないかと心配です。

舟田さん
野沢は、国際色も豊かになりそうですよ。安心してヒマラヤに旅立って下さい。また「やまざと」最新号が楽しみ。ＯＢ会費、１１期はあと２名はなんとかします。

奥名さん
１１期の野沢スキーメンバー増強策は順調ですが、１５期はどうですか。また強力講師陣の参加に備え、トレーニングも怠らないように。

****

01.26ao
この週末、温泉付でのトレーニング開始とのことですが、あまり張り切りすぎて、怪我をしないようにね。

この冬一番の寒気が張り出しているようですから、八方尾根は荒れるんじゃないかな？まあ、この二人のコンビならしょうがないと思ってあきらめて、それなりに頑張ってちょうだい。
小山さんは、カービング初降ろしかな。カービングの鮮烈な感覚を存分に味わって下さい。気

持ちいいですぞー
さて、先行している私も、せっかく新雪が積もっているんだから、どこか行こうか。
奥名会長も、風邪も治って、雪も積もったんだから、元気に外に出よう！！感服しているだけでは、１１期との差は広がるばっかりですぞ。
****

01.30mo
２０００年。この記念すべき年の最初の温泉に、1/２８(金)・1/２９(土) と一人で八方温泉に行ってきました。本当は２９日富山の小山氏と待ち合せの予定だったが、風邪を引いたとの事。奥名会長といい北陸には悪い菌がいるみたいだ。
八方温泉約５２℃のアルカリ性単純温泉。効能は筋肉痛、関節痛、疲労回復そして美肌。温泉の効能を確かめるために、八方に行き次いでに少し運動をしてきました。７～８年振りの八方でしたが、斜面が平らになっているのには驚きました。スキーだけでなく、ボーダーもおり、平になってスピードが出せるだけ、昔より、危険です。私も１回ボーダーにこかされました。それも、男の子に。

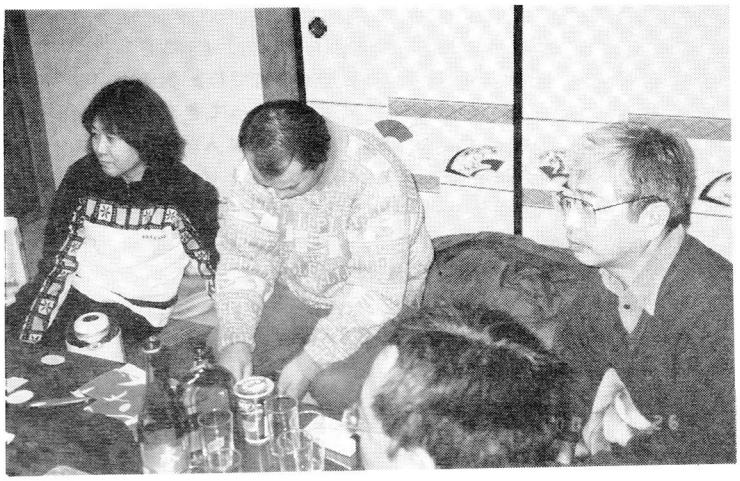
２８日、平日のため、八方でその日の最初のゴンドラに乗りました。生まれて初めてです。第１ケルンからの１サイクルが約３０分。(ゴンドラ→リフト→リフト→滑る) 兎に角、人が少ない。コブが殆ど無い。青柳さん向きのゲレンデです。(只、青柳さんでは体力が・・・・・・？) でも、調子に乗り過ぎて、エネルギが続かず、コブの練習まで足が廻りませんでした。
３時にはゲレンデをリタイヤ、温泉でビール。
一人で滑っている私を雲一つなく、風もなく、鹿島槍、五竜、白馬槍、杓子、白馬がやさしく見守ってくれました。それも、２日共。

小山さん
旅館から見た白馬三山のモルゲンロートのピンクが印象的でした。また、計画します。

****
02.03ito
年をとると決断が鈍るといいますが、ようやくスキー合宿に参加する決意を固めました。よろしくお願い致します。
思えばあれからもう１年、早いものです。再び野沢温泉で雄姿を披露することに致しましょう。

****
02.07mura
私もスキーに行けることになりました。２５、２６、２７日と参加します。ところで、２５日に北陸を車で出発される方はいらっしゃいませんか。もし、いれば、同乗させて頂きたいのですが。いなければ、老体に鞭打って、単身で野沢まで運転して行きます。

****
02.07mo
温泉スキー、私が声をかけての参加者は高田和守君だけ、多分、小山さんは来てくれると信じ



村田　辰野　　上村
奥名

ているが。お互い先は長いのです気長にやりましょう。それにしても、幹事長の一声で保田大先生、加藤父ちゃんをゲットしたのはさすがと言う他はない。今年も幹事長に頭があがらないね。

白馬三山私が見た時と同じですね。御礼に鹿島槍・五龍を送ります。私はあんなに快晴になるとは夢にも思わなかったので、バカチョンしか持っていかなかった。おかげで空の色が青くならなかった。
でも平らな滑りやすい八方でトレーニングしたのだから、さぞかし・・・・・・
野沢が楽しみです。

****
02.08kato
野沢ＯＢスキーを楽しみにしています。
今のところの予定です。
２／２５勤務の後　出発。
２／２６スキー＆温泉
２／２７　〃
２／２８野沢発
というようにせっかくの野沢温泉ですので、できれば、２／２８まで居たいと思っております。なお、野沢に着くのは、２５日夜か２６日朝になるのではと思います。よろしくお願いします。また、宿屋が決まったら、場所など教えてください。

****
02.13mo
小山さん
少しは自制して野沢と立山に備えること！！！！山の神様に許可を取り消されない様に！！！！！野沢が終わったらまた、ゴマすらなくては。
和子さん、聖子ちゃんへ
是非参加して下さい。金沢発の特別車がお待ちしています。(会長よろしく)

加藤父さんへ
２７日一緒に帰りませんか１３時まで滑り、温泉→戸狩野沢温泉駅→長野→名古屋で名古屋着２０：４１予定勿論指定きっぷはとっていな

い。晩メシごちそうするから熟考方。（ふるさと、日曜日の泊まりは当日でもＯＫでしょう。）
１２日新しいスキーの試運転に行ってきました。さすが、連休、日本にもこんなに人がいたのかと感心しました。保田さん対策トレーニング、八方温泉の練習、いずれも効果期待できず。最後の手段、スキーを１０ｃｍ短くしました。後は先生の老化？を期待するのみ。

後は体調維持と各人の普段の行い次第です。頑張りましょう。

****

02.13ao
野沢スキー合宿、合宿らしいメンバーとなりました。幹事長として嬉しく思うと共に、舟田事務局長には、安心してヒマラヤに行ってきて頂戴。
現在当方が承知している参加メンバーを記しますので、確認してください。参加日に誤りある人は、青柳と奥名会長まで連絡ください。奥名広報委員長には、ふるさとへの連絡をお願いします。

野沢スキー合宿参加者一覧	参加日		
田村（０期）	２５？	２６	２７
村田（７期）	２５	２６	２７
保田（９期）	２５	２６	２７
伊藤（９期）	２５	２６	２７
森川（１１期）	２５	２６	２７
小山（１１期）	２６	２７	
上村（１１期）	２６	２７	
加藤（１１期）	２６	２７	２８
高田（１１期）	２６	２７	
青柳（１１期）	２５	２６	２７
奥名（１５期）	２６	２７	

以下　奥名会長兼広報委員長の営業努力　？
しかし、１５期以下は、どうなってるの。団結力の２３期からの参加があってもいいのにな一。参加して欲しいひと、上馬・竹中・栂・高木美保の諸君。「やまざと」が誇る人材の参加が欲しい。こう見ると、ワンゲルの中にも、ＩＴ格差が生まれているようですね。ミレニアム行事は、ワンゲルＨＰ読者とメール仲間に偏っているようです。主要メンバーのメールアドレスを組織化した１１期がミレニアム行事を引っ張って行きます。今年も野沢では、１１期が大きな顔をさせてもらいますが、よろしくお願いします。
私の行動予定を連絡します。公式計画として採用して下さい。
２５日　早朝の新幹線　大宮　６：５２　飯山線経由　野沢温泉　９：５９着
＊夜行バスは回避し、体調維持を優先しました。森川さん、　１１：００ー１１：３０　ゴンドラ終点レストランで合流しよう。

２６日　終日スキー
夕食後　カービングスキー教室　講師：保田先生　テキスト　ＶＴＲ　ﾊﾟｰﾌｪｸﾄ　ｶｰｳﾞｨﾝｸﾞ　基礎編・応用編

２７日　１５時までスキー　１６：０２　野沢温泉バス停　バス　飯山線経由　新幹線

ということで、バッチリ　スキーを楽しみます。
＊２５日　合流計画　１３：００ー１３：３０　ゴンドラ終点レストラン（やまびこｹﾞﾚﾝﾃﾞ入口）
２６日　合流計画　できるだけ夜行、早朝着とすること。宿舎で合流。

２５日　合流計画に同じ
なお、上記計画は、すべてスキー滑走可能な天候時。ゴンドラ運行中止、雨による滑走不能時は、すべて宿舎で合流。

＊温泉入浴計画　中尾の湯３回、その他の外湯最低２回。天候により、外湯めぐりあり。
奥名さん、田村教祖どのに、行動計画をお伝えください。
※最後に、３月連休スキー　参加者募集
日時　　３月　１８日　ー　２０日
場所　　志賀高原
宿　　笠岳ホテル　（安い　１泊２食付　７千円以内）
では、野沢温泉で合いましょう。

****

02.13koya
青柳氏から電話で問い合わせがあり、返事はしてありますが、野沢のスキーに参加させていただきます。２６日（土）から２７日（日）参加の予定です。交通手段は、今のところ車の予定です。富山を朝３時に出れば７時には着くかな。この３連休、３日間とも午前中は雷鳥バレーで滑っていました。
では、野沢で。

****

02.14sib
いまの所、行かない予定です。でも、この機会をのがすと、永久に・・・ なんて 考えも頭をかすめたりして・・・突然、気が向いたら、という確率もゼロではありませんが。

****

02.14ito
野沢スキー合宿参加に関し、気持ちの準備は整いました。切符の手配も完了しました。
（往）２５日　あさま１号（7：32）→野沢温泉（10：35）
（復）２７日　野沢温泉（13：40）→東京（17：12）
おいしいお酒が飲めるように体調に配意したいと思います。

****

02.16ho
昨晩下記スケジュールでスノーライナーの切符をとりました。
行き　２５日　あさま１号　大宮乗車　７：５６発　４号車１３ーＤ　長野着　８：５７
バス　のざわ１号　長野発　９：２０野沢温

泉着 10：35
多分伊藤兄と同一スケジュール

帰り　２７日
バス　のざわ１０号　野沢温泉発　１６：４０
長野　着　　１８：００
あさま５３２号　　長野発　　１８：２８
大宮着　　１９：４６　５号車１３－Ｅ

伊藤兄
行きの列車座席番号は？帰りそんなに早く（野沢温泉 13：40 発）出なくて、上記最終のバスに変更しませんか？乗車変更は１回のみ可能ですよ。

****

02.16ino
井上’ｓです
行きたいけれど、やはり、行けません。カービングスキーもしてみたいが買えません
スノボーなんてとんでもありません（奥名会長ＴＥＬありがとうございます、残念ですが・・・）
金沢は今積雪２４ｃｍ今冬一番かもしれません

****

02.18kato
昨日は電話いただきありがとうございました。昨日は入試業務で遅くなり、夜１１時ごろ帰りました。娘から奥名さんへ電話しなさいということでしたがちょっと遅いので失礼いたしました。
２７日夜の野沢の件、助かります。到着の方は、まだ、はっきりしませんのでわかり次第連絡します。
１１回生というのは、口はよく動くが身体が動かない観念的な連中が多いのが特徴です。

****

02.18taka
皆さんに会えるのを楽しみにしています。連絡が遅れましたが、私の合流予定は次の通りです。
２月２６日（土）
東京（王子）ー野沢　早朝に出発のつもりです
誰か、東京から便利な交通手段を教えてください！今は、ＪＲ（新幹線＋在来線）で行こうかと考えています。その場合の、下車すべき正確な駅名も教えてください！到着後、スキー少しお酒ほどほどお風呂と休憩たくさん

２月２７日（日）
スキー、お風呂を適当に、ときどきお酒野沢ー東京（王子）ホテルに泊まりのため、当日中に東京へたどり着けば良い
その他のお願いーーーーーーーーー
１．東京ではホテル泊まりをしているため、スキー用の荷物を宅配便で先送りしておきたい
２．宿泊先の名前、住所、電話番号をメールして欲しい

****

02.23kato
２月２５日１９：３０～２０：００頃につく予定ですので恐れ入りますが、宿泊と夕食の手配をお願いいたします。日頃、予約をしたことがない私も、時間に追われる旅になりそうなので列車予約しました。予定は次のとおりです。
２／２５
昼頃　神戸発
新大阪から新幹線に乗る
15：00　　名古屋発「ワイドビューしなの」指定席
18：00頃　長野着
18：00頃　長野発普通列車
19：00頃　飯山着
19：00頃　飯山発野沢行きバス
19：30頃　野沢着
長野、飯山の乗換え時間は３分程大丈夫でしょうか。とにかくその日のうちに辿りつくつもりです。
２／２６やまびこゲレンデで華麗な滑り。
２／２７やまびこゲレンデで疲れを知らぬ滑り。
２／２８やまびこゲレンデでゆっくり滑る。
　　そして、適当に帰る。
やはり野沢では静かな滑りをしたいものです。

****

02.24
▼保田さんはあまりのうれしさに当日が待ちきれず、鬼の霍乱を起こしてしまい無念の欠場の連絡
▼昨日から上信越自動車道は妙高高原付近の吹雪のため通行止め。気温も氷点下７度で道路凍結。これに恐れをなした村田さん急遽ＪＲでのなぐり込みに変更。帰りは一緒に戻りましょう。

芝
辰　森　小　高　奥　伊　田村　青　田　上
野　川　山　田　名　藤　　田　柳　村　村

お茶会の件　（私信から）

11期　森川　功

参加人員は保田さんが風邪で欠席され、その代わり、ワンゲルホームページを見られて、妙高でのスキーマスターズ大会に、茨城県代表で

参加された８期の柴田夫妻が25日ふるさとに泊まられ、26日一緒にスキーをしました。

また、せっちゃんに叱られた芝田君も塩尻の塩羊羹を持って参加しました。（来るという正式な連絡なしに来るのだから、困ったものだ。まあ、来ただけよしとすべきかな）

ということで、延べ参加人員は14名。（含む、柴田夫人。旦那さんに似て、直滑降のスキー。兎に角速い）

お茶会は25日、26日二日にわたり、村田大先生、森川中先生、辰野小先生のお手前で、全員＋美和ちゃん（大学３年生の可愛い子）が御相伴しました。大先生が恐いのか、おいしいと評判で、お茶は桑名まで持って帰れませんでした。お菓子は塩羊羹も食べたので、２本残りましたが、森川と芝田が山分けしました。（芝田君は安い羊羹を持って来て、高い羊羹を持って帰りました。）という訳で、皆さん十分味わられたので、幹事長の依頼は心良く？御受けするでしょう。

その他、高田大事件、森川大事件、青柳小事件、村田小事件がありましたが、詳細は奥名会長に聞いて下さい。

２０００　ＯＢスキー合宿　騒動記
その当日模様

02.25
****
▼先発隊
青柳（１１期）団長
村田（０７期）叱咤激励いけいけ係
伊藤（０９期）宴会
森川（１１期）テクニカルコーチ
加藤（１１期）撮影記録
前夜祭の模様は厚いベールに包まれて詳細は不明。
スキー板神隠し事件
温泉転倒事件
女性部屋なしセクハラ事件
どうしてものぞきたい方は、明石の加藤記録室に保管してありますのでそちらへどうぞ。

02.26
****
▼本体
金沢組
辰野（１３期）　奥名（１５期）　金沢を５時半出発　順調に駒を進め　９時「ふるさと」着
富山組
小山（１１期）　本体１よりわずかに早く到着
東京方面組
上村（１１期）　早朝着
高田（１１期）　重役出勤

会津組
田村（００期）
前日妙高高原で大会に参加したその足で突然のなぐり込み参加は柴田（０８期）夫妻　野沢のゲレンデを暴走と思われるほどの腕前お酒かかえて芝田（１１期）散歩がてらに参加
お昼にいつものレストランで待ち合わせ。
M氏遭難事件発生。捜索に手間取る。
みんなでやまびこゲレンデを「クローズ」時刻まですべる。
最後にスカイラインコースを下る。O氏ついていけず一人ゴンドラで下山（非難ごうごう）。
やああ　お疲れお疲れ・・
「シーハイル！」は今年も野沢のゲレンデにこだました
夜のお茶会には特別ゲストとして「ふるさと」御用達共立？大学の女子学生をお迎えした。お茶菓子の塩羊羹（芝田差し入れ）を「大中小」で取り合う。

02.27
****
午前中も前半好天に恵まれ、昨日ほどの人もあまりいない。ゲレンデが荒れないうちにといってシュナイダーコースをおりる。途中までは気持ちよく滑ってきたものの最後の急斜面には少しひるむ。
高田氏大腿ＸＸ筋損傷事故（幸いにも軽傷）

昼前後天候は悪化し、視界不良。一時は数メートル先も見えない状態。雪は横殴りに吹き付け、止まっているのか滑っているのか判然としない状態に陥る。このままだと遭難だな・・・。
個々の予定で順次野沢をはなれる。

02.28
****
▼加藤隊　留年
千葉特産の「ピーナッツ」と「袋の破れた」それでも「ほとんど食べられていないサキイカ」ありがとう。お土産に持ちかえりました。妻が大好物なので喜んでいました。特に、ピーナッツは、「新物でないほう」を置いていただきありがとう。ワンゲルらしい皆様のやさしい心に感謝します。
2/28 は、雪とガス。しかも、上の方は大荒れで、長坂ゴンドラリフトは、中間駅止まり。上の平リフトは、休止、しかもフード付きのリフトは風に弱いためか、撤収していました。
皆様の言うように、日頃の行いと天候とは関係がないようです。仕方がないので、稼働している全リフトに乗り、その証拠としてビデオに収録しました。苦労しました。
五里霧中の中、ユートピアもシュナイダーも牛首も滑りました。
１日券があったのですが、１時半頃切り上げ「あー、いい気持ちだなー。」と空いた風呂にゆっくり入り、けがもせずに無事帰着しました。和守のように適当に「毛があると」けがするようです。それとも、太りすぎ？

田村ご先祖様の「シーハイル」の叫びが耳について離れません。

その後
****
青柳です。
ご苦労さまでした。今年も楽しいスキーと人生のリフレッシュができました。いつも思うのですが、雪国から東京に戻ると、雪のカケラもない晴天と雑踏の大都会。そして何時もと何も変わらない仕事が待っているこの日常、雪国はまったく夢の中となります。このギャップの大きさが、雪と無縁の都会からのスキーの魅力でしょう。

それと、KUWVOBスキーは、いつも思わぬハプニングで、いろいろ楽しませてくれるのがまた魅力です。今年も、十分楽しませてもらいました。まったく変てこな個性的集団ですな。ただ、悲喜劇部分の主役を、１１期が独占していることには、我を含めて反省が必要か。

また、先輩・同輩から、衰えぬエネルギーを吸収できるのが、この会の楽しみ。皆さんから吸収した、色んなエネルギーで、２０００年も元気に過ごせそうです。
今年の桜の開花は早そうですね。４月１５日には、金沢の桜も散っているんじゃないかな。残念ですが、「お花見コンパ」は欠席とさせていただきます。盛会を祈ります。
では、また２００１年　野沢で会いましょう。

皆さん、心配をおかけしました、高田です。
皆さんの合宿後記を楽しく読ませて貰っています。
まず、加藤さん、病院まで付き添って貰い、貸しスキーも返して貰いありがとう。それにしても、げんきですね。
それから、小山さん、わざわざ長野まで車で送っていただきありがとう。帰りは眠くありませんでしたか。
上村さん、長野まで同行していただきありがとう。
青柳さん、心配をかけて申し訳ない。他の方も大変にお世話になりました。改めてお礼を申し上げます。
左膝の状態は、そんなものです。半ギプスをしてびっこを引きながら勤務しています。当日は、長野から新幹線にて東京へ帰り、ホテルに宿泊。翌日（２８日）、東京本社に出社、でもみんな冷たいのです。実にうれしそうに原因と状況を聞いてくるのです。昼食会では、俺はゴルフでやったことがあるとか、当人の苦労を横に怪我談義に花が咲く始末。出張の予定を切り上げ、その日の内に四国に帰りました。２９日に四国工場産業医の整形外科病院へ行ってMRIを取って貰い、診察を受けましたが、この医者からして冷たい「年と体重を考えなけりゃいけないよ。早くゴルフが出来るようになりゃいいだろう。装具を作ってやるから当面はそれをつかいな。」ですって。これが、ゴルフ仲間の言動でしょうか。１，２，３，４，５日と四国に滞在、５日のコンペは残念ながら欠席。別のゴルフ仲間が筋力トレーニング器具「ＡＢＦＬＥＸ」を調達して届けてくれました。今日（６日）に装具が出来上がるので、病院に行って受領、装着の予定。今週は明日（７日）から大阪（７，８，９日）、富山（９，１０，１１日）、金沢（１１日）、香川と回らなければいけません、予定はゆっくりとしたものを組みました。ただ、１２日には結婚式の媒酌が有ります。という状況です。こういう怪我は良く日にちが薬と言いますが、本当にそのようです。あせらずに、「ＡＢＦＬＥＸ」で筋力トレーニング（ウエストが減ると説明ビデオは言っています。少し、期待しています）をしながら直るのを待ちたいと思います。そして、来年もまた、皆さんとお会いしたいと思っています。
それから、当日から酒を飲んでいません、飲み会に行ってもウーロン茶ですませています。ちょっと酒に飢えてきた感じのこのごろです。

以上、お礼と経過報告を兼ねて送信します。
高田和守

＊柴田　勝之　　８期

ＯＢ会誌を送付いただき有難うございます。毎号楽しく拝読しております。ホームページの情報も楽しく拝見しています。

小生、金沢を離れて33年、水戸に居を構えて20年になります。50有余年の人生で水戸在住が最も長くなりました。北関東の田舎ですが、20年経つと、住めば都で大変良い所です。昨今、地方にあって国際文化都市と言われています。

さて、30年ぶりにワンゲルのスキーに家内と参加する機会を得ました。前日、妙高池ノ平でスキー大会があり、その足で、飛び入り参加したものです。先輩、後輩の面々にお会ういし大変楽しいスキーでした。その後、３月にまた保田、青柳、森川氏と志賀高原に行く機会があり、大変良いスキーシーズンだったと思っています。

信州方面でのスキーは20年ぶりでしたが、高速道路のおかげで時間的に非常に近くなっていることが分かったのが収穫でした。これを機会に来年も参加したいと考えております。同期の皆さんはどなたか参加しませんか

草々

お花見コンパ
顛末の記

by　せっちゃん

そもそも４月15日（土）は、「８日（土）では入学式他でＯＢは多忙ではなかろうか？」と決定されました。その時点で「花なしコンパ」とも噂されました。さらには、「その頃なら、現役の新人勧誘の援助になるのでは？」の声もありました。後者は人数比に懸念があり、沈静化していきました。

ところが、ところが、長い冬の御蔭で、15日がほぼ満開の巡り合わせになってきました。その点では、８日に浅ノ川園遊会を催した某商工会より、ワンゲルＯＢの名に恥じぬ読みの深さというべきでした。

しかし、しかし、まともに 100％の降水確率となり、花より団子の実益をあげた某商工会より、馬鹿さ加減を暴露することになったのでした……。

さて、時代は「花金」。土曜早朝に、沈床園へ駆け付けたせっちゃんが見た物は、前夜の宴の後と、闊歩するカラス、所在なげな陣取り学生５組程でした。

宴の後、といっても、わずかの散乱が残るのみで、カラスの害、ならびに観光シーズンの景観保持のため、深夜のうちに処分の手が打たれたことがわかりました。何より、トタン製大ゴミボックスが仮設され、「燃えるゴミ」「燃えないゴミ」の区分までされていたのが感慨物でした。沈床園の酒宴がどこまで許可されているものか、ちょっと気にしていただけに、なかなかの気配りと思えたのでした（以上までに、キーワードが入っています）。

ビニルシート２枚を広げ、３５周年記念時に制作した「金沢大学ワンダーフォーゲル部白山記念登山受付」の垂れ幕を貼り付け、陣取り完了。まだ家族は夢の中のうちの事でした。

天気予報って、あたってほしくない時にあたるものなのです。本日は、２時から観光会館でエヴェレストビューホテル社長の講演があり、その後沈床園へ向かえば丁度の按配となっていました。

ポツポツ落ち始めた空の下、観光会館への自転車を止め、ひょいと見上げると、あー、やってる。田村教祖様と、早々から番をしていたという奥名会長。スキー合宿からの差し入れが、かなり空いてしまったようです。爛漫の桜の下の御蔭で、どうにか雨の直撃を免れているものの、全面濡れは時間の問題。それに、朝の陣取り組が全員消え、気合い入ってるワと思えたドームテントも失せていました。「鈴木（同期）には、断っといたよ。」仕方ないわよねえ。大阪からこんな雨の日に来てもらっても。

シートの内側が濡れないように処置して、観光会館へ向かいました。私はこの講演会があることを、ヒマラヤ観光開発に照会の手紙を出したことがあるという友人から聞きました。彼女が「だから案内がきたんじゃないかしら」と言っており、講演会後の質疑応答も、それらしき傾向がありました。

ともあれ、ビデオに映し出されたのは、１ケ月程前に見てきた懐かしい景色でした。但し、「豪華・快適ホテル」が前面に出ていて、これじゃあ、景色をスイスアルプスに入れ替えても一緒。嵌め込まれた絵葉書にすぎない。石垣、煙の臭い、牛の糞、シェルパ達。それらの向こうに光っていた山々だったよ！似て非なる物。懐かしさと、ちゃうよ！がごっちゃになって、

田村教祖と奥名会長。
撮影：舟田事務局長

三人揃えば、ＯＢ会の揃い踏みならぬ、揃い飲み。
この神経があれば、どんな辺境にも旅ができます。

なんとも複雑な時間でした。

この席で、教祖様は、最前列に座られ、質疑応答の際には、「ヒマラヤに惚れました。しかし、客では行きません。従業員に雇って下さい。」と、いつものペースで座を盛り上げたのでした。（その件の後日回答は「月給２万円、３ヵ月のみ」…でした）

その講演の間に本降りになり、同席していた上馬夫婦も帰途につきました。

本日のコンパは返事不要、雨天中止となっていました。でも、誰かが顔を出したなら…やっぱり待っていてあげるのが筋ではないかと、沈床園へ戻りました。爛漫の桜の豪華な広場はひっそり。学生の１グループだけが、ゴミ箱裏に宴を張っていました。

ビニルシートの１枚を屋根とするべく試みるも、紐も足りず、そんな抵抗をしてみたものの、結局「この大ゴミ箱に屋根としてかぶせるのが一番」の結論に達してしまいました。では「燃えるゴミ」側にするか？「燃えないゴミ」側にするか？なかなかに意味深な選択とも言えました。もちろん私達…田村教組、奥名会長、舟田事務局長は、どうせなら「燃えるゴミ」でありたい人種でありました。しかし客観的に見て、「燃えるゴミ」側はやや異臭があり、「燃えないゴミ」側のビンをどけた方がましのようでした。そうやっての設営中も「ワンゲルでなかったら、絶対こんなことやらん！」のつぶやきが聞こえましたが、まあまあ。

なんとかご接待会場が仕上がり、コンロを広げジュージュー。「あ、いい匂い！」の声に、トタン越しに、焼きウィンナと花見団子を交換。数寄者同士、エールを送り合ったのでした。

「え！こんなとこでやってんの？」の松林氏が加わり、講演会場で出会った「あれだわ氏」（クンプ協会の代表Ｇ氏）も飛び入り参加。まずまずの賑やかさ。

ライトアップされた桜は重たげに花房を垂れ、その隙間からは、これまた思わぬ光線に眩んでいるような雨粒達がキラキラ落ちてきます。百間堀もただただ静かに、オレンジがかった桜達が、散華の前のひとときをむつみあっていました。

７時。これにてお役御免。兼六園の茶屋の甘酒で温まり、解散したのでありました。

以上、ミレニアム花見の記でした。

２０００年春小屋酒場

（食料計画）	12夜	13朝	13昼	13夜	14朝	14昼
０期　田村　昭夫				○	○	○
15期　奥名　正啓	○	○	○			
15期　舟田　節子	○	○	○	○	○	○
18期　椿川　利弘	○	○	○			
13期　辰野　隆義				○	○	○
13期　吉田　穂積				○	○	○
13期　吉本　良治				○	○	○
15期　上馬　康生				○	○	○

バイト現役

佐藤　豪一郎
（５回生　新ＯＢ）
矢内　佑一（４回生）
角谷　　誠（４回生）
矢田部　桂（３回生）
清水　健作（３回生）

椿川　舟田　奥名　　高三郎頂上
【これは、息子から借りてきたＡＰＳ。リモコンシャッターでホラ！】

高三郎と犀川ダム

18期　椿川　利弘

ゴールデンウィークの次の土曜日に、奥名会長、舟田事務局長と一緒に、高三郎に登ってきました。これまでの高三郎登山で最高！でなかったかと思います。ユキツバキ、タムシバ、ホンシャクナゲ、カタクリの花が見頃で、登山道にこんなにいっぱいあったかと思うくらい見事でした。また、新道と旧道の分岐から頂上付近を見ると、遠く雪の上に見えたカモシカが何ともかっこよかった。

今回の私の役割は、後発隊が土曜日と日曜日でベルクハイムの床張りをすることになっていて、前日の金曜日に犀川ダムからボートを使って、その資材を運ぶことでした。

資材運びを手伝ったのは、現在、県の河川課に勤務していて、ダムの職員を知っているし、犀川ダムのことに間接的に携わっているからです。

ここで少し犀川ダムについて説明しますと、なぜか犀川ダムは、金沢市が工事して県が管理しているダムで、昭和40年度に完成した県内２番目のダムです。そして、洪水調節のほか、水道用水の確保、発電等の多くの目的がある多目的ダムとして建設され、ダム上流の倉谷等の集落の人達が移転しました。

犀川ダムとの関わりは、昭和48年５月に新トレで、駒帰から歩いて、やっと犀川ダムに着いた時からです。当然高三郎もその時が初めてで、山を登っている時は周りが何も見えていませんでしたが、犀川ダムから見た高三郎はよく覚えています。

２年生の時にベルクハイムを建て替えることになり、犀川ダム管理事務所からボートを借りて、セメントや木材を運びました。今では船舶免許がないと運転させてもらえませんが、この当時は、ボートの運転も自分達がして、好き勝手に使って何回も往復したり、エンジンが止まってオールで漕いだこともあったりしたけれども、管理事務所の人も大らかなものでした。

また、大学院の時に、１学年下の高桑君がダム上流で地質調査をしていた際に行方不明になったと聞いて、犀川ダムの管理事務所に泊めてもらい、翌朝捜索に行った時にも、ボートで送り迎えしてもらい、お世話になりました。そして、残念ながら見つけることが出来なく、高桑君の両親に最初の捜査報告を自分がしなければならなくて、辛かったことを記憶しています。

ところで、このようにボートを使える場合以外、高三郎に登る際には、必ず犀川ダム貯水池脇の道路を通らなければならないのですが、この道路が年々崩壊してきていて、吊橋の上流で新たな崩壊箇所もありました。この道路の通行人としては早く補修してほしいものです。

しかし、ダム管理する立場としてみれば、実際のところボートを利用するため、この道路を利用していないこともあり、限られた予算の中で、道路補修は後回しになっているのが現状です。そのうえ、この道路の管理責任などが明確になっていないようです。

私的には高三郎と犀川ダムはセットになっており、これからもベルクハイムの補修と共に、貯水池脇の道路も含めた登山道の整備に関わっていきたいと思っていますし、これから年を重ねても、高三郎に挑戦していきたいと思っています。

【高三郎頂上部。新緑、シャクナゲ、残雪の頃がベストシーズン。現役の頃はフラッペ。ＯＢなら、残雪冷え冷えビールが至福。】

＊矢内　佑一　　42期

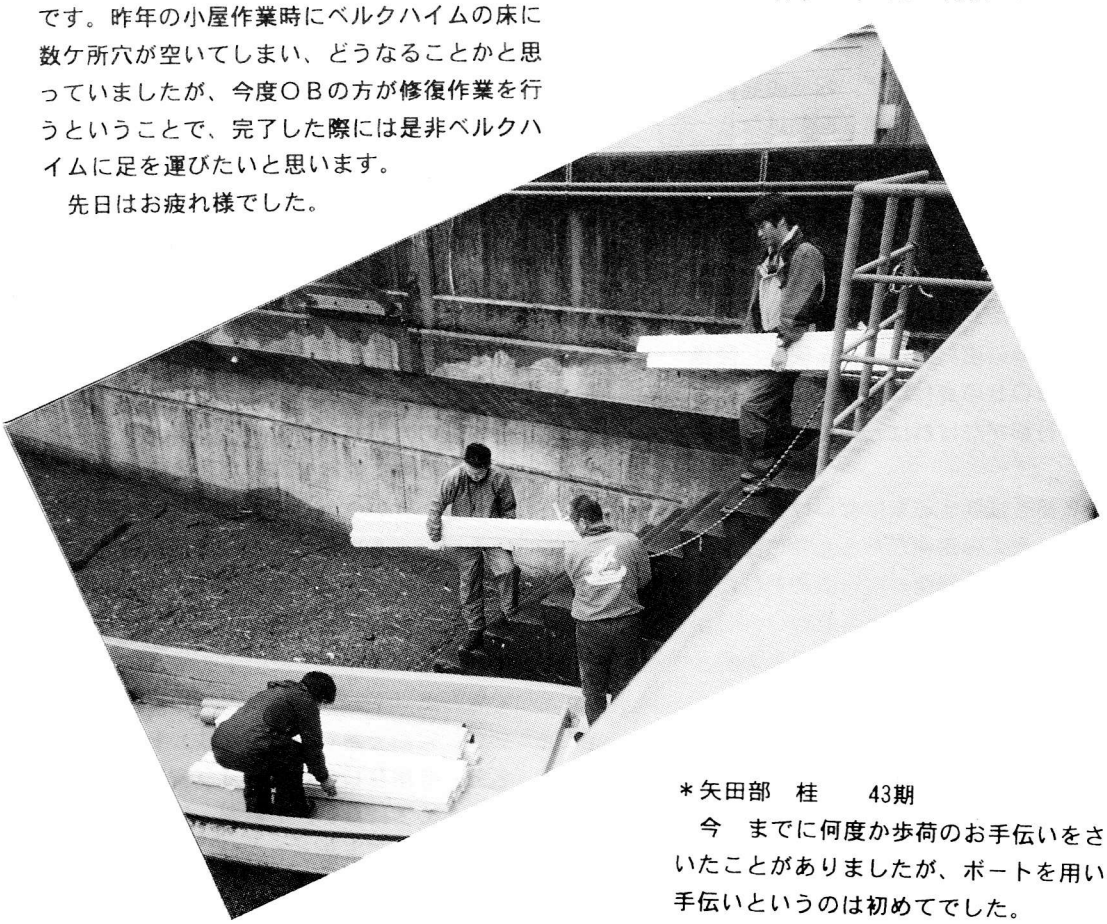
先日は多少疲れましたが、とても楽しかったです。昨年の小屋作業時にベルクハイムの床に数ケ所穴が空いてしまい、どうなることかと思っていましたが、今度ＯＢの方が修復作業を行うということで、完了した際には是非ベルクハイムに足を運びたいと思います。

先日はお疲れ様でした。

＊詠み人知らず

引退し　やっと分かりし　山の味

ベルクハイムは　姥捨て山



＊矢田部　桂　　43期

今　までに何度か歩荷のお手伝いをさせて頂いたことがありましたが、ボートを用いてのお手伝いというのは初めてでした。

歩く速度にはない、流れる景色と風、そして心地よい波と、とても新鮮でおもしろい一日でした。

でも、次に高三郎へ行く時、あのアプローチの長さを思うと少しひるんでしまうかもな、と思ったりもしています。

ありがとうございました。また何かありましたら、声かけて下さい。

＊清水　健作　　43期

舟の旅は楽しかった。春と秋で水量が違うのにびっくりした。新緑の高三郎は美しい。

【水門を抜け、犀川ダムを振り返る。
「舟」で「山」に行く？】

春の山小屋酒場

15期　舟田　節子

年２回の会報発行というのは、この種の会では珍しい方だと思う。

そうした理由の第一は、まず、転居の転送サービスが一年間であるから、年２回発送なら、移転先不明になる事態を防げるであろう。（転送されてくれば、ＯＢ会へ転居を未連絡と気付いてもらえる）。その第二は、せめて２回は出さないと、行事のお知らせを兼ねる事ができないというものだった。

行事のお知らせの度に、連絡費を使い、発送作業をするのはＯＢの身には不可能である。さりとて、何も行事がなければ、何の為のＯＢ会なのか？

ここでＯＢ論を展開する気はないけれど、部は学歴以上に、当人の指向がからんでの関わりである。何周年記念の単発の寄付集めだけなら、「懐かしい」のみでよいかもしれない。しかし、存続し続けるなら、なんらかの行事の提言は必要である。それが、会報紙面に公示され、みなにノミネートチャンスがあるというのも、大事な事なのだ。

という訳で、実際役員だってその頃どこに赴任しているものか？なのだけれど、かかさず行事予告を盛り込んではきた。そんな非現実的な善処をしても、ほとんどのＯＢにとって、現実に参加予定を組む程にはならない。よしんば予定しても、限りなく優先事項が入ってしまう。そのあたりはどうしようもないのである。

毎度の長い前書だけれど、「ミレニアム　春の山小屋酒場」も、結局はいつものメンバーで開催される事になったのだ。（メール網では、何度か広報が出たし、15期同期会シリーズのうちでもあったが…）

５月12日（金）

今回私は早々と、代替指導者の手配もして、ルンルンで準備にあたっていた。苦節（？）30年、初めてボートで倉谷入りできる。例の「くたばれ！切れ込み」を横目に悠々と…。それは、食材の重量も梱包も　気にしなくてもよいという事でもあって、パッキングも鼻歌混じりになるくらい。

ただ、参加メンバー減は、出立直前まで出る始末。余れば担いで戻らなければならないのだから、その度に抜き取り。かく言う私も、直前に親戚の葬儀が入り、３日「つぶれた」（不謹慎ですが、十分お年の方でしたので）上に、当日の朝、まだ泊り客がいた。責任から、お義理のつきあいまで、「山のような足カセ」が、ＯＢの現実なのだ。

だからこそ、ダムに着き、茫洋の湖面を見た時には、「やっと、世間離れができる」の、背伸びが出た。さあ、リフレッシュタイムの始まりだ！

犀川ダムに１時集合。その前に、辰野さんと椿川さんは、資材の買い出しに出ていた。見積もりでは、老体ＯＢにはとても搬入は無理となり、５日前に加藤ジュニアに現役バイトの手配も頼んであった。その現役５人もここへ集合となっている。

まず辰野カーから、杉板をおろし、運搬し易いよう、５本ずつくくる。今ＢＨに張ってある合板は見栄えはよいが、湿気にはもろに弱く、一枚板の方が持ちがよいとの事。さらに、２×４建材の中に面取りをした具合のいいものが見つかったという。このあたり私は知識ゼロ。いつも感心するのみである。椿川さんは、ダムの管理人に挨拶に入っている。

そして現役連中が到着。これがちゃんと顔がわかる。40周年で見た「子」や、去年の懇親会で飲んだ「子」。こっちも現役に頼むのはそれなりに億劫である。「必然性」もしくは「大義名分」を用意しないと、そう安易に受話器を取れるものではない。それが、加藤ｊｒに「任せて下さい」の返事をもらい、こうして、犀川ダムの地に現役が来て、一緒に仕事の段取りとなると、ああやっぱり、為せば成る。嬉しい。

ＢＨがあって、山小屋酒場があって、良かった！仕事があって、「必然性」や「大義名分」が湧いてきて、頼んだり頼まれたりで、人はつながることができる。実際、ＢＨや高三郎がなかったら、ＯＢ会の運営や現役との交流は、かえって難しくなっていたのではないだろうか。余計なお世話をしたくもなければ、気楽に頼めもしないというふうに、近世、人のご縁は疎遠に流れるものと、相場は決まっている。我知らず、常識のように身構えた殻を、こんなふうに破れた時は、「やったゼ！」のガッツポーズが出る気分だ。（何せ、息子には「学生気分の抜けんやつ」と呆れられている。）

事務所から職員と出てきた椿川さんも、５人の現役を数えて嬉しそう。早速指示を出して、気合いが入った様子。辰野さんは、この後は、帰社して、本来のお仕事に励まれるそう。ご苦労様。

今年は雪が多い。そのせいか、ダム湖の水位もこれまでになく高かった。ボートまでの階段が恐怖だったのに、目前にボートが浮いている感じ。という訳で、積込みもいたってスムーズに進行する。

椿川さん、佐藤君（５回生）、矢内君（４回

【吊橋をくぐり抜ける。
水量の違い…それは、
山が生きている証】
オジサン
清水　　角谷

生）、矢田部君（３回生）が第一陣。流　避けの水門開けにやや停滞した後は、あれよの間に消えてしまった。

さっきまで雨がおちていたくらいだから高三郎は見えていない。このところ、登山口に着いたらあふれる車にギョッの山ばかり。この静けさ、豊かな緑…不便なままで残ってほしい。

ちなみに、金沢だって昔の町名が復活し始めている。効率優先の高度成長期から、減速期へ…豊かさの尺度が変わろうとしているのだ。大量に登れ大量に泊まれるメジャーな山より、ヤブに紛れそうな道とろうそく灯る小屋のマイナーな山。車と高速道路による何日間百名山踏破より、近くて自然豊かな山への四季詣で山遊び。後者が復権する時代が来ている。

おまけに、今犀奥は、何重もの規制がかけられた、特別自然保護区域である。そんな所に、昭和38年来の既得権により、小屋を構えていられる。そこは、大学が３年に１度、9000円の地代を営林署に払ってくれていて、他に維持・管理費を要求される訳でもない。見方を変えれば、私たちはとんでもない贅沢な場所に、気楽なセカンドハウスを持っているようなものだ。

さらには、介護保険制度ができても人は幸せになる訳ではない。動く体、気力、関わる人がいて、待ちどおしい朝がある……きっと、そんなあたりなのだ。わかっていながら、「日常」はそれを忘れさせてしまうし、そんなピュアな感性じゃやっておられんのが現実。だから山小屋という「非日常空間」が貴重なのだ。

以上の「山小屋復活論」、どこに受理してもらえばいいんでしょ？

第二陣は、奥名会長、私、清水君（３回生）角谷君（４回生）。清水君はＮＨＫの取材なんかでナカオの林代表と面識があるというし、角谷君は去年の懇親会で、栂さんに憧れの人！という感じで密着取材をやってた「子」だ。新人は13名入ったとか、話がつながる。

20分でもうボートは戻ってきた。残りのセメントや、脚立を積込み出発。本当に一度もボートに乗ったことがない。だから、真後ろに遠ざかっていくダムに感激。豊かな水際につかる木々の目線も新鮮なら、その上のムラサキヤシオツツジも秘境の麗花の風情（誰にも見れるものじゃないんだから）。切れ込みは、こっちが気をつけていたからわかった程度だったし、例の出島は、オジサンがわざわざ、岩壁と出島の間の、こんな時期の今年しか通過できないであろう隘路を通過してくれた。あの倉谷の赤い吊橋も見上げて通過。たった10分で倉谷に、ゴッスンと到着。快適すぎてはまっちゃいそう。

川岸にはまだかなりの材木が積まれている。さて、と時計を見て、当然のように「４時に迎えをお願いします」と言って、舟を見送る。あすテン設トレも控えた彼らには、そこまでが限度だろう。引き返してきた椿川さんにそう伝えたら、彼の方は運搬が済んだら歩いて帰るものと思い、三便目までは頼んでなかったらしい。ハア！？時に、女の図々しさの方が、事をスムーズにしてしまう場合があります…アハハ。どのみち、お礼を言いに行くのは椿川さんですし…。ともあれ４時までに運搬を終えなければ。

舟着き場からは、物を運ぶとなると、ＢＨは意外に遠い。一昨年の長雨で地形が変わり、川原が支流で寸断されてしまったが、その支流がやや深くなり、二箇所の徒渉地点を探さなければならなくなっていた。長物を抱えてはピョンピョンともいかない。ましてやセメント袋でこけようものなら…。

徒渉地点確保にスコッパを持ち出そうとしたら、これがまた、鍵があかなかったそうだ。幸い今回の荷物にはバールが入っている。これで

佐藤　矢内　矢田部　清水　角谷　椿川　奥名

こじあけ、新たな鍵は今日帰る現役に、辰野さんへの連絡として頼むことにする。

小屋の中はいつものようにカメちゃんが散乱。これはともかく後回し。スコッパをかかえて下りる。２箇所の徒渉はそもそも、支流が流れ込んでくるために生じている。その流れ込み口を塞いでみる事にした。運搬はバイト料を払う訳だし、椿川プロの元ＯＢ計３名は、流木を運んだり、石を転がしたりの土木工事に励んでみる。つまるところは、本流の川床が高くなっている限り、ちょっとの障壁くらいでは止められないのだった。心持ち水量は減ったが、このままえぐられていくとなると、将来的には面倒である。

荷物は中継地点を往復しつつで、土木工事地点までまず運びこまれた。ここでバナナ休憩。みんな汗だく。４時までとなると、小屋までどうにかセーフのあたり。人力頼みはそうはかどるものではない。ほんと、現役バイトを頼んで正解だった。

最後はＢＨへのきついきつい登り。そんな真似はできるはずもないから、せめて邪魔になりそうな枝をせっせと切る。そしてついに全部が運び上げられた。御苦労様。現役に協力してもらった資材と思うと、この後もきっと嬉しく仕事ができるだろう。冷やす時間もなかった缶ビールをつけてありがとう。そしてさようなら。おっと、その前に水洗トイレ見てってちょうだい。といっても見るだけじゃ良さはわからない。秋の小屋作業までお預けなんて……小屋の価値がどうしたらわかるものだろう。

ＢＨに静けさが戻った。まずは掃除だ。奥名さんが水場を見に行き、私達はカメ虫除去。今年は冬が長かったせいか、ミイラではなく、ご存命のお目覚めになった所を、お立ち退きいただく。ドバッ、ドバッと、しゃっくりするようにホースから泥水が出てくる。これも小屋開きの音のうち。お、澄んできたと思ったら「傷テープないけ？指先切った。」「あ、そういえば、辰野さんの水場のマニュアルに、『軍手をはめて』と書いてあった」。後の祭り、お気の毒様です（これも次回は改善されるそうです）。

「この床、明日剥がすんやろ？」「んー。ほんでも今日は、寝んならんし…」真面目に拭き掃除をする。あいかわらず、蛇の排泄物に、諸々の残骸。これらが汚いかといえば、ちゃんと自然に分解されていく物達であって、累々の不燃物の不快さとは次元が違う。そして、ゆったりと流れる時間といい、小屋では誰もが哲学者になれる。夕食をとって、明日の早出の準備をしたら、もうすることがない。「いい所やけど、一人じゃおられんなあ」「田村さんは80日いたんよ」

そう、ここで田村先輩は「変わり者」から、名実とも「教祖」へと解脱された。「大学生10年」なら努力しなくてもできるし、偉かったのは親の方というしかない。が、小屋住まいの方は物好きだけではやり通せない。私も、80日は最初から真似はできないが、自転車での、ダムまで往復は１回やってみたいと思っている。還暦にそれをやれるだけの体力を保持しておきたい…は一つの目標である。ともあれ、ここで80日を過ごされたこと、週１の買い出しをマウンテンバイクでされていたことは、既に「田村伝説」となった。創部者なら必ずいるが、後年にさらに伝説を加えるような人はそういない。

奥名さんも、椿川さんも、明日は町会の用事で、高三郎の後はすぐ下山だ。「朝５時に出れば、１時には戻ってこれるよ」「それなら、十分や」。ゆったりした時間といいつつ、その前後がかっ詰まってしまうのがＯＢなんである。

【浮上する？カモシカ。この山本来の住人】

5月13日（土）

ラーメンの朝食。昔は雪山幕営の定番だったが、今は、ネパールトレッキングのララを思い出す。インスタントラーメンごときで思い出せるのは幸せだが、小屋の生活ってのは、あそことたいして変わらない。遠いようで、近い。そんな発見がなんか楽しい。そんな手抜きでも何か慌ただしい朝、隣の消音トイレが、快適。（だって、いつ抜けよう、どこへ隠れようって、朝はやっぱり落ち着かないもんです。）

ダムまでの道は4月28日から通行可ということだった。だから、高三郎にはまだ人はそう入り込んでいない。今回は新道－頂上－旧道と周回してみる。久々、登りの新道。やっぱり並みの急坂ではない。それでもイワウチワが励ましてくれるし、傾斜がゆるむとユキツバキの大群生地。「現役の時に、花を見た覚えある？」「ない。前のやつの靴しか見とらんかった」そうなのだ。あれだけ関わりながら、山としての高三郎の記憶がない。ペグが足りないとお説教をくったことや、沢水を食器4杯飲んだことや、みんなの汗が道路に筋になっていた事なら覚えているが、あの頃、景色も花も目に入ってはいない。シャクナゲなんて卒業してからの領域なのだ。

うっかり砺倉側に行きかかる。クラコシ尾根にまたヤブが茂りだしたのだ。枝伝いに枝渡りと、今の時期でこの状態だと、この後は通行可とはいい辛い。これを厄介と思うのは人間様の都合であって、カタクリに、蕾から満開までのシャクナゲと、花の方は存分に咲いていてくれる。このところ、登山口へ行ったらギョッとする程の車、頂上にはわんさかの人…に興醒めすることが多くなった。誰にも自然を楽しむ権利はあるが、人を見に山へ来たのではない。だから、ヤブの復活が「困った」というより、好ましく思えてしまった。いつまで来れるかわからないが、ずっと自然豊かなままの山であってほしい。

とはいえ、四肢を駆使してで、ストックも邪魔になるのみ。「9時に着くかなあ」と言ったら、あとの二人に「無理なんじゃなあい？」と言われ意気消沈。大休止してもらう。もうちょいで前方のシャクナゲ尾根にドッキングなのだが…。「ほら、あそこの影、カモシカみたいな形になってるよ」「ああ、あれか」…数秒後、「影がなくなった…」「えっ？」ほんと、消えている。そこから中空に浮くように、移動中の影があった。高曇りの空と雪の稜線がとけあって、妙な立体感になってしまう。

分岐がべったりの雪。ロープのかかる痩せ尾根あたりが夏道伝いになり、また雪屁伝いのルートをとって、最後、ずんぐりの雪丘が頂上だ。無雪期は笹藪の中で興醒めだが、360度の展望になるこの時期は惚れ惚れの頂上だ。白山の頂上部が雲に隠れているぐらい。ここからは白山北部の山々の北面を見ることになり、まだ雪がたっぷり。南面になる大門は随分雪解けが進んでいる。そんな景色を見渡しながらの、ビールのおいしさは格別。これ以上の贅沢を思いつかない。山スキーの跡がある。33期佐藤夫婦が、予定どおり連休に来たのだろうか。

証拠写真を撮って下山。雪がついていると、旧道への分岐地点がわかり辛い。新道から女性が一人上がってきた。一人でも来たい人がいるんだなあ。「すごいですねえ」と言ったら、「いいですねえ」と言われた。そりゃあ、こっちは両手に雄花だもん。というより、一人でも登りたいほどのこだわりの山なら、なおのこと、そんな山へ登りたい仲間のいる人が、かえって

羨ましいかもしれない…と、思った。でも私は高三郎にこだわったって、一人で来る根性はない。だからやはりスゴイと感心するしかない。

分岐下のロープ付近はさらに足場が崩れてきていた。そこからも枝が茂り気味。昨秋の作業がここまできていないのと、雪で道になだれかかっていた木々が起き上がっていないせいなのだ。枝をよけたり、つかまったり、ずっと「手足の運動」状態で、駈け下りる。

本日２組目のすれ違い者は、くろゆりクラブの下見の３名だった。今春から、くろゆりクラブは発足15年をむかえ、ナカオとの姉妹関係を打ち切った。それで、下見に出るなどの自主活動も始まっている。見送って振り返ると、分岐から上はすでにガスの中。同日に登っていても、展望条件はがらりと変わる。健脚のあの人達でこのペースなら、引率される連中に踏破は難しい。この分裂劇の主因は、ナカオが主導の場合、「ほとんどの人が登れる山」で選定していたのに対し、「いつまでも、登りたい山に登れない」の不満の鬱積だったらしい。団体登山になれば、水準をどこにおかねばならないか、連れていってもらう立場のみの人には、同じような場数を踏んでいてもわからない。翌週予定だった高三郎はこの下見の結果、行き先変更になった。これまでのところ、華々しい登山計画のほとんどが、行き先変更の憂き目をみてしまったようだ。「登りたい」、「登れる」、「他人を連れて登れる」、この間に横たわるクレバスは、責任がかかってみなければ気付かない。事故がからまないうちに、個々の自覚につながってくれればいいが…。

残雪豊富なせいで、前高も広々ブナ林だ。ここは左、左とルートをとればいい。この地点は迷い易いと苦情が多いらしいが、この「苦情」感覚がよくわからない。山へ入ればすべてが自己責任なのだから。

ともあれ、この秋には、倉谷から頂上まで、８本の標柱が立つことになる。これは金沢市からナカオが請け負う仕事だ。この春にも、高尾ー吉次山間の８本を３回の作業山行で立ててきた。プロが交じる手際の良さ、ナカオの誇りにかけてで集まる人達に感心した。もちろん報酬は会へで、打ち上げ飲み会ができるかどうかの額だ。

その後もおなじみの急坂で、間隔をあけていたからそうは目撃しなかったものの、それぞれによくこけた模様。新人トレには無理やろうなあで、降り着く。登れた自分を誉めたくなる山。そしてまた会う日までと後にする山…。

なお、上馬さんは早朝に新道にあがり、砺倉やクラコシ尾根で猿の観察をしていた。私達が分岐から下りにかかる所が見えたということだった。

そんなふうに、猿や、カモシカに加えて、ＫＵＷＶもこの山に頻繁に出没していた時代があった。13年前、白山の時以上に万感の思いで頂上のＫＵＷＶの木札を撫でたものだ。「帰ってきたよ！」今度は、そこへナカオの人達と、金沢市の標柱を立てる。流れた時間への、象徴ともいえる仕事。そう、時が流れたのだ。ＫＵＷＶがどうであれ、高三郎は高三郎であり続けるのだから。ただちょっと、こだわりのご挨拶を胸に、仕事をしてきたい…私のＭ５。

２０００年春
山小屋酒場

１３期　辰野　隆義

前回の報告で予告したとおり、今回は、小屋の床の張り替えが大きな目標となった。

秋の山小屋酒場終了後、記憶が鮮明なうちに材料仕入の下見はだいたい済ませてあった。そこで、大仕事のわりには慌てる事はないと、一週間前になってから、買い出し品の最終チェックに出掛けた。

すると、予定していた床材が、予定の３分の１程度しかなく、入荷予定は金曜日との事。金曜日といえば、材料搬入の当日である。すでにダムのボートの手配も済んでいる。間に合うかどうか……。運を天に任せるしかない。

５月12日（金）

10時に椿川君（18期）とムサシの前で待ち合わせ、買い出しする。床材は、入荷したばかりの、まだ梱包も解いていない物を購入する。結構なボリュームがある。舟田さんを通して現役生のボッカバイトを頼んでおいて正解だった。

購入した資材は以下のとおり。

床材（２×４用６フィート材
　　1800×49×19厚　松材）130本
〃　（〃　　８フィート材
　　2400×49×19厚　〃　）23本
床用釘　２箱（約2000本）金槌３本
脚立（３ｍ　２ツ折り）１台
セメント（20kg）２袋　…秋の作業用

天気予報では金曜頃から天気はよくなるはずだった。それが半日ずれてきており、午前中の今、まだ雨が降っている。

午後１時。ダムサイトで、今日入山する人達と待ち合わせ。木材は、４－５本ずつビニル紐でくくり、持ちやすくしておく。それでも40パーツの荷物となる。

現役バイトは５人来てくれた。これなら、腰

が痛い、膝が痛いとボヤいている参加ＯＢの負担もほとんどなくて済みそうだ。

この日ボートで倉谷へ入ったのは、奥名会長、舟田事務局長、椿川君（ボートの手配など、全てやってくれた）以上３名と、現役５名。その８名と荷物は、２便に分かれて倉谷へと搬入された。

私は、今日は引き上げ、明朝、他のメンバーと入る事になっている。現役組も今日帰るそうだ。

５月13日（土）

いつもの工学部に、いつものメンバーが集まった。もう少しいろんなメンバーが来てくれると良いのだが、それは当初のモットー「無理せず」「楽しく」「迷惑かけず」に反することになるかもしれない。いろんな人が、都合のついた時に参加してくれれば、それで良いでしょう。

いつものということは、田村御大（０期）、吉田、吉本、辰野（以上13期）。久しぶりの坂尻君（15期）が時間が過ぎても現われず、見捨てて出発。（上馬君の方へ、親戚の葬儀で不参加の連絡があったらしい）

さて、ダムへ着くと、いつもと雰囲気が違う。車がいつもになく多く停まっておりたくさんの人がたむろしている。どうやら、企業局主催のゴミ拾い大会（倉谷までの道の、どこにゴミが落ちているのでしょうか？）らしい。開会の挨拶をしている真ん中を通り抜けて、足取りも軽やかに出発。歩くにはちょうど良い天候だ。

山小屋は、昨秋と変わらぬ姿で出迎えてくれた。水場も便所もそのままだ。

昨日入山の連中は、今日は早朝から高三郎へ行っている。でも、しっかりと、ビールは冷やしてあった。ご好意に甘えて、まずはビールで喉を潤す。最高！！これがあるから酒場は止められない。

小休止の後、さっそく小屋奥から床板（合板のフローリング）をはがす。ぼろぼろになっている。雨漏りだろう。ふと見ると、右奥の根太に白アリが発生している。これはマズイ。

急遽相談。今回、奥の方は床板を固定せず、秋に白アリ退治処理を行い、根太を取り替え。その後、釘止めするとの段取りをつける。

それにしても、奥から床板を並べてこなければ、入り口側が張れない。そこで、固定はしないが、きっちり寸法取りをし並べてみる。入り口側では、寸法合わせや、調整のため、鋸を使っての細かい細工が必要になる。細かいといいながらも、案外いい加減でもどうにかなるものである。

そうやって半分くらい板を並べたところで、高三郎へ行っていた３名（奥名、舟田、椿川）が帰ってくる。疲れているようだが、充実感が漂っている。私もそのうち……少しでも……ちょっと……無理かな。

少し手伝ってくれた後、本日下山組の奥名、椿川の二人は名残惜しそうに下山。新しい床で寝るのは次回までお預けです。

どうにか寸法合わせをし、入り口側の床だけは浮き上がると危ないので、釘で固定する。夕食までには形を整える事ができた。

素晴らしい。実に素晴らしい。白木の、合板ではない、１枚板組の床。寝っ転がると、木の香りがぷんとする。

そこへ、本日入山組ながら、早朝出発をしていた上馬君（15期）が上がってくる。一人で猿の調査をやっていたらしい。山小屋へ入るなり、感嘆の声をあげてくれた。

夕食は例によって、山菜のオンパレード。日頃目にする山菜から、これはどうみても雑草でしょうという品の天麩羅まで、じつに素晴らしい夕餉でありました。

【本当は実技いらずのお立場らしいのに、鮮やか手際の辰野親父。倉谷の廃屋はあれよの間に朽ちた。手入れがあってこその山小屋】

【白木の床の豪華さは
我が家以上かも】

辰野　吉本　吉田　田村　上馬

また、田村さんの倉谷での顔の広さと図々しさの御蔭で、大きな岩魚２尾、日本酒１升も入手。骨酒にもありつけました。吉本曰く、“現代版わらしべ長者”だそうです。

そんな酒宴のつまみは、上馬君の白山山系から倉谷近辺に至るまでの、野性の猿のお話。いくら好きとはいえ、自分の足と目で確認しての話だからすごい。

メニューの豊かさから、話題のレベルの高さから、下界ではとうてい味わえない酒宴でありました。

その夜は白木の香りと、酒の酔いにまぎれ、心地よい睡眠となりました。

ところが、夜明け前に大雨が降り、雨漏りしはじめ、バケツをあてたり、移動したりと、気付いた方は夜中の作業があったようです。私は雷鳴を記憶しているぐらいで、ぐっすり。

５月14日（日）

翌朝雨はあがり、爽快な朝。雷鳴を聞いた者、雨漏りに気付いた者、その後の鼾を聞いた者と、同じ小屋に泊まったはずが、各自証言が食い違う。大笑いの朝食のあと、せっかくの新しい床が雨漏りで傷んでは大変と、屋根修理からとりかかる。

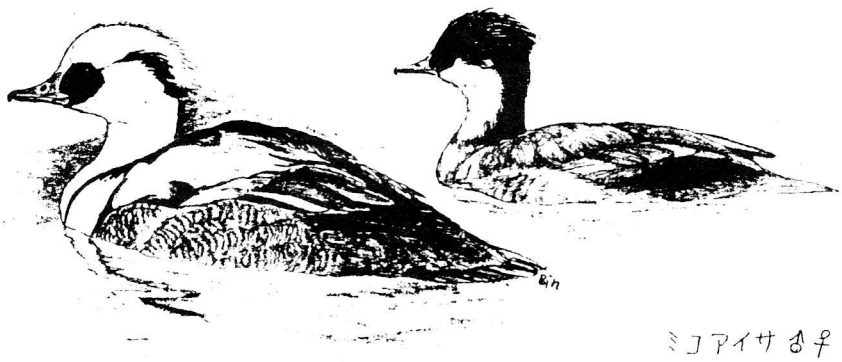
さっそく、搬入したばかりの脚立で屋根に上る。原因と思われる箇所に、大きなトタンを打ち付け雨漏り対策完了。その後、出発前にも通り雨に見舞われたが、漏ってはこなかった。昨夜は降り始めてからまもなくポタリときたそうなので、とりあえずはOKではないでしょうか。

残りの床板も、可能な物は釘で固定し、フリーの板はNOをつけて再度剥がし、風通しをよくした上で、今回の作業を終了とした。

次回秋は、白アリ対策の後、床板の完成。それに、いよいよ囲炉裏の製作へと入っていきます。興味のある方の参加をお待ちしています。

また、山小屋でぼんやりとしたい、岩魚釣りをしたい、高三郎へ登ってみたい、その他、いろんな人の参加もお待ちしています。秋には、栗にキノコがおいしいですよ。

以上、報告及び、お誘いでした。



ミコアイサ ♂♀

山小屋酒場沿革史

ベルクハイムと小屋作業の歴史については、創立35周年記念誌　上巻p180－ 229をご覧下さい。

初代ＢＨ　1964年（昭和39年）11月完工　６期石橋　合津他
２代目ＢＨ　1974年（昭和49年）９月竣工　16期川端　山内他

1993年（平成５年）９月　大修復着工　屋根張り替え　36期石川　立川CL他
94年（　６年）９月　〃　床張り替え　37期福田　戸田CL他
95年（　７年）９月　雨漏り修復　愁心碑修復　38期佐川　正善CL他
９月23日　修復記念・月見の宴　ＯＢ35名参加
10月25日　月見の宴反省会・兼３回生（38期）とＯＢ会役員懇親会
この席で、金沢市の登山道修復補助金を受ける団体として申請することを合議。
かつ、小屋作業をＯＢでやってみないかの話がもちあがる。
96年（平成８年）３月　やまざと96号外にて、山小屋リフレッシュ会立ち上げと、ＯＢによる登山道整備を提言。実行時には辰野オヤジにより「山小屋酒場」が正式名となる。

第１回　96年（Ｈ８）５月12、13日　参加16名
登山道偵察・旧道800m付近まで整備
器材搬入、小屋までの階段整備、小屋回り整備、残材焼却処理、水場までのルート刈り開け、ベンチ造り
＊ワイン酒多飲氏（０期　田村）小屋番就任　５月12日－８月１日
第２回　96年（Ｈ８）９月21－23日　参加16名　現役22、23日　39期川本CL他
登山道整備（800m付近－分岐手前鞍部）
ホース搬入、水場設置、ホース埋設
＊暁風翁氏（０期　田村）小屋番復帰　９月25日－10月６日
第３回　97年（Ｈ９）６月７、８日　参加10名　現役４名搬入バイト
登山道整備（800m付近　ロープ設置　テン場刈り開け）
小屋土台の補修、流し場制作、かまど補修
第４回　97年（Ｈ９）９月20、21日　参加６名　現役19－21日　40期高岩CL他
登山道整備（分岐手前鞍部－分岐と頂上の中間あたりまで）
トイレ用資材の切り出し　（ＯＢスキー合宿の話がもちあがる）
第５回　98年（Ｈ10）５月23、24日　参加12名
登山道整備（分岐－頂上）
トイレ小屋組、基礎固定、トイレ給水・排水管敷設、戸枠作成

＊創立40周年記念総会・懇親会　９月12、13日　医王の里　参加ＯＢ58名、家族11名
＊現役小屋作業　９月16－18日　41期河村CL他（頂上部刈り開け、頂上看板設置）
第６回　98年（Ｈ10）10月４、５日　参加７名
便器本体取付・固定　給排水テスト、防腐処理
＊99年（Ｈ11）春　県道寺津－倉谷線不通により中止
＊現役小屋作業　９月18－20日　42期石川CL他（前高三郎周辺）
第７回　99年（Ｈ11）９月25、26日　参加６名
トイレ完成　屋根修復
第８回　00年（Ｈ12）５月12－14日　参加８名　現役５名搬入バイト
高三郎偵察　資材搬入、床張り替え、屋根修復
第９回　00年（Ｈ12）秋予定…ＨＰ閲覧もしくは事務局へお問い合わせ下さい。
白アリ対策　囲炉裏制作

「野猿天国」複数に分裂？

新たに ナラダケ群 アゲハラ群 命名

金沢・犀川上流域

暖冬で繁殖 猿害再発の恐れ 警戒

県白山自然保護センター調査

金沢市の犀川上流域に、ニホンザルの群れが複数存在していることが石川県白山自然保護センターなどの十三日までの生息調査で分かった。周辺ではこれまで高三郎山周辺の「タカサブロウ群」だけが確認されていたが、同山から離れた地点で五つの集団が新たに見つかり、このうち二つが「ナラダケ群」「アゲハラ群」と名付けられた。暖冬で猿の生存率が高まる中、「本家」の白山ろくに比べ積雪量が少なく、冬場も比較的えさが得やすい同川流域の環境が群れの拡大、分裂を促しているとみられる。関係者は白山ろくと同様、市山間部の集落にも猿が出没する可能性があるとして広域的な分布調査の必要性を指摘している。

猿に関する生息調査や研究は、金沢市熊走地区で平成七年十二月、畑が猿に荒らされる被害が初めて出たことから、県白山自然保護センターや白山自然保護研究会が実施している。白山自然保護センターは昭和四十六年にさかのぼって周辺での目撃情報やふん、食痕などを記録。この結果、奈良岳周辺では猿の姿やウドなどを食べた跡が再三目撃されていることが分かり、上馬康生研究主幹はタカサブロウ群とは別の群れの可能性が大きいとしてナラダケ群と命名した。

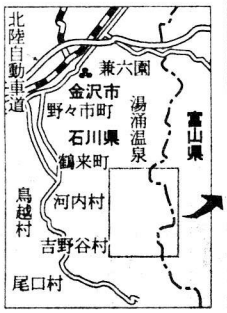
アゲハラ群は平成十年二月に挙原山近くで見つかった四十二頭で、発見者の白山自然保護研究会の滝澤均いしかわ動物園企画教育係長が名付けた。このほか、大笠山で九年六月に雪渓を横切る三頭が見つかり、二年十二月には口三方岳で十頭余り目撃されていたことも分かった。高尾山、医王山でも冬期に二―五頭の足跡が確認されている。

上馬さんらによると、これらは新たな群れの可能性がある一方で、タカサブロウ群が冬場を中心に移動していることも否定できないという。

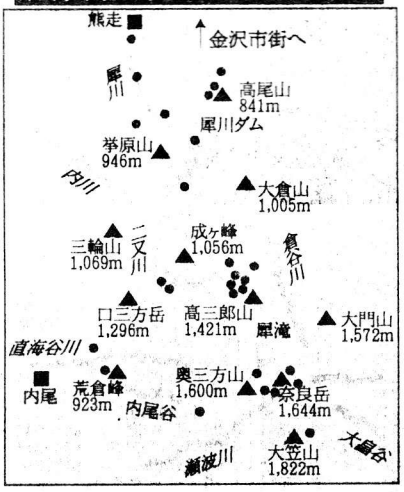
犀川上流域での猿の総数や群れの行動様式は不明だが、自然保護センターは現地で数が増えているのは確実と指摘する。原因としては、本来は厳しい自然環境の冬に淘汰される子猿が暖冬で生き抜き、繁殖に参加することが挙げられる。

白山ろくの猿の群れは平成七年は二十三群だったが、十一年には二十八群に拡大、山里に下りて農作物を荒らす群れも目立つ。上馬さんらは「金沢でも今後、集落に近い山間部に猿の進出が進むことは十分考えられる」と話している。

▲木の上で確認された猿の集団。「アゲハラ群」と名付けられた＝平成10年2月、金沢市の挙原山周辺（滝澤均さん撮影）



犀川水系及び周辺のニホンザルの記録場所



※赤い印が猿の姿やふん、食痕が記録された地点。記録は昭和46年から

ちょっと久しぶりの白山

20期　深田　進

この時期（ゴールデンウィーク）は山仲間との山行がすっかり恒例になっている。１６年前に１９期の栂さんから笈ケ岳に登ろうという話があり、就職して以来遠ざかっていた山に再び足を運ぶきっかけとなった。山仲間のメンバーは１９期の栂さん、２０期の栃尾、久富、松下、深田、２１期の栂夫人（旧姓瀬戸）などワンゲルのＯＢが中心になっている。松下君とは最近ご無沙汰しているが、７年前まではわざわざ鎌倉から駆けつけてくれたものだ。白山近辺を主に登ってきて、これまでに笈ケ岳は色々の方向から５回登っている。最近は県外の山にも行くようになり、尾瀬、越後駒ヶ岳、中の岳と続いたので、今年は久しぶりに白山へ行くことになった。

コースは２泊３日で

①一里野温泉スキー場－－－－奥長倉小屋－－－－七倉山－－－－小桜平小屋－－－－新岩間温泉

②一里野温泉スキー場－－－－奥長倉小屋－－－－大汝山－－－－ゴマ平小屋－－－－中宮温泉

の２コースを考えていたが、②は机上登山の段階でかなり無謀な計画とわかり、いちおうメンバーの調子がよほどよければという可能性を残して出発することにした。

白山へは高校２年の６月に登って以来かなりの回数になり、初めの頃は登った回数を数えては一人自己満足に浸っていたのだが、１０回、２０回と登り、登山の形態が異常になるにつれて、どこまでが白山登山なのかわからなくなり、数えるのをやめてしまった。当初、白山に登るということは最高峰の御前峰に登ることを意味していた。が、山は高きが故に尊からずということで、大汝、七倉、四塚などの主峰群はいいとしても別山、三の峰、釈迦岳はどうなるの？まして、丸石谷を遡って百四丈の滝を越え清浄が原のネマガリタケの中をさまよって帰ってくるというのは？

それほど行っていると思っていた白山だが、積雪期のこのコースはほとんどのメンバーが初めてで、昭文社の山と高原の地図「白山」の執筆者である栂さんでさえ雪の小桜平やゴマ平は行ったことがないと言っていた。というわけで、今回欲しかった情報を整理すると、

①山小屋の状態：今年は特に雪が多かったので小屋が埋まっていて入れないことも考えられた。また逆にどの程度の人出なのかわからないので、小屋が満員の場合に備えてテントが必要か否か。

②頂上部の雪面の状態：大汝からお花松原への下りなどでアイゼンが必要か否か。

③美女坂の状態：標高はともかく急峻なので雪の付き方次第ではかなり危険な場合も考えられた。

結局アイゼンは持っていったが、テントは持っていかなかった。そして実際に必要だったのはアイゼンではなくて、テントだった。万一小屋が満員なら座ってでも寝ればいいという安易な気持ちからで、雪に埋まっている心配は実は出発してから思いついたものだ。初日はスキー場の上を出発した時から雪の上を歩き、奥長倉の小屋は冬期の出入り口がちょうど雪面の高さにあってすんなりと入ることができた。客は自分たちだけ。畳や毛布もあって快適に過ごすことができた。しかし細い尾根の上のこの小屋でさえ頭が少し出ている

程度である。小桜平はどうなっているだろうか。今頃心配しても遅いのだが、小屋が埋まっていたらそのまま下りてしまうしかないということで落ち着いた。この時点でゴマ平回りはほとんど諦めた。小桜なら下りる元気はあるけれどゴマが埋まっていたらシャレにならない。

２日目、小屋を出ると美女坂が険悪に聳えている。左の丸石谷側は絶壁なので右の目附谷側の斜面を絡みながら登る。雪の多いのが幸いしてルートは楽に取ることができた。右の斜面も急激に目附谷に落ちていっているので固ければ怖いところだ。念のためアイゼンを付けている者もいたが、十分に柔らかだった。美女坂の上から四塚山までは野球ができるほど広い雪原を勝手気ままに歩いた。上から５、６人のスキーのパーティーが滑り降りてきた。四塚山を登り切ったときはかなり消耗していて②案はやはり無謀だと思った。七倉山を従えて聳える大汝峰は畏敬の念を覚えるほど立派だった。今回の最高地点七倉山から飽きるほど大汝峰を眺めてから、きびすを返して下りにかかる。２週間前くらいに下で降った冷たい雨が山では雪だったようで、例年より雪が柔らかいうえに日差しですっかりくさった雪面はワカンが要るくらい足が潜った。栂夫人などは首まで潜っていた。アイゼンは結局使うことはなかった。下りでは皆すっかり元気になり、小桜平に向かって我先にと下っていった。

小桜平の手前の樅が丘の辺りから双眼鏡で小屋を探すが、それらしい物は見あたらない。自分自身学生時代以来来ていないので、小屋が平のどの辺にあったか全然覚えていない。頼りの栂さんも栃尾もはっきりしない。地形図の小屋の位置を頼りに、三段になった平をくまなく探したけれどわからず仕舞い。「小屋の位置くらい柱を立ててわかるようにしとけよ 」と捨てぜりふをはいて即下りにかかった。テントを張れば最高のロケーションだった。不幸中の幸いは雪が多くて登山口までほとんど足下を気にせずに下ることができたことだ。結局この日の行動時間は１１時間３２分。閉鎖されている山崎旅館の倉庫を借りて、一夜のしとねを確保した。

登山データ
平成１２年５月４日～６日
メンバー：栂（１９期）、栃尾、深田（以上２０期）、栂（２１期）、竹田　以上５名
行動記録

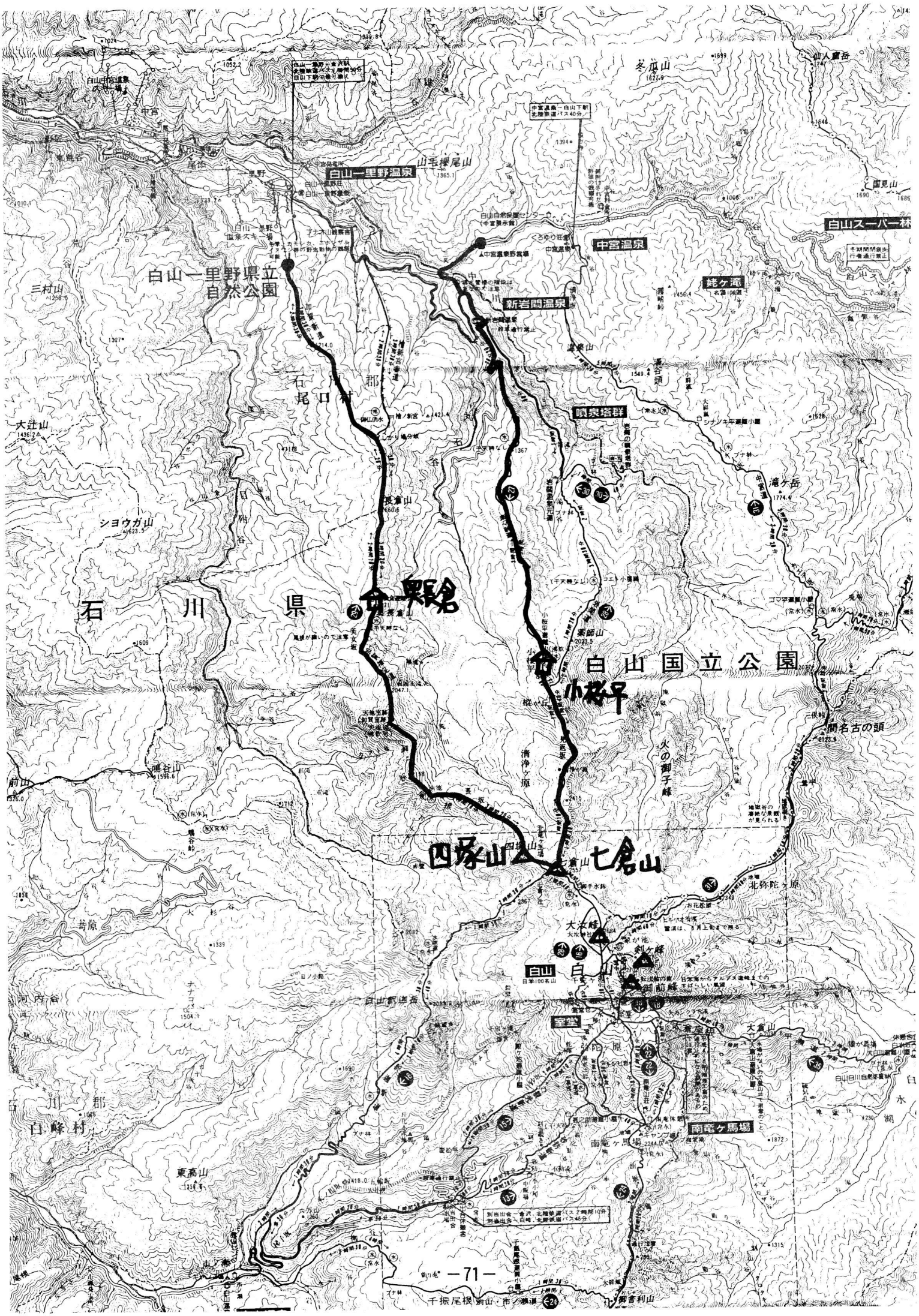
４日　金沢＝＝＝一里野温泉スキー場＝＝＝ｺﾞﾝﾄﾞﾗ山頂駅－－－奥長倉小屋
8:00　9:20　9:45　9:55　9:55　14:50

５日　奥長倉小屋－－－美女坂上－－－天池－－－四塚山－－－七倉山－－－
6:28　7:45　8:18　8:40　11:28　12:07　12:20

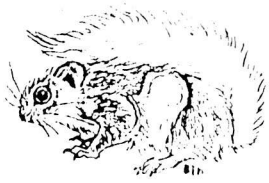
小桜平－－－登山口－－－山崎旅館
15:00　17:35　18:00

６日　山崎旅館－－－鉄管路上－－－中宮レストハウス＝＝＝中宮温泉＝＝＝金沢
7:55　8:10　8:47

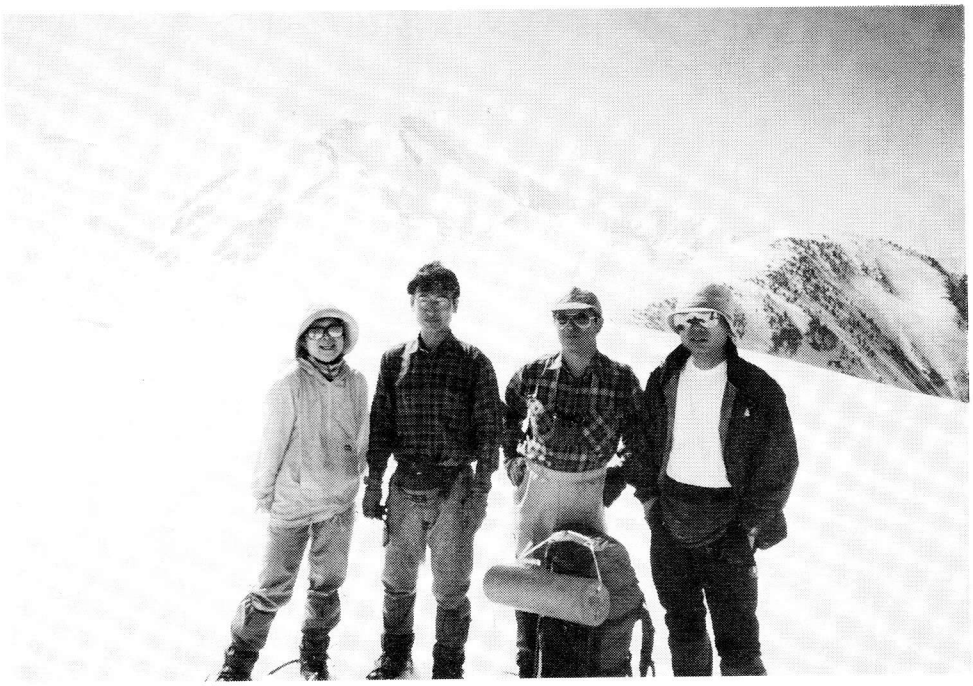
＊スキー場と中宮レストハウスに車をとめる。
＊早朝でも中宮温泉のくろゆり荘には入浴できた。


白山一里野温泉
中宮温泉
新岩間温泉
噴泉塔群
姥ケ滝
白山スーパー林
白山一里野県立自然公園
石川県
白山国立公園
黒倉
小桜平
四塚山
七倉山
白山
別当出合
南竜ケ馬場
室堂
千振尾根
御舎利山

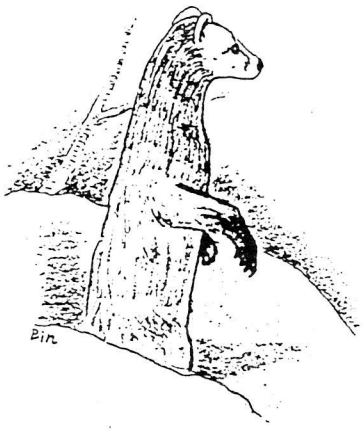
【奥長倉小屋】
栃尾（20期）竹田　深田（20期）栂（19期）



モモンガ



【天池付近からの白山】
栂（21期）竹田　深田（20期）栃尾（20期）



テン

山便り

10期　木津　治男

2000/06/07

６月４日（日）僧ヶ岳へ登ってきました。最高の日和で、気持ちのいい登山を久しぶりに満喫してきました。

*

奥名さんの数々のメールに煽られたというわけではないのですが、小生の登山への気持ちをずっと繋いでいただいたという点では大いに感謝しております。

*

小生のかみさんが（のり子という名前です）、３人の子供達に手が掛からなくなり、休日の過ごし方にも変化が出始めたこの５月のことでした。近所の山好きの奥さんに誘われ、「ちょっと山に行って来る。」と言って、いきなりゴム長に手っ甲もどきのスッパッツ代用品を持って、金剛堂山に登ってきました。
この、元ワンゲルの亭主を差し置いてと、思いましたが、結婚前に長崎から北アルプス槍穂縦走をガイドして以来、その後富山へ帰って１８年になりますが、子供達がまだ幼少の頃には遊園地代わりに、医王山、牛岳、白木峰、薬師岳へ連れていったきりでした。

この１０数年登山らしいものからは一切遠ざかっていた、ぐうたら亭主の沽券（一応、元山岳部～ワンダラー）というものは、元よりとおの昔に雲散霧消してしまっております。

*

６月に入って、また、件の町内の奥さんに誘われたらしく、「今度の日曜日僧ヶ岳へ登ってみない？」とかみさんから誘われました。このところ心の臓の病かと思われるほど動悸・息切れが自覚症状となってきていた小生としては、健康診断代わりにこの誘いに乗ることにしました。ジョギングどころか散歩もせず、完璧なパソコンおタクの１０年を過ごしてきた５０男にいきなり僧ヶ岳は殆ど自殺行為にも思えたものです。しかし、この機会を逃がしては一生登山とは縁が切れるような気がしての一大決心でした。しかも、僧ヶ岳は初めてでしたので、地図や磁石や山の道具をと家捜し始めた亭主に向かい、かみさんの一言、「あなた、カメラ一つでいいわよ」でした。
リーダー役の近所の奥さんはこの２～３年身体の健康とかで山登りを始められたわけですが、こちらも二人の息子さんを社会に送り出して、ご亭主と二人でアウトドアを始められたわけです。これも、奥さんがかってにフィーバーで、体力的限界のご亭主を置いて、さる登山グループに入り、かなりの登山経験を積まれたらしいのです。「もう僧ヶ岳には何回も登っているから大丈夫、帰り道の温泉を楽しみに付いてこられ」というわけです。

*

日曜日早朝、コンビニに立ち寄り、おにぎりと、５００mlのペットボトル数本（一人３本ずつ）を調達し、魚津ー片貝川上流の登山口を目指しました。コースタイムは次の通り。

*

7：35　東又登山口出発、初めからすごい登り、いっきに直登で小生の心臓はバクバクいい呼吸はふーふーだった。生まれて初めて「ふーふー」を経験した。息が切れた状態を、「ふーふー言う」と表現する事は知識では知っていたが、初めて体験した。学生時代はどんなきつい登山でも呼吸はつねに「はーはー」であった。これが、３０分間のワンピッチの間ずっと口先をまるめて「ふーふー」であったのだ。どうしても、口を大きく開けて「はーはー」という呼吸が出来なかった。何故だか解らないが、２ピッチ目以降は「はーはー」という息が出来た。
そして、１時間も歩き稜線に取っつくころには残雪も目立ち始め雪上を歩き出すと、身体はもう宙を走っていたようだ。それまで、二人のご婦人のお尻ばかりパチパチ撮影していたのが、雪になったら急に走り出していた。そして、初めて前に先回りして撮ることが出来た。

9：50　前衛峰の成谷山（1600m）にとりつく

10：50　僧ヶ岳頂上

13：30　登山口へ無事下山

背景の山は、毛勝岳、　花々は、いわかがみ・いわうちわ・かたくり・たむしば・しらねあおい等同行のご婦人方は、２ｄパックにデイパック、そして小生はハーフデイパックに愛用のＫ１ＳＳと標準と望遠ズームを２本、それとレーンスーツのみの軽装備でありました。撮影タイムなしなので、花々を撮るときはちょっと苦しかった、三脚無しの接写なのでまるで、バイアスロン競技をやっているようなものでした。一応、ご一行様は人様にお見せするようなものではないのですが、僧ヶ岳頂上のスナップをお見せします。左が小生、中央がわが妻、のり子、右がリーダーのあつ子さん、の３名でした。久しぶりのきつい登山でしたが、気分良く登山の醍醐味を満喫できた僧ヶ岳ではありました。

山便り

11期　青柳　健二

FROM: KENAOYAGI@aol.com
SUB: 尾瀬で水芭蕉ウォッチング
青柳です。

突然思い立って、水芭蕉の尾瀬へ行ってきた。
９日の金曜に休みがとれて、９－１０日の一泊二日。

ところが、梅雨入りと重なって、雨の出発。
予約があるし、サラリーマンの山行きのつらさで強行。

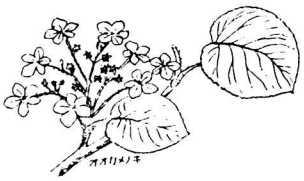
トレーニングの意味も込めたので、福島の御池側から
尾瀬ガ原へ入った。
これが失敗なのか成功なのか、残雪一杯の中を雨に
濡れて歩くことになった。

今年は、春にタップリ雪がふり、例年より２週間遅れで、
水芭蕉の盛期だった。
温泉小屋付近から、水芭蕉が迎えてくれた。
雨の中、霧に霞んだ水辺に咲く水芭蕉。
正に「水の妖精」の名のとおり、幻想的風景に、
疲れが吹っ飛んだ。

東電小屋に泊まる。
そんなに混んでいなかったのに、しっかり
８畳間に８人詰め込まれ寝させられた。
山小屋は、１畳１人のルールを守ることが
サービスと心得ているのだろう。

１０日は、曇り。尾瀬ヶ原を水芭蕉ウォッチング。
下田代、中田代、見晴、とほぼ半周。
カッコウ、ウグイス、ホウアカ、その他モロモロの
鳥たちの合唱を聞き、カメラと双眼鏡をぶら下げ、
人の２倍の時をかけて、尾瀬を楽しんだ。
惜しむらくは、至仏岳と燧9岳が全容を見せて
くれなかったこと。

水芭蕉、ザゼンソウ、リュウキンカ、ショウジョウバカマ、
ヒメイチゲ、ミヤマスミレ、ワタズ9ˆの可憐な花々と
ミネサクラ、タムシバ、オオカメノキ、そしてアズマシャクナゲ、
ムラサキヤシオツツジの鮮やかな色合い。
ブナと白樺の新緑の中、たっぷりの花巡りだった。



帰りは、平滑の滝と三条の滝を巡って御池に戻った。
尾瀬の水を一気に１００M落とす、三条の滝は、その
水量の多さに迫力満点。
滝の展望台までの急斜面の下降で、高所恐怖症の病を
浮かび上がらせたご褒美としても大満足できるものだった。

車の単独行の最大の弱点は、山から降りても、達成感と
疲労をいやす、最良の飲料ビールが飲めないこと。
上半身だけ着替えて疲れた体にムチ打って、それから
たっぷり５時間かけて自宅まで戻ったのだった。

デジカメ、スキャナがないので、折角の写真もお見せできません。
絵葉書みたいに、青空と明るい山容の元での水芭蕉は見れなかった
が、またの楽しみを残しての山歩きとなった。
次は、梅雨入り前に、水芭蕉の満開となる年に行こう。

さて、８月の白山に向けてのトレーニングは成果があった。
濡れた木道の上でシッカリ転んで、ひざを擦りむき、バランス
の大切さも再確認。
７月にもう一山どこか登って、また絶好調で入りますから、
宜しく。

２０００．６．１１
花の写真集で、花の名前を覚えながら。
ＫＵＷＶ１１　青柳でした。

山便り

100m級低山紀行　15期　奥名　正啓

猿山　標高　３３３ｍ

猿山は能登半島門前にあり、山よりもその断崖絶壁のほうが遙かに景観としては素晴らしい。能登の山は総じて高い山はないものの、あまり人の垢にまみれていないせいか少し山にはいっただけで、かなり山奥へ入り込んだ気分がする。富来町のヤセの断崖や能登金剛にくらべると、はるかに人の気配の少ない孤絶した地域である。
右写真の三角点には頂上の標識が倒れている。そこには３５３ｍとかかれているように見える。左絵には３３２ｍ。そのほかのガイドブックには３３３ｍなどとなっている。いづれにしろ大差はない。この三角点は道沿いにはなく、少しばかりヤブのなかに踏み込まなくてはならない。そこまで行っても見晴らしがいいわけでもない。

****

春先に花開く代表的な花。それがキクザキイチゲ（左）と雪割草（右）である。

キクザキイチゲはおおがらでその花の白さもすてきだ。時に薄紫色の花もあり、こちらは高貴な雰囲気がしてなお素晴らしい。

猿山の代表は何と言っても雪割草の群生であろう。この雪割草という名前は春先に真っ先に雪を割って花を付けることから呼ばれているが、本当のユキワリソウ（カタカナで表記しているところに注意）とは全く違う。いわばあだ名のようなもので、正式にはミスミソウあるいはスハマソウと言う。近年甚だしく盗掘にあい、相当数が持ち出された。その際、紫色や赤の濃い色合いのものがとられ、白い花ばかりが残っている。

****

猿山の断崖絶壁は岩だけではなく、カシワ、エノキ、ケヤキなどの樹木が生えている。しかし、それらは海からの強風にさらされてあまり高くはのびず、盆栽の枝のようにグネグネと枝をひろげている。

深見の部落から急な坂道を登りきったあたりに東屋があり、遠く猿山灯台がのぞめる。振り返って後ろには富来の高爪山が姿の良いシルエットをみせている。

下をのぞくと、高所恐怖症の人は足がすくむほど垂直に近い絶壁である。

ＯＢ一言通信

＊松尾　秀邦　　元顧問

やまざと12号拝受。14頁のベルクハイム庭にある”愁心”の文字に30年近く前になるＷＶ部唯一の遭難死を思い出しました。碑に”愁心”を書いてくれと頼まれましたが、筆は小学生以来持ったことがないので、幾度か清書して提出した次第です。当時のキャプテンは小西君だったと思いますが。

遭難地に建てられてから一度訪ねたきりでしたが、ベルクハイムの庭に安置されているのを見て安心すると同時に、逝った徳島出身の桂君の家族の方々を思い出します。ボケ老人の戯言です。

＊田村　昭夫　　０期

Ｍ１－Ｍ４・・Ｍｎ　皆出席予定。

＊高田　昌嗣　　４期

やまざと12号ありがとうございました。先に連絡した通り、１月中旬に東京を引き払って故郷の久留米に帰ってきました。住所の山本町が示す様に、家から５分も歩くと耳納山脈の登りが始まる田舎です。目下引っ越し荷物の整理に追われていますが、一段落したらハイキング程度から徐々に山歩きに復帰する予定です。

鈴木正國君（４期）の訃報は驚きでした。田村さんより電話で連絡を受けましたが、都合がつかず、葬儀にも出席できませんでした。思えば1994年８月にチェコで開催される学会への出席途中で、駐在中のオランダへ立ち寄ってくれアムステルダム近郊を案内したのが彼に会った最後でした。冥福をお祈りします。

編集後記の舟田さんの一文は多くの問題を提言していると思います。本人の意志確認はやはり必要でしょう。自分はせめてお荷物とならない様にしたいと思います。よろしく。

＊白井　勇　　９期

前略　会報12号お送りいただきありがとうございます。森島先輩の『鈴鹿セブンマウンテン制覇』楽しく拝読させていただきました。鈴鹿の山も最近、ゴルフ場から眺めることが多くなってきたことを反省しています。四季を通じて楽しめる山です。10期の寺本君、11期の森川君がご案内させていただきますので、是非お出掛け下さい。小生は山麓の温泉でご一緒させていただきます。

＊高田　和守　　11期

卒業後30年が経ち、三人の子供達（男ばっかし）も巣立ち、家には夫婦と犬（名前は元太雄のミニダックス）と云う生活でしたが、次男が離れに居を構え、孫二人（男と女）が生活を変えてくれました。

最近の愛唱歌は「孫」。仕事がら出歩くことが多いのですが、帰ると孫を相手にと思っても、当の孫はそれ程でもなく、拍子抜け。まだの方は早く持ってみて下さい。かわいいですよ。

＊近藤　正興　　12期

大変ご無沙汰いたしております。ＯＢ会報「やまざと」12号読ませていただきます。たいへん遅れてますが、住所変更を連絡しておきます。

＊辰野　隆義　　13期

スキー合宿参加させていただきます。春の小屋作業の打ち合せは後日やりましょう。荷物が多くなるかもしれませんが、15期の皆様の若さに期待しております。

＊仁藤　早苗　　14期

三重では養鶏や養豚をしていた夫も、やはり牛をやりたい、しかもフリーストールで飼い、ミルキングパーラーで搾乳するのでなく、一頭一頭搾乳している大田原でやりたいと、二年間いた三重を後にして、２月中旬引っ越しました。三重にいた時は、喜久子や外茂子などと会おうと云ってたけど、結局子供のことや親のことで頭が忙しくなり実現しなかったね。桑名の人とも会えなかった。

大田原の憂しはとてもおだやかで、モーとなく声を聞いたことがないです。村人は30人位、うち若い人が10人いて、とても元気で自由でのびのびとしていて村の雰囲気を作っています。私は子供25人と大人の食事づくりをしています。昨日は我が子光太郎の希望で、日光の霧降アイスアリーナー（屋外）でスケートを楽しみました。では又、会いましょう。

＊三宅　毅　　15期

また東京で一人暮らしです。

＊椿川　利弘　　18期

春の小屋酒場と登山道整備には参加しようと思っていますが、「マルチトレーニングin倉谷」とは、トレーニングをするのですか。また、５月12日（金）の平日としているのはなぜですか。でも一応参加にしておきます。

８月の白山登山については、カナダに行く予定とダブラなければ、参加したいと思っています。

＊竹中　敏　　21期

「シェルパのふるさとを訪ねて」届きました。ありがとうございました。とても感激しました。トレッキングいつか行きたいなと本だけは買ったのですが、ぼくにとっては夢みたいなものです。

チベットやダライラマの本は興味があって、結構本を読みました。実際にその世界をじかに見たことはないのですが、おおらかな感じが好きです。

ちょうど５年前の３月に見たテレビが今でも忘れられません。ヒマラヤ山麓の小さな村で行われたカーラチャクラという法要の様子を伝えるドキュメンタリーでした。

法要の初めに砂曼陀羅を描くのです。２ｍ四方くらいの板の上に何色もの砂を使って、信じられないくらい緻密で極彩色の絵を描くのです。一番初めにダライラマが下絵の線を引き、その後僧侶達が下絵にそっていろんな色の砂を落としていって、やがて曼陀羅となるのです。出来上がるのに２～３日かかっていたと思います。そして法要が始まり、遥々遠くから何日もかけて集まった人達が拝んだり、ダライラマの説話を聞いたりして過ごすのです。

何日か過ぎてカーラチャクラの最終日、砂曼陀羅は棒で掻き混ぜられて、あっけなく一瞬でただの一色の砂になってしまいました。僧侶達はその砂を外に持ち出し、ヒマラヤの万年雪と氷河から融けだす川にサラサラと流すのです。あの場面の白い峰と、青い空と、ほとばしる川にキラキラと帰って行く砂の光が、今でも目に焼き付いています。エンヤのシェパードムーンという曲がバックに流れていました。

あんなきれいなテレビは他に見たことがありません。

テレビや本より、実際にその場へ行って見る方がずっといいと思います。

＊荒戸　美雅　　25期

2005年　愛知万博が瀬戸　海上の森で開催されることになっていますが、地元では様々な意見交換がされています。

住民の環境に対する意識の高まりに、今までの役所の進め方、コンセンサスのとり方では対応できなくなっているようです。

会場候補地を歩いてみると、どうしてこんな所にというのが、私の実感です。大阪がオリンピックを開催したいと考えている所は湾岸エリアで、こちらの方が妥当と思われます。

身の回りにも様々なギャップが出ている中で、子供の育て方、社会との関わり方、仕事の仕方などを考えています。

＊福田　武・由佳　　37期

ＯＢ会費（５年分×２人分＝２万円）を振込しました。今までの滞納、大変申し訳ありませんでした。ＯＢ会費滞納にも関わらず、「やまざと」に住所変更など掲載していただきましたこと、大変恐縮しております。

やまざとを読む度、山へ行きたくなります。これからも楽しみにしております。

＊西田　秀輝　　39期

会費の納入が遅れまして申し訳ありません。「やまざと」の発刊をはじめ、事務局の方々には様々の御配慮を頂き頭があがりません。金沢を離れてはや２年になる私にとって、「やまざと」は、金沢と大学時代を思い出させてくれ、元気がわいてきます。これからもよろしくお願いします。

最近はゲレンデスキーに没頭しつつも、晴れた空に浮かび上がる雪山を見ていると、無性に登りたいと思う時があります。ワンゲルの血の恐ろしさ（？）を感じるこの頃です。

振込票通信欄から

＊藤森　忠夫　　18期

98年11月からマレーシアへ単身赴任中。

＊佐藤　かおり　　33期

毎回やまざとありがとうございます。

私事ですが、昨年結婚し、新婚旅行は、イースター島、そしてアコンカグア（6962m）登山をしてきました。相手は福井工大ワンゲルで、（10数年前）に合ワンで一緒に竜王岳へ登った人です。

＊宮崎　耕輔　　35期

いつもお世話になっております。結婚をしまして、住所が変わりましたので、よろしくお願いします。

03期西尾.txt

３期の西尾です。いつも、ＯＢ通信有難うございます。

昨年１２月に会社を卒業して、今は、次の人生の行き方の可能性を探るべく、いろいろと、左手でジャブをだしながら、その反応を確認しております。

　宮仕えはもう沢山だ、時間に縛られたくはない、人からノルマを与えられるのも嫌だ。
自分で考え、自分の責任で時間と仕事をコントロール出来る、自営業であれば、気力と体力の続く限り、７０歳・８０歳になってもやれる。

などと考えて動き回っておりますと、結構忙しい毎日です。

03期登内.txt

ホームページ拝見致しました。
最近は老老介護で両親の面倒を見るために中央線「あずさ」と或は高速バス又は車で信州・伊那まで往復し途中の景色を楽しんでいます。雪の降る小淵沢から見る甲斐駒とか立科からの浅間とか楽しんでおりますが、どうも時間が無くてともう一つ体力に自信が無くトレーニングは専ら内臓に限ってしまっています。こちらの方は毎日欠かさず頑張っています。
本日の朝日新聞にはアルツハイマーにはアルコールに強い人は１．６倍とかの記事があり心強く頑張ろうとしています。
楽しいページ有難う御座いました。
現在は琵琶湖の第24回鳥人間コンテスト選手権大会の人力飛行機の作製に頑張っております。昨年に引続き出場しますのでご声援お願いします。
「飛びたい野田！空でいい野田！」で飛ばします。
金沢からは金沢工大の夢考房チームが今年も参加するのではと思っています。

04期森島.txt

メールならびにOB 会通信、拝見しました。
元気に冬をたのしんでおられるようで、うれしいことです。こちらは、雪どころですが、まだ雪と戯れるまでには至っていません。

雪との戦いももう終わりですが、その分、春が楽しみです。今年は近くの山から始めて見ようかと思います。

あ、また舟田さんに聞かれたら召集礼状が来るから、秋になってから言わないと・・・・・・

06期石橋.txt

今年は寒い日がおおかったのか、例年より桜の蕾が小さく、北の国ではまた雪のようですね。九州では蕗の薹は１ヶ月以上も前に食卓にのぼりました。そろそろ桜の便りが聞けるのですが、まだ、構内の桜も咲きそうにもありません。
今月４期の高田さんと６期の大崎と小生で会うことにしておりましたが、４月１日より小生がタイ国にでかけるため１ヶ月さきになりそうです。例年タイへは３月に行くのですが、「先立つもの」が狂いました。学生２名、院生１名を連れて、タイ北部の山中です。今は乾期ですが、そろそろ夕方のスコールがやってきます。帰国は３週間後ですのでそのあとにミーテングの報告をいたします。

07期村田.txt

　連休も終わりました。仕事に精を出しましょう。
　この連休は立山スキーの予定を変更し、中国山地第二の高峰？、氷ノ山（１５１０米）へ登って来ました。車道が上までついており、たったの１時間半で頂上に着いてしまいました。我々は長靴で、他の多くの登山者は登山靴にスパッツを付けていました。あまりのあっけなさに、向いに見える鉢伏山にも登って来ました。色んな花々のも出会え、特に清流の中の梅花藻は絶品でした。これからは、こちらも新緑の季節、楽しみです。

08期篠島.txt

この度、自宅にもＥメールをいれました。
５月連休は四国の石ずち山に登ろうと準備していたら、まだ雪が多く装備に注意してほしいとの地元役場の話、嫁さんと一緒では止める事に決め、山陰のさんべ山に切り替え４・３０に登頂、久しぶりにカルデラのハッキリした山を見てきました。
　このあと、神戸に帰ってからは、初めて北六甲の丹生山に登り、六甲とは違う自然の豊富さを味わい、この連休は山三昧でした。
　それにしても、うちの嫁さんはよく付き合ってくれるものだ、と我ながら関心しています。

09期清水.txt

清水一の家の者清水あつ子ともうします。旧姓鈴木あつこです。
　４年のとき退部したので会員ではないのですが、奥名くんの顔はなんとなくおぼえているような気がします。わたくしの顔は覚えておいでですか？多分おぼえてはいないでしょうね。いろいろな通信物から大島会長はじめ皆さんのご努力すごいなーといつも感心しているしだいです。
　わたくし個人的にはここ２８年ぐらい山にはいっていません。でも、いつか倉谷の山小屋に行ってみたいものだと、思っております。ここ千葉は、やはりあたっかいです。もう金沢の寒さには耐えられないかもしれません。それでは、どーぞお元気で。 清水あつこ

09期吉田.txt

この　添付・「ただに血を盛る・四高南下軍」ちょっと　変じゃないですか？
http://www.mahoroba.ne.jp
この連休は　ヘルニア発症後15ヶ月、沈静化に向かい、初めて　七本槍のしづヶ岳　近くの余呉・菅山寺へ　向かいました。
　余呉湖で羽衣を隠され、漁師の妻になった天女が生んだ子供が、菅原道真で　6歳に　入門したのが、菅山寺と　いわれのある寺です。今回　下見、次回　登頂の予定です。こんな情けない内容でなく、早く　北ア・南ア・白山へ行きたいものです。

10期木津.txt

先頃より、メールの数々ありがとうございます。
このところ、といっても、ここ５年ほどアウトドア活動は開店休業状態です。子供達を連れて、今頃の春の低山歩きを楽しんでいたのは１０年前のことです。小学生だった子供達にゴム長をはかせ、かたくしまった雪の牛岳、医王山、白木峰等を歩いたのをつい昨日のように思い出します。このところ、子供達のスポーツイベント（バスケットボール／中学・高校陸上駅伝大会）、また私たち夫婦で楽しんでいるフレッシュテニスという室内レクレーションスポーツで休日の過ごし方が決まっていました。
　３人のうち、長女と長男は社会人、末の次男は今年進学し箱根駅伝を目指します。今、お世話しているフレッシュテニスというスポーツも高岡市の連盟の１０周年記念行事がこの４月に終わったら、小生も第一線を引かせてもらい、休日の過ごし方を再考しなければと思いつつ、夫婦してそろそろ山歩きを再開しようかと話したりしています。
　この１０年のフレッシュテニス記念誌発行のための写真探しをしていたら、なつかしい金大ワンゲル２５周年白山登山の時の集合写真の数々がでてきました。先頃不慮の事故で亡くなった大出君一家の写真もありました。当時の参加者には、なつかしい思い出ともなるでしょうから、画像をメールに添付して送ってみます。ＪＰＧファイルに圧縮してありますので多少画質が落ちているかもしれません。大きなサイズのものがご入り用ならメールを頂ければ個別にお送りいたします。
　節子様によろしく。

11期青柳.txt

春の倉谷・小屋酒場は盛況のようですね。
高三郎の石楠花もあたり年とのこと。
元気があると楽しみが多くて結構なことです。

さて、当方は、５連休と連休明けの激務疲れで、ぐったりしてます。金融関係は、連休明けは大忙しなのです。そして、関西方面への純粋に仕事の出張があって、大変だったのです。

　連休は、前半ちょっと信州で遊んできました。女房殿の麻績村（聖高原）の別宅を基地に、ドライブと春スキーを楽しんだのです。セッチャんのヒマラヤ紀行と水戸の先輩・桑名の同輩に触発されてのもので、今春の残雪の多さがそうさせたのです。

ドライブでは、３日に、軽井沢一浅間一万座一志賀と高原ルートを走って見ました。コブシの花咲く軽井沢から、唐松の芽吹く浅間高原、万座温泉からは、雪の回廊を通って今だスキー天国の志賀の渋峠まで、一気に走り抜き、快適・快適！！５００Ｍから２０００Ｍまでの標高差が作り出す、春の移ろいの面白さを満喫しました。

４日は、八方尾根まで、日帰りスキー。
９時から５時まで、またまた足がつるまで滑りこんでしまった。兎平から上部が、全面滑走可能。やはり、山岳スキーの趣を持つ八方の春スキーはまた、快適・快適！！白馬三山は、午前中雲の中だったが、午後には顔を出し、絶景を楽しませてくれた。

ただ、当日は風が強く、オリンピック９８の男子滑降スタート地点にいたる最上部のリフトは、１１時ころでストップし、スキーは、兎平・黒菱のコブコブ斜面でのゲレンデスキーとなった。３月の志賀で、コブ克服のキッカケを掴んでいたので、午後はもっぱらコブの練習。でも、兎平のコブはきつい。我がカービングは、かのモーグル金メダリスト里谷多恵 チャンも愛用のものだが、乗る人が違えば結果は異なることを再体験した。

でも、本来の山スキーの楽しさは、味わえなかったのが残念。やはり、立山・月山そして八甲田、さらには白山。日帰りスキーではなく、時間をかけて、自分の足で歩いて登って、滑らにゃだめだな。来年は、桑名のオジサンの誘いに乗ってみようか。

５日は、麻績の家の庭の草取りやら、凍結防止をしていた水道の調節やら、本来の仕事をしたあと、麻績村から大岡村まで、北アルプス展望ドライブを楽しむ。大岡村は、日本一のアルプス展望の里。まだ桜の花が残った、安曇野の対岸の村からの残雪のアルプスは、それは見事。絵になります。
　常念から白馬に繋がる見事な景観をタップリ楽しむ幸せに浸りました。

幸多ければ、苦も多し。３時過ぎに帰宅の途についたが、渋滞は想像以上。高速に乗って１５分で渋滞となる。思い切って高速を降りて、国道を走ったのだが、国道でも渋滞も憂き目にあった。帰宅は深夜の１時。実に１０時間の苦痛のドライブを強いられたのでした。

そして、連休最後の７日は、法事があって、１時間近くの正座を強いられたのでした。八方のコブ斜面での転倒の後遺症もあり、我輩の足腰はもうメタメタです。

今時の日本の首都圏のサラリーマンの連休は、かように楽しみを得れば、苦行も倍になって帰ってくるのが常であります。今時は、地方都市なかんずく信州・北陸方面にお住まいの方は、それだけで幸せであることを、噛み締めてほしいものです。

でもどこに住んでも、楽しみを求めなくっちゃ生きている意味はない。スキーは、倉庫にしまって、車もタイヤを交換し、夏モードの遊びを考えよう。

今年の８月の白山はよさそうですね。気持ちが動いて来ています。就職活動中の長女と問題の１７歳で受験生である長男の動向の見極めが必要ですが。

11期上村.txt

私は連休中は故郷の高鷲村で過ごしました。今年は'96以来久しぶりに５月連休が桜の季節となり、高鷲村の沿道の桜を楽しみました。高鷲村の北の荘川村の荘川桜はまだでしたが、南の白鳥町ではもう散ってしまいました。

高鷲村では仲間達と恒例の水芭蕉祭りの物品販売の手伝いでした。無料メールアドレス、デジタル工房（デジカメ写真をＴシャツにプリント、プリクラ）、湿原保護ボランティア（アンケート、絵はがき販売による寄付集め）、ひるがの良いところツアーが我々の商品です。たこやき、焼きそばなどと違い、関心を示す人は少なく、訪れるのは地元の知人がほとんどでした。無料メール加入者は我々の店を手伝ってくれた大学の先生とＯＬの２名だけという淋しい状況でした。
　今年の観光客の入りは去年に比べて大幅ダウンでした。湿原植物園入場者は300人と去年の1/10、交通整理の人によれば1/3とのことでした。やはり高速の影響でしょう。今年は荘川まで延長されたため、高鷲村は通過地点になってしまったのでしょう。磐越など、他の自動車道で起こっていた現象も、目前にして初めて実感したという次第です。高鷲村も観光産業の地盤沈下を想定した施策が必要になってきたように思います。

　白鳥町役場の情報化担当の方ともゆっくり話す機会がありました。白鳥町にはソフトピアブランチとしての拠点整備とデジタルＴＶ共用のインフラ整備を実現したいとのことでしす。しかしながら、その熱い思いを上に伝えるのは先進的な白鳥町でも難しいようです。自分の言葉でなく、地域活性化に実績のあるシンクタンクの報告書として提出してもらう手も考えているとのことでした。
　高鷲村では今年春まで、県から補助金を２００万円もらってリゾートオフィス計画の調査をやっていましたが、白鳥町がその拠点として機能し、高鷲村だけでなく福井県和泉村にまでリゾートオフィスをということは夢ではなくなる時が来るように思います。

　高鷲村にはこの秋、サービスエリアが開設されます。そこの専務（３セクなので、社長は村長です）ともゆっくり話す機会がありました。ここでは、①メールで連絡できない業者とは取り引きしない②成績の芳しくない下位５つの業者は新しい業者と入れ替えるとの方針を打ち出すそうです。それぞれ、今から始める事業は全て情報化を前提にする、競争原理を導入して活性化し、サービスエリアと業者の癒着をなくし、すこしでも安価にお客に提供することが主旨だとのことです。ここではＴＶカメラを設置して白山や高速の映像をＮＨＫに提供するために、光ファイバを設置するとのことです。電力会社の回線を使い、役場にも接続することで、地域情報化の布石にしたいとのことです。
　人材の乏しい高鷲村ですが、このような計画が立案できるのは、ダイナランドスキー場のリストラでスキー場経営に携わっていた村となじみのある外部の人材が得られたからです。人材をオープンにする最高の事例のように思いました。
　東海北陸道が完成し、サービスエリアができたら是非ここに寄って下さいね。

11期加藤.txt

今年は、曜日が良くて
皆様、いろいろなところへお出かけになったようですネ。

私は、5/1，5/2、5/6 と真面目に勤務させていただきました。特筆すべきは、通勤には苦労せず、日頃、満員の電車もゆっくり座りることが出来ました。

難を言えば、周辺が連休というので気分的に、先生も生徒も燃えていなかったということでしょうか。

連休でお疲れの方々、ご苦労さまでした。ハイ

11期森川.txt

５月、旅行には一番良い季節です。
つえを持って５／４～６立山地獄谷温泉療養に行ってきました。

５／４朝一番の「しらさぎ」に乗り、のどかな富山地鉄に揺られて１２時３０頃立山駅着。室堂行き直通バスはもう終了しており、ケーブルの順番を２時間半待つ。食事をしても時間があるので、そう言えば小山さんが昨年話ていたのを思い出して立山カルデラ砂防博物館を見学。なかなか面白い。立山カルデラが加賀藩の領地だったのは初めて知った。また、立山温泉が昭和４４年の大雨でなくなった事も。ちょうどその時、白山の別山にいたのを思い出した。（別山でただ一度雨に降られた時だ。１３期の雨男（大島君）と雨女（あつ子嬢）のせいで）昨年乗れなかったゴンドラで美女平へ。そして室堂着１６時半。快晴です。（午前中はガスッていたとの事。）そこで観光客に早変わりして、「雪の大谷」散策。剣、大日がいい。雷鳥荘について、温泉に入り、大日に沈む夕日を見る。雲がないので、夕焼けの色はイマイチ。雄山の色も薄いピンク。

５／６快晴。
一の越まで歩いて、御山谷滑走。あたたかい。スキー服はいらない。昇りもスキーもシャツ１枚でＯＫ。最初は快調だが、中ほどから雪質が悪い。それでも、今年は雪が多い。御山谷は黒部湖湖畔まで雪がびっしり。黒部湖まで１時間半歩くが今年は雪道。去年より歩き易い。ロープウェイを１時間程待って（昨年は確か３時間ほど待ったが）室堂へ時間があるので弥陀ガ原

まで白山を見に行くが全然見えず。雪質も悪い。バスで室堂へ戻り、宿へ。宿の手前で昨年と同じように雷鳥の御出迎えを受ける。昨日と同じような雲ひとつない夕焼けを見る。

５／７曇り後晴
一の越まで歩いて、御山谷滑走。今日は少し風が強い。ひと滑りした時、東一の越へ行く人が目に入り、つられて行くことにする。今年は雪が多いので、半分程斜滑降で滑って、後２０分程歩く。スキー靴のため、歩きにくく少しあぶないトラバースである。東一の越からは上部はかなり急斜面である。急斜面が終ったら雪が柔らかくかえって悪戦苦闘。暑い、板は雪の中に１０ｃｍ程もぐるし・・・・（なぜタンボ沢と言われるのかが分かった）黒部湖までの予定が黒部平（ロープウェイの駅）でギブアップ。小山ガイドの言うとうり！！！御山谷は最高。この時だけは、小山さんの偉大さを感じた。来年は是非御一緒願いたい。後は扇沢ー大町経由で帰宅。

２０００年のスキーは快晴の八方で始まり、快晴の立山で終りました。

11期芝田.txt

お天気にめぐらめた連休、皆さんいかがお過ごしですか。

私の場合、９連休にフレックス休み５日を加えると、１６連休にもなったのですが、それはしませんでした。（一時はモロッコ行きを考えたのですが・・・）

その代わり、日帰りで近場を巡っています。

とくに、安曇野はすばらしいです。ちょっとした扇状地状の斜面に果樹園に囲まれて集落があります。リンゴや遅いサクラ、モモの花が咲いて、こいのぼりがあがり、残雪の北アルプスが見えます。藁葺きの農家や白壁は、典型的な日本ですね。

美術館もたくさんできたし、新しいレストランもあります。これらを順番にたずねていると、何日も楽しめます。ヒコーキに乗らなくていいのがうれしいですね。

皆さんは、いかがお過ごしですか？
！

11期長岡.txt

淡い新緑の日々もたちまちに過ぎて，関東の平野部で見る緑はどこも同じ色の季節となりました。立夏を過ぎたここ数日は，本当に初夏のような。小宅近くでは，藤の紫，そして，高貴な感さえ漂わす桐の花。

今年の連休は，本当によいお天気でした。皆様それぞれに，お出かけになったにしろ，ごろ寝にしろ，のどかな日々をお過ごしであったことと思います。小生の場合，短期間ながら北陸での滞在とその往復も爽やかな緑の風光の中を。　松本盆地では桜（ソメイヨシノ）は終わり，高山盆地に入ればちょうど桜の盛り。実家までの幾つもの峠を越すごとに，標高に応じて，桜～コブシにヤマザクラと新緑～新芽が萌え始めた梢の木々～残雪に覆われた笹原と疎林，の繰り返し。ソメイヨシノも，山間部のものは花の付き方が豪勢で，別種かと見まごうばかり。
また，飛騨山間部の随所では，神社仏閣などで目にするしだれ桜がそよぐさまなど，心を洗われるばかりの風光。

ところで，連休の混雑は避けて，これからお出かけの方もあろうかと思いますので，ご参考まで周辺の道路状況などです。なお，残雪期のこと故，日々に状況は変わりますが，悪い方向へは向かわないでしょう。

１．手取川（牛首川）上流域
市ノ瀬までの道は問題なし。行ってみた５月５日は登山者の駐車がかなりでしたが，それでもまだ空きスペースも随分。道路脇には残雪も所々で，普通の年には市ノ瀬あたりでのヤマザクラが満開なのが，今年はまだ。　やはり，春の進行はかなり遅いようです。
以前から有名だった市ノ瀬のミズバショウがちょうど満開でした。（市ノ瀬発電所の手前から南山腹を少し登る：新しい道標あり）　まだ１週間以上は花の見頃が続きそうです。かつての出作り水田跡に，自然に広がったもので，開けた茅原に群生。残雪・水流とミズバショウというイメージを期待される向きには，ちょっと違和感ですが，一面の見事さは，県内随一。花の数などは，大嵐谷など比較になりません。普通はちょっと気付かないものですが，爽やかな甘い香が一面に漂っていました。
余談ながら，快晴の日の昼前にお出かけになれば，目前に聳える別山山頂近くの雪の斜面が陽の光をぎらぎらと反射していて，かつての春山での想いを彷彿とさせるような。

白抜山・鷲走ヶ岳への林道は，昨年から，東二口の集落はずれの家のところで鎖錠されたまま。大変便利な道だったのですが，歩くと１日がかりの山になってしまいました。（下田原谷からの林道が通れれば問題ありませんが，この時期はまだ無理）　もう，開くことは当面ないような気配ですが，小生のように遠方から来て短時間で，という者には大変困ったことです。

白山スーパー林道：道路での掲示によれば（小生の記憶に間違いなければ？），今年の開通は６月５日。この頃にはまだ，三方岩岳山頂一帯は雪がかなりの筈。白雪の白山と，渓間の新緑の対比が見事なことでしょう。

目附谷の林道：一里野からの林道は，スキー場方面への支線分岐のところで鎖錠。開いていたとしても，しばらく先で雪。スキー場方面へはそのまま進めますが，スキー場の尾根に出た先で，雪で前進不可。ここまで進めば，蛇谷を隔てて，大笠山と笈ヶ岳の眺めが見事。スーパー林道の帰りなどに，この地点まで登って，暮れゆく山々を眺めながらのビールの一杯など，１日の山歩きの終わりに相応しい満足感が得られることでしょう。なお，目附谷を大きく廻り込む上記の林道本線に対して，目附谷西支谷のウサギ谷から登って合流する支線の林道は，上

部の林道本線合流点（ここも好展望）までの除雪が終わっています。

白峰の西山南山麓：クロスカントリースキー場の整備が終わって，広々としてしまいました。大道谷から，ここを経てさらに上部に伸び続ける白木越林道沿いでは，白山の展望絶好（加賀室跡～山頂部～三ノ峰までの大展望）の地が出来，写真を撮りに来る人も増えていました。むろん，のんびりと白山を眺めながらの昼食などにも最適。
五十谷の林道：災害復旧で，この夏一杯まで進入禁止となっていました。昔の出作りの地あたりに行けば，白山の展望が見事だったところです。

２．庄川本流の上流域
ここでも春は遅いと感じつつ通過で，御母衣湖脇の荘川桜は未開花。（普通は連休が見頃）まだ，奥では雪ということもありますが，大白川，ブナオ峠，天生峠への道は，鎖錠のまま。

境川ダムへの道（大笠山への登路，４日に遭難がありましたが）は，登山口まで通行可。連休のせいか，この手前のキャンプ地も賑わっていました。
三方岩岳麓の大窪ノ池のミズバショウは見頃，ただし例年ならば周縁のミズナラ疎林の林床を一面に彩るカタクリは，極僅かが開花のみ。緑もほとんど見えずで，やはり，白山周縁全域で，季節の進行は１週間ほど遅いようです。

３．その他，周辺
富山県城端の，縄ヶ池への林道は５月10日まで除雪中。ここのミズバショウは本当に見事で，例年は５月中旬ですが，前述のように遅れるでしょう。近年は有名になったせいで休日大渋滞につき，早朝か夕暮れがお薦め。毎年，連休には開くはずの安房峠（旧道）は，18日から。
有料トンネルが勿体ないと，帰路，野麦峠経由としたところ，問題なく通れるものの，峠は雪で一杯。雪の乗鞍岳眺望は，いつに変わりませんが，峠の整備が一層進んで，前景を含めた被写体とはならなくなってしまったのが残念。ただし，このルートは，連休期が終われば，西側の阿多野郷と野麦での工事が再開されて，日中３回の僅かな時間帯のみ通過可となる（路上での表示による）ので，要注意。
ついで，この近くでは，秋葉川から柳蘭峠に登る道（秋神温泉から先）と，鈴蘭峠が，通行不可（路上での表示による）。

15期坂尻.txt

ＧＷも今日で終わり。明日からまた長い一週間が始まります。
で、来週のベルクハイムの小屋作業＆新緑を愛でて飲む会に久しぶりに参加したいような気分になっております。１３日の朝から、１４日の午前までなら何とかなりそうです。
１４日の午後から、化学教育研究会という団体の定期総会に出席の予定なので、それまでに金大（角間）へ行ければと思っています。
日程とかが決まっていたら連絡を頼みます。

15期松林.txt

本日（２月２８日）、恐れ多くも教祖さまが私をお訪ねくださいました。
うかがえば、野沢温泉でのスキー合宿のあと、そのまま金沢へお越しになり、このあと、春を求めて熊野古道を歩かれるのだとか。
私も思わず、仕事なんか放り出して、教祖さまのお供をさせていただきたい衝動に駆られました。暗くて寒い雪空のもとで、週７８時間労働にうんざりしている私の心を知っていて教祖さまは、お訪ねくだされたのでしょう。
おかげさまで、教祖さまを励みに、もう少しだけがんばってみようかな、という勇気をいただくことができました。
どうもありがとうございました。

15期上馬.txt

５月５日、連休中に実行しようと考えていた日が、とうとう来た。体調は万全とは言えないものの、事前のトレーニング山行で登った観音山での感触から、なんとかなると、とにかく行けるところまで行こうと思い出発した。

朝４時自宅発、犀川ダム４時４５分発。桂氏の石積みと高桑氏の石碑の前で黙祷し、まだ草木も伸びず、朝のひんやりした空気の中、順調に進んでいった。ツクシの建ち並ぶ倉谷を過ぎ、沢を跳び越え、まもなくベルクハイムの下へと思ったところ、なんと流れが行く手を遮っていた。川原が荒れ、流れが二つになり、その一つが道を２か所で断ち切っていたのだ。小さな高まきと、流れの中に置かれた石を頼りに、何とか濡れずに渡る（帰りは雪解け水で増水していて少し濡れてしまう）。ザゼンソウやスミレサイシンが目だつ道を行き、金山谷も石づたいに無事跳び越え、新道の取り付きで一休み。近くでオオルリとウグイスの囀りが、遠くからクロツグミの囀りが聞こえていた。

急な登りの始まりであったが、ゼンマイや満開のイワウチワを左右に見ながら、呼吸を乱すことなくゆっくりと進む。ユキツバキやブナの新緑にシャッターを切りながら登っていくと、やがて残雪の上を行くことになった。カモシカの足跡が続き、ブナの花やノウサギの糞が雪の上に落ちていた。砺倉分岐の手前のテントサイトで休んでいると、かさこそと近づいてくるリスに出合う。雪の消えた尾根筋では、ここでもイワウチワが満開。

クラコシ尾根にはいるとブッシュがじゃまになる。タムシバは花を開いていたが、シャクナゲはまだつぼみであった。標高１０００ｍ付近から高三郎山を撮る。中三方、口三方、成ヶ峰なども、まだたっぷりと雪を付けていた。両側のコシアゲ谷も卜谷も、雪崩の跡が生々しい。ショウジョウバカマやイワナシの花に顔を近づけながら、新道分岐への急な登りをなんとか乗り切る。分厚い残雪の尾根には、先行する一人の登山者の足跡。そして正面には雪の多い大門山。まだ、標高１０００ｍくらいまでしか色づいていない。そこからはほとんど雪の上を歩き、１０時５５分ようやく山頂に立つ。白山そして周りの山々に頭を下げる。

残念ながら白山は、もやで霞んでいたが、レンズを取り換えてシャッターを切る。その後、ヤブの中で昼寝をする。足と呼吸はなんとか大丈夫であったが、去年手術した首から肩にかけての疲れがたまってきて、横にならないと我慢できなくなっていた。気がつくと１時間半ほど眠っていた。一人だけの静かなひとときであった。

１２時４０分発、帰りは旧道を下る。ブナにヤドリギがやたらと目につく。レンジャクであろうか、その粘っこい糞と思われるものが雪の上に落ちていた。下りは、さすがに疲れが足に出てきた。学生時代は、ここをよく走って下ったことが信じられないくらいに、膝のまわりが痛くなっていた。ストックを持っていなかったら、もっとひどかったことだろう。途中、下から登ってくる男性一人。そして、鈴を鳴らしながら下ってきて、「今日は最高でしたね」と言って追い抜いていった女性一人。

この時期としては、以外と少ない登山者であった。ほんとうは疲れていたからであるが、また来週もくるからとベルクハイムに立ち寄らず、３か所でおいしい水を飲みながら歩き、ダムに１６時３０分着。振り返ると、新緑の上に白く輝く高三郎がまぶしかった。

15期宇野.txt

ＧＷは、熊野古道を１泊２日で歩いて来ました。心地よい春の風に吹かれながら幸せ一杯で熊野の山村をぬけてきました。
ほんの数年前まで、ほとんど観光客の入ったことのない山村では、人懐っこいおじいさんやおばあさんが行き交う観光客に愛想を振りまいていました。
自然の中で一人で生きる勇気が無い以上、回りの人々と仲良く暮らすしか術が無い。
熊野古道の途中の山の中に、「高原霧の里」というところが有りそこに「イイデスハンソン」が住んで居ました。最終バスを待っていた所にバッタリ出くわしサインをもらいました。嫁さんや春菜は止めろと言いましたが、偶然は大事にしなければとミーハーになりました。旅の楽しみは、その土地の景色と人情です。それを満喫出来た時良い旅だったと言えるのでしょう。

ＰＳ．
ＧＷも終わり明日からまたサラリーマンです。

16期金森.txt

やまざと12号受け取りました。ありがとうございます。いつも楽しく読ませて頂いてます。ベルクハイムの給排水設備が整備され水洗トイレが出来たことには感心しました。思えば私たちの卒業の年に山小屋を改築したのはもう25年も前のことで、あの時のどの部分が今も残っているのか一度たずねてみたい気がします。

昨年の11月に勤務先のHewlett Packardが分社し私が所属する計測器部門は新会社 "Agilent Technologies"に、日本法人は「アジレントテクノロジー株式会社」になりました。Email Addressも新しくなりました。しばらくは旧アドレスからも転送されて来ますが、OB会名簿を更新いただければと思います。

16期中野.txt

OB通信 毎度ありがとうございます。
いつも、季節を綴った文章を読んで懐かしい山の情景を思い浮かべています。
山小屋週間に参加できなくてすみません。
参加されるみなさま、ごくろうさまです。
大変だと思うけど、うらやましい気もします。
変ですね。それではまた。

ご苦労さまです。（いろいろと）
昨年の４月から滋賀県へ単身赴任となりました。彦根のアパートで気ままなひとり暮しをしています。といっても週末には高速をぶっ飛ばして福井へ帰り、月曜の早朝にアパートへ戻る変則的な生活パターンを繰り返しています。そんなわけで土日は家族と一緒に過ごすことを優先してしまいＯＢ会行事にはなかなか参加できません。楽しい企画が一杯なのに本当に残念です。ひょっとしたら家族で参加することもあるかもしれません。そのときはよろしくお願いします。

16期清水.txt

シアトルの１６期清水です。３月２５日に家族が到着し、いよいよ新生活を始めたばかりです。
沈床園でコンパですか。よろしいですね。ただし、くれぐれも注意してください。昔のようにやりすぎないように。２次会は香林坊、片町、または小立野でしょうか。　こちらでは、公園や木の下で酒を飲むことは法律違反のようです。廻りにもたくさん桜が咲いていますが、特に日本式の花見をしている人は見当たりません。又、なぜかこちらの桜は非常に長い期間咲いており、なかなか散りません。
雨が降らないことを祈ります。ではまた。

17期小島.txt

４月２２日帰国しました。香港駐在時にはお世話になりました。メールアドレスを設定しましたのでご連絡します。今後もよろしくお願いします。お手数ですが、宛先変更願います。

17期渡辺.txt

ご無沙汰しております。
いつもメールをありがとうございます。
つかぬ事をお聞きしますが第7ギョーザのホワイト餃子についてですが、あの小立野店以外のチェーン店をご存知でしたらお教え下さい。と言いますのもこの連休に野々市町に昨年より住み始めた義弟から「遠いので知り合いにホワイト餃子を買ってきてもらっている」という話を聞きました。
四半世紀も前のことで思い出せませんがチェーン店だったような気がしますが・・・・

18期大西.txt

ご無沙汰しています。また、”やまざと”お送りいただきありがとうございました。
　さて、かねてより家族で白山登山をしたいと思ってました。下の娘が今年小学校三年生になるので、やっと行けるかなと考えてたところなので、今回の企画は私にとっていい機会を与えていただいたと思ってます。

思えば２７年前、新人部員のころにはじめて山らしい山に登って感動したのが白山でありました。それまで２回のトレーニングは高三郎と医王山でザックに石を入れて苦労して、ピークに立ってもあまり感動は覚えず、こんな部はすぐにでもやめてやろうと決意しておりましたが・・・
白山は違った。大展望とお花畑と雪渓と・・・、最初からここに連れていかんかい、歩荷の苦労は感じなかった。初めて味わった充実感・・・

妻に、子供に魅力を知ってもらいたい。そんな気持ちで申し込みしたいと思いました。よろしくお願いします。妻、次女、三女、それに私の４人で参加希望します。（長女は中二ですが、肌が焼けるのとトイレの虫を極度に恐れて不参加）

テントを担いでいく気になれないので、ケビンへの宿泊を希望します。ケビンどまりははじめてなので、何を持っていったらよいのでしょうか。
　また、これからの予定等わかったら教えてください。まだまだ先の話なので、近づいたらで結構です。ご面倒かけますがよろしくお願い申し上げます。

23期興井.txt

皆さん、ご機嫌いかがですか？
ゴールデンウィークの初日に早速ですが恵那山（中央高速道のあの恵那山トンネルの恵那山です）に登ってきました。日帰りで登れる山です。今年は雪解けがおそくて北アルプスの各山小屋も小屋開きに苦労しているとのこと。予想に反して恵那山もこの時期にしては春山そのものでした。半分以上を雪の上を歩く羽目になってしまいました。スパッツすら持たずに来てしまったので靴の中までぐちょぐちょになって下山してきました。幸い天気も良く、残雪にしっかり覆われた南アルプスや中央アルプスがよく見えました。下山後中津川に一泊して翌日はちょっと寄り道、かねてから行ってみたかった郡上八幡に寄りました。水の都、良い雰囲気の町でした。ゴールデンウィーク後半は家族サービス？何して過ごすか今から考えます。
　最近私の回りでも仕事上のストレスからうつなどの症状で職場を離れる方もいます。せっかくの長期休暇。皆さんも浮き世の憂さを忘れてしっかりリフレッシュしましょう！

25期高橋.txt

転勤によりe-mailアドレスが変わりましたのでお知らせします。
e-mail : taka@ples.fie.fujitsu.co.jp
以前は新宿のはずれの事業所迄約１時間余り、満員電車にゆられての通勤でしたが、今度は、なんと小学校以来となる自宅より徒歩１０分のところにある事業所に転勤になりました。（東急・東横線/ＪＲ南武線の武蔵小杉駅前にある小杉タワープレイスです）行き帰りで約２時間、時間に余裕が出来たのは良いのですが、新宿のネオン街が懐かしいこのごろです。
！

26期畠山.txt

畠山、２６期です。　新潟県上越市在住です。

３月から夏までは山スキーの季節です。　今年は３月の降雪が多かったため、残雪がたっぷりです。上越市の郊外に南葉山という９００ｍ程の山があります。　医王山のように市民に愛されている低山です。車で２０分で登山口のキャンプ場に着くと、標高差４００ｍの急斜面を経て１時間ほどで頂上です。頂上直下は傾斜４０度ほどで、なかなかの斜面です。　眼下に高田城の桜を眺めながらの飛ぶような？ジャンプターンは気分を爽快にしてくれます。　場所が身近なので、ジョギングのようなトレーニング気分で何度か通っています。
　最近カービングスキーにとりつかれています。　ゲレンデスキーだけでなく、ショートスキーまでもカービングにしてしまいました。　来年は山スキーも１３０ｃｍぐらいのカービングタイプにしようと思っています。なにしろ短いわりに安定感があるし、楽しいスキーです。
１０年使った短いだけで不安定だった寸胴のショートスキーは下取りに出しました。　ビンディングの安定性も増したせいもあり、９０ｃｍの長さでも荷物を背負ったジャンプターンにも十分耐えてくれます。
　写真を貼付します。　それでは。

36期樫村.txt

いつもメールや会報など、送っていただいてありがとうございます。
　そして、いろいろとお疲れさまです。

この春から、七尾市にある能登第二病院に職場が移りました。精神科の病院です。私はそこで臨床心理士（平たくいうとカウンセラー）として仕事をしています。
　引っ越しもしたので以下のように名簿の変更をお願いします。

鈍行列車で思ったこと

0期　田村　昭夫

恒例の春の小屋酒場からの帰路、長岡の長女の処に寄ってから、鈍行列車に乗り継ぎ、小出経由で会津若松に帰ってきた。

新車両二台。前の車両には私を含めて五人、後の車両には閉経集団が十二、三人。やがて前の車両は私一人の貸切となった。

窓の外は深緑と残雪の風景。贅沢とはこのことを云う。年金生活者の一人旅には理想的設定である。ここに最愛の夫に先立たれた傷心の一人旅の美しい女（ひと）が乗り込んでくれれば天国である…。

しかし、現実は苛酷である。どやどや乗り込んできたのは、茶髪、顔黒の痴呆高校生達。彼らの品性の下劣さときたら表現の域を越えている。彼らの先生と思しき二人が「年々生徒の質が低下してきますね」と話していた。

日本は滅びた。日本を滅ぼしたのは誰か。男達である。大切な吾子の教育を、愚かなカミさんと、低能な学校の先公にまかせた男達に責任がある。

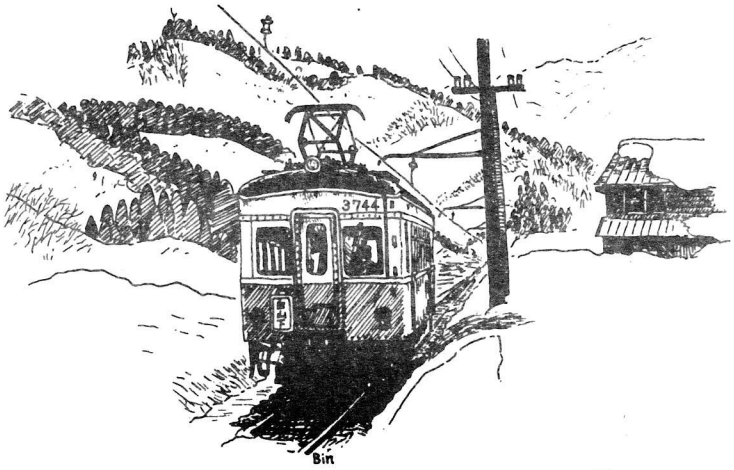
女が稼ぎ、男がヒモとして家にあり、子供の躾教育をするのが本来あるべき姿である。一億総サラリーマン化した昭和三十年代に、今日の滅亡した社会の萌芽を見る。

拝啓

先日は大変お世話様になりました。山に居る時だけが、幸せな気分になれます。ベルクハイムの下にテントを張っていた「コビキ塗装」の社長との語らいが今回の収穫の一つでした。

別紙原稿の文章で「低能な先公」は「低脳な先公」のあやまりです。お詫びして訂正させていただきます。

白山南竜でお会いできるのが楽しみです。それまで左ヒザを直しておきます。　　敬具



私案　北陸州立大学

0期　田村　昭夫

（工学部の同窓会誌に投稿したものに、改善を加えたものです。）

北陸地方の大学は州立一校で充分である。国立や私立大学はもはや不用である。

北陸州立大学の本部を金沢に置き、医学部、文学部、理学部は金沢大が引き継ぐ。薬学部、経済学部は富山大が引き継ぐ（※１）。工学部部、法学部を福井大が引き継ぐ（※２）。教育学部は各県立とする。各地域の伝統と特色を生かすとこの様な配分になるが、如何なものか。

現在進行中である角間地区への工学部、薬学部の移転を中止して、前者を福井へ、後者を富山へ移す。北陸先端技術大学院大学は現在の辰ノ口で国立のままで良い。又学生の数は今の半分で良い。そして、社会人を受け入れる開かれた大学にする。

大学人は角間に籠らず、香林坊に出没すべし。公開講座は片町、香林坊で行う。少子化がさらに進み、生涯教育が叫ばれる昨今、教育改革は急がねばなるまい。

古来金沢は天下の書府として世間に広く知られてきた。日本の教育改革は金沢から起きて当然である。

以上が私案であるが、これを叩き台として、議論の輪が広がれば幸甚である。

※１　富山に薬学と経済学を置く理由…古来越中は売薬を通して情報収集と蓄財の才にたける。

※２　福井に工学と法学を置く理由…古来、越前は織物工業の盛んな地であり、明治憲法の元となった「五ケ条の誓文」の草案を作ったのが、越前藩士由利公正である。

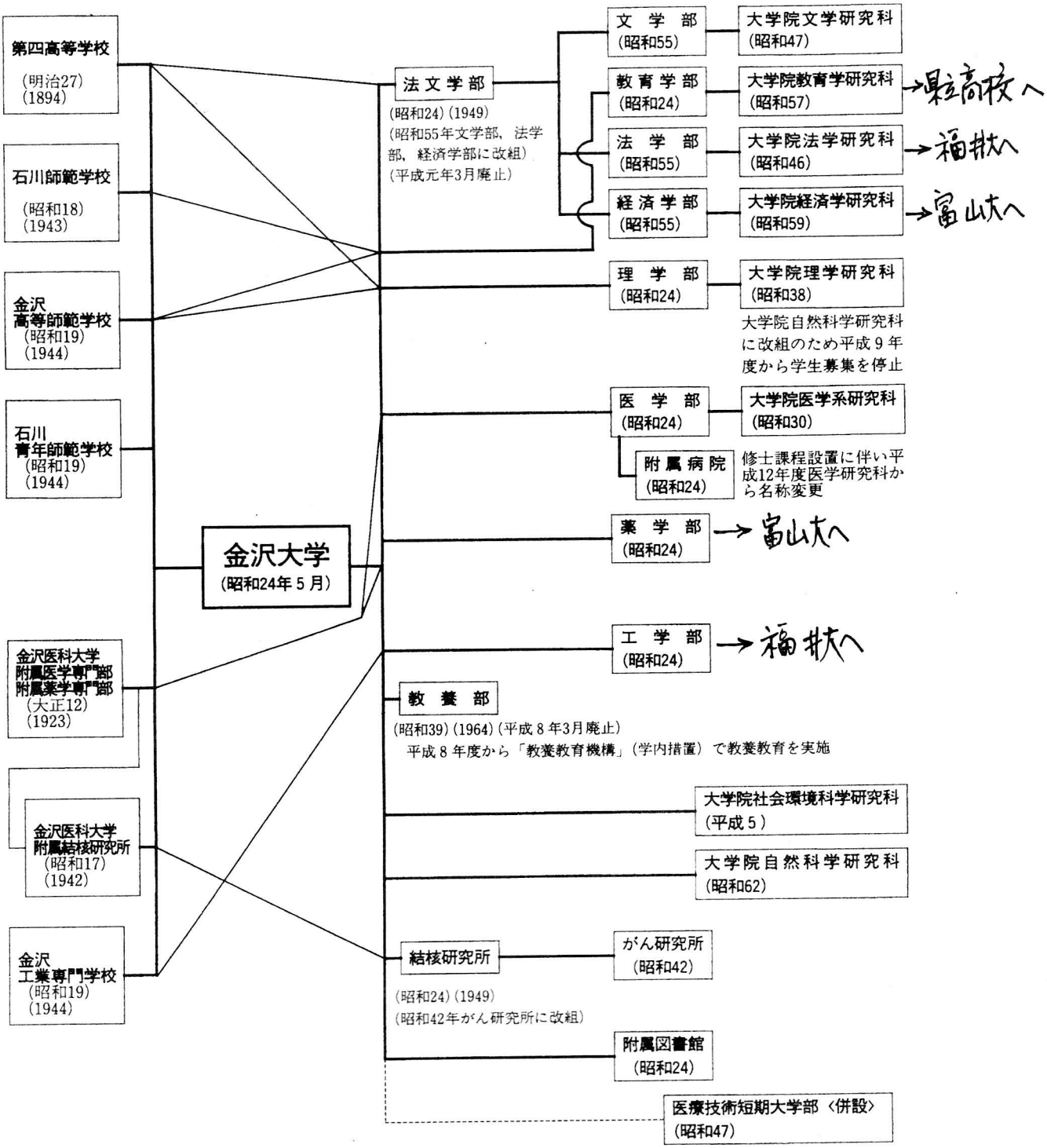
付記）私大、短大を一般教養部に改組。
一般教養部の復活（志望学生全員入学）
金沢美工大を芸術学部に改組する。
一般学生は全寮制とする。
社会人は専門学部へ入学さす。

白山下へ行く電車

北陸州立大学(案)
(全員入学・全寮制)

I　大学の概要

1.　沿革



金沢大学歴代学長一覧		(在任期間)
初代	戸田正三	(1949.9.22～1961.9.21)
第2代	石橋雅義	(1961.9.22～1967.9.21)
第3代	中川善之助	(1967.9.22～1973.9.21)
第4代	豊田文一	(1973.9.22～1979.9.21)
第5代	金子曾政	(1979.9.22～1985.9.21)
第6代	本陣良平	(1985.9.22～1989.9.21)
第7代	青野茂行	(1989.9.22～1993.9.21)
第8代	岡田晃	(1993.9.22～1999.9.21)
第9代	林勇二郎	(1999.9.22～　　)
第10代	田村昭夫	

市立
金沢芸術工芸大学 ——→ 芸術学部
~~学生は全寮制とすべし~~

一般教養部の復活 (1年半)
(北陸地方の全大学に全学生を無試験入学さす・専門への特性を見る)

金大ＷＶ同巣会
人材派遣

３期の西尾氏は小松製作所（現在コマツ）を退職後、コンサルタント業で多忙である由。毎日を如何に過ごすかで腐心する私にとっては、誠にうらやましい限りである。

そこで提案したい。各界のエキスパートを擁する金大ＷＶ同巣会は非営利団体（ＮＰＯ）として名乗り出る。同巣会員は全員、各自の得意とする分野をワンゲルホームページに載せる。宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の様に、困っている人達がいたら、世界中何処でもすぐに飛んで行く、お助け鳥集団。

私の例で恐縮であるが…。

田村　昭夫　1936年８月28日生まれ
（専門）　プラスチック成形加工
（趣味）　山野彷徨　宇宙論
（運転免許）なし
（パソコン操作）不可
（連絡先）〒965-0031
会津若松市相生町４－15
TEL　FAX　0242-22-0506

この国を滅亡さすもの

０期　田村　昭夫

先日、地元会津大学で、世界各国から来ている外人教授達による「わが母国の教育について」のパネルディスカッションが行われた。

各国共通なのは、「子供の仕付けは父親の役割」であること。翻って、日本の仕付け役は母親。

「わかった！」会津藩の掟にある、「婦女子の言は聞くべからず」の真意がやっと解った。

思春期の男の子の心身に荒れすさぶ嵐を、母親は絶対にわからない。それがわかるのは、嵐の経験者である父親だけである。息子が一人前になろうとする最も大切な時、単身赴任とやらで父親が家を離れたらどうなるか、云わずもがなである。又、例え家に居たにしても、働き蜂に成り下がって、息子との対話がなく、ＰＴＡは母親任せでは、父親失格である。

しかり。この国を亡ぼすのは、サラリーマン親父である。仕事仕事と云って会社イノチで生きてきても、会社では忠誠心だけである。無能な高給取りはもはや不用なのである。

サラリーマン諸君！もういいから大切な家庭に帰ってくれ！そして貧しくてもいいから自立した姿を家族や息子に見せてやっていただきたい。

小立野台地から鼎の山を望む。

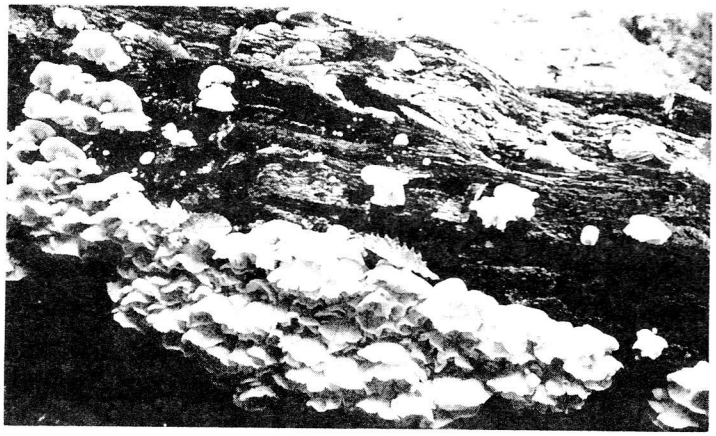
p.89～92は、「自然人」（橋本確文堂）NO.51、2000年４月１日号の転載です。p.92からお読み下さい。

筆者　栂　典雅は19期ＯＢ

葉広葉樹のダケカンバ、高山帯では同様にハイマツやミヤマハンノキなどであるが、これらはいずれも菌根菌を伴う樹種である。

高山帯におけるキノコ調査は、全国的にもほとんど例がなく、本県でもまだ、緒に付いたばかりであるが、この地帯では菌根菌の割合が高いことが分かってきた（表1）。また、高山帯に特有と思われるハクサンアカネハツ（仮称）やイロガワリキイロハツ（仮称）、北欧に生育するとされるアカキヒダタケ（仮称）といった新（産）種が多く見つかっている。反面、山地帯のキタゴヨウから高山帯のハイマツまで、いわゆる五葉松と共生するゴヨウイグチやベニハナイグチ、平地から広く分布するヌメリイグチなども確認されている。

一般に、標高が高くなるほど土壌の栄養分は乏しく、温度や水分の条件からも植物の生育には厳しい環境と言える。そういう場所に生育する樹木にとっては、菌根菌の働きはより大きなものがあり、菌根菌は壊れやすい高山帯の生態系を地下で支える力持ちと言えよう。


ブナの枯木に生えるブナハリタケ。「かのした」などの方言で呼ばれる

熱帯性とされるオオシロカラカサタケ（撮影／山下良明）

兼六園とキノコたち

兼六園にキノコは似合わないかもしれないが、実は関係おおありなのである。同園の庭師であった故南多喜男氏の努力によるものであるが、園内で見つかったキノコは二百二十六種類におよび、中にはケンロクエンクギタケ（仮称）やブドウヤマドリタケ（仮称）、クロアザキヒダタケ（仮称）などの新種も含まれる。また、同園が国内有数の冬虫夏草類（ｐ19）の宝庫であることも明らかになった。

なぜ兼六園にキノコが多いのか？ひとつは、シイやカシなど元々そこにあった樹木に加えて、松や桜など様々な樹木を移植し、池水や築山など多様な環境が創られたこと。もうひとつは、落ち葉掃きなどの管理が常になされ、菌根菌の生育に適した環境が保たれていることである。

中にはサルノコシカケ類やマツオウジなど、生きている老木にも発生し、その死期を早めてしまう厄介者もいるが、大半のキノコは天下の名園の維持に役立っていると考えられる。

時にはキノコの視点で兼六園を散策するのも一興であろう。その際『兼六園とキノコたち』（ｐ29）は最適なガイドブックになる。

林の衰退→マツクイムシ等の被害といったように、人と樹木とキノコの間には密接な関係がある。

もうひとつの変化は、熱帯性のキノコの進出である。近年、カキノミタケ('94)、イカタケ('94)、ヤコウタケ('95)、オオシロカラカサタケ('98)、ダイダイガサ('92、'99)といった南方系のキノコが相次いで発見されている。その原因として、熱帯地方から輸入する観葉植物やバーク堆肥などに菌が混ざってくることも挙げられる。このことは、熱帯性のものに限らず、南半球の固有種などもやってくる可能性を示唆している。

そして、地球温暖化の問題がある。環境庁は温暖化の指標と考えられる生物のひとつとしてオオシロカラカサタケを挙げており、数年前に同庁が発行したパンフレットには、関西地方まで北進したことが記載されている。これらのキノコの移動は、直接的には人為によるところが大きいとしても、北進していることはほぼ間違いなく、今後は本県で定着、増加するのかどうか、観察が必要である。

キノコの宝庫　山地帯

標高五〇〇㍍を超えると、雑木林の主要な樹種もコナラからミズナラに替わるところが多く、ブナも見られるようになる。石川県における本来の山地帯（ブナクラス域）は、ブナ帯とも呼ばれていて、もう少し低い標高から一六〇〇㍍あたりまでとされるが、ここでは、主にミズナラ林とブナ林のキノコについて述べることとする。

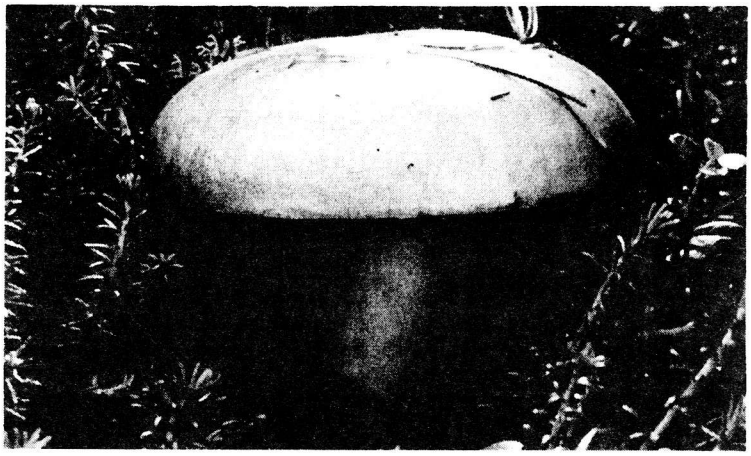
ブナに生える代表的なキノコといえば、ナメコやブナハリタケ（かのした）、ムキタケなどがあり、ミズナラに生えるものにはマイタケやクリタケ（もたせ）などがある。これらは山村の人たちが昔から採っている美味なきのこで、いずれも腐生菌（木材腐朽菌・p17）であり、老齢木や風、雪崩による倒木が広く存在する地域では、まとまって生える優秀な食菌のみを採取対象とするのは当然であろう。そのほか菌根菌では、ブナヌメリガサやアケボノサクラシメジなどがブナ林に特有の種とされる。

しかし、この地域で確認された種類の多くは、実は、里山地域と共通である。例えば、南方系とされるヒメベニテングタケやムラサキヤマドリタケが、冷温帯気候のブナ林からも採取されている。里山本来の樹種であるシイやカシ、雑木林の主要樹種であるコナラやアベマキなどとミズナラやブナは同じブナ科の樹木であることから、キノコの分布も連続すると考えられるが、まだ、分からないことも多い。

なお、環境庁の『植物版レッドリスト』（一九九七）に記載されたキノコ類のうち、本県ではムカシオオミダレタケ、エビタケ、タマチョレイタケ（以上、絶滅危惧Ⅰ類）とツキヨタケ（絶滅危惧Ⅱ類）の四種が確認されている。前三種はともかく、ツキヨタケはごく普通に見られるものであり、この選定には疑問がある。しかし、これらは、自然性の高いブナ林に発生するものであることから、全国的に良好なブナ林が減少していることを勘案したものであろう。

菌根菌の威力？　亜高山帯～高山帯

石川県では、標高一六〇〇㍍から二四〇〇㍍あたりまでを亜高山帯、それより上部を高山帯としている。代表的な樹木は、亜高山帯では常緑針葉樹のオオシラビソや落



白山の高山帯で発見されたイロガワリキイロハツ（仮称）

多彩なキノコ　丘陵帯

海岸から概ね標高五〇〇㍍までの、いわゆる里山と呼ばれる丘陵帯を中心としたこの地域は、古くから人間の様々な活動により、自然環境の変化が著しいところである。元々の植生は、スダジイやタブノキ、カシ類などの常緑広葉樹が生える照葉樹林帯（ヤブツバキクラス域）が広く占めていたが、現在は社寺林などにわずかに残るだけで、平地の大部分は都市や農地に改変され、里山地域もスギなどの植林地やマツ林、雑木林と呼ばれる落葉広葉樹の二次林になっているところが多い。

ヌメリササタケ。県内では「すべたけ」「むらさきのめり」の方言で親しまれている

しかし、人の手が入った雑木林や樹木の多い公園などは、菌根菌（p16）にとっては、むしろ生育に適した環境となる。そのため、身近な林では昔からきのこ狩りが盛んで、アカマツ林でのマツタケやアミタケ（しばたけ）をはじめ、海岸クロマツ林でのショウロやシモコシ、コナラなどの雑木林でのサクラシメジ（かっぱ）やヌメリササタケなど、おなじみのきのこが並ぶ。

このように、人為の影響を受けた多様な環境を反映して、この地域のキノコ相も多彩であり、種類数は全体の八割以上におよぶことが表1から読みとれる。

また、人為的作用と自然の遷移（復元）による影響を受けて、キノコ相の変化も他の地域に比べて大きい。そのひとつは、里山の変貌である。燃料革命以来、里山の雑木林は放置か、開発か、植林かのいずれかであったといってもよい。燃料としての薪や炭、肥料としての落ち葉などが採集されなくなった雑木林は、常緑樹も茂る暗い林になり、土壌は富栄養化してくる。このような変化は、マツタケ生産量の激減に象徴されるように、菌根菌の種類の変化と減少、腐生菌の増加をもたらす（表2）。つまり、この地域におけるきのこ狩りの対象種の多くが菌根菌であることと、その生育環境が人為により維持されてきたことは決して無縁ではなく、放置→菌根菌の減少→

表2　マツ林の環境とキノコ相

	若齢林	壮齢林	老齢林
林相	下層植生、A_0層（※）とも貧弱である	下層植生が多くなりA_0層がやや発達している	高木の広葉樹が競合しA_0層が発達して土壌が肥沃化している
菌根菌	マツ特有種がほとんどである	マツ特有種、広葉樹との共通種が見られる	マツ特有種はほとんど見られず、広葉樹との共通種や広葉樹特有種が見られる
	フユヤマタケ、キツネタケ、クロトマヤタケ、スナヂアセタケ、ササタケ、オウギタケ、ヌメリイグチ、チチアワタケ、アミタケ、ハツタケ、トキイロラッパタケ、ショウロ、コツブタケなど	キシメジ、シモコシ、シロシメジ、マツタケ、マツタケモドキ、マツシメジ、ホンシメジ、ムラサキナギナタタケ、ホウキタケ、クロハリタケ、チャハリタケ、クロカワなど	テングタケ、タマゴタケ、ツルタケ、ガンタケ、キアブラシメジ、ヌメリササタケ、ドクベニタケ、チチタケ、ケシロハツモドキ、クロハツ、キチチタケ、カノシタ、ニンギョウタケなど
腐生菌	ほとんど見られない	落葉分解菌が見られる	落葉分解菌が多く見られる
		モリノカレバタケ属など	モリノカレバタケ属、クヌギタケ属、ハラタケ属など

『石川県のキノコ』(1999) より

※ A_0層＝地表の落枝葉とその分解物の層を指す

石川県のキノコ
―自然環境とキノコ相―

梅　典雅・米山競一　石川きのこ会

よねやま　きょういち
1936年生まれ。きのこの分類と分布、植生とのかかわりに興味をもち、きのこ会の中では山地帯、亜高山・高山帯の調査グループに属し、調査活動に加わっている。石川きのこ会副会長。

とが　のりまさ
1955年金沢市生まれ。子どもの頃のきのこ狩り体験がキノコの世界を知るきっかけに。現在、石川きのこ会理事。白山高山帯の調査などを担当。

全国的にみてもキノコの調査研究が進んでいるといわれる石川県では、その多彩なキノコ相がすこしずつ明らかになってきています。

はじめに

いったい日本には、何種類のキノコが生育しているのだろうか。日本で最も多くのキノコが掲載されている図鑑は、保育社の『原色日本新菌類図鑑』であるが、その数は約千種類であり、実際はその数倍といわれている。菌類は、他の動植物に比べて、研究が遅れている生物群のひとつであるといえる。

それでは、石川県内のキノコの種類数はどうであろうか。県自然保護課の委託により石川きのこ会が実施した「自然環境保全計画調査（キノコ）」の報告書『石川県のキノコ』（一九九九）には、まだ正式な学名が付けられていないものも含め、標本に基づく千百五種類が記載されており、その後も新しい種類が次々と見つかっているというのが現状である。石川県のキノコ相に関する調査研究は、充分とは言えないが、比較的進んでいるということはできよう。

このような中で、本県のキノコ相を概観すれば、本県が日本の中央部に位置し、海岸から高山帯まで様々な環境を有することから、キノコも南北両系のものが混在するなど、多様性に富むことが特徴のひとつであると推測される。

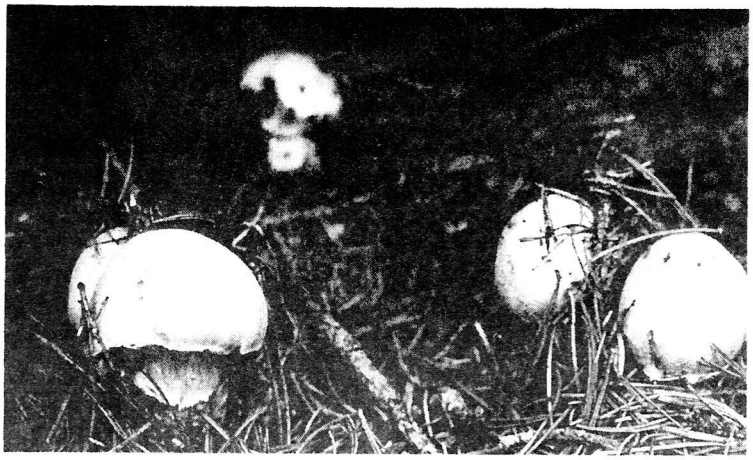
表1　植生帯別・生活型別キノコ確認種数

植生帯区分	生活型別種類数(%)			
	菌根菌	腐生菌	寄生菌	計
丘陵帯（平地～里山）	371(40.3)	512(55.6)	38(4.1)	921(83.3)
山地帯（ブナ・ミズナラ林）	187(47.9)	193(49.5)	10(2.6)	390(35.3)
亜高山帯～高山帯	83(63.4)	48(36.6)	0(　0)	131(11.9)
計	449(40.6)	610(55.2)	46(4.2)	1,105

＊『石川県のキノコ』(1999) を改変

表1は、本県を大まかに三つの植生帯に分け、前に述べた千百五種類を標本採取地の植生帯および生活型ごとに区分したものである。ただし、複数の植生帯で採取されたものもあるため、各々の合計数は一致しない。

以下、各植生帯別にキノコ相の特色や現況を述べてみよう。



ショウゲンジ。アカマツ林に生える食菌であるが、本県では白山のハイマツ林で初めて採取され、その後、キタゴヨウ林でも見つかっている

◎中村元風（なかむら・がんぷう、陶芸家・日本工芸会正会員）

舞台、古九谷のこころを今に

北国新聞夕刊「舞台」から
p.25のように掲載されたとのことですが、
ＨＰに入ってきた形でご紹介します。

本文：　伝統とは古いままを残すことではなく、創業当時の大切なこころを残すことだと思っている。

九谷焼は三百五十年程前に創始された古九谷をルーツに持つ。私は十六年前に陶芸を志した時、古九谷作品を真剣に調べ始めた。美術館や古美術商に頼んで手に取らせてもらったことも数えきれない。しかし見て触るだけではよくわからなかった。マラソンも実際に走ってみないと本当のことがわからないように、古九谷も、実際に真似て造ってみないと本当のことがわからないのだと悟った。

幸運なことに、私のしつこさに負けたのか、ある大コレクターが、古九谷百点程を十年近く貸してくれた。

私は十年程、それを写す仕事に没頭した。実際に”本歌”を目の前にして写してみると、それまで見えていなかった様々なものが見えるようになってきた。古九谷を造った人々の意図も少しずつ見えてきた。

真っ白な白磁を求め、端正な形を求めていたことがはっきり見えてきた。当時の技術の限界の中で、もがき苦しみ、デザインを工夫して最善の作品に仕上げようとする執念がはっきり伝わってきた。

私は十年近くにおよぶ、この古九谷を写すという仕事を通じて、古九谷に始まる九谷焼の伝統とは、その時代の最新の技術を駆使して、その時代でなければできない、そして今までにない、よりよい作品を目指し造り続けることだと知った。

私が一生の中で、どんな作品を残すことができるのか、私の挑戦は始まったばかりである。

（加賀市）

北國　平成12年（2000年）5月29日（月曜日）

東京だより

「今九谷」力作80点並ぶ

加賀の中村さんが個展

◇…加賀市大聖寺錦町の陶芸家、中村元風さんの「今九谷色絵磁器展」＝写真＝がこのほど、東京・日本橋高島屋で開かれ、白磁に九谷の五彩を使って絵付けを施した今九谷の力作約八十点が陶器ファンのため息を誘った。

中村さんは現在、百名山を題材とした作品を手掛けている。今回の個展では地元の白山をはじめ、羊蹄山、大雪山、丹沢大山を描いた新作の大皿四点が公開されたのをはじめ、白馬三山や妙高山、磐梯山、蔵王山、鳥海山などの小皿も展示され、来場者はじっくりと色鮮やかな作品を鑑賞した。

ＧＷには常念山系に出かけて来ました。
３日夜、糸魚川（妻の実家）泊。

４日朝１番の大糸線で穂高、季節運転の小型バス（昨年より運行開始）で中房温泉（東京方面からの夜行列車接続便は盛況だったようですが、南下組は珍しいようで、地元タクシー会社管理職の運転手と小生の２人で約５０分の道中）、合戦小屋を経て燕山荘（泊）。途中、前日登っていた地元高校生の集団が下山していきました。

５日快晴。燕山荘から大天井岳、途中で雷鳥の新婚カップルに出会いました。雄の背中は黒っぽくなりかけていました。立山だと、この時期はまだ真っ白なのですが。フィルムの入っていないカメラのシャッターを押して時間を食いました。大天井への直登はステップが切ってあるとはいえアイゼン、ピッケルが頼もしい存在ですが、下りの南斜面から常念小屋までは夏道が出ていて無用。常念小屋（泊）。

６日 常念岳をこえて蝶、樹林帯はたっぷり雪が残っていました。蝶からの樹林帯の急な下りは、調子良く滑って木と激突するわけにもいかず、意外と時間がかかりました。上高地から安房トンネルを通って平湯に出て、高山、富山経由で帰ってきました。

現役の話に戻ります。新年度になって初めての使者が新入生トレーニング山行の計画書をもって研究室に訪ねてきました。１回生の参加者は１３名。角間キャンパス内の国際交流会館に居住する学生が３人います。昔、アイルランドからの留学生と冬合宿でいっしょになったことがありますが、一度に３人というのは珍しいことです。

snow-capped IOUZEN
雪上訓練　医王山
［目的］ ラッセルの練習をする。冬山でのルートファインディングに合わせてコンパスの用途を知る。
［日程］ 2000年2月25日(金)，26日(土) 1泊2日 非常1日
［山域］ 医王山
［行程］
1日目(2/25) 金沢大学 ==(車)== 見上峠 ---- 医王の里（幕営）
2日目(2/26) 医王の里 ---- 西尾平 ----（桔梗ケ原経由）---- 分岐 ---- 白兀山（往復）---- 医王の里 ==== 角間
［メンバー］
L 杉村明慶（教-人環2）医 奥野岳志(工-土建2)　加藤菜就(工-物化 2)　西脇幹雄(工-機機 2)井澤寿予（理-物 2） 石原　諭（経１） sL竹内利行(工-物化 4)清水健作（理-物 2）小倉 亮(法 2) 矢田部　桂（理-物 2） 日野鋼貴(文-人間 1)福村岳代（教-障 1）山本資治（工-人機１）
［連絡員］

越前聡子(文-人間 3)　076-264-0205
谷上 望(文-人間 2)076-232-5648

^^^

新入生トレーニング

2000 新入生トレーニング山行
［主旨］ 新入生に対して、ワンダーフォーゲルという活動の理解をはかるとともに、山行のための基礎的体力を養成する。
［日程］ ５月２７日(土)，２８日(日) 1泊２日
［山域］ 医王山・県境夕霧峠
［行程］
1日目(5/27) 金沢大学 ---- 見上峠 ---- 医王の里（幕営）
2日目(5/28) 医王の里 ---- 新覗(ザック置き場) ----三蛇の滝 ---- 鳶岩 ---- 新覗 ---- 白兀山 --- 夕霧峠 ---- 白兀山 ---医王の里 ==== 角間
［メンバー］ cL 矢内佑一（工-物化３）
Aパーティー
L 谷上 望(文-人間 3) sL 西脇幹雄(工-機機 3) 谷村一成（工-人機２） 河原一美（教-学校２） 日野鋼貴(文-人間 1) ローズ・ジュディ（ＵＳＡ）松岡史明（法 1） 深作亮太（工-人機１）

Bパーティー
L 小倉 亮(法 3) sL 杉村明慶（教-人環３） 角田幸久（経 2）松本なゆた（理-地球２） 山本資治（工-人機２） 竹内雅幸（法 1）松山文枝（医-保健１） 木村昌宏（工-機械１）

Cパーティー
L 奥野岳志(工-土建３) sL 加藤菜就(工-物化３) 吉森幸世（文-人間２）西 大輔(工-人機２) 久原宗仁（文-史２） 真村メリッサ中川拓哉（理-化１） 渡 洋子（医-保健１）

Dパーティー
L 矢田部 桂（理-物３） sL 清水健作（理-物３） CsL阿納真弓（文-人間３） 福村岳代（教-障害２） 石原 諭（経２） アリソン・ウオッツ（Australia）石山晶代（教-養別科） 森本達也（工-機械１） 中道卓郎（法１）
［連絡員］越前聡子(文-人間 4) 076-264-0205 井澤寿予（理-物３）076-235-2767

顧問のひとり言　前田 達男

Summer Camp Training

先週末は、福井県大野市と鳩が湯温泉、刈込池に出かけてきました。教職員組合法文分会のレクレーション行事です。刈込池には残雪の三の峰が映り、イモリの卵が水の中にいっぱいありました。昔、赤兎山から下山してきたときは、そのまま勝原まで歩きました。岩魚をかじりながら温泉につかってのんびり一泊、という夢がやっと叶ったというところです。狭い山道でバスの運転手は慎重運転そのもでした。

夏合宿の計画書が２通出てきました。この夏は4パーティが (1)北海道 (2)南アルプス北上 (3)北アルプス(蝶 - 槍 - 笠) (4)北アルプス(燕 - 槍 - 裏銀 - 針の木) に出かけるということです。前期試験と集中講義を済ませての夏休み入りですので、8月に少し入っての出発となることでしょう。

主将挨拶　　第43期主将　小倉　亮

私自身は 2 年前からしか金大ワンゲルを知らないが、諸先輩方の話や過去の記録を見るに年々ワンゲルも変わってきているようである．もちろん夏合宿をはじめとしてトレ山などはしっかりとこなしており何も心配することは無いのだが、やはり全体的に易しくなってきているようである．そんな中、今年も一回生、男 5 人女 4 人が入部した．人数こそ少ないが荷歩トレや強雨の中の新トレ（正直私は何人か辞めると思った）を経験しても、次の山行にむかい、やる気十分の彼らには心強さを感じる．今年は夏合宿でも 10 泊を超える計画のパーティーがあるなど、又少しずつワンゲルが変わり始めている．部活の為に人がいるのではなく、人の為に部活があるのだからワンゲルがその時のニーズに応じて変化していくのは当然だと思う．かといって全く好き勝手にやるのではなく、今まで築き上げられてきた金大ワンゲルの伝統を土台に、2000 年の金大ワンゲルの理想形を創る、ということに主将として、又一部員として、その一端を担えるよう努力していきたいと思います．

2000年 北アルプスParty　第１回 トレーニング山行

[目的]　体力アップ

[日程]　6月24日(土)，25日(日) 1泊2日 非常1

[山域]　人形山

[行程]　1日目(6/24) 金沢大学 ==(車)== 上梨 ---- 中根山荘上部駐車場（幕営）

2日目(5/28) 幕営場 ---- 宮屋敷 ---- 人形山 ---- 宮屋敷 ---中根山荘上部駐車場---- 上梨 ==(車)== 金沢

[メンバー]　L 阿納真弓（文-人間３） sL 小倉 亮(法 ３) 深山裕貴(教-人環3)
山本資治（工-人機２） 日野鋼貴(文-人間 2) 福村岳代（教-障害２）
森本達也（工-機械１） 松山文枝（医-保健１）

[連絡員]

谷上 望(文-人間 ３) 076-232-5648 090-9444-4969

井澤寿予（理-物３） 076-235-2767 090-2839-2461

北海道PARTY 第１回 トレーニング山行

[目的地] 富士写ケ岳

[目的] 林さんのカラ元気を出せるようにすること。２回生は本番スイカをたくさん持っていく予定なので限界に挑戦してもらいたい。１回生はとりあえずしっかりはしってね。

[日程] 2000年6月24日(土)～6月25日(日) １泊2日 非常１

[行程] １日目　金沢大学 ==(車)== 我谷ダム ---- 富士写ケ岳登山口（枯淵口)(幕営)

２日目　登山口 ---- 前山 ---- 富士写ケ岳 ---- 展望台 ---我谷ダム ==(車)== 金沢大学

[メンバー] L 奥野岳志(工-土建３) ｓＬ 清水健作（理-物３）医療 河原一美（教-学校２） 西 大輔(工-人機２) 谷村一成（工-人機２）日向 （医-保健１）
渡 洋子（医-保健１）

[連絡員]

谷上望(文-人間 ３) 090-9444-4969 井澤寿予（理-物３）076-235-2767 090-2839-2461

2000年度夏合宿 北アルプス裏も表も加藤Party

第1回トレーニング山行

[日程] 6月17～18日 1泊2日 非常1

[山域] 倉ケ岳、獅子吼高原(後高山)、奥獅子吼山

[目的] 1回生:山行における基礎的技術を向上させ、係の仕事を身につける。

2回生:1回生への技術的指導、精神的援助を行なう。

3回生:L、sLの経験を積み、全体を把握した適切な判断を下す。

全体:男25kg、女18kgの歩荷で、技術・体力を養う。

[行程] 〈1日目〉金沢 ==(車)== 月橋 ---- 大池広場 ---- 倉ケ岳 ---- 大池広場 ---- 風吹峠 ---- 獅子吼高原（幕営）

〈2日目〉幕営地 ---- 月惜峠 ---- 奥獅子吼山 ---- ケカン谷の頭----不動滝 ---- 板尾==(車)== 金沢

[メンバー] L 谷上 望(文-人間 3) sL 加藤菜就(工-物化3) 医療 久原宗仁 (文-史2
石山晶代 (教-養別科) 深作亮太 (工-人機1) 真村メリッサ
[連絡員] 井澤寿予 (理-物3) 076-235-2767 090-2839-2461
阿納真弓 (文-人間3) 076-232-6301 090-1396-3967

2000年度南アルプス茶無羅為(さむらい)Party
第1回トレーニング山行
[日程] 6月17～18日 1泊2日 非常1
[山域] 倉ケ岳、奥獅子吼高原
[目的] 体力づくり、ルートファインディングの初歩
[行程] 〈1日目〉金沢 ==(車)== 月橋 ---- 大池広場 --- 倉ケ岳 ---- 大池広場 --
-- 風吹峠---- 獅子吼高原 (幕営)
〈2日目〉幕営地 ---- 月惜峠 ---- 奥獅子吼山 ---- ケカン谷の頭----不動滝
---- 板尾==(車)== 金沢
[メンバー] L 杉村明慶 (教-人環3) sL 矢田部 桂 (理-物3) 角田幸久 (経2)
石原 諭 (経2) 中川拓哉 (理-化1) 竹内雅幸 (法 1)
[連絡員] 森田善文 076-235-4807 伊藤純司 076-263-8353

中日新聞
000年(平成12年)6月15日(木曜日)

噴泉塔へのアクセス道路2年半ぶり開通

あす岩間一里野線

県鶴来土木事務所は十六日正午、国天然記念物「岩間の噴泉塔」で知られる岩間温泉へのアクセス道路となる尾口村の県道岩間一里野線五・五キロ区間の通行止めを解除する。

同県道は、冬季通行止めが解除される予定だった平成十年四月十五日に、区間内で大規模ながけ崩落が見つかり、復旧工事のため通行止めに。昨年開通が予定されていたが、新たな崩落が発生したことから、平成九年秋から実質的に二年半ほども通行止めが続いていた。

岩間の噴泉塔群は、県道の終点となる新岩間温泉からさらに奥へ徒歩で約一時間四十分。一年を通して温泉が勢いよく噴き出す様子が見られる名所として知られる。

夏は涼線地帯、秋は紅葉狩りで人気のある白山スーパー林道(尾口村尾添―岐阜県白川村鳩ケ谷間33・3キロ)が、10日から全線開通=写真。残雪が多かったため、昨年より5日遅れだった。初日は石川県側から302台、岐阜県から190台、計492台が利用したものの、前年初日の611台を下回った。今シーズンは昨年の10万2000台を上回る11万台が目標。この道路は昭和52年8月、両県にまたがる未開発森林資源の開発を目的に開通された。

それなのに落差80メートルのふくべの大滝、細流がまるで老女が白髪を振り乱したように見える姥(うば)が滝をはじめ、白山頂上の展望、ブナ原生林、蛇谷峡谷、胃腸の霊泉と呼ばれている中宮温泉、間近に見られる野猿など観光資源が豊富なので、〝山岳観光ルート〟としての名声が世間に知れ渡っている。

残雪の山肌が涼味誘う

白山スーパー林道

通行期間は11月20日までだが、降雪が早まればそれ以前でも閉鎖される。通行時間は8月末までが午前7時―午後6時、9月以降が午前8時―午後5時。通行料金は普通車なら片道3150円、往復4890円。問白山林道石川管理事務所=電076619(6)7341

猿問題に手を焼く中、さらに…

イノシシ被害も警戒

目撃情報集め対策検討

白山麓鳥獣害防止対策協

石川県内の山間部で昨年からイノシシが相次いで確認され、鶴来町など一町五村でつくる白山麓鳥獣害防止対策協議会は二日までに、目撃情報の収集に乗り出した。隣県の福井県では三年前からイノシシが出没し、水田や畑で猿の食害がかすむ大きな被害が出ている。暖冬続きでイノシシの北上が進むとされる中、同協議会は福井と同様の現象が近く白山ろくで起きる可能性が大きいとし、山里に下りてくる猿に手を焼きながら、イノシシ対策も検討する。

福井では畑壊滅も　暖冬で北上の恐れ

雪が残る吉野谷村のブナオ山で確認された二頭のイノシシ。暖冬の影響で石川県内に北上し、個体数が増えているとみられる＝3月17日（ブナオ山観察舎提供）

県白山自然保護センターなどによると、イノシシは昨年から加賀地区で頻繁に見られるようになった。イノシシは本来、暖かい場所を好むが、今年一、三月には雪の残る吉野谷村のブナオ山斜面で相次いで確認され、小松市や山中町、辰口町、金沢市内でも目撃された。

県内での増加を裏付けるように、狩猟数は平成九年度の五十六頭に対し、十年度は百四十七頭、十一年度はさらに上回る見通しとなっている。

県白山自然保護センターは、本来は冬期間に淘汰されるイノシシの子どもが暖冬のため死なずに生き残っているとし、「このままの気象条件なら県内でも福井のような被害が出る」と指摘する。現時点で被害は確認されていないものの、白山麓鳥獣害防止対策協議会は目撃情報を集め、被害があり次第、対策を講じることにした。

福井県嶺南振興局によると、嶺南地区では十年前から三ホンザルが畑を荒らすようになり、対策を講じてきたが、イノシシ被害が確認されてから対象はイノシシに移った。イノシシは水田の中に入って体を擦りつける「泥打ち」を繰り返すほか、畑では土を掘り起こしたり芋などの作物を食い荒らし、「被害の大きさは猿の比ではなく、水田も畑も壊滅的な状態」（同振興局）という。

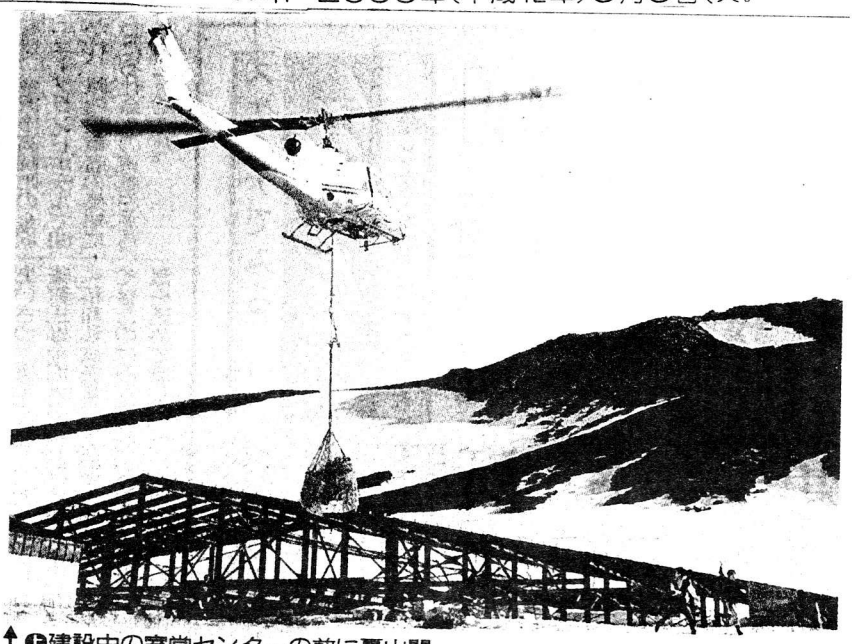
小浜市では昨年、約三千百五十㌔が被害に遭い、農地の周囲に電気柵を張り巡らす対策を取っている。農家は設置費の半額を負担し、漏電防止の草刈りなども余儀なくされている。

白山ろくでは猿の被害が深刻な一方、防止策の効果は上がっていない。鳥獣害防止対策協議会は新たな難題を抱える形となったが、「猿以上の被害が出るとなれば放置しておけない」と警戒感を強めている。

北陸中日新聞　2000年（平成12年）6月6日（火）

白山の夏準備着々

ヘリで物資空輸



（上）建設中の室堂センターの前に夏山開きの物資を空輸するヘリコプター（下）例年より多い残雪に屋根まですっぽりと埋まる室堂センター（後方は御前峰）

七月一日の夏山開きに備え、白山（二、七〇二㍍）へのヘリコプターによる物資空輸が五日行われた。

白山観光協会（鶴来町）が、夏山期間中に常駐職員や登山客らに必要な燃料や米、冷凍食品などを運ぶため毎年実施。同県白峰村市ノ瀬の臨時ヘリポートから、室堂センター（二、四五〇㍍）や南竜山荘（約二、一〇〇㍍）間を、ネットで包んだ物資をつり下げながらヘリが往復。計約二十㌧を運んだ。

同センターでは、今年室堂を〝引退〟した木下道雄主任（六九）の後任として管理を預かる中出隆幸副主任（四三）とアルバイト学生約十人が、運び込まれる物資を手際よく倉庫へ収納した。

室堂付近の残雪は、三―五㍍ほどと昨年よりはるかに多く、建物は上部だけが顔を出した状態。センターは建て替え工事中で宿泊はできるが食事提供はなし。同協会では、登山者へ自炊の用意を呼び掛けている。

室堂の新番人・中出さん

山に慣れ気合新た

三十一年間にわたり室堂センターに常駐した木下道雄（六九）主任の後任として、今年大きな〝バトンタッチ〟を受けた中出隆幸室堂副主任（四三）＝鶴来町＝は、五月の春山開きから室堂で業務を開始し一カ月あまり。同協会事務局（鶴来町）の木下さんから無線でアドバイスを受けながら、〝独り立ち〟へ向け作業が続く。

五日、ヘリコプターでの物資空輸では、次から次に運ばれる荷物を、アルバイト学生に指示を与えながらてきぱきと倉庫へ収納。二年間木下さんからみっちり指導を受けたとはいえ、機械操作など業務内容は幅広く「まだまだ余裕がありません」と苦笑い。それでも「しっかりと登山客を迎えたい」と気合を見せ、夏山開きへ準備を着々と進めている。

アルバイト学生らに指示を送る中出さん＝白山室堂センター付近で

例年より残雪が多い白山の南竜山荘付近＝29日午前10時、北國新聞社ヘリ「あすなろ」から

北國

平成12年（2000年）6月29日

〝夏〟目前 白山残雪多く

1日に山開き

二十九日の石川県内は高気圧に覆われて青空が広がり、午前九時の気温は金沢二三・三度（平年二三・二度）、輪島二二・二度（同二二・〇度）と蒸し暑さを感じさせる梅雨の中休みとなった。七月一日に夏山開きを迎える白山は濃い霧に包まれ、同時刻の気温が八・〇度と別世界。同日の開山祭に臨む白山比咩神社の神職ら関係者約六十人が残雪を踏みしめながら室堂を目指した。

白山観光協会によると、今年の白山は四月入りしてからも雪が降り、例年になく残雪が多い。室堂付近には五〇―一〇〇㌢の積雪があり、登山道にも雪が残るという。

白山では現在、来年度の完成を目指して室堂ビジターセンターの建設工事が進められており、今年夏は登山者への食事の提供はできない。このため、県は弁当などの持参を呼び掛けている。県は七、八月中、室堂などで自然解説員による高山植物などの解説を行う。

金沢地方気象台によると、三十日の県内は梅雨前線が北上し、県内は再び雨模様となる。夏山開きする七月一日は曇り一時雨の見込み。

北陸中日

2000年（平成12年）6月29日

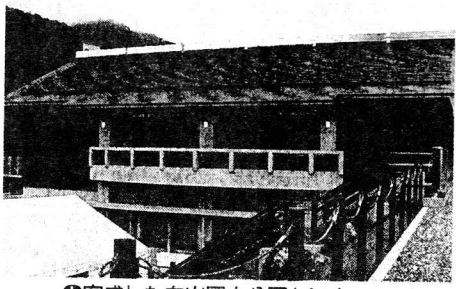
ダイヤモンド事業の2施設 白峰に同時完成

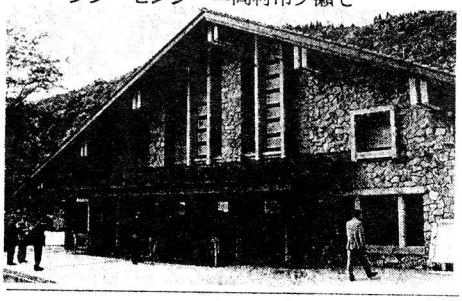
七月一日の白山夏山開きを前に、白山国立公園の情報拠点として県と環境庁が建設した「白山国立公園センター」と「市ノ瀬ビジターセンター」の完成式が二十八日、白峰村内それぞれの現地であり、出席者らが完成を祝った。

二施設ともに、県などが進める白山ろくのダイヤモンド計画整備事業（平成七―十一年度）の一環。同計画は、白峰村風嵐地区から白山山頂部にかけての総合整備で、室堂ビジターセンターも平成十三年度に完成を予定している。

白山国立公園センターは、同村風嵐地区に県が約三億円をかけ完成。鉄筋コンクリート造り二階建て、床面積約四百九十四平方㍍で、情報・談話コーナー、レクチャーコーナーなどがあり、国立公園の玄関口として一年間を通し情報提供を行う。隣接地に建設省が「白山砂防科学館」を、同村が「ふるさと交流センター」建設を進めており、平成十三年六月までに白山関連三施設がそろう予定。

一方、白山の登山口・別当出合の手前にある市ノ瀬ビジターセンターは、環境庁が約三億八千万円をかけて完成。鉄筋コンクリート造り二階建て、床面積約五百四平方㍍。主に白山登山客への情報提供が目的で、市ノ瀬周辺情報はじめ登山客同士で情報を交換できる休憩談話コーナーなどがある。利用は春山開きの五月一日から十一月五日まで。





㊤完成した白山国立公園センター＝白峰村風嵐地区で㊦同じく市ノ瀬ビジターセンター＝同村市ノ瀬で

軍都明暗

金沢学序説 ▷51

●歴史が示す21世紀の指針●

九師団来たり 人口と活力回復

昨年七月、国旗国歌法案に関する衆院内閣委の地方公聴会が金沢市で開かれたとき、元連合石川会長の荒島勝夫氏は「拙速は避けるべきだが、国旗国歌の法制化には必ずしも反対でない」と述べた。長年の労働運動家としては〝大胆発言〟の荒島氏は少々はにかみながら、こうも語った。「私には日露戦争で勲章をもらった先祖もいる」

複雑微妙な思い

その先祖をしのぶ「荒嶋軍曹武勲之碑」は今も郷里の金沢市宮野町に立つ。明治三十七年、金沢第九師団 歩兵第七連隊の荒島栄次郎上等兵は難攻不落とされた旅順要塞の攻略に参加した。ロシア軍の砲火を浴びた七連隊が大損害を受け、連隊長も旗手も戦死したとき、荒島は重傷に屈せず軍旗を抱いて帰り、連隊の名誉を守った。この殊勲で第三軍司令官乃木希典の感状と功六級金鵄勲章を授与され、軍曹に特進したのである。

戦争や軍隊を懐かしむ気にはなれないが、さりとて多くの将兵の死闘を忘れ去ることも情において忍びない―戦後五十五年のいま、往年の郷土部隊を回想するとき、この種の複雑微妙な思いを抱く人は荒島氏ばかりではあるまい。

明治初期に戻ると、河合辰太郎は「金沢論」で旧藩時代の金沢には「士卒一万七千余人」がいたとしている。江戸に次いで全国第二位の武士人口であり、家族も含めた消費は膨大だった。武具の需要が職人を育てるといった副産物もあった。

が、維新後、金沢は名古屋鎮台の分営とされ、兵力も歩兵一個連隊のみ。官僚を兼ねた旧藩の武士と単純比較はできないが、めっきり貧弱な陣容になったことは否めない。

しかし、北方の巨人ロシアとの緊張は金沢に再び「軍都」の地位を与えた。明治三十年代初頭に九師団が置かれると、兵力は飛躍的に増えた。師団司令部、第六旅団司令部のほか、騎兵、砲兵、工兵、輜重兵の各部隊も新設されたのである。

金沢市も協力を惜しまず、兵営用地の予算が不足したときは進んで募金を実施した。師団の設置は「国家の長計たるのみならず、我が地方の利益を増進する」（募金趣意書）という目算があったからだ。旧藩主前田家も演習場を購入して寄付した。三十一年、金沢―小松間に開通した鉄道は九師団の輸送手段という意味も持っていた。

鉄道開通や繊維・機械産業の発展と並んで、九師団の設置は維新後減り続けた金沢の人口が底を打ち、旧藩時代の水準に回復するきっかけとなった。第二次大戦まで金沢の人口の約一割は軍関係者が占め、その経済効果は計り知れなかった。

ただし、軍都の繁栄は多くの犠牲を伴った。日露戦争で九師団は旅順や奉天（現瀋陽）の激戦に投入され、石川の戦死率は高知、岐阜に次いで全国三位に達した。殊勲の荒島栄次郎も、戦傷がもとで戦後間もなく世を去っている。

その後もシベリア出兵、満洲事変、上海事変、日中戦争と、歴戦の九師団は流血を強いられた。太平洋戦争末期、沖縄を守備していた九師団が、米軍上陸を目前に台湾移動を命じられなかったとしたら、全滅の悲劇を演じたであろう。

忘れ得ぬ亡き人々

現在の金沢には陸上自衛隊の第十四普通科連隊などがあるだけで、その規模は明治初期より小さく、軍都の面影はない。が、この町がかつて師団設置を機に浮上した歴史、そして今日の平和のいしずえとなった亡き人々を、ゆめゆめ忘れてはなるまい。

明治以来の戦没将兵が眠る金沢市野田山の旧陸軍墓地。長い年月の風雪によって土盛りが削られ、倒れそうな墓碑も見られる

北の都

金沢学序説 ▷52

歴史が示す21世紀の指針

四高の衣鉢は継がれているか

「軍都」と「学都」―戦前の金沢に共存した二つの伝統を考えているうちに、その双方と縁の深い人物を思い出した。作家の井上靖である。

井上の父隼雄は伊豆湯ケ島の出身だが、金沢医専（現金大医学部）を卒業した軍医であった。父が陸軍金沢衛戍病院長となったのに伴い金沢に移った井上は昭和二年、第四高等学校に入り柔道と詩作に熱中した。

縁は異なもので、金沢が軍都でなかったら、後年の大作家がこの地に学ぶことも恐らくはなかったであろう。

市民に愛されて

ここからは「井上さん」と呼ぼう。亡くなる直前の平成二年十月、東京・世田谷の自宅を訪ねたとき、既に病み衰えていた井上さんだが、四高の話になると背筋が伸び、目が輝いた。

金沢・広坂の文房具商で店を四高生のたまり場にしていた「宮地のオッサン」の話や、商売そっちのけで井上さんら四高柔道部と全国を回った熱狂的ファンの豆腐屋さんの話も出た。

「土地の人たちに愛されたという点で、四高の右に出る学校は全国になかったでしょう」

井上さんの言葉に誇張はあるまい。四高の誕生は明治二十年。当時、一高（東京）二高（仙台）三高（京都）五高（熊本）と並んで全国五つの官立高等学校の一つだった。維新後、意気消沈していた金沢市民にとって、四高は希望の灯であり、生徒は掌中の玉と思えただろう。

四高が名古屋や新潟ではなく金沢に設置されたのは、やはり学問の伝統が大きかった。藩政末期からの諸学校を統合して地方ではまれにみる水準の石川県専門学校が既に存在したのだ。

「金沢論」の河合辰太郎や実業政治家中橋徳五郎らはその卒業生であり、四高に移るころには哲学者西田幾多郎、宗教学者鈴木大拙、国文学者藤岡作太郎、作家徳田秋声、ジャーナリスト桐生悠々、天文学者木村栄らも学んでいた。

生徒の大部分が県内出身者の専門学校を西田幾多郎は「全体が一家族というような温かみのある学校であった」と回想した。これを基礎に、旧藩主前田家や市民が多額の地元負担金を払って四高が出来たのである。

ただ、西田は四高当初の校風に反発して中退してしまう。開校式で薩摩出身の森有礼文相が石川県人を無能呼ばわりし、これも薩摩人の初代校長がスパルタ教育を導入したからだ。四高が落ち着いた金沢色を帯びるのは、人格者として名高い北条時敬が校長を務め、西田が教授となって「善の研究」を書き始めた明治三十年代以降である。

旧制四高本館（現石川近代文学館）を背に立つ四高生の像。明治（中）大正（左）昭和（右）の三時代を表わす　＝金沢市広坂

大学再編の中で

四高の上に「北陸帝国大学」を設置することも金沢市民の悲願だったが、これは実現しなかった。そして戦後の学制改革で昭和二十五年、四高は六十三年間の歴史を閉じた。この間、寮歌に「北の都」とうたわれた金沢で青春を過ごし、世に出た人材は一万二千余に達した。

四高の衣鉢を継ぐべき新制金大にも地元の期待は熱かった。設置費用には県費、寄付金のほか「つくれ我らの大学」を合言葉にした大学宝くじの収益も当てられた。国立ながら金大は市民の汗の結晶だったのである。

それから半世紀、金沢は多くの大学を擁するようになった。その中で郊外角間に移転した金大の設備は見違えるように充実したが、研究教育の情熱や市民とのきずなの面では四高時代や金大草創期と比べてどうか。

独立行政法人化に向けた国立大学再編が進む今日、新潟大なども日本海側の拠点大学の地位をうかがう。金大に自らの殻を破る努力と地域に寄与する気概が求められるゆえんである。

０Ｂ会会計報告

（平成１２年１月１日～平成１２年６月３０日）

《収入の部》

０Ｂ会費納入	７３５，５８０
４期森島氏原稿掲載料	１０，０００
ＯＢスキー合宿余り寄付	４，２２５
預金利息	３４０
計	７５０，１４５

《支出の部》

０Ｂ会報（やまざと）No.12 印刷費	２１３，４００
〃　郵送料	１２５，９９０
春の小屋酒場資材	５２，０３７
〃　食費	１４，７１０
〃　備品他	１２，５７６
〃　現役バイト代	３０，０００
号外印刷費	１０，５００
〃　郵送料	３２，０２０
通信費	２１，６４０
文具・備品費	２０，３９２
その他	４，０８８
計	５３７，３５３

《差引剰余金》

前回（11.12.31現在）繰越金	２，０８７，３４９
収入の部	７５０，１４５
支出の部	５３７，３５３
差引合計	２，３００，１４１

今回より、返信はがきは同封されていません。
はがきで、一言通信をお出しになる場合は、下をご利用下さい。

９２０－０９１１
金沢市橋場町１０－４９
金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会事務局

舟田　節子　行

ビクーニャ

ナバタで休む カモシカ

ＯＢ会報「やまざと」１３号

発　行　日　平成12年７月　　（’００夏号）
発　行　者　奥名　正啓
編集責任者　舟田　節子
印　　刷　プリントショップ多田

金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会
事務局　〒920-0911　石川県金沢市橋場町10－49
☎076-222-9288　（舟田節子）
E-mail settyan-f@muc.biglobe.ne.jp
URL:www02.u-page.so-net.ne.jp/pa2/ma-okuna/kuwv/

奥名会長　E-mail ma-okuna@pa2.so-net.ne.jp
名倉名簿担当　E-mail nagura@wnk.njk.co.jp

振込口座　郵便局　00780-3-14120 金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会
〃　北国銀行本店　普　223703　金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会